

# テイルズオブベルセリア～True Fighter～

ジャスサンド

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

降臨の日以来業魔や怪獣という脅威に対抗する聖寮とそこに属する対魔士の台頭により、世界は少なからず安寧の中にあった。

理による平和を掲げる聖寮の思想を人々は受け入れ信じた。それが災厄の時代を乗り越えることに繋がると信じて。

しかし誰しもが聖寮を認めただけではない。

聖寮の掲げる理に抗い己の意志を貫き通す者達がいた。

※この作品はテイルズオブベルセリアとウルトラマンガイアのクロスオーバー作品です。

# 目次

序章 動乱くはじまりく

第1話 ファーストミッション | 1

第2話 掴んだ光 | 9

第3話 誠か嘘か： | 23

第4話 海上の出会い | 31

第一章 違う軌道の惑星（ものたち）

第5話 極寒の地に立つ | 45

第6話 共同作戦 | 56

第7話 名は体を表すというけれど | 64

第8話 きたぞ、われらのマギルウ奇術団！ | 77

第9話 もつれる糸 | 93

第10話 マギルウ復活 | 105

第11話 風のザビーダ | 121

第12話 仇敵との邂逅 | 140

第13話 地脈に住まいし龍 | 160

第14話 セカンドエンカウント | 181

第15話 號嵐（シグレ）を追い求める剣士 | 207

第16話 再戦 | 220

第17話 無法者共、安らかな一時 | 236

第18話 壊賊病 | 252

第19話 計略の地 | 260

第20話 仲間じゃなくても | 275

第21話 流儀（ちかい） | 294

第22話 常闇より蘇りし過去 | 311

第23話	仕組まれた再会	329
第24話	瞬く星の下で	349
第25話	激ファイト!! キャラ札三本勝負	373
第二章 さまよえる心達		
第26話	帰郷	392
第27話	衝撃の青	411
第28話	変わらないもの	429
第29話	魔女の師	443
第30話	渚の天使(おとめ)と悪魔(ごうま)	463
第31話	地上の楽園	475
第32話	忌み名の聖主	486
第33話	世界の罪	496
第34話	零れ落ちた幸せ	506
第35話	奪った者と奪われた者	518
第三章 君は一人じゃない		
第36話	情けは人のためより自分のために	533
第37話	理に背いた者	542

## 序章 動乱くはじまりく

### 第1話 ファーストミッション

―急がなければ。彼の者の復活を止めなければ人間の世界は再び破滅する。

―天族と人間の共存のためにも世界は常に進歩しなければならぬ。しかし彼の者が復活する度に人間の歴史は断絶の時を迎えてしまう。それはあつてはならない。人間が己のが業と向き合い穢れを受け入れるためにも

―既に二つの光は託した：早急に残る光を託すべき人間を見つけなければ

---

#### 聖寮

それは人々の希望の象徴。聖隷を従え悪しき業魔を相当する対魔師の集まり。彼らの出現により業魔病に蝕まれかけた世界は救われ、世界には再び秩序が戻った。

対魔師の存在は業魔に太刀打ちできぬ人々は感謝と敬意を祓い平和な過ごしていた。

その聖寮本部の一室。

日が昇り始めた時刻のその部屋には、毛布にくるまって静かに寝息を立てる男がいた。

肩まで伸びた茶髪に黒曜石のような濃い黒色の瞳の持ち主だ。

夢でも見ているのか表情にはどこか楽しげな感じを漂わせている。

「起きて」

「いつ!?」

頭に加えられた衝撃で彼は目を覚ます。

眠気で回転が鈍い頭とおぼろげな視界が回復すると寝台に寝そ

べった彼を見下ろす者がいた。

少し長めの鮮やかな赤毛をツイテールで整え、シワ一つない清潔な身だしなみをした少女。

彼女は呆れた声色で未だに夢の世界に意識が傾いている目をする彼に物申す。

「いつまで寝てるの。もう見回りの時間よ」

「ん…あ。もうそんな時間なんだ…ありがとうノア」

「まったくもう、急いで着替えて。布団は私が畳んでおくから」

ノアと呼ばれた少女エレノアはそう言うと言おうと背後で男が着替え始める。

エレノアは温かみがまだ微かに残っている毛布をピツシリとズレがないようにたたむと、白衣の制服に袖を通し顔を冷水で洗い支度を終えた男に再度声をかける。

「用意できたみたいね。じゃあ行くわよグラン」

対魔士は王都ローグレスに本部が置かれそこから各々が与えられた任を全うするべく各地に赴いている。

一等対魔士になってまだ日の浅いグランとエレノアにここ数ヶ月間、与えられたのはローグレスの街中を徘徊する任であった。

「聖堂も異常なし、これで今日のノルマは終わった」

「何事もなくてよかった。ゼクソン港で数日前業魔が発生したばかりだから」

「その話は聞いてるよ。確かその業魔を討伐したのは」

「グラン、エレノア！」

噂をすれば何とやら

耳に届いた凛々しい声色にグランがそう思っている合間に、ブロンド髪で青い瞳をした穏和な顔立ち声の青年が彼とエレノアの元にやって来た。

「オスカー、お疲れ様です」

「ありがとうエレノア。二人は哨戒中か？」

「今終わったところ。そつちこそ大金星だつて聞いたよ。ゼクソン港に現れた業魔の群れを倒したつて」

「耳が早いな。もうローグレスに届いているのか」

「早いと言つてもローグレスとゼクソン港の距離はそう離れていませんしそう珍しい話ではないでしょう」

「確かに、それもそうだな」

オスカーを加えた三人は談笑を交えながらローグレスの整った街中を散策する。

「二人共そろそろ一等対魔士らしい役目が与えられる頃合いじゃないか？ グランは巡察官を希望しているらしいが…君ならローグレスの警備隊を率いるなり、故郷のイズルトを統括ぐらいの実力はあるだろうにどうして巡察官を希望するんだ？」

「駄目かな。同じ一等対魔士のテレサはヘラヴィーサを統治してるし、やっぱり一等対魔士はそういう役職に回った方がいいものなのか？」

「駄目とは言わない。巡察官も聖寮に重大な役職だ。しかし、あまり好き好んで希望する者は少ない」

「単に世界を回りたいからという理由だけなんです。この人が希望してるのは」

エレノアがジト目でそう補足しグランは心外そうに眉を吊り上げる。

「そんな軽い理由じゃないよ」

「そんなことありません。世界のあらゆる場所を見て周りたいてって巡察官の役目そっちのけの発言をしていたじゃないですか」

「だけどニュアンスが違うじゃん。それじゃまるで僕が仕事に打ち込まない不真面目な人間みたいなの言い方だよ」

「あつてるじゃないですか。それに今朝だって、私が起こしに行かなかつたら寝坊をして——」

「あー！ 聞こえない！ 何も聞こえない！」

「また貴方はそうやって！ 昔からそうです！ 不都合なことに耳を背けないでくださいー！」

(相変わらずだな…この二人は)

第三者がいよいよといまいとお構い無しとばかりに繰り広げられる

グランとエレノアのやり取りにオスカーが苦笑と一緒に、率直な感想を自らの内でぼやく。

そうこうするうちに三人が聖寮本部の前まで行き着くと、門前の壁に対魔士を象徴する白き衣装を羽織った男が背中を預けるように寄りかかっていた。

オスカーとは対象的な紅い双眸をした、黒くスラツとした質感の髪を額の前で分けた男に気付いたグランはあつと声を上げる。

「ジャグラー」

「ようやく来たか」

彼の名はジャグラス・ジャグラー。

グランとエレノアの同期でありながら彼らより早く一等対魔士になった男であり、蛇心流という剣術の使い手とされる男だ。

「よくもまあ四六時中べたべたしていられるなお前達」

「べたべた：!?!べ、別にそんなんじゃないやありません！任務です！あくまでも任務としてですから！」

ジャグラーと呼ばれた男の言葉を真に受けたエレノアがムキになって否定するも、からかった本人はそれに対して返事をよこすことはなかった。

壁面に寄りかかっていたジャグラーにオスカーは訊ねた。

「ずっと待っていたようだがジャグラー、我々に何か用があるのか？」

「そうだ、と言ってもお前には用はないがな」

オスカーに対して数秒にも満たない間のみ目を合わせたジャグラーはエレノアへと視点を切り替え、グランに手を伸ばす。

「エレノアこいつを借りるぞ」

「はい。それは構いませんが」

「助かる。ついて来い」

「え？」

エレノアに許可を取ったジャグラーはグランの腕を掴むや否や聖寮本部内に引き込むように引っ張る。

廊下を歩いている最中も話が飲み込めないグランにジャグラーは用件を説明する。



「アルトリウス様がご指名だ。俺とお前で来るようにとのことだ」

「アルトリウス様が？」

アルトリウス・コールブランド

聖寮のみならずその名を轟かせた人物だ。

一年前の緋の夜に多数の聖隷を使役し軍すら太刀打ちできなかった業魔の群れを一掃し、一躍救世主として世間から絶大な指示を得た。

一等対魔士をも凌駕する筆頭対魔士でもあり聖寮どころか、王や教会にも及ぼす程の影響力の持ち主。

そんな人物が同じ聖寮内の人間とはいえたかが訓練生から一等対魔士にあがったばかりの小僧を直々に指名して、一体何の用なのか。

訳が分からず困惑している間にグランはアルトリウスの執務室を目前にしていた。

「細かい話は俺も知らん。俺はお前を連れて来いと指示を受けたただだからな」

ジャグラールがノックしドアを開ける。

「失礼しますアルトリウス様、グランを連れて参りました」

「暫し待ってくれ」

必要最低限の私物しかない室内の中心で大量の書類と格闘しつつも落ち着きを払った様子 of 男はそう返す。

一区切りついたところでペンを置き、ジャグラールとグランへ目を巡らせた。

「早速だがお前達二人に調査を命じる」

「調査、ですか？」

「ウエストランドのブルナーク台地に行ってもらいたい。ロウライネの塔で対魔士の新人訓練を経験した君達ならよく知っている場所だろう」

ジャグラールとグランの言葉に頷いたアルトリウスは更にこう告げた。

「レニードに駐在する対魔士からの報告によればブルナーク台地で新

たな遺跡が発見されたそう。お前達には小隊を率いてその遺跡の調査をしてみよう」

「お言葉ですがアルトリウス様、遺跡の調査なら近場であるレニードの対魔士達にやらせれば早い話ではありませんか。何故わざわざローグレスにいる我々を派遣する必要があるのでしょうか？」

「ジャグララー…？」

アルトリウスに切り込んだジャグララーにグランは冷や汗が滲む。

「それは―」

「既に一度行われた調査に基づいた結果だ」

いつの間にか部屋にいたのかジャグララーとグランの背後には二人の男が音もなく立っていた。

どちらも対魔士らしい白衣に身を包んでいるが、雰囲気はどこことなく清涼な感じとは離れているようにグランとジャグララーの二人は思った。

「あなた達は？」

「彼らは私の側近の特等対魔士だ。最も最近着任したばかりで公には知られていないがな」

(側近だと…？)

アルトリウスからの言葉にグランは納得したようだが、ジャグララーは疑い深い目付きを彼らに注ぐ。

髪先が黄色く染まった水色の髪をした丸刈メガネをかけた男と、肥えた体つきをした赤紫の髪の四十程度とおぼしき男の二人組。

「私はガッツと言う。以後お見知りおきを」

「ゼブブだ」

二人組の男の社交辞令が済むとアルトリウスはその中の一人、ガッツに注文した。

「ガッツ続きを二人に」

はっ、とガッツは答えるとグランとジャグララーに説明する。

「その遺跡が発見されてすぐレニードの二等対魔士達が調査に乗り出

し、内部を調べた結果危険があると判明した。おびただしい数の魔物のみならず遺跡の周辺には業魔も多数確認されており、調査部隊にもかなりの被害が出た」

「そこで一等対魔士である君達にこの件を命じたい、そういうことだ。出立は明後日、十数人の二等対魔士の小隊を結成しブルナーク台地の遺跡を調査してほしい。同行する二等対魔士の選抜はこちらで行う。以上だ」

「すごいことじゃない。アルトリウス様からの直々の勅命なんて」

自室に戻ったグランから先程アルトリウスからの依頼を受けた旨を聞いたエレノアはそう、感嘆の意を表した。

我がことのように嬉しさを声色に乗せるエレノアを余所に浮かない様子のグラン。

そんな彼の顔色が引つかかったエレノアはグランに質問する。

「嬉しくないの？」

「嬉しくないなんてことはないよ。アルトリウス様からの勅命なんて対魔士にとってはとても光栄なことだと思うし」

「ならどうしてそんな浮かない顔をしているのかしら？」

「ジャグラーがき、ずっと険しい表情してたんだ。アルトリウス様の執務室を出てからずっと、それがちよつと気になって」

訓練生時代からジャグラーの直感に飛び抜けていた。

剣士としての第六感が冴え渡っているともいうのだろうか、戦闘のみならず自らに迫る危険には人一倍敏感な男だ。

それを身近で知っているだけにグランは不安を拭えずにいた。

「ジャグラーが…本人に聞いてみたの？」

「聞いても何でもないの一点張りで取りつく島もなかった…まあわからないことをいつまでも気にしてもしょうがないだけだよ」

自らそうやって踏ん切りをつけたグランは雲っていた表情が一転して明るくなり、エレノアに伝える。

「いつ戻れるかわからないけど当分の間は仕事の方、僕の分もよろしく」

「しようがないわね。その代わり帰って来たらスイーツご馳走してくれる？」

「こないだダイエットするなんて言ってたのどこの誰だっけか？」

「そ、それとこれとは話は別！ほらよく言うでしょ、おやつは別腹だど！」

「はいはい、わかったわかった」

怒気を含んだエレノアの物言いにグランもさすがにやり過ぎたと僅かばかり反省の念を感じ、それ以上のからかいをやめる。

「気をつけて」

「わかってるって」

まさかこの時彼らは思いもしなかっただろう。

この後に起こる出来事が彼らの進む未来に大きな影響を与えることを

## 第2話 掘んだ光

ミッドカント領最大の貿易港とされるゼクソン港にてグランとジャグラーは船の手配を行い、出港の準備が整うまでの僅かな時間を過ごしていた。

「アップルグミは買ってある。ピーチグミはまだ余ってた？」

「数個程しかなかったはずだ。いくらか買いたしておけ」

露店に並んだ品物を見渡しグランはジャグラーに確認を取り、回復用品のグミを購入し腰に下げた袋に収納する。

彼ら二人は他の対魔士達を宿に休ませ備品の調達をしていた。

「こんな雑用わざわざしなくても二等対魔士の連中に任せばいいだろうに」

「ちゃんと自分の目で確認しておきたいんだよ。何かあった時に手元に何があるか知っておかないと不安だろ」

「意外だな。お前がそんな殊勝な奴だとは」

そうぼやき、つい先程露店で購入した『シユワシユワコーヒー』なる飲み物を胃袋に運ぶジャグラー。

感想は彼いわく微妙なのだがその微妙さが返って癖になり、なかなか中毒性のある飲み物であるのだそう。

そんな彼の嗜好はさておいてグランは店に並べられた装飾品の一つに目を引き付けられる。

白い太陽の輝きを受けて光るピンクの指輪。

グランはそれを手に取ると店主は彼に勧める。

「さすがは対魔士様、それに興味を持つとはお目が高い。その指輪はつい最近仕入れた物でして、掘り出し物でございますよ」

「へーこれ、買うよ。いくら？」

「ありがとうございます。48000ガルドになります」

「なんだ柄にもなく洒落つけにでも目覚めたか？」

「そんなんじゃないって、人に贈るんだ」

金額を支払いながらその疑問に答えるグラン。

包装された指輪を胸の内ポケットに仕舞い込むとグランはその人

物の顔をひっそりと思い浮かべる。

値段のことは秘密にしておこう。

返って気を使わせてしまうだけだろうし、あげるなら形に残る物にしたい。

―何せ明日は

そう思いを巡らせていた時シユワシユワコーヒーを飲み干したジャグラーの元に、空から白い鳥が降り立った。主に連絡用として扱われているシルフモドキだ。

個人の発する波長の些細な違いを区別できる優秀な鳥である。

シルフモドキの脚にくくりつけられていた用紙を開くジャグラーに、グランは何事だろうかと訊ねた。

「そのシルフモドキ聖察のじゃないけど何かあった？」

「いやなんということはない。単なる手紙だ、文通相手からのな」

「へー……は？」

あんまりに自然に言うものだから聞き流しかけたグランだが、どうにかそうならずに済んだ。

信じられないと主張した気に目を丸くし、石化したように硬直する彼の態度にジャグラーは不満そうに片眉を潜めた。

「おい、何故そんな目で俺を見る」

「いや、だって文通だよ文通、ジャグラーに文通って、そっちの方が意外って言うか……く、ははは」

「今すぐこの場で切り捨ててやろうか。うん？」

驚愕から一転、腹を抱えて口元を塞いで笑うグランの太ももをジャグラーは鞘に収めたままの太刀で小突く。

「ごめん、失礼だってわかってる、わかってるんだけど、ダメだよっば面白い、うはははは」

しかし一向にグランは堪えきれず笑いを溢しジャグラーは額に青筋を浮かべかける。

―こいつ、本当に斬ってもいいだろうか

おそらく日頃の自分の振る舞いと文通というワードの不釣り合いさが生み出す破壊力が相当な威力だったのだろうが、目の前で虚仮に

されて嬉しい人間はいやしない。

付き合う気のないジャグラーはそっぽを向いて手紙の内容に目を通す。

そこにようやく笑いを静めたグランが一言詫びの言葉をかけた。

「あの、本当にすみませんでした…それでその文通相手はどこ誰なの？」

「ふん…踊り娘だ」

「踊り娘かあ、マジルウちゃん？」

「違う。俺はあれには関心がない。ハリアの踊り娘だ」

「どこでいつ知り合ったのさ。そんな人と」

「二ヶ月ぐらい前にローグレスに観光で来ていたらしくてな、たまたま通りがかった時に道を聞かれただけだ」

「…それだけ？」

「それだけだ」

どうにもキナ臭い。話を聞いた限り道案内をしただけで文通のやり取りをするまでの関係に発展するとは思えない。

それにジャグラーは己のことになると口数が少なくなり本当のことを隠したがる男だというのは、グランもよく知っている。

「嘘つけ、それだけじゃないだろ。まだ他に何かあるんだろ？その人と」

「しつこいぞ貴様。ちゃんとした交際相手がない貴様にとやかく言われる筋合いはない」

「な!?!少し自分がうまくいったからってその言葉はないんじゃないか。そもそも文通相手がいるからってそれが恋愛の対象とは言えないと思うけどな」

「ほお、これが負け犬の遠吠えというものか。初めて間近で見たが見苦しいな。結局は貴様は俺が妬ましいだけだろう」

「誰がそんなこと言いましたか？」

しようもない舌戦を展開していくグランとジャグラー。

船着き場を目前にしたところまでそのやり取りを持って行きながらも、二等対魔士らが待機している姿を見て意識を切り替える。

「船の準備が完了致しました。いつでも出港可能です」

「よしすぐ出港に取りかかれ」

ジャグラの指示の元二等対魔士達が出港作業動き出し、ジャグラはシユワシユワコーヒの空き容器をグランに押し付け船内に乗り込む。

「ゴミ渡されても困るんだけど…」

文句を垂れながらも渋々グランはゴミをちやんとした場所に処理しに向かった。

レニードの港に船を停めたグランとジャグラは隊を率いて調査対象とされる遺跡へ移動した。

ロウライネの塔より少し離れたブルナーク台地へ到達し、虹を描く間欠泉に心を魅了されつつも遺跡を探す。

「レニードの対魔士の話だと遺跡はロウライネとヴォーティガン海門とのほぼ中間地点に位置してるらしいけど、今のところそれらしいのはないな。もっと」

「アルトリウスが適当なことを言っただけの話だな」

「その含みのある言い方、よした方がいいと思うけどな。アルトリウス様に聞かれたら何言われるか」

「いなければ問題ないだろう。聖寮の掲げる理とやらに背いているつもりもない」

「前から気になってたんだけどジャグラ、アルトリウス様のことなんか邪険にしてないか？」

「アルトリウス個人に対して思うところは何も無い。ただ理とやらで何でもかんでも縛りつけるスタンスは気に食わん」

刺のある返しをするジャグラにグランは腑に落ちない感覚を抱く。



ジャグラの態度には稀にまるでアルトリウスが気に食わないような節が見受けられるのだ。

対魔士になったからにはアルトリウスを尊敬すれど、敵対感情を持つのはおかしい。

「ならなんで対魔士になったんだ？」

「…知りたいか？」

「そりゃあ知りたいさ」

グランの返答が予想通りだったのかジャグラは愉快そうに口角を上げ笑う。

何故可笑しいのかとグランが問いたただそうとすると、それよりいち早く二等対魔士の声が割り込んできた。

「報告します。遺跡の入り口と思われる場所を発見しました」

「案内しろ」

会話を中断させて全員こぞってその二等対魔士に付いていくと、岩壁の下へと続く階段があった。

「地下遺跡か、どうやらここの間違いようだな。俺とグランが先行する。残りは後に続け」

ジャグラが先陣を切りグラン、二等対魔士達と一列に並んで遺跡内部へ侵入する。

階段を一段一段静かな足取りで下り、平坦で窮屈な一本道差し掛かってでも速度を一定に保ち深部へと進む。

そして数分かけて開けた場所を見つけた彼らは辺りを見渡して、遺跡の内観を調べた。

「今のところ安全みたいだけど」

「業魔の姿はおろか気配も感じない。どうなっている?」

業魔も魔物も影も形もない。アルトリウスから聞いた話とは違う。ジャグラ一程ではないがグランもアルトリウスの語った内容が真

実なのか、怪しくなってきた。

そう思いつつ歩みを進めていくと遺跡の最奥部らしきただっ広い空間に行き着く。

空間の奥には祭壇とその上には祭り上げられているかのように土

器に似た化石が置かれていた。

「これは…土器か？」

祭壇から化石を取り上げたジャグラーが興味深そうな眼差しで眺める。

何の翼を模した部分や何かを通すような輪っかの部分がある珍しい形状だがそれ以外には、外見的に目立った特徴はない。

「ここにこんな風にあるとなればそれなりに価値のあるものだろう。こいつは持って行くとするか」

ドゴオオオ!!

ジャグラーが土器を布袋にしまいこんだ時床が激しく振動し場にしたほぼ全員が姿勢を崩し、狼狽える。

「地震!？」

「これは…」

遺跡の一部の壁に輝が入り天井から砂粒が舞い落ちてくる。

それだけではない。

自分達が来た道から醜悪な容姿の獣の怪物の群れが入り込んで来た。

「業魔!?!さっきまでいなかったのに!?!」

ただ事ではないということだけは瞬時に飲み込めたグランは見に宿した聖隷を呼び出し、ジャグラーも同じ行動をとりながら今だに狼狽する二等対魔士らに命を下す。

「もたもたするな!お前達全員聖隷を出せ!応戦する!」

「は、はい!」

対魔士と聖隷、業魔の戦いが幕を開けた。

ジャグラーは長太刀をグランは片手剣を鞘より引き抜き業魔に立ち向かう。

「魔神剣!」

「蒼破刃!」

漆黒と蒼の衝撃波が数匹の業魔を弾き飛ばし、ひび割れた壁面に叩

き付ける。

ジャグラーとグランはそのまま自らが使役している聖隷の援護を得て、獣型の業魔と打ち合う。

「こいつらどれだけいる!？」

爪竜連牙斬と呼ばれる剣技を浴びせ業魔を葬るジャグラーが刀身を振るって、染み付いた赤紫の血を払い叫ぶ。

一匹、二匹と確実に業魔を潰している。

潰しているのにも関わらず一向に敵の数が減る気配がない。

(減るところか増えている…?先まで何の音沙汰もなかったのか?こんな増え方があるか…?不自然すぎる…もしやこの業魔達は)

太刀が赤く染まる程に思考を中断せざるをえなくなる状況下においてジャグラーはある仮説を立てていた。

物事の発端からこの状況に至るまでのあらゆる要素を組み立てて、それを整った形にしていく。

そしてそれが完成した瞬間ジャグラーはあまりの驚愕目を見張った。

(可能性の低い話だが、タイミングが良すぎる…しかしそんなことがあり得るのか…だがだとすれば、最初から全てが―)

「ジャグラー様!」

自分を呼ぶ声にジャグラーの意識は引き寄せられ、そこでようやく眼前の光景に気づく。

考え事をしていたせいで疎かになっていた隙を狙った業魔が迫っていた。

迎撃も援護も間に合わない。

ジャグラーが死を目前にした時、両者の間に割って入った者があった。

その者はジャグラーに背を見せ、業魔の中心部に剣を突き刺す。業魔はゆらりと崩れ落ち絶命する。

が、ただでは死ななかつた。

「ガ、アアア」

「ぐっああああああ!!」

その寸前牙を剣の持ち主である人物の右肩に差し込み、首を振って腕を引きちぎる。

それが最後の行動であり業魔は今度こそ朽ち果てた。

ジャグラーはその者の元へ駆け寄り膝を曲げる。

「グラン！しっかりしろ!!」

「あああツ…！大、丈夫か…ジャグラー…」

「俺に気を使っている場合か！お前は下がれ。それでは戦えない！こいつの出血を止めろ！」

グランを使役聖隷に託したジャグラーは太刀を握り締め、再び襲い来る業魔を切り捨てる。

「うわああああ!!」

「ああああ!!」

ジャグラーが優位に戦いを進めていても他の二等対魔士達はそうはいかない。

二等対魔士達が傷を負い、劣勢に追いやられ死んでいく。

聖隷の援助を受けている分まだマシだが数で責めてこられれば、人間である以上いずれば体力が尽きる。疲弊した者から命を散らす。

「き、聞いてない…こ、こ、こんな、業魔が現れるなんて聞いてない…」

血だまりに沈む仲間の惨劇に臆した二等対魔士が怯えと共に漏らした呟きを漏らす。

ジャグラーは顔色を陰しくさせ、悪鬼のごとき形相で彼に詰め寄る。

「貴様。シャプレーだったか。何を知ってる！」

「違うんです！俺はただ！」

「くだらぬ戯れ言に耳を貸す気はない。自分の身を守るための方便をそれ以上続けるなら業魔に殺られる前に俺が腸をかつさばいてやろうか」

髪を鷲掴みし太刀を喉元に添えてジャグラーは耳元で囁く。

首に突き付けられた刀身から微かに血が滴り、二等対魔士シャプレーの恐怖の対象は一気に書き変えられた。

「ひ、ひいいいい！」

「ジャグラー！」

「お前は余計な口を出すな！わめくな！言え、お前が隠してるのは何だ！」

「…こ、この調査に参加するにあたって調査中何があっても一等対魔士の二人から目を離すなと」

「命令されたんだな？誰からの指示だ」

「メ、メルキオル様です」

「メルキオルだと…？」

メルキオルは十数人いる一等対魔士の中でも上位の君臨する老人だ。

アルトリウスの参謀的立ち位地にあたる男が二等対魔士に自分達二人をわざわざ監視させ、しかもそれを内密にするなどは。ジャグラーもその理由にまるで見当がつかない。しかし確実に言えるのはメルキオルが何かを企んでいることだけだ。

「あの男、一体何が狙いだ…」

「グオオッ！」

悩むジャグラーに構わず業魔が二等対魔士の屍を越えて侵攻してくる。

「チイ、考える暇もないか…貴様もいつまでも怯えてないで戦え！今剣を取らなければ俺に殺されずともここで業魔共の餌になるぞ、それでもいいのか！」

「は、はい！」

「とはいえこれでは…くそ！数ばかりちよろちよろと！」

業魔を蹴散らすジャグラーが毒づいた時それまでより一際強い振動が遺跡全体に走る。

その揺れは脆い壁を破壊し床もところどころ抜け落ちていく箇所が増え始めた。

「ジャグラー！」

聖隷の治癒術を受けるグランが叫ぶ。

その途端グランと使役聖隷の足場が崩れ暗闇のそこへと消えてい

く。

「うわあああああ！」

「グラン！」

しがみ付く業魔を紅蓮剣でほふるジャグラーは落下するグランの名を、声を張り上げて呼んだ。

その次の瞬間彼らのいる空間は上から降り注いだ瓦礫に飲み込まれた。

「……う……」

途絶えていた意識が目覚めグランは体を起こそうとする。

けれども頭では動かそうとしているのにまったく反応しない部位があった。

おぼろげな思考でそれがどこなのか探った時彼の意識は完全に覚醒した。

「…腕、ないんだな…」

他人事のように無気力に呟くグラン。

無事な左腕で体を起こして光が射し込んでくる、真上を見上げる。

「そうだ…ジャグラー、皆、早く助けに行かないと…！」

まだ戦っているはずだ。

グランは立ち上がり遺跡上部へ繋がる通路を求めて歩き出す。

その拍子に彼はある光景を目にした。

彼の視線の先には瓦礫の下敷きになり、身動きの取れなくなった自分の使役聖隷の姿があった。

「パール！」

それを目の当たりにしたグランは出血による目眩に襲われているにも関わらず、即座に瓦礫を取り除こうと試みる。

「しっかりと！今すぐこの瓦礫を！」

「グ、グラン様…！」

「え……！」

一瞬何が何なのか理解できなかつた。

聖隷が自分の意思で言葉を喋つたのだ。

聖寮では聖隷は意思なき存在だと教えられていた。アルトリウスだつて同じことを言つていた。

—なのはどうして？

グランは戸惑いを露にしながらも残つた腕で瓦礫をどかそうと必死になっている。

「私に構わず、行つてください。私はもう、助かりません」

「駄目だ！そんな弱気になつちや！大丈夫。すぐに動けるようになる！」

己と聖隷に発破をかけるように言い聞かせ、グランは瓦礫を取り除きにかかるも、量が多い上に一つ一つが重く腕一つではどうにも扱らない。

片腕を失つた自分に苛立ちを募らせるグランは悪態をつく。

「くそーこんな時に両腕が使えないなんて！」

「例えこの瓦礫から脱け出せたとしても…もうじき私は私でいられなくなる…そうなれば私は、あなたに恐ろしいことをしてしまう」

「どういう、こと…？」

壊れた仮面から覗かせる純粹無垢な瞳にグランは眉を細めて聞き返す。

答えを聞こうと口を開いた直後、上の方でけたましい爆発音が鳴り響き、上で何かが起こつたのだと彼に直感させる。

「もはや時間の猶予はありません、行つてください…あなたはここで終わつていい人じゃない…貴方には、帰りが待つてる人がいる…エレノア様に渡さなければならぬ物もあるでしょう…」

そう言われたグランはハツとさせられ内ポケットに入れた物を思い出し、続いてそれを渡すつもりである少女の容姿を脳裏に浮かべる。

「あなたがいなくなれば彼女は悲しむ…それはおわかりでしょう…？」

聖隷の言葉は何一つとして間違っていない。

自分が死ねばエレノアはきつと涙を流す。

幼くして両親を亡くした彼女にはもう悲しんで欲しくないと自分は思った。悲しい思いをさせないようにと彼女を守ると昔に約束した。

その約束を貫き、守り通すためには断じて死んではならない。

しかしそのためには自分の使役聖隷を見捨てなければならぬのだ。

「ごめん…」

「お気になさらず…」

後ろ髪を引かれる思いに胸を引き裂かれるような感覚を持ったまま、グランは先の見えない空洞に走り出す。

その途中パルは土に目を落として哀愁を帯びた声色で呟いた。

「忘れません…貴方から授かった名を」

「…飽<sup>エリ</sup>く<sup>アル</sup>なき探<sup>ガリ</sup>究<sup>リ</sup>心<sup>パー</sup>パル」

それは本当の名ではない。

彼を与えられた時には意思がなく、名を訊ねても答えを返さない。だから名を考えるのには苦労した。

悩むに悩んで名付けたのは小さい時好きだった冒険小説にちなんだ名だった。

「…：…ありがとう…：パル」

それを最後の会話としグランは遺跡の上部を目指して駆けた。

遺跡の至るところから爆発音が聞こえようが、脇目も振らず彼は疾走する。

背後で地を揺るがす轟音が発生しても、彼は振り返らず目から一滴の雫流しながら先を急いだ。

「うああああああああ！」

慟哭を上げ地下空間を走り抜ける彼の目と鼻の先に光の歪みが音もなく現出し、その体を包み込んだ。

—ここは…どこだろう



ふと気付くと青と緑が支配する空間にいた。  
絵画みたいに幻想的な景色が広がる空間にグランはいた。  
見回している彼の足元に影が覆い被さり背後を振り返る。  
そこで見下ろしているのは龍だった。

周囲の色とはまた違った色合いをした青を持つ体躯と八つの尻尾の先端を合わせた、九つの顔を持った巨大な龍だ。

—君は一体…？

不思議と喰い殺されるとは思わなかった。

鎌首をもたげる龍の目は敵意を抱いているよりも、何故か申し訳なさそうにこちらを気遣っているように見えた。

龍は体から赤と黄の光を出して、その光はさ迷うことなく自分の体に吸い込まれるように入った。

そして龍は雄叫びを上げると目の前の空間はあっさりと消え自分の視界が真っ白に埋め尽くされた。

遺跡の外では山のような物体が身をくねらせて鳴き声を上げていた。否それは山ではない。

金と焦げ茶色の体表に埋め込まれた青い結晶を光らせ、三日月のような形状の角を生やした魔獣だ。

魔獣—コツヴは角より光の弾を放出し遺跡が隠された山を攻撃し、目障りな岩を鎌の成りをした両腕で切断する。

『クワアアア』

そんなコツヴの前に突如現れた赤い光はやがて人の形に変化し、地面に降り立つ。

着地の衝撃で土砂が巻き上がり、大地の震撼がコツヴの足元を伝って全身に行き渡る。

コツヴの前に立ちはだかったのは異様な存在だった。赤と白のボディと逆三角形の青い結晶を取り囲む金の意匠を胸に刻んだ巨人。彼は両腕を特に右腕をまじまじと見つめると叫び声を出すコツヴに気付く身構え、左腕を顔の横で垂直に曲げて右腕を突き出すように構えをとる。

「デユア！」

### 第3話 誠か嘘か…

赤と銀、そして金の三色のボディを持つ巨人はコツヴに迫り攻撃を仕掛ける。

右ストレートを腹部に決め、身を翻すと同時に跳ね左の踵で顔を蹴りつけた。

『クワアアア』

人体でいう横顔に相当する部位を横一文字の軌道で蹴られたコツヴは鎌の左手でそこを抑え、鳴き声を上げる。

手応えを感じた巨人は続けざまにパンチからキック、キックから肘打ちとどンドン格闘技を決めていく。

しかしそういつまでも優位に進むはずはなく一本角から放たれたコツヴの光弾の直撃を受けて、巨人は胸から火花を散らして仰向けに地べたへ倒れこむ。

『ドワアアア！』

怯んだ相手に容赦なく光弾の連射を行うコツヴ。

光弾の発射が止む頃には巨人は土に片膝を付き、小刻みに両肩を下に揺らしていた。

その様子からダメージの入り具合を読み取ったコツヴは距離を詰め、両腕の鎌で巨人の首筋を挟む。

『ガアアアアア！』

両側から凄まじい力で首を締め付けられ悲鳴を上げる巨人。それに構わず、コツヴはその巨体を岩盤に押し込み脱出を封じる。

悶える巨人の胸にある青き結晶が赤く明滅し、警告であるかのように何度も何度もけたましく鳴り響く。

『クワアアア』

勝ちを確信したコツヴは薄気味の悪い笑い声で宣言した。

だが

『ジャアアアア！』

そうは問屋が卸さないと言っても言いたげに巨人はコツヴの鎌を鷲掴み首筋から引き剥がす。コツヴの腕力と力比べをし、皮膚から鎌が剥

がれたところで腹部に思い切り脚を伸ばす。

結果としてコツヴの側から間合いを離してしまい、巨人はかろうじて危機を脱した。

コツヴは再び光弾による射撃を敢行するもそうはさせじと巨人は赤い光弾を角に命中させ、光弾の砲台を負傷させた。

「クワアアアアア」

―よし今だ！

ここぞというチャンスを見逃してなるものかと巨人は必殺の一撃を決める。

「ジャァァァアアア」

まず両腕を左右に伸ばして、腰を下ろして上半身を前屈みにする。

腕を二つとも頭の先端部分を隠すように持っていくと尖った頭の先端には赤き光が満ちていく。

エネルギーが収束した瞬間背を後ろに曲げると光は鞭のようにになり、巨人は体ごと重心を前面に押し出す。

「ジャアアアアア！」

解き放たれた光の鞭はコツヴに到達するや早い、その巨体を切り刻み頭から爆散させる。

四散したコツヴを見届けた巨人は心身共に疲れ果てたのか、胸にある結晶の明滅速度を早め片膝を地べたに打ちつけた。

そうしてしばらく佇んでいた巨人だがやがてその巨軀は透明に薄れていき、完全に姿を消失した。

---

意識が覚醒したその時グランの頭にあらゆる情報が送り込まれた。

澄んだ青い空と白い雲、石造りのシンプルな町並みを見下ろさんばかりに巨大な王城、清らかな水を噴き出す円形状の噴水。

どれも彼にとつて馴染み深い光景ばかりだ。

「ここは…ローグレス？どうして…」

余りの驚きにグランは啞然とする。

「僕はさっきまでブルナーク台地に…ウエストガンドにいたはずなのに…どうしてローグレスに…」

とても信じられない。

ブルナーク台地のあるウエストガンドとローグレスのあるミッドガンドは船でも三日以上はかかる位置関係にあるはずだ。

まさか二大陸間の物理的隔たりを、瞬時に越えてきたとでも言うのだろうか。

「こんなありえない…夢でもない限り船以外で大陸を行き来するなんて…夢？そうだと夢だ。でないと言明がつかない」

混乱からかグランは自分に言い聞かせるように夢という単語を幾度か反復し、これまでの体験をその一言で片付ける。

遺跡で業魔の襲撃にあったのも、聖隷が自我を持っていたのも、自分が巨人になったのも、全てタチの悪い夢だったのだ。そう解釈しなかった

「全部夢だったんだ…」

無理矢理にでもその説を自分自身に押し付けるグラン。

その彼の耳に噴水のベンチに座る若い男達の会話が聞こえる。

『おい聞いたかよ。さっき対魔士が話してたのを小耳に挟んだんだがレニードに向かったローグレスの対魔士様が何人も帰ってこないらしいぞ。本当だとしたらヤバいんじゃないか？』

『嘘に決まってるんだろ。レニードに向かった対魔士の中には一等対魔士もいるんだぜ。業魔なんぞにそう簡単にやられるかっての。』

『いやその話、俺も聞いたがどうやら本当みたいだ。なんでも業魔退治に向かったものの、凶悪な業魔に返り討ちにあたって話だ。隊は全滅し一等対魔士まで何人か犠牲になったみたいだ』

『二等対魔士まで…マジかよ…一等対魔士つてのは対魔士の中でも一握りの人間しかなれない選りすぐりのエリートなんだろ？そんな馬鹿な…』

「にわかには信じられない話だけど先日レニードから戻ってきた救助隊が退治に行った一等対魔士の腕を持ちかえってきたって話もある』

『おいおい大丈夫か…？聖寮の一等対魔士を殺つちまう業魔なんか俺はお目にかかりたくないぜ』

男四人組の会話を聞いたガイアは戦慄した。

「…レニード…一等対魔士の腕…」

断片的な情報を拾い上げて繋ぎ合わせていくうちにガイアの声は上擦り、震えていく。

頭の中の作業に気をとられているそんな彼の正面を子連れの母親が横切る。

一拍遅れて彼女らの存在に気付いたグランは話を聞くため、女性の肩へと腕を伸ばして引き留める。

「あ、あの…すみません！」

しかし彼の指先は女性の肩をすり抜けて宙に浮かんだまま何も掴めはしなかった。まるで彼が霊体であるかのように

「え…」

ぎよつとして言葉に詰まったグランは進行を妨害するように女性の前に立つ。

だがそれすらも結果は同じで女性はグランの体を通り抜け、子を連れて城の方へと遠ざかっていく。

「そんな…一体全体何がどうなってるんだ…誰か、教えてくれ」

何もかも自分の理解の範疇を越えている。

普段なら軽口をぼやけたろうがそんな心のゆとりはグランにはなく、彼は衝動と恐怖に駆られたまま茫然と立ち尽くす。

その瞬間、景色が一変する。

青い空は豪勢な造りの天井に、石造りの町並みはいくつもの本が並べられた棚に、水を噴き出す噴水は木造の執務机に瞬きもしないうちに変化していた。

『レニードに派遣した隊は全滅か…手痛い損失だな』

執務机を真ん中に置いて相対する二人の男がいた。

アルトリウスとゼブブと名乗った大柄な男だ。

『一等・二等共に霊応力の高い者を選んだはずだが期待外れだったな』

『一等の二人なら可能性はあると踏んでいたのだが、必ずしも靈応力の高さに左右されるわけでもないということだろう…古文書を解読してもなおかの龍に関しては何とんどが謎のままだ』

『時間は限られているぞアルトリウス…わかっているな？』

『問題ない。既に四つの内二つは何者かに託されている。聖察の勢力をもってすればその宿主の特定もそう遠くはない』

二人はグランの存在に気付いていないのか、目もくれずに淡々と何事かを話している。

『現状光は後回しでも支障はない。まずは優先すべきは喰魔の目覚め』

『そうは言うがそちらも簡単な話ではないぞ。八つの穢れを送るためにはその数だけ喰魔を揃える必要がある…まさか本当にタイタニアの喰魔に双方が質を求める気か？』

『あれはいずれ強い憎悪と絶望を生み出す。何ら問題はない』

『英雄らしからぬ発言だな。完全に情を捨てている』

『理想の世界を実現するため…理による世界を作るためにはくだらぬ感情など捨て去らなければならぬ』

—アルトリウス様は何を言ってるんだ

彼らが何を話しているのかまるで理解できない。

しかしアルトリウスから発せられる言葉の一つ一つには計り知れない重みがある。そして彼らが何かを企てていることにも

それだけはなんとなく感じる事ができた。

『この世から穢れを消す…彼らもそのための礎となったのだ』

『礎とはな…ものはいよいよだな…しかし、どうせ死ぬ身であったならばせめて我々にとって有益な贄となつてからにして欲しかったところだな』

—贄？

ゼブブのその言葉を皮切りにまた周囲の景色が一変する。

グランを待ち構えていたのは今度は建造物は一つもない、青と緑の二色が四方八方に広がる風景。

人の手では到底なし得ないまさに超常の力で構成されたような摩

訶不思議な世界だ。

目の前の光景をグランは一度しか見たことがなかったが彼の記憶にはしっかりと焼き付いていた。

「これは…」

先から自らの身に降りかかる現象に息を飲んでいるグラン。

そんな彼は自らの身体が、超常の力で溢れる世界を身近に感じていたことを微かに気付いていた。

「この空間、前に来た時より不思議な感覚が強くなってる」

—キユアアア

ふとグランの背中に甲高い咆哮が浴びせられる。

それに過敏に反応したグランが振り向くと、九つ首を持つ青い龍が彼を見下ろしていた。

「君はあの時の…教えてくれ！君は一体何なんだ!?僕は一体どうなったんだ!?失った右腕が治ったのは君仕業なのか!?!」

矢継ぎ早に語気を強めて龍に問い詰めるグラン。

目の前の存在が人語を発するとは風貌からして思えないが、それでもすぎるしかない。

自分を巨人の姿に変化させた光を与えたのだから何かを知っているはずだ。

「君は何を知ってるんだ！頼む、答えてくれ！」

龍はまじまじとグランを見つめたまま口を閉ざす。

そのまま暫く時が過ぎた頃龍は虚しさを表したような声色の叫びを上げる。

—アアアアアア

するとグランの正面に青白い空間の歪みが発生した。

歪みを生み出したと思われる龍はグランを直視して、九つある内の一際大きな首を縦に振る。

グランがその行動に首を傾げ質問を口にしようとしたが、彼が声を



出すより先に龍の体は次第に透けていく。

「待って！うわっ！」

制止のために腕を伸ばして叫んだがもう遅い。

龍は完全に姿を消しグランの指先が触れたことで、龍の残した光の歪みは強烈な輝きを放つ。

光に潰された視界が回復し足元に柔らかい感触を感じたグランは恐る恐る目を開くと、晴れ渡った空と色とりどりの花が咲く草原があった。

他には人も町も何もない。

「何なんだよ……さつきから……夢なら夢って誰か言ってくれ……」

表情に悲壮感を帯びたグランの呟きはそよ風に拾われたまま何処かへ飛び去っていく。

ブルナーク台地のある一帯は酷い有り様であった。

遺跡の隠された山は半壊し遺跡の壁面部分の大多数が外気と月明かりに触れてしまっている。

おまけに遺跡自体もコツヴの攻撃を受けてしまい、第三者が見ればとても遺跡とは呼べる外観ではない。

「……はあ……うっ……」

その遺跡から這うように出てくる者がいた。  
シャプレーだ。

全身の爪先に至るまでくまなく襲う痛みと大量の出血による目眩いと格闘しつつ、彼は地を大蛇のように進む。

一刻も早くこの場を離れ、治療を受けなければ死んでしまう。こんなところで死にたくない

その思いだけが彼を突き動かしていた。

しかしその思いは無残にも儚く潰えてしまう。

「ガアッ！」

月夜に赤い血潮が舞い散る。

背中に深く斬り込みを刻まれたシャプレーは、ピクピクと弱々しく体を小刻みに動かして間もなく息絶えた。

物言わぬ骸となった彼の体から流れ出た血を手にした刀身に滴らせたその存在は、闇夜の中で左目に怪しい真っ赤な光を灯していた。

## 第4話 海上の出会い

ブルナーク台地で一等対魔士二名と多くの二等対魔士が、業魔によって惨い死を遂げたときれる痛ましい出来事から四カ月が経とうとしていた。

以来世間は業魔をより恐れ、同時に聖寮やアルトリウスへの信頼を強く寄せるようにもなった。

だが世界がそんな状況であろうと海の上で生きる男達にはさほど関係はない。

世界がどんなに一変しようがその生きざまを、流儀を曲げさせることなど不可能なのだ。

ある海上を進む船の甲板に海賊帽を深々と被った男が大層満足そうに口角を吊り上げ、不敵な笑みを浮かべる。

「いい波が来てるじゃねえか。こりゃ予定より早く港に着けるかもな、なあアイゼン」

「この調子で行ければそうだろうがどうだかな。もしかするとこれから荒れるやも知れんぞ」

「ははは、冗談に聞こえないから手に終えねえ。まあそうなたらそんな時はそんな時で何とかすりゃいいさ。最も業魔程度どうってことはないがな」

海賊帽の男ーバン・アイフリードはけたけたと笑い飛ばし鮮やかな金髪の男に語る。

アイフリードにアイゼンと呼ばれた金髪の男はその指摘に難色を示すことなく、つい先程アイフリードがしていたのと同種の笑みをもって返す。

「近頃業魔の他にも怪獣という謎の巨大生物も出現しているとも聞く、用心しておくにこしたことはない」

「巨大生物か、噂には聞いていたがどんな姿形をしているのものやら。できれば一度お目にかかりたいもんだな」

「やめておけ、出くわして五体満足でいられた奴はいないらしいぞ。」

といつても遭遇できるのかもわからんが」

「その心配は無用だ。なにせ俺には死神がついている。いざとなつたらアテにさせてもらうぜアイゼン」

アイゼンは地を司る聖隷だ。

聖隷はそれぞれ加護を持ち自らの支配圏である領域内に特有の恩恵をもたらすもののだが、アイゼンのそれはとても加護と呼べる性質ではない。

彼の加護は周囲に不幸を与える『死神の呪い』とも言うべき、まさに呪われた力なのだ。

「お前と付き合ひの長い俺の勘じゃそろそろ何かしら来てもいい頃合いなんだがなあ」

「船長！前方に謎の漂流物が！」

「お、さつそく来たか？」

言葉に出してみれば何とやら

部下の海賊につられてバルエルティア号の船橋へ足早に行くと単眼鏡を覗いて、海面を見やる。

「…残念ながら生物じゃないな…ありやあいかだだ」

「漂流したのか？救助信号旗は挙がってるか？」

アイゼンの問いかけに首を振って答えるアイフリード。

彼は視点をずらして海面に浮かぶいかだの上部を単眼鏡越しに覗き見ると、ほんの微かだが人影を捉えた。

「誰かいるな。取り舵一杯、船をあのかだに寄せろ！」

「へい！」

「どうするつもりだ？」

「なに、特に大した理由はねえよ。この海域をあんなもんで航海するイカれた奴の顔が見てみたいだけさ」

間隔が縮まりいかだの様子がより鮮明に見えるやすくなる。

いかだには袖も裾もボロボロの服装の男が横たわっていた。それ以外には何も無い

バンエルティア号をいかだの真横につけると乗組員たちによって取り付けられたタラップを伝って、アイフリードとアイゼンはいかだ

に乗り込む。

「気を失っているだけのようだ。壊賊病というわけではなさそうだな」

「とりあえずバンエルティア号に運ぶとするか。水棲業魔に食われたんじゃ夢見が悪い」

倒れる男の容態を確かめたアイゼンにそう返したアイフリードは己も乗っているいかだに目を配った。

「食料も積んでねえ。アイゼンどうやらこいつ思った以上にイカれた奴のようだぜ。死神の呪いが思いがけない奴をバンエルティア号に呼び寄せちまったな」

「目当ての奴じゃなくて残念だったな」

二人は軽口を言い合うと男を回収しバンエルティア号に踵を返した。

あれからどれだけの時が過ぎたのだろうか。

あの時から自分を取り巻く状況は180度一変した。

『対魔士様私の息子が草原に行つたきり戻つて来ないんです!』

『俺の娘もです!どうか捜索を出してもらえないでしょうか!』

「駄目だ。今アルディナ草原は凶暴な業魔が出没してとても捜索隊を出せる状況じゃない」

『そんな!お願いします!対魔士様!』

『悪いが諦めてくれ。たった二人の子どものために多くの対魔士を犠牲にするような危険を犯すことはできない』

個よりも全、それを優先するためなら例えどんな小さい命が犠牲になろうとも構わない。あてもなく世界を放浪する中で、そんな理のたに犠牲になった人をたくさん見てきた。我ながら滑稽な話だと思う。

巡察官として見たかった世界の有り様をまさか対魔士でなくなつ

てから知ることになるうとは。

理によつて理想の世界を実現する。アルトリウスの言葉だ。

それが正しいのだと思つていた。どんなに心情的に辛い選択であろうと、それで世界がより良い方向に進むのなら間違つていないのだと。そう信じていた。

聖寮の、アルトリウスの言葉に従えば災厄の時代を乗り越えられると疑いもなかった。

聖寮にいる内に感覚が麻痺していたのだ。

だが今は違う。彼に対して疑念を持つてすらいた。

九つ首の龍が見せた会話もだが聖隷にも意思がある事実を知っているはずなのに誤魔化して、対魔士に道具として使役させている。

何故事実を隠す必要がある。何故自分はその遺跡に遣わされたのか。何故九つ首の龍は自分に光を託したのか。

その答えを一つも見つけられないまま自分は世界を放浪している。

聖寮の対魔士としての名前も地位も全て捨てて

バンエルテイア号の甲板にてアイフリードとアイゼンは保護した男についての意見を交わしていた。

「世捨て人みてえな格好してやがったな。アイゼンお前はあいつをどう見る？」

「あいつからは妙な力を感じる。俺達聖隷に近い何か強力な力をな」

「そいつはつまり、あいつもお前と同じ聖隷ってことか」

「いやそれはない。確かに聖隷に近い力を持っているようだがあいつ自体はお前と同じ人間の気配を感じる」

「わっかんねえなあ…まあ目が覚めたら直接聞いてみつか」

—どうも小難しいのは性に合わない

後ろ髪をかきむしりながらアイフリードは呟くと、ふとアイゼンの掌に納まっているピンク色の指輪が目に入る。

「そいつは…」

「あの男が持っていた。相当大事なものなんだろう、服装がボロボロになっていてもこれが入っていたポケット周りだけは傷ひとつなかった」

目を細めていた彼の耳にキィイと音が響いた。

「お、お目覚めみたいだな。どうだ？気分の方は」

扉を開けて出てきた男にアイフリードは海賊らしからぬ気さくな様子で微笑みかけ、改めて全体像をチェックする。

ボロボロに破れたみすぼらしい衣服とそれに反した印象を与えるさらつとした鮮やかな赤髪。

それらの特徴を持った彼はアイフリードとアイゼンとバンエルティア号、ついでに海へと目を凝らすと質問を口にした。

「…誰だ？…それにここは…？…」

「俺はアイフリード。アイフリード海賊団の船長だ、んでこつちの目付きの悪いのは副長のアイゼンだ」

「海賊…この船は海賊船か…」

「ああ、バンエルティア号。異大陸まで航海できる俺の自慢の船だ」

彼の問いにアイフリードは気分を害した素振りもなくむしろ誇らしげな様子だ。

「こつちは名乗ったぜ、次はお前の番だ」

「……」

表情を曇らせ複雑そうな面持ちをする男。

まだ意識が戻ったばかりで思考がはつきりしていないというものもあるのだろうが、それ以外にも返答に詰まる理由がある。

そう分析したアイフリードはやはりただならぬ者ではないと察した。

その時アイゼンがアイフリードに警告をもたらした。

「…気を付けろ、何かくるぞ」

「何かってはつきりしねーうおっ!？」

「っ……………」

船体が傾き乗員全員が例外なく体勢を乱しつつも、咄嗟に近くの支

柱に捕まる。

「おいおい…なんだありやあ」

じょうろに酷似した形状の細長い鼻に赤い体表をした如何にも間抜けそうな面をした怪物が突如として海面に現れた。

体勢を持ち直したバンエルティア号の進路上に二足で立つ怪物――ジャツパにアイフリードは何故か嬉しそうに呟く。

「あれ程の巨体、どうやらあれが巷で噂の怪獣のようだな」

「お前のおかげで今日も退屈せずにすみそうだ。よっしゃ、お前ら全砲門開け、狙いをあのデカブツに集中しろ！」

「おう!!」

バンエルティア号にアイフリードの指示が飛び交い乗組員たちは威勢よく答える。

せつせと船長の指示に従う彼らを男は目を細めて眺めていた。

「何をするつもりだ？」

「あんな面白い奴にはそう滅多に遭遇しねえからな。これを逃す手はないだろ」

「戦うのか…？海賊なんじゃないのか…」

「そんじよそこらの海賊とは違うんだよ。俺達アイフリード海賊団はな…撃てえー!!」

男に顔だけを向けて白い歯を空気に晒すアイフリード。

彼の号令によりバンエルティア号の砲撃がジャツパに放たれる。

弾は一つ残らず巨体に衝突し火花を散らすも、ジャツパはけろっとしていた。

「効いてる…って様子じゃねえなあれは」

「ならこいつはどうだ。ウインドランス！」

アイフリードの後方に控えていたアイゼンの風の刃は黄色い鱗を打ち、ジャツパの進行は一時止まる。

しかしあくまでも一時的でしかない。

「チッ…これもダメか…やりにくいな」

効き目が薄いのを見てとったアイゼンは舌打ちをする。

その横で男はバンエルティア号の手すりに自らの手を置き、海上へ



と身を乗り出す。

「おい！おまー」

見投げしたとしか思えない行為だ。

気でも狂ったのではとアイフリードとアイゼンが視線をそちらへ移すと、バンエルティア号を照らす赤い光が垂直に伸びた。

その光は輝きを失うとバンエルティア号の隣にはジャツパと同等の背丈をした巨人が立っていた。

「巨人に変身しただと…？」

「死神の呪いが思いもよらない奴を引き寄せたみたいだな」

アイゼンとアイフリードが言葉を交わす前で、巨人はジャツパに右ストレートを叩きつける。

しかしアイゼンのウインドランス同様に鱗にダメージを殺され、むしろ巨人の方が鈍痛に見舞われた。

「ウアッ！」

『グバアア…！』

ジャツパのパンチを受けて巨人は後退を余儀なくされる。

胸に一発入れられた巨人はお返しだと言わんばかりに、左拳を柔らかそうな顔面に狙いを定めて振るう。

しかし触れるか否かのギリギリところでジャツパは細長い鼻から黄色い煙を噴出。

回避する暇もなく至近距離でそれを浴びた巨人は絶叫を上げて悶える。

「グウ、ドワアアア!!」

「くっせえ!!んだあ、この…！丸々一ヶ月放置したパレンジみてえな臭いは！」

「むう…！」

「ぎゃああ!?汗だくになった服を敷き詰めた部屋並みに嫌な臭いだああ!!」

「…母ちゃんごめんよ…こんな臭い服を洗ってくれてたんだな…俺今からでも変わるよ…週に二回は必ず風呂に入るよ…洗濯もちやんとするよ…」

ジャツパの鼻より出たのは強力な悪臭だ。

物事に例えるのもおこがましいその臭いの被害は巨人はおろかバンエルティア号にまで及び、アイゼンを含めた全員が鼻を摘まみ、彼を除く全員が悲鳴を上げる。

中には過去に想いを馳せ懺悔する者まで現れた。

「ジュアアア……い！」

とてつもない異臭に意識を手放しかけた巨人は首を左右に振ってどうにか正気を保つ。

不用意に近付いてはまずいと身をもって悟った距離を置こうとする巨人だがジャツパが先手を打っていた。

己の姿を背景に溶け込ませて身をくらませたのだ。

逃げたとは思えない。

「フア?！」

ジャツパを見失った巨人は中腰に身構えて、いつどこからくるともしれない攻撃に警戒をする。

すると巨人の背後にジャツパは姿を現し、両手の吸盤と思われる穴を使って巨人を引き寄せた。

ガツチリと巨人の両腕を掴んだジャツパはもう一度黄色い異臭を吐き出し、巨人を悶えさせてしまう。

「ドワアアアア!!！」

抗うにもジャツパの鼻から出る強烈な臭気に精神を磨耗され、巨人は次第に抵抗力を削がれてしまう。

おまけにジャツパの体表からも同様の臭いが香りだし巨人は悶絶する。

「このままじゃまずいぜ。こいつを野放したらこの海はこいつの悪臭で汚染されちまうぞ！」

「そうなればこの辺り一帯は生物は死滅しあいつのテリトリーとなる。怪獣水域……いや、怪獣海域とでも言ったところか。どちらにしてもあいつの発する臭いを封じなければ手のうちどころがないぞ」

強力な悪臭により海が汚されるのをよしとしないアイフリードとアイゼンは打開策を考える。

「通じなくてもやるしかねえ！砲撃用意！」

アイフリードは部下に砲撃を命じる。

その間にもジャツパは悪臭と太い尻尾で巨人を苦しませていた。

巨人の胸元の結晶が赤く明滅を始めジャツパはその音に気をよくしたのか、海面に四つん這いになる巨人の腹部を勢いよく蹴り上げる。

「ガア、ジュアアア」

いいように遊ばれ、いたぶられるがままになっている巨人は体力を消耗していく。

その証拠に胸の結晶―ライフゲージの点滅が早くなりだしている。

「船長準備できました！」

「よし俺の合図で一斉に撃ち出せ、あいつの頭上にお見舞いしてやる」

部下の報告にアイフリードは矢継ぎ早に次の命令を下し、大砲の間近まで歩み寄る。

「いいか、巨人があの間抜け面と距離を空けた時を狙え：外すんじやねえぞ」

「了解！」

そう指示を下してアイフリードは機を窺うが、ジャツパはなかなか巨人から離れようとしなない。

このまま待っていてもチャンスは来ないと、判断したアイゼンは二度ウインドランスを発動する。

『グルパアアア』

「今だ！撃てえ！」

風の刃は後頭部に命中しジャツパは仰け反る。

自らを戒めていた重みがなくなったのを感じた巨人は残る気力を振り絞って体を起こし、アイフリードの指示が飛んだ瞬間反射的にジャツパとは真逆の方向へ飛ぶ。

バンエルティア号の大砲から発射された弾丸がジャツパの頭部で爆発する。それも一発やそこらではない。

何発も脆い部位を攻められたジャツパは傷付き、か細い悲鳴を出す。

『ジユパアアア』

『ジェアアアア』

巨人は縦に曲げた左腕の手首に伸ばした右腕の間接部を組んで己の頭上へと運ぶ。

その過程で収束させたエネルギーを両腕を胸の前で下ろしたと同時に解き放つ。

「ジャアアアアア！」

「L字に見えなくもない構えから解放されたエネルギーは橙色の光線となってジャツパに行き届く。

必殺技クアンタムストリームの一撃を受けたジャツパはその体を爆散させて、巨人とアイフリード海賊団の前に敗れ去った。

「よっしやー!!」

「ざまあみろってんだ！」

未知の敵を打ち倒した実感を得て歓喜に沸き立つアイフリード海賊団。

喜びのあまりお互いに抱き合う船員達を尻目に、アイフリードはアイゼンと共に巨人を見上げる。

「さて、邪魔がいなくなったところで聞かせてもらおうぜ。色々とな」

「ほー…つまりお前は聖寮の対魔士で九つ首の龍から光を与えられて巨人に変身する力を得た…そういうことか？」

「ああ」

変身を解いた赤髪の男はバンエルティア号の船長室でアイフリードとアイゼンを前に全てを話した。

元は対魔士であったこと、ブルナーク台地での業魔と怪獣との戦い、謎の空間で九つ首の龍から光を授かり巨人への変身能力を得たこと、アルトリウスとゼブブとの会話。

自身の名前以外の全てを打ち明けた。

「九つ首の龍…か」

「心当たりがあるのか？アイゼン」

「いや龍の方にはない。だが別の方にはある」

アイゼンはそう言い切ると男に視線を合わせて呟く。

「お前が九つ首に会った空間というのはおそろく地脈だろう」

「地脈？」

「地脈とは大地の中を巡る自然のエネルギーが流れる空間のことだ。そして地脈には地上で起きた出来事を映し絵のように記録されている大地の記憶というものがあるらしい。お前が見たのはそれだろう」  
地上で起きた出来事を映し出す。

アイゼンの言葉が本当ならやはり、アルトリウスとゼブブのやり取りは実際にあったのだということになる。

「聖寮も胡散臭いとは思ってはいたが…こいつの話聞くかぎり何かヤバいことを企んでいそうだな…まあそいつは今はさておいて。んで、お前のことは大体はわかったが、これからどうするんだ？いくあてはあんのか？」

言葉に詰まる男。

どこに行きたいのか、何をしたいのかまるで考えていなかった。

ただ聖寮に対する不信感と自らに与えられた力を持ったまま、対魔士として復帰するわけでもなく放浪していただけだ。

「わからない…どこに行つて何をすればいいのか、まるで…」

「目的も楽しみもなく生きてるんじゃない面白くねえぞ。人生つてのは長いようで俺らが思つてるよりも短いんだから…」

アイフリードはそう返すと改めて男を眺める。

明るい色彩の赤髪と相反したサファイアの双眸。

世捨て人の身なりからは考えつかない整った顔立ちからはどこか温かな安心感を感じさせる。

本来ならばお目にかかることのない自分とは相容れることのない人種の男だ。

「ま、この船にいる間は好きにしろや。ここにいる奴らはお前みたい

に世の中はあぶれたもんの集まりだ。礼儀だのなんだのと事細かいのは気にしなくていいからよ」

アイフリードはそう言い残して船長室を去る。

その自由気ままな生きざまが表された彼の背中を、口を閉ざして見つめる男は次に壁にもたれかかったアイゼンに話しかけた。

「…君は聖隷、なのか？」

自分を珍獣を見るような丸くした瞳で見る男にアイゼンは眼光を鋭くさせたまま、腕を組んで答えた。

「珍しくもないだろう…対魔士なら聖隷はたくさん身近にいただろう」

「…やっぱり、聖隷にも意思があつたんだな…」

この場にはいない誰かを思つての言葉を呟いて俯く男。

酷く気力のない彼にアイゼンは既視感を抱いた。

「俺の加護は相当なひねくれ者でな。生まれついた頃からの体質のよいうなものだな…それがもたらす災いのせいで俺の周りにいる奴らは誰もが傷ついた。妹も何度か巻き込んだこともある」

男は顔を上げてアイゼンへ耳を傾ける。

「死神の呪いとも言うべきタチの悪い加護を解く方法を求めて俺は妹の元を離れて異大陸に渡った。だが未だにその方法は見つからない。呪いを解けずどうすべきか悩んでいた俺にある男は言った。『呪いの力を持って生まれたのなら呪いごとお前だろう』とな。その言葉で俺は妹と暮らすことを諦めてこの船であいつらと共に海を旅する決意をした」

妹は今でも大切に思っている。

妹のことももちろん大事だが呪いを持ったままの自分と一緒にいれば、彼女の身に何が起こるかわからない。

妹が傷つくのは兄としては是が非でも避けなければならぬ。

彼女の元を去り、呪いごと含めて自分を受け入れた人間達と生きる。

そういう生き方も悪くないと思つた

「お前がこの先どうするのか…俺はその選択には干渉しない。自分の舵は自分で取る、それが俺達アイフリード海賊団の流儀だ」

「自分の舵は…自分の手で…」

アイゼンの言い放った流儀は男に重くのしかかった。

彼らに言わせれば自分は今目指す場所もなく霧の中でさ迷うばかりの船だ。

いずれは難破し沈没する運命にある。

このままじつと何もしなければ、そういう末路を迎えるだろう。

「もし俺達と共に来るなら拒みはしない。死神を受け入れるような奴らだ。巨人に変身する元対魔士を受け入れる度量ぐらいはある」

言いたいことを告げたアイゼンは彼を一人にする。

そうして部屋に取り残された男は閉口したまま熟考した。

そして

長い月日が経ったバンエルティア号の一室では、男が金属を使って何かを製作していた。

「これでよしつと、名前はそうだな…エスプレンダー。これにしよう、語感もいいしな」

青いガラスのように透き通った表面を黄金色の金属が取り囲んだそれを掌に納めた男は満足気に微笑む。

達成感に満たされていたその時体に奇妙な感覚が走り、彼は目を細める。

「またか…」

「リーダー！」

活気のある声と共に扉が開かれ外から海賊帽を被った金髪の男が入ってくる。

「ベンウィック、どうした？」

「副長が呼んでる。用件は―」

「わかってる。いくぞ」

ベンウィックと呼ばれた青年の言葉を遮った男は椅子を立ち、彼と共に甲板に足を運ぶ。

白銀の大地を一望できる甲板に上がると船頭に立つアイゼンに男は声をかける。

「アイゼン、行ってくる」

「ああ、頼んだぞ。ガイア」

お互いに視線を交わすと男―ガイアはエスプレンダーを前に突き出し、赤い光に包まれる。

丸みを帯びた光は上昇し、雪の降る空を飛翔していく。



## 第一章 違う軌道の惑星（ものたち）

### 第5話 極寒の地に立つ

雪と寒気が支配する極寒の大陸ノースガンドにある街ヘラヴィーサ。

街中にも雪が降り積もり辺り一面、白一色に飲み込まれている。幻想的とさえ思えるそんな空間を興味無さげに歩む男がいた。

青い色の後ろ髪を両側にツンとはねらせた男は水色と黒色が入り混ざったコートを冷風に靡かせ、一切の無駄を感じさせない所作で街中を進む。

「まさか業魔になるとはとんでもないことをしでかしてくれたよダイルの奴は、あいつのせいで商船組合の活動が制限されちゃった」  
「密輸の罪を擦りつけたはいいものこのままだと俺達に疑いの目が向けられるのも時間の問題だ。早いところ聖寮にダイヤルを始末してもらわなければ俺達まで捕まっちゃう」

建物の隅で隠れるように商船組合の組員らがひそひそ声を潜めて囁き合っているが、男はまるで興味を示さずその前を歩いた。

おおよそ聞き捨てならない内容であるにも関わらず男は歩みを止めず素通りしていく。

宿の曲がり角を目前にした時、小さな悲鳴と共に足元に鈍い衝撃が伝わる。

「きゃっー」

曲がり角を飛び出して来た少女は冷たい雪の上に尻餅を付き、手に持つ紙袋から紫の果実ナツプルが溢れ落ちた。

ひんやりとした路面に落ちたそれを男は拾い上げると、付着した雪の滓を払う。

そして少女に力を貸す素振りを微塵も見せず自力で立ち上がるの待った男はナツプルを少女へ投げ渡す。

「あ、ありがとう！」

「ディアナ！もう、一人で先に行かないの迷子になっても知らないわよ！」

危なげながらもナツプルをキャッチした少女の後方から母親と思われる女性が駆け寄る。

「聖寮からお知らせがあったでしょう。今は業魔がいて危ないから家で大人しくしているようにって」

寒冷地だと言うのに大胆に豊満な胸元を露出させた挑戦的な格好をしたその女性は、男に気づくと謝罪を口にする。

「すみませんこの子が迷惑をかけたみたいで、お召し物は大丈夫ですか？」

「親なら子供から目を離すな」

それだけ伝えた男は親子の元を去る。

同時に聖堂のある方角より刃の交じり合う音と悲鳴のような叫びが飛んできた。

それを皮切りに穏やかな空気は消息を絶ち、外にいた住人達は弾かれたように屋内へ避難する。

状況を把握するために男は建物に吊り下げられた梯子を登り屋根上から聖堂を見下ろす。

そして彼は無造作な髪型の女と異国風の衣装をした男が対魔士に取り囲まれながらも、剣と二刀小太刀を振り回し刃向かう光景を目にする。

「対魔士共がたかが二人の人間に遅れを取るとはな…そうかあれが聖

寮が釣り上げようとした獲物か」

あの二人が先の母親が言っていた業魔だろう。それに数刻前業魔の侵入を手引きした魔女を処刑すると御触れが出ていたのを彼は知っている。

おおかたその魔女を餌に使いあの二体の業魔を誘き出したところだろう。それ自体は策としては何ら問題はない。

しかしだからこそ這いつくばる対魔士の有り様が滑稽に感じる。せつかく餌を用意してまで釣り上げた獲物に痛手を受けているのだから。

「まんまと言ひ様にあしらわれているな」

数で勝るにも関わらずてこずる対魔士を眺める男の視線に気付くことなく、黒髪の男女と彼らの仲間らしき奇抜な服装の女は障害を片付け港を目指す。

その後しばらくして彼女らの進行方向にある港からゆらゆらと火が燃え広がり、ヘラヴィーサの白き雪雲に黒煙が昇る。

おそらく人為的に引き起こされたであろう。

二等対魔士を指揮していた金髪の対魔士も業魔の後を追ったために聖堂の前にはもう人の影はない。

喧騒から一転無音となった聖堂を暫し見据えた男は興味が失せたのか、踵を返し飛び降りようとする。

だがふと目の色を変えて港を振り返る。

海面から何の音沙汰もなく丸っこい蛸に似た容貌巨大な生物が出現したのだ。

その生物は火の手を上げて燃え盛る近場の倉庫を短くも太い腕で破碎している。

突如として現れ港破壊する怪物を恐れた船乗り達がごった返すのを見向きもせず、彼の視点はただ怪物にのみ注がれていた。

「こんな街中に現れるとはな…業魔共が暴れ回った影響か」

憎々し気に舌打ちを打った男はそこで始めて眼下に広がる街を意識して視線を向ける。

がそれも東の間赤い光の奔流が彼の視界に割り込む。

「あれは」

真下の街を一瞥した後彼は捉えた。

陸に迫り来る蛸の怪物の真後ろに赤い巨人の姿を。

その存在を認識した男の口元が崩れ、彼は歓喜の笑みを表した。

「ようやく現れたか、お手並み拝見といこうか…」

「な、なんなのですか!?あれは!」

エレノア・ヒュームは純粹な困惑の中にいた。

親しい者全てを業魔に奪われ、業魔を心の奥底から憎んだ彼女はオスカーの後押しもあって幼なじみが希望した巡察官の任についた。

対魔士として業魔と、近頃出沒し始めた怪獣の脅威から人々を守る。

その決意を胸に秘めた彼女はオスカーの義姉テレサ・リナレスと並んで、ヘラヴィーサに混乱を招いた業魔を相手にしていた。

しかしその最中のこと。

いきなり倉庫から火が吹き出し、ほどなくして海上には蛸の成りをした奇怪な怪物が出沒しヘラヴィーサの街を壊し出したのだ。

「なんじやなんじや！あの珍妙な蛸は！あれも主らの作戦かいな！」  
「あたしに聞かれても困るわよ！」

戦闘に参加せず外から叫ぶ魔女―マガルウに黒髪の女業魔ベルベット・クラウは横目もくれず、そう返事を寄越す。

倉庫の火事は彼女達の仕業だが蛸の怪物とは無縁だ。

そもそも存在すら知らなかったような生き物だ。

「対魔士もあの様子ならあれは聖寮の兵器でもなさそうだな。何にせよ、今の内に逃げたほうがよさそうだ」

「そうね」

二刀小太刀を両の手に収めた業魔―ロクロウの意見にベルベットは同意し、脱出準備に取りかかる船に乗り込もうとする。

それに意識を戻されたテレサは断じて逃すまいと自らの聖隷に非情な指示を下す。

「二等対魔士テレサの名において命じます。やりなさい二号！あなたの全魔力をもって身体もろとも業魔を吹き飛ばせ！」

身綺麗な体を装っているが特攻しろという意味合いを誤魔化すことはできない。

しかし聖隷二号はそんな非人道的な指令をすんなり受け入れ船に乗りかかったベルベットへと突撃する。

「そやつ自爆する気じゃぞー！」

真つ先に二号の行動の意図を看破したマガルウが警告するも、巻き添えにするだけの魔力は充分溜まり距離も後十数歩ぐらいまでに縮めた。

二号がベルベットらを船ごと吹き飛ばす

が結果としてそれは阻まれた。

上空から赤い光が舞い降り海面に届く手前で人の形へ変化を遂げていく。

光は蛸の怪物と同等かもしくはそれ以上の身長まである体躯の巨人となり、落下速度を緩やかに落として海に降り立つ。

その際に生じた地響きが波を荒らし、巻き上がった高波が二号を覆う。

収束した魔力が霧散し、走りが止まりかける二号。

「そのまま飛びなさい！」

そのまま全身を波に浚われるかと直感した二号に誰かが命令を告げる。

誰が下した命令なのか判別する間もなく二号は指示通り跳ぶ。

波に船体を刺激されながら誰かが宙を浮かぶ二号の腕を掴み、手元に引き寄せた。

「待ちなさい！」

「テレサ前に進んでは危険です！」

二号を連れ去り脱出を謀るベルベット達にテレサはただならぬ敵意を投げつけるが、彼女とエレノアにも波が迫り二人揃って塩水を被る。

「…業魔……！」

「あれではもう対処のしようがありません。それより今はあの怪獣を」

遠ざかる船にテレサは唇を噛み締める。

彼女より一足先にエレノアの注意は蛸の怪物と巨人に切り替わった。

巨人は蛸の怪物の尾を海水から掬い上げ港から引き剥がし、相手の目を自らに釘付けにさせていた。

赤き光の巨人ガイアはまず人的被害を抑えるべく蛸の怪物―タツコングを陸地から引き離しにかかった。

抗うタツコングの尾を綱引きのように無理矢理引っ張る。

陸から離れたところで尻尾を手放し水飛沫を上げて跳躍するガイア。

ヘラヴィーサの盾になれる位置に立ったガイアの回し蹴りがタツコングに打ち付けられる。

軟体生物特有のふにやりとした感覚のせいでダメージが通っているのかわかりかねるが、仰け反っているのか分かりかねるが効いていないはずはない。

気にせずガイアは拳を振り上げ、キックを決め込みタツコングを追いやる。

だがタツコングもやられてばかりではいけない。

手も足も出さずいたぶられるタツコングの口から吹き出したオイルがガイアの目を奪う。

「ドアアアア―」

間近で浴びたガイアは攻撃の手を中断してしまう。

そこに突け込んだタツコングが体ごと体当たりをかましガイアを弾き飛ばす。

直撃をもらったせいで頭まで海水に浸かったもの、おかげでオイルが流し取られガイアの視界が回復する。

目元を抑えながら体を起こしたガイアをタツコングの張り手が襲い、また海水に飛び込む羽目になってしまった。

『ギユアア、ギユアア』

ガイアを足蹴にしながらタツコングは今度は身体中からオイルを噴射し、広範囲に撒き散る。

オイルはヘラヴィーサの倉庫を包む炎にのしかかり、火の手はより一層勢いを強めていた。

「ハッ…」

海面でもみくちやにされるガイアの視界の端に火災の悪化から逃げ惑う人々が映り込む。

いつまでも手間取ってはヘラヴィーサの街は壊滅的打撃を被ることだろう。

「ムウウ、デユアア！」

タツコングの猛攻を受けながらガイアは全身に力を込め、その体から白く目映い輝きを放つ。

今度は自分が視界を潰される番となったタツコングは目を塞ぎ、無防備になった隙にガイアはその場から離脱し間合いを置く。

そして間髪入れずに必殺技の体勢に移る。

両拳を固く握り締めたまま両腕を左右に伸ばし、赤い光が頭部の先端部に収束したと同時に身を屈めた。

「ハアア、デユアアアアア！」

掛け声と共に解き放たれた鞭と化した赤い光の刃がしなり、空気を削り、タツコングに直進する。

ガイアの必殺技フォトンエッジがヒットし、タツコングはその身を爆散させていなくなった。

倒すべき敵を倒したガイアは胸の結晶体を赤く明滅するのも構わ



ず両手より水流を放射。

滝水のように流れた水は倉庫を焦がす炎を鎮火し、ヘラヴィーサの街はどうにかことなきを得た。

「ジュアー！」

完全に火の手が収まったのを確認したガイアは赤い球体に変化すると、ベルベット達の船が去ったのと同じ方角へ飛び去った。

騒動の収まったヘラヴィーサの聖堂でテレサは沸き立つ苛立ちを止められずにいた。

「まさか業魔を取り逃がすなんて、その上二号を奪われた挙げ句ヘラヴィーサの被害も甚大になってしまった…」

表情こそどうにか平静を装おっている体を保っているが、テレサの心中には今までにない程怒りと困惑があった。

「それにあの巨人…あのような存在聖寮で聞いたことがない。あれらは何なのですか…?」

「気になるか?あの巨人が」

テレサただ一人しかいない聖堂内に男の声が響いた。

辺りを見ると微かに半開きになった窓があり、声はそこから入り込んでいると思われる。

「誰です!？」

「そこを動くな。こちらの言う通りにすればあんたの知りたがって

ることを喋ってやる」

「くっ…」

まがいなりにも一等対魔士でありその中でもゼロナンバーという対魔士の中でも上位にあたるテレサに対する男の物言いに、彼女は苛立っていたのもあつて顔をしかめる。

けれども一時の感情に身を任せては情報を聞けず何の収穫もないままに失態の上乗りをするだけだと、合理的な判断が働いたテレサは嫌々ながらも従う。

「では聞きますが、あの巨人はどのような存在なのですか？」

「あれは光だ。お前達人類を裁くためのな」

「私達人間を裁く…？聞き捨てなりませんね、どういう意味でしょうか」

「言葉通りの意味だ。いずれお前を含めた人間達は滅びる。巨人の手によつて、そしてこの星の意思によつてな」

理解できないとテレサは男の正気を疑うが彼女は続けて男に訊ね聞いた。

「仮にあなたの言うように巨人の目的が私達人間を滅ぼすことなのだとしたら先の巨人の行動は妙ではありませんか。私にはあの巨人は私達を助けたように見えました」

「人間を救うのと自然を救うのは同意義ではない。いつまでも自分達が自然の支配者でいるなどと思わないことだ」

「私は自分が支配者であるなどと思ったことは一度足りともありません」

「どうだかな…まあ精々人類が破滅の時を迎えるその時まで自分達の愚かさというものを噛み締めるがいい」

声はそれつきり聞こえなくなる。

声が途絶えた途端テレサは扉を開け、出所と思われる窓のあるところ  
ろに回り込む。

しかしそこには既に誰もおらず降り積もった雪には足跡すら残さ  
れていなかった。

「二体…何だと言うのですか…！あの業魔も、あの巨人も、あの男も…  
！」

## 第6話 共同作戦

赤い光が海上を行くバンエルティア号の甲板に着地し、人の姿に戻る。

フード付きのローブで目元を隠した男をベンウィックが出迎えた。

「お疲れさんリーダー、はいこれ水ね」

「助かるよベンウィック…この騒ぎは何事だ？」

水を口に含みながら訝しげに訊ねるガイア。

バンエルティア号は大砲による砲撃を行っており、その狙いとなっているのは前方を航海する船であった。

「ああ、今業魔らしい連中にけしかけてるとこなんだ」

「変なタイミングで戻って来ちゃったな。でも何でまたそんなことを？それに業魔って」

「そうかリーダーは怪獣が出てすぐ戦ったから知らなかったんだっけ…ヘラヴィーサを焼き払った奴らがどうやら業魔の集まりだったらしいんだ」

「じゃあ今追いかけてるのがヘラヴィーサを襲撃した業魔の脱出船か。業魔の力を借りて何をするつもりなんだアイゼンは」

「決まってるだろ？見晴らし台を抜けるためさ」

「見晴らし台…ヴォーティガン海門か。そういえばこの辺りの海域だったな」

ノースガンド領とウエストガンド領、この二つの海峡に建設された聖寮の要塞施設。それがヴォーティガン海門だ。

徹底した防衛体制が敷かれておりその周到な警備は、海を渡り行く海賊達から『見晴らし台』と皮肉を込めて呼ばれている。

「あそこはノースガンドとウエストガンドからの侵入者を王都に入り込ませないためにかんりの対魔士が配備されてるし、僕らだけじゃ突破が厳しい。それはわかるけど…」

「やっぱり、複雑だよなりーダーからしたら。元々仲間だった奴らや守るはずだった場所を襲撃するのは、しかもそのために業魔と手を組むなんてさ」

「それは昔僕だった者の話だ。そいつはもういない」

「リーダー…」

「変わらないままじゃいられないからこの海賊団の仲間になってこの船に乗ってきたんだ。その道を選んだことに今さら後悔はない。でもありがとうベンウィック」

ベンウィックにそう礼を告げるとバンエルティア号の砲撃が止み、進行速度が急激に弱まる。

「ガイアとベンウィック、他数人は俺と来い。残りの連中は周囲の警戒を怠るな」

陸地に船を寄せるとバンエルティア号の船首からアイゼンの号令が船尾まで響き、海賊団の主要メンバーは陸におりていく。

「副長からの命令だ。降りるぞ」

「了解！」

かけられた板を伝ってアイゼンと合流した先には五人の若者がいた。

ベルベットとロクロウにマギルウ、蜥蜴の業魔のダイルそしてテレサの使役聖隷二号。

「うおっすげー！本当に業魔の集団だ」

フードの奥からガイアが一行全員に眼差しを送り二号を注視する傍ら、ベンウィックが業魔を前に物怖じすることなく白い歯を向きだしに笑う。

「業魔と知ってやるかいかれた奴らだな。陸の上なら容赦はせんぞ」  
「まったくね」

もはやこの状況下では呑気としか言い表せないベンウィックの口調に反してベルベットとロクロウは各々の武器を構え、いつでもやる気満々といった様子だ。

「命令よ、二号。こいつらを蹴散らせ」

目を向けず言い放ったベルベットに二号は逆らわず紙葉を展開し、投げつける。

魔力が蓄積されたそれらが飛来するのをベンウィックはたじろぐ素振りを取らず、一步もそこを動かない。

「おっと、あんたらの相手は俺じゃないぜ」

「俺だ」

アイゼンがドスの効いた声を発するとベンウィックの足元の地面から競り上がった土壁が魔力が込められた紙葉をはねのける。

その術を垣間見たベルベットは思わず言葉を滑らせた。

「聖隷！」

「いいや、死神だ」

ガイアとの目配せを行いアイゼンが前に進み出る。

単騎でやり合うつもり彼の意図が読めないとはいいたげなベルベットを端目に、最初からそれを知っているベンウィックとガイアは

この場を任せ距離を置く。

彼らが退いたのを見てとったマギルウも下銭な笑みを露骨にアピールしつつ、側の岩にぺたりと座り込む。

「くくく、儂らに戦いを挑むなど百億万年早いわ」

「お前は戦力じゃないのか？」

「野暮なことを聞くのーそこはあえてそっとしておくのが紳士じやろうが。花も鼻白む乙女じゃぞ儂」

「どこが乙女よ！」

マギルウに突っ込みを入れたベルベットがアイゼンに直進を開始する。

それが開戦の合図となり控えていたロクロウと二号も各々の攻撃方法を用い、アイゼンを攻め立てる。

紙葉が飛び交い、剣撃と拳が交錯する様を傍観するマギルウは能天気な軽口を呟いた。

そこにガイアが歩みマギルウに質問した。

「まあ見事にドンパチやつとるのー」

「本当にあんたは戦わないのか？」

「言ったじやろう。儂はか弱い乙女じやて派手な乱闘は嫌いなものじやよ。戦いはあやつらに任せておけばええ」

ガイアからの問いかけにマギルウは微笑みを崩さず何事もないように返答を投げ返す。

「随分と買ってるんだな」

「なにしろ脱出不可能とされた監獄島から逃れ街一つを破滅に追いやった冷酷無惨な悪しき業魔じゃからのう。少なくともそこいらのならず者相手に遅れをとるまいて…それよりそちもええのかえ？そんな暴漢共を主らの聖隷は一手に引き受けておるんじやぞ」

「そつちが買ってるように俺もあいつを信頼してる。あいつはそこいらのならず者とは格が違う」

「信頼とは…まあ、嘘と汚れでまみれた裏社会で生きる海賊の言葉とは思えんのか」

したり顔で語るマギルウの探るような目線に気付きガイアは反射的に首を反らし、戦いの経過を見守る。

三人を同時に相手にしながらもアイゼンは決定打を受けず渡り合っている。

お互いが敵に直撃を与えられぬまま時が過ぎ、ある瞬間アイゼンが拳を下ろした。それは戦いの中断を意味していた。

「合格だ。力を貸せ」

「は？ずいぶん勝手な言い草ね」

文句を垂れながらもベルベット達は武器を納めアイゼンの話に耳を傾ける意思を示す。

「こちらも戦力が足りない協力しろ」

アイゼンはベルベット一行に説明した。

彼女らがヘラヴィーサを壊滅に追い込んだ業魔であると知りながら力量を試したこと。

あのまま進んでいけばヴォーティガン海門にぶち当たり危険を侵していたであろうこと。

こちらも同じく海門を抜きたいがいかなせん戦力が不足していること。

「海賊に協力する気はない」

「自分の目で確かめるか？いいだろう、命を捨てるのも自由だ」

それらを聞いた上でベルベットは協力を拒み、アイゼンもそれを容易く受け入れた。



「なんじゃ断つてもよいのか?」

「お前達はお前達で、俺達は俺達でやる。それだけのことだ」

マギルウにそう返すアイゼンは彼らに背を向け歩き出す。

一人そのまま行こうとする彼にガイアが同行を申し出る。

「俺も行く」

「いやお前はバンエルティア号に残れ。もしも何かあつた時に対処できぬ奴が必要だ」

淡々とした顔色で言いかけた彼は、ベンウィックとガイアを置き去りに単身ヴォーティガン海門へ向かう。

「リーダーどうする?」

「……ベンウィック、出航の準備を整えておいてくれ」

不安そうな面持ちを隠せないベンウィックにそう答えると、ガイアはベルベット達の元に足を運び頼み込む。

「アイゼンはああは言ったが俺からも頼む」

再度に渡る海賊からの申し出にベルベットは顎に手を当て熟考し、まるで考える気を微塵も見せないマギルウが彼女に聞く。

「どうするつもりじゃ?」

「そうね…」

「どのみち俺達は船をまともに動かすこともままならない。海賊なら船の操縦はお手のものだろう。向こうもああ言ってることだしここはお互い協力したほうがいいんじゃないか」

ロクロウの意見を取り入れベルベットは思案を続けた。

海賊の実力がアテになるかはとにかくアイゼンという聖隷の技量は手合わせをして、かなりのものであると確信している。

ヴォーティガン海門がどれだけの戦力を保持しているか詳細は把握できていないが、彼と自分達が手を組めば船の一隻や二隻突破させるのは難しくないはず。

「いいわ。けど要塞を抜けた後王都まで船と船員を貸してくれるなら乗ってもいい」

「王都か…わかった。それまでは全面的な協力を約束しよう。それと試すような真似をして悪かった」

「海賊が謝るの？」

「全ての海賊が無礼な者ばかりじゃない。それだけの話だ…アイゼンを頼む」

海賊らしからぬ意外な面に目を丸くするベルベットにガイアはそう返事を寄越すと踵を返し、船内に乗り込む。

それに追隨するかのようにはマギルウとダイルもバンエルティア号へ歩を進める。

「ではではよろしく頼むぞベルベットや。儂はあやつらの船で待っておるからの」

「俺もそうさせてもらおうとするか。船乗りじゃ戦力にならないし…アイフリード海賊団の船に乗るのはちと不安だが」

マギルウとダイルは足早にバンエルティア号に搭乗し、彼らに乗せた船は陸地を遠ざかりアイゼンと同じくヴォーティガン海門を目指す。

「いいのか？ベルベット。ダイルはともかくマギルウを連れていかなくて」

「あいつが戦う気がないのはさつき見てたでしょ。これから聖寮の施設に攻め入ろうって時に戦う気のない奴が近くにいたんじやたまんないわ」

「ふうむ、それもそうだな」

「私達も行くわよ」

## 第7話 名は体を表すというけれど

ヴォーティガン海門は業魔の巣と化していた。

アイゼンの死神としての呪いが一端となり対魔士達が一齐に業魔へと変貌したのだ。

非常に厄介とも言えるが侵入しやすいという点ではむしろ好都合だった。

業魔が突如内部に出現したことで対魔士は統制がとれず、慌てふためくだろう。

その隙を突けば所詮は烏合の衆でしかないベルベットやアイゼンの少数でも海門を攻略するリスクは少なくすむ。

理性のない業魔と自分達の施設に出現した業魔に戸惑う対魔士を手当たり次第潰し、ベルベット達は着々と海門の警備を無力化していく。

「海門を開くための開閉装置があるはずだ。そいつを見つけ出さない限りバンエルティア号の援護は期待できない」

「船はもうこっちに向かっているの？もしそうなら業魔が船に取りつかもしれない。いくら海賊が戦い慣れていても業魔はそうはいかないわ。そうなたらこっちの援護どころじゃないはずよ」

「心配はいらん。ここが業魔の巣になっていることは向こうに伝わっているはずだ」

アイゼンとベルベットはそのやり取りを交わしつつ渡り廊下を駆けける。

突き当たりに差し掛かりベルベットがドアを蹴破って外に飛び出た。

高所から海を見下ろすと確かにバンエルティア号は影も形もなく、あるのはただの残骸と成り果てた聖寮の戦艦のみであった。

「アイゼンの言う通りだな。いつの間に連絡をとったんだ？それとも

最初からこうなるとわかったのか?」

「俺は何もしていない。死神の呪いは俺ですらも何が起こるか想像がつかない」

「ならどうして船が来てないってわかったの?」

ロクロウの言葉に淡々と答えていくアイゼン。

しかしその次に投げかけられた質問には一瞬答えに窮するような間を置き、目を遠くの海面に向けた。

「バンエルティア号にこのテのことに鼻が効く奴がいてな。そいつなら計画していたより時間を贈らせて船を寄越してくるだろうと考えたまでだ」

「そんな奴がいるのか。気になるな」

「細かい話は後にして。さっさと装置を探しだして海面を開くわよ」

ロクロウがそう相槌を打つと横からベルベットが冷ややかに告げる。

二号はそんな彼らを一步離れたところから口を閉ざして見つめていた。

アイゼンの予想通り業魔の出現を感知したガイアはバンエルティア号を一時岩影に待機させ、ベルベットとアイゼンが内部を攻略する時間の経過を待っていた。

「そろそろ頃合いだな。ベンウィック船を出せ」

「アイアイサー!」

「いやはや大したもんじゃて」

船上にこだまする海賊達の掛け声とは打って変わった呑気な調子の声色でマギルウがぼやく。

「海賊とは荒くれ者の集まりと思っておつたがまさかここまで統制がとれた動きをするとは。よっぽどアタマが優秀なんじゃろうな」

「船室で休んでるんじゃないのか？」

「そのつもりじゃつたのだが眠りにつこうとすると憎き裏切り者の阿呆ヅラが脳裏をよぎってしまったので、とても休めるような気分じゃなくなってしまったのじゃよ」

「そうか…」

「むむ、お主ちと反応が悪いぞよ。そこはもう少し男として優しさを示すところじゃろうに」

「というと？」

「安眠できぬ儂を労るなり『眠るまで僕が側にいてあげるよ、心配しないで』とかなんなり言えんのかいな」

老獪な喋り方から急に愛らしい美少女の声質に変化するという多芸ぶりを惜しみ無く披露するマギルウ。

どこからそんなにも聞いた時の印象差が激しい声を出せるのかと純粹に驚くガイアであるが、その思いをおくびも表に出しはしなかった。

「言ったら何かくれるのか？」

「儂はベルベットなぞと違い無慈悲な悪魔ではない。もちろん最高の褒美を恵んでやるぞ…」

思わせ振りの笑みを得意気に浮かべるマギルウは一拍置いて声高らかに手振りを交えて語った。

「聞いて驚けい！なんと儂と添い寝をするありがたい時間を与えるぞ！かの魔女マギルウ様と同じベッドで眠れるなど十回人生を繰り返しても一度あるかないかの機会じゃぞ！どうじゃ？まさしく心躍る、今にも断崖絶壁から飛び降りることもいとわぬ幸福な心境じゃろう？」

「…絶壁…か…」

マギルウの熱烈な言葉にポツリとガイアは一言こぼし、マギルウのある一点に視線を移す。

フードを被っているため視線がどこに注がれているのかは彼以外の人間には知るよしもない。

「海門が見えてきたぜリーダー！」

ベンウィックが呼び声に引き戻されたガイアは海門を上から下まで見つめる。

業魔がうようよと海門の壁を破壊し回り、対魔士達がその対処に追われひどく狼狽するような様子が辺り一面に見受けられた。

その光景にガイアは奥歯を噛み締めるもそれらには目を止めず、アイゼンの姿を探す。

海門の最上部、西側と東側を繋げる役割を担う通路のような場所に彼とベルベット達はいた。

先まで戦闘があったようで壁と亀が合体したような業魔が這いくばり、その前でブレードを納めるベルベットと小太刀をしまうロウロウの姿が遠目ながらも見られた。

「上手くいったみたいだな」

「このまま海門を抜ける。船を海門に寄せろ、なるべく急いでな」

周辺の業魔が襲撃してくるとも限らない。

ガイアは警戒を配りながらベルベット達が降りてくるのを待つ。

アイゼン、ロクロウと順に上空から飛び降り難なくバンエルティア号に着地してみせた。

「これで後は―」

残るはベルベットと聖隸二号。

だが彼らが倒したはずの業魔が起き上がり近くにいた二号へ剛腕を振り上げる。

「くっ！」

腰に後ろ手を回しガイアは拳銃のような武器を引き抜く。

照準を合わせるまでに五秒にも満たない早業で銃口に収束した赤い輝きが放たれる。

光の弾丸は寸分の狂いもなく業魔に被弾し、二号目掛けて降り下ろした大岩のような腕は無理矢理軌道を変えられその巨体ごとあらぬ方へ吹き飛ぶ。

だが着弾の際に巻き起こった風圧が二号の小柄な体を宙に舞わせ、彼は片手に羅針盤を抱えたまま無防備な姿勢で落下していた。

―ライファイセツトツ！

誰が叫んだか

二号の耳に何者かを呼ぶ音が聞こえた。

その音を誰が、誰に、どんな意味を込めて発したのか理解する間もなく彼の体は同じく落下するベルベットに抱き抱えられた。

「そのまま手を離すな！」

船上からアイゼンがベルベットにそう叫びガイアは腰のポーチに手をつ突っ込む。



そしてそこから摘まみ出した縁が緑色をした楕円柱のカプセルを装填。

バンエルティア号の先端部へ撃つと瞬時に光子ネットが展開され、高所から落ちてくるベルベットと二号を優しく受け止める。

落下の衝撃を緩和した彼女達は怪我なく甲板に降り立つ。

彼ら全員を乗せたバンエルティア号はヴォーティガン海面を通り過ぎ、大海原へと旅立つのだった。

ヴォーティガン海門攻略に成功したバンエルティア号はベルベットの一行の目的地となるローグレスを目指していた。

その航海の間、暫し時の猶予を授かった皆は戦いの疲れを癒したり、己の鍛練に精を出したりとそれぞれ自由に時を使っていた。

「ローグレスか…」

ガイアもまたその中の一人であり、潮風に衣服を靡かせながら緩やかに流れる波の動きを観察していた。

とはいっても意識は別にあるらしく、波がやや荒れていることに関してはどこか上の空な様子だ。

「ここにいたのね。探したわよ」

そんな彼の背中にベルベットが声をかけた。

茫然としていたガイアは声をかけられるまでベルベットの気配には気付いていなかったために、僅かに驚くもフードで隠されたおかげ

で彼女はそれを知らない。

「何の用だ？」

「礼を言いに来たのよ。さつきは助かった」

「…それだけか？」

「何、悪い？」

ベルベットがそう聞き返すとガイアは即座に答えを寄越す。

「悪いわけじゃないんだが、まさか礼を言われるとは思ってなかった」

「あたしもよ。海賊に頭下げられるなんて今まで考えたこともなかった」

それもそうだと内心彼女に同意するガイアは静かにほくそ笑む。

「言いたいことはそれだけ。ローグレスまでしつかりね頼んだわよ」

「ひとつ聞かせてくれ。ローグレスで何をする気だ？」

それはベルベットに会ってからずっと疑問に思っていたことだった。

ヘラヴィーサを襲撃し、先程はヴォーティガン海門を機能停止まで叩いた。

後者は自分達がそうするように仕向けたところもある。

だが見たところ成人を迎えていないであろう年頃の少女が業魔となつてまでしたいこととは一体何なのか。

それが気になつてしようがなかった。

「復讐よ…私達を捨てた男への」

振り向かずそう呟いたベルベットの背中をガイアはまじまじと見つめた。

復讐という言葉とは裏腹にとても儂く脆い。軽く触れただけでも崩れてしまいそうな程に哀れとさえ感じた。

「復讐…それは業魔になってまでする意味があるのか」

「理解しようなどと思わんことじゃ」

ふと背後で聞き覚えのある声が生がしガイアはそちらに視線を移す。

口調から察した通り歩み寄るその人物はマガルウであった。

「あんたか…ゆっくり寝れたか？」

「いやいやかれこれ三時間夢の国に旅立ったがまだまだ足りん。後二日程あちらの世界に居座りたいところじゃったが、その宿賃がもうなくての」

「結局はただ眠れなくなっただけじゃないのか」

「まあそうともいうの」

言い回しの独特さに呆れ返っているとガイアは思い出した訊ねた。

「それはさておきさつきという言葉どういう意味だ？」

「さつきのとな…もしやその気になってくれたのかえ。それはありがたいのじゃがちとばかし遅かったのう。儂の隣はもう予約でいっぱいじゃ…しかし落胆することはないぞ、ざっと二年程待てばまたチャンスもあるうて」

「そつちじゃない」

「なんじゃ違うんかいな」

「ついさつきのだ」

それでマガルウはああ、と合点が言ったのか口元をニヒルに歪め始めた。

「そういうことかえ。簡単なことじゃよ、自分と異なる者を理解する

など無理だということよ…獣と羽虫がお互いを理解しあえんのと  
同じ理屈よ」

「少し違うと思うが…その例えが成立するのは言葉が通じない者同士の  
話だろう」

「同じじゃよ。業魔と人間も聖隷も、の…せいぜい言葉が話せるとい  
う共通点があるだけ、その一点が一致する…それだけでしかないの  
じゃよ。それに聖寮は聖隷の自我を封じ業魔を倒すため道具として  
使役しておる。そして民衆もその聖寮を支持し、何の疑いも向けず生  
活を送っている。人様はどちらとも理解するどころか歩み寄る気ぜ  
ろじゃ」

マギルウはそこで話を切りガイアの反応を確かめると、再度口を開  
く。

「お主は海賊として聖隷と上手くやっておるようじゃが儂からすれば  
お主らの方こそ異端であると思わん」

言葉に詰まるガイア。

そこに締めとばかりにマギルウが畳みかける。

「所詮は利用と敵対でしか言い表せぬ関係ではないという話じゃ…理  
解も共存も不可能。叶わぬ夢じゃよ」

両者の間合いを静寂が支配しマストに張られた帆が潮風に揺れる  
音だけが不気味にざわめく。

「ま、そのような夢物語を真に受けようが儂には関係ないがのー」

あつけらかなと言つてのけるマギルウにガイアは、彼女がどこまで  
が本気でどこまでがふざけているのか、その境界線が見切れずにい  
た。

そこに羅針盤が転がり込んだ。

日の光を浴びて黄金に輝くそれをガイアは膝を曲げて掴み取ると、前方に人気を感じ顔を上げた。

「あつ…」

ぽつりと眩きをこぼしたその人物と間近で目が合い、ガイアは一瞬目を丸くした。

(テレサの聖隸…)

オスカアの義姉テレサが使役していた聖隸だとはガイアもよく知っていた。

それが何故ベルベットと行動するようになったのかそこに至るまでの経緯はわからないが、彼が自分の意思を持っているのはよくわかる。

現に今も落とした羅針盤に時折熱い眼差しを送っていることから、もそれが見て取れる。

ガイアは羅針盤に付いた埃を軽く手で拭き取り、彼に手渡した。

「ほら」

「あ、ありがとう…」

聖隸二号改めライフィセットとベルベットから名を与えられた少年はたじろぎつつも、差し出された羅針盤に手を伸ばす。

「海賊は怖いか？」

「ううん」

「なら何故目を反らす？」

「それは…」

「鈍ちんじやのーお主、顔を隠したフード男などそりや不審者にしか

見えんぞ。坊でなくとも怖がるじやろうよ」

それでようやくガイアはライファイセツトの態度の理由に気づいた。幼い少年から見た自分はマギルウが評したように怪しい人間にしか見えぬ、猜疑心を植え付けるような印象でしかないのだろう。

「そう怖がらなくていい……そうだこれをあげよう。異大陸の遺跡で手にいれた戦利品だけど」

「綺麗、だね」

できるだけ恐怖心を与えぬように細心の注意を祓ったガイアは穏やかな口調でライファイセツトに腕輪を渡す。

純白の宝石が埋め込まれた清廉な輝きに満ちたその腕輪をライファイセツトは物珍しそうにいじくってから、自らの左腕にはめる。

しかしライファイセツトの細腕では手首にフィットせず肘の辺りまで腕輪は到達してしまった。

「どうやら坊にはまだ早いようじゃな」

「ならそれがちゃんと呼けられる男に早くならないとな」

「なれるかな僕に」

「もちろんさ。今が一番育ち盛りな年だろう？すぐ成長するさ、男なんて三日あれば身長が伸びてたりするもんだからな」

「ありがとう、えつと」

「ガイアだ。よろしく、ライファイセツト」

「うん！」

警戒を完全に解いたライファイセツトは腕輪を懐にしまうとそそくさと駆け歩き、船首のアイゼンに進路に関する提案をしに行った。

彼の後ろ姿はまさしく年相応の少年らしく軽快、それでいてピツシリと体に一本の芯が通っているようにガイアは思える。

「変わったな」

「無口であった坊がこの短期間であそこまで感情を露にすると驚きじゃ、お主の言うように男子三日会わざれば刮目してみよなる格言もあながち間違いいではないやもしれぬな」

「それだけじゃないさ。名前を新たに得たんだ：今のライフイセットはその名前に見合う男になるために必死に自分を確立しようとしている。だから他人の目には変化が見えて激しい」

「なるほど名は体を表すという格言もあったの。まあ全く面白みの欠片もない二号なんぞつまらんものよりかはよっぽど遊びがいのある名前じゃて」

せつかく前半部分はまともな発言をしていたのに後半部分で自ら台無しにするマギルウに、ガイアは密かにジト目で呆れ果てる。

そんな彼の視線にマギルウは感付く素振りはなく、会話を続けた。

「それにしても坊のおかげでそなたのことが色々と知れたわい」

—まさか僕の正体に気づいたか

危惧しつつ一歩踏み込み、ガイアはマギルウに聞き返す。

「教えてもらいたいな。俺がどういう人間なのか」

「フフ、ええのかえ？ 後で泣いて聞いたことを後悔しても知らぬぞ：引き返すなら今のうちじゃよ」

「構わない」

「いい覚悟じゃ、ならばその覚悟に免じて今この場で答えてあげようではないか」

魔女を名乗るいかにも怪しい出で立ちの女とフードで顔を隠した不審者が緊迫した空気の中無言で睨み合いをしている。

端からすればシニールでしかない。

事実偶然通りがかったベンウィックが二人から漂う異様な雰囲気  
に気圧され、何もなかったと自分に言い聞かせて立ち去るぐらいには  
奇妙な構図だ。

「では語ろう。記念すべきマガルウ姐さんの調査報告会第一弾の犠牲  
者になれた喜びを噛みしめつつ、恥じらいにもがき苦しむがよい！ま  
ずひと一つ、見た目の割にお喋りじゃ」

「……は……？」

溜めるに溜めた深刻な雰囲気を一気に打ち砕かれたような衝撃に  
襲われた。

「ふた一つ！意外に面倒見がよい。この発見は特に有意義じゃった。  
後で坊には褒美をやらんといかん……とまあそれはさておき、そして最  
後の三つはなんと！」

「もういい……また今度聞かせてくれ」

「こら、またんか！まだ最後まで言い終わってないじゃろうがー！」

マガルウの制止の呼びかけを無視してガイアは船内へと足早に去  
る。

「やれやれ困ったものじゃ……しかしまああれでよかったのかもしれ  
ん。まだ確信が持てぬ以上迂闊に踏み込むのはかえって警戒される  
じやろうからな」



## 第8話 きたぞ、われらのマギルウ奇術団！

「わああ…」

ゼクソン港に着いたバルエルティア号から降り地に足を付けたライファイセツトは港町の景色に心を奪われた。

同じ港でも白銀ばかりだったヘラヴィーサとは違って、青や緑といった色が織り成す光景は大自然の躍動を感じる。

「まるで初めて見たような反応だな…ローグレスにいたならライファイセツトは何度も来たことあるだろ」

「聖寮に使役された聖隷は自我を封じられておる。それ故にこうして自分の目で景色を感じるのはこれが初めてなんじやて」

「そういうものか」

マギルウの説明にロクロウが頷く。

そんな彼らから数歩距離を置いたところで、アイゼンとガイアはボラードにヘラヴィーサとヴォーティガン海門が落ちたと情報を提供し今後について話し合っていた。

「アイフリードの行方がわかった。ボラードの情報によれば監獄島に送られたらしい」

「タイタニアか、また面倒なところに…そういうえばマギルウが言ってたな。ベルベツトは監獄島から脱獄してきたって」

「それが本当ならベルベツトに聞けば何かわかるかもしれないな」

「あたしに何か用？」

遅れてバルエルティア号を降りてきたベルベツトにアイゼンはいい機会とばかりに問い詰めた。

「丁度いい。お前に聞いておきたいことがある、お前はタイタニアに

いたそうだな」

「ええそうよ…飯は最悪だったけど」

「そこにアイフリードという男はいなかったか？」

「アイフリードってあんた達の船長よね」

「ああ」

「囚人の話だといいたみたい。でもあたしが脱獄した時にはもういなかった。メルキオルって対魔士が連れ出したって囚人達は言ってたわ」

メルキオル、その名がベルベットの唇から紡がれた瞬間ガイアの表情は著しく強張る。

横顔が見えずとも長年の付き合いからそれを察したアイゼンは彼を見ることなくベルベットに告げた。

「アイフリードの失踪に対魔士が絡んできるとなるとローグレスに行けばもつと有力な情報が掴めそうだ。もう少しお前達に同行させてもらおう」

「知らないわよ。地獄に道連れになっても」

「フン、お前達こそ気をつけることだ。死神と共倒れになって地獄からも突き返されても俺は責任をとれん」

「俺も共に行こう」

ベルベットとアイゼンが皮肉を交えたところにガイアが自ら同行を名乗り出た。

意外な申し出にベルベットは訝しげに眉を潜める。

「あんたが…？」

「俺はこの辺りには昔何度か来ている。土地勘はそれなりにあるしローグレスにも何度か足を運んだこともある。連れて行って損はないはずだ…もちろん戦闘になれば戦いに参加する。足手まといにはならないつもりだ」

アルトリウスのいるローグレスはミッドガンド領王都にして聖寮の本拠地。敵の本丸だ

配備されている対魔士の数はヘラヴィーサとは桁違いだろうし、どんな罠を仕掛けているのかわからない。

どんなに微かな情報でも持っているのとそうでないのとの違いは大きい。

ましてやベルベット達の中にはローグレスを訪れた者はいない。田舎の村で育ち都会とは無縁の生活を送っていたベルベットはともかくロクロウとマギルウは知らぬと断言し、ライフィセットは自我を封じられ道具として扱われていた。まともにローグレスを知る者がいないのだ。

「そういうことなら案内人にはもってこいね…なら道案内は任せたわよ」

己の意を伝えたベルベットは踵を返し好奇心に心を躍らせるライフィセットと合流し、一足先にローグレス側の街道へ歩いていった。

「いいのか？ローグレスには対魔士共がうようよいる。そいつらと戦うことになっても」

「海賊団に入った時からその覚悟はどうにできてる。それにいつまでも恐れてちゃいけないと思うんだ…いつかは向き合わないと知りたいたいことも謎のままだ」

「…わかった。他でもないお前自身がそう言うなら引き止めはしない。だがこれだけは先に言っておく。お前の命と対魔士の命なら俺は迷わずお前を優先する」

眼光を尖らせながら言い放ったアイゼンもまたベルベットの後を追いついて、ガイアは暫しそこに留まっていた。

「…いくか」

ガイアを加えた一行はゼクソン港とローグレスを結びつけるダナ街道を歩む。

業魔と聖隷、魔女と人間、世界中どこを探してもこれらが一堂に会する光景が見られるのは今彼らがいるこの場所だけだろう。

「一つ言っておくことがある。ローグレスに入ったら目立つような真似は避けることだ。妙な行動を取ればすぐさま聖寮に通報される…」  
「それぐらい言われなくてもわかってるわよ」

「だとしてもだ。念を押しておくに越したことはない」

「そうじゃのう。何にせよここにいるメンツはどれもイロモノばかりじゃからな…何もせんでも目立つ」

—お前がそれを言うか

ライフィセツトを除いた一同がほぼ同じ感想を同時に抱き、内心で突っ込むもマギルウはそんな彼らから浴びせられる視線などどこ吹く風。

露程も気にする表情を表さずルンルンとステップを踏み、先頭へ踊り出る。

ガイアとベルベットはただ呆れたように一言吐き捨てるしかマギルウに費やす労力はなかった。

「今いちわけがわからないな…あいつだけは」

「まったくもって同感ね」

---

立場上仲が良いとお世辞にも言えない連中でありながらも、どうい

うわけか他愛のない話には華が咲くというのは何ともおかしなものであったがローグレスに入った一行。

石造りの街並みやそれらを優に上回る全長を誇る王城とそれにはやや劣るものの、人々の目を引くには十分すぎる大きさの聖寮の紋章が印された垂れ幕を下げた建造物。

ベルベツト達は呆気に取られ、驚嘆したりと様々な反応を示すが約一名に限っては一切の無反応であった。

(二等対魔士が増えている…警備体制が変わったか?)

二等対魔士の数が以前にもまして増えている。

ざっと見ただけでもガイアが在籍していた頃よりも十人は確実に警備兵に配備されている。しかしそれ自体は何ら不自然とは感じない。

(考えてみれば当たり前か。ここ二年だけでも業魔による被害は増えている。それに怪獣も出没するようになった…警備を増やさない方がおかしい。でも二等対魔士の人数に対する一等対魔士の数が少なすぎるような…)

目につくのは二等対魔士ばかりで一等対魔士が不足している感が否めない。

代わりにミッドガンド王国の兵士が割り当てられたといった感じだ。

如何に業魔や怪獣による各地の被害が増加傾向にあると一言でいっても、二等対魔士を増員したらそれを指揮する一等対魔士も増えていなければ割に合わないというもの。

それに王国兵と二等対魔士は王都防衛の任を与えられているが、同じ目的を持っているにしても両者の指揮系統は大きく異なる。

それ故に現場の最高権限を持つべき一等対魔士が不足しているというのは、元対魔士の観点からすれば引つかかるところ。

「その黒コートの子とフードの男止まれ、手形を見せてもらおうか」

どうにも釈然としないガイアの思考を遮断したのはミッドガンド王国の鎧を着込んだ兵士。

彼はベルベットとガイアに近付くと厳しい面持ちで槍を携えたまま、問い詰めた。

「どうした？ 聖寮が旅人に発行する通行手形だ」

ベルベットは歯噛みしガイアを横目で睨む。

聞いてないと言いたげな仏頂面に気付いているもののガイアは目を向けず、対応策を思案していた。

「この未熟者！ 奇術師見習いの基本はにっこり笑顔と教えただろうじゃー！」

そんな時マギルウがベルベットの頭を背後から小突き、舞い踊るようにベルベットとガイアの間収まる。

「奇術師？」

「イカにも！ 御覧の通りクセ者揃いの我が一座、その名も『マギルウ奇術団』と称しまする〜」

「式典の余興か？」

「タコにもその通り！ いやはや、我が馬鹿弟子共が失礼致しました。ほれ、兵士様の御不審を解くのじゃ。お前の得意芸ハトを出してみせよ！」

「は!？」

どうにか回避できると安堵しかけた矢先、無茶苦茶な要求を吹っ掛けられたベルベットはあからさまに狼狽していた。

「……すみません師匠、仕込みを忘れました」

「な、な、なんと情けない奴じゃ！芸の道をイカに心得おるか〜！」

大きな振る舞いで驚愕し退いたマギルウはその勢いのままくると一回転し、今度はガイアに話を振る。

「お主はちゃんと準備しておるはずじゃ！お前の秘技『七色の美声』を披露してみせよ！」

「なんだと…!?!」

まさか自分にまで飛び火するとは、想定していなかったのかガイアはフードの奥で言葉をこぼす。本来の自分の声色が僅かに表に出てしまっていた。

「ほれ、早くするのじゃ。恥ずかしがることはない。いつものように麗しい乙女の声真似をするだけでよい」

「ちよつと待て―」

「いつまで焦らすつもりじゃはよせんか〜い！」

でたらめなマギルウの言葉を否定しようとしてガイアが口を開いた途端、彼女は声を張り上げた。黙って言う通りにしろと暗に命じているのだ。

―やむを得ない。

諦めがついたガイアは前に一度だけ見たマギルウの演技力を参考に、身振り手振りを交えて愛らしい声色で彼女に言葉を返す。

「焦らせないでくださいマギルウお姉様〜私だって色々心準備とかあったんですよ〜」

恥と引き換えに大切な何かを失ったような気がした。

後ろでアイゼンがドン引きしている光景が目には浮かぶようだ。だがもう後戻りできない。

この時点でガイアは完全にとんでもない方面へ振り切ってしまった。  
「……」

「こ、こんな感じでどうですか？」

「おおーやればできるではないか、よいぞそれでよい！しかしもっと、もっとやれるはずじゃー！」

「もう、そんな意地悪言わないでください！これ以上はちゃんとした場所でお金を頂いてやるものですよ」

「それもそうじゃのう。無料で芸を披露してはマギルウ奇術団の名が廃る……だがしかあし！まだもう一人弟子の芸の披露が終わっておらぬ。これをやらずしてこの場は退けぬ。さあ、そなたも芸を披露してみせよ！ハトを出せぬというのであればハトマネをせよ！」

「頑張つてーやればできるわ！自分を信じて!!」

(……いっら)

しまいには徒党を組み出したマギルウとガイアにベルベットはこの上ない程の敵意を覚えるも、その心情を知ってか知らずか彼らは彼女に芸を披露するよう仕向けてくる。特にガイアからはその気が顕著に見られるように思われた。

「ハ・ト・マ・ネー！」

「ハ・ト・マ・ネー！」

「ハ・ト・マ・ネー!!」

是が非でも断りたいところだが兵士の目線もある。

これも復讐のためと諦めの境地に行き着いたベルベットは顔を歪めながらも、片手で嘴を形取り赤面すると共に呟く。

「……ポッポ」



すると狙いすましたかのように絶妙なタイミングでマガルウが手を振ると、実物のハトが現れパタパタと綺麗な音を立てて天へと飛び去った。

「斯様に泣く子も笑うマガルウ奇術団！ローグレスの皆様にご挨拶の一席でございます」

「こ、こんなところで宣伝するな！さっさと散れ！」

「かしこまり〜」

マガルウとガイアが息を揃えて答えた。

どうにか検問を誤魔化したベルベット達は情報収集を行うべく、ガイアを頼りに街中を散策した…のだが早速ベルベットの中で彼への信頼が揺らいでいた。

「……最悪ね。目立つ真似するなって言い出したの、どこの誰よ」

「…すまない」

反論の権利を失ったガイアは目を反らしながらもベルベットの文句を甘んじて受け入れる。

検問で最悪の目立ち方をしてしまっただけにガイアとベルベットは周りに目を向ける心の余裕はない。  
そんな彼らをマガルウがまた茶化す。

「そう責めるでない。上手くやり過ぎたことだし、結果オーライで何よりだポツポ〜♪」

誰のせいだとベルベットはマガルウを責め立てる衝動に駆られるが、彼女が機転を効かせたおかげで難を乗り越えたのも事実であるた

めに何も言えない。

「あそこまで検問の目が過敏だとは思わなかった。以前はもう少し緩かったはずだが」

「以前って、どれぐらい前なんだ？」

「二年程前だ」

「ある意味当然の話だな。それだけの時間が経っていれば警備体制が変わっていてもおかしくはない」

ロクロウの質問を受けてのガイアの返しにアイゼンはそう呟く。

彼の意見に内心同意するベルベットは先の兵士の言葉を思い出す。

「さっきの兵士が言った式典って何なの？」

「俺もよくわからんが何でも聞いたところによるとアルトリウスが民衆を集めて演説を行うらしい。街中の警備が嚴重な理由もそのためものらしい」

「ならその時がチャンスね」

ロクロウがアルトリウスの名を口にした瞬間ベルベットが憎しみの感情が浮き出した。

それでガイアは彼女の復讐相手が誰なのか察した。

「城の前の広場がある。やるならおそらくそこで行われるはずだ」

「ミッドガンド！ミッドガンド！ミッドガンド！」

「こりや割って入るのは無理だな」

「せめてお互い別れよう。さっきので顔を覚えられた可能性もある」

ガイアの先導で広場に赴いたベルベット達。

奇抜な服装をした集団がこぞっついては怪しまれると判断し、ベルベット・ライファイセット・ロクロウ、マギルウ・ガイア・アイゼンの

二組で別れ距離を置いた。

しかしそれでいてお互いを視認でき、声の届く距離にいるように心がけた。

「これだけの人数を集めて何を言うつもりだ？」

「わからない。ただはつきりしてるのは世界の平和のためだってことは確かだ…あの人はそういう人だ」

「―来たぞ」

アイゼンにつられて城を見上げると端正な顔立ちで身なりのいい男がいた。

ミッドガンド王国第一王子パーシバル・アスガードだ。

「王国民よーミッドガンド聖導王国第一王子、パーシバル・アスガードである。この良き日を皆と祝えることを父王と共に嬉しく思う！」

演説が始まった。同時に民衆が静まりかえる。

「十年前の開門の日以来我が王国は存亡の危機を迎えていただが命が尽き果ててゆかんとする地に奇跡の剣を持ち立つ者があった。誰であろうアルトリウス・コールブランドである」

「あっちー！」

演説の最中ベルベットが見晴らし台を発見する。

「登るのはいいがここで襲うのは無謀―」

「誰であろうアルトリウス・コールブランドである！」

「―ッ！」

ロクロウがそう言うもアルトリウスの名が出た瞬間ベルベットは

弾かれたように、見晴らし台へ駆け出す。

危惧していた事態にロクロウを始めとする他の仲間達も後に続く。

「なくはないと思っていたが……」

歩幅の短いライフィセットを腰の辺りに担ぎ上げながらガイアは毒づく。

その間もパーシバル王子の民衆への演説は続いている。

「アルトリウスの偉業は誰もが知っている。彼は業魔に苦しむ民の救済に全てを捧げた。五聖主の石柱たるカノヌシを降臨させ聖隷の力を我らにもたらした」

ベルベットが業魔手を解き放ち石壁にしがみついたのだ。

しかし左手のみでは全体重を支えることはできず、彼女の体はずり落ちかけてしまう。

「ベルベット！」

ガイアに担がれながらライフィセットは悲痛な叫びを上げる。

「混沌の世に理という希望を与え今、その希望が絆となって我々を結んでいる。アルトリウスの偉大な功績と献身を讃え今ここに災厄を祓い民を導く救世主の名―導師の称号を授けん！」

「導師：アルトリウス！」

民が沸き上がりベルベットは石壁を登りきり見晴らし台をからその様子を見て、憤りを露にする。

彼女が憎しみを込めてその名を呟くとパーシバル王子の後方より、まさにその人物が陽光の元に姿を晒した。

「世界は災厄の痛みに満ちています。なのに私は皆さんに頼まねばな

らなかった。理による苦痛に耐えてくれと、意志という枷で自らを戒めてくれと：何故なら揺るがぬ理とそれを貫き通す意志。これが災厄を切り払う唯一の剣だからです」

その強い決意を秘めた声にガイアは二年前を思い出す。

ライファイセットを担いだ方と逆の手で弾倉に紫色のカプセル型の弾丸を装填し、壁目掛けて撃ち放つ。

銃光から伸びた紫の光がアンカーのように石垣に刺さり、ガイアはライファイセットを抱えたままトリガーを引くとアンカーに引き寄せられ二人は見晴らし台に降り立つ。

ライファイセットが着地すると心配そうにベルベットに寄り、ガイアはもう一度同じ弾丸を入れ、残りの三人を引き上げる。

「今ここにその剣がある。私は誓おう、我が体と命を全なる民のために捧げることを、全ての人々に聖主カノヌシの加護をもたらし災厄なき世に導くことを！世界の痛みは私が必ず受け止めてみせる！」

荒波が押し寄せたように民衆がわっと怒号にも似た叫びを上げる。

「バカ！見つかるぞ！」

ベルベットの頭をロクロウが抑え強制的に下げさせる。

彼女は今にも飛び出していきかねない衝動を押さえつけ、憤慨に震えた声で言葉を溢した。

「ライファイセットを殺した…！」

(えっ…)

それを聞いたライファイセットは喉の奥が詰まるような感覚に襲われ、固く握り締めたベルベットの左手から血が滴り落ちるのを見つめる。

ベルベット並々ならぬ憎しみを目の当たりにしたガイアは銃を懐に納めつつ、その視線はアルトリウスの横顔を捉えて暫し離さなかった。

「いきなり飛びかかるかとヒヤヒヤクワクワしたわい」

「それじゃ無駄死にでしょ。アルトリウス自身が言ってたでしょ、理と意志の剣がいるのよ。あいつを殺すためには」

煽り立てるマガイルウに冷静さを取り戻したベルベットは冷ややかな表情を決め込む。

「そろそろ儂はおいとまするかの。名残惜しいじやろうが探し物があるでな。じゃあの、皆の大願成就、七転八倒を祈っておるぞ」

「仲間じゃなかったのか？」

「勝手に付いてきただけよ。それよりこれからどうするかよ」

「導師アルトリウス、あれがお前が標的か？」

アイゼンの問いかけにベルベットは口を閉ざし答えない。

だが否定もしないということとはつまりそういうことだ。

「情報があるわ。何か使えそうな話はない？」

「そのテの情報…さすがに知らない。だが詳しそうな者なら心当たりはある」

「闇ギルドだな」

「闇ギルド？」

ガイアの思惑をいち早く見抜いたアイゼンが口にした言葉にライフィセットが疑問を持ち、二人はかいつまんで説明する。

「一言で言うなら悪い奴らの集まりだ。聖寮も王国も手を焼いていて

その詳しい動向も、規模も、正体も活動以外の何もかもが謎だらけの組織。隠れ蓑にもうつつつけというわけだ」

「ローグレスにもアイフリードが懇意にしていた闇ギルドがあったはずだ。バスカヴィルというジジイが仕切っていて確か、王国の酒場が窓口だと…詳しい場所までは知らんが」

「俺もそれは聞いたことがある。場所にはおおよその検討がついてい  
る…今度は、大丈夫だ」

「任せていいのね?」

「ああ」

マギルウが抜けたせいでベルベットからの不穏めいた視線を一身に背負ったガイアは緊張感に心を飲まれつつ、先頭を歩く。

するとその時ライファイセットが空腹に腹を鳴らし、恥ずかしそうにお腹を見た。

「おお、腹の虫か。これから復讐しようって時に豪胆だなライファイ  
セット」

「無理もない。ゼクソン港からここまでまともな食事を取っていない  
」

「これから行く酒場にも食べ物ぐらいはある。後もうすぐだからほん  
のちよっとだけ我慢してくれ」

男性陣三人から三者三様の気遣いをかけられライファイセットは素  
直に嬉しさを噛み締める。

聖寮の使役聖隷として道具扱いされていた頃には味わったこと  
ない、新鮮な気持ちでライファイセットの中で芽生え出していた。

そんな感情を胸に抱いたままライファイセット達はある質素な店の  
前にきた。

「ここだ」

「本当にここなの?」

石造りの質素な外観からはとても闇ギルドの拠点とは思えない。いぶかしみながらもベルベットは他の面々を伴って中に入り、カウンターに向こう側に立つ老婆に告げる。

「この子に何か食べ物？」

「この店の名物はマーボーカレーよ。一週間も煮込んで作るの」

マーボーカレー、その響きにライフィセットは未知の物に対する好奇心を引き立たせられ、実際に一度食べたことのあるガイアは味を思い出しごくりと喉元が唸る。

「じゃあそれを頂戴」

「他の人達は？」

「同じものを頼む」

「私はいらないわ」

「わかったわ：それにしても貴方達ずいぶん変わった一行ね」

唐突に囁かれた一言に全員が眉を吊り上げ、代表してベルベットが詰め寄る。

「私達が誰だか知ってるの？」

「ええ、監獄島から脱獄してきたんでしょ？ベルベット・クラウドさん？」

「ーッ！」

まんまと言い当てられたベルベットは瞳を見開くと共にアタリを引いたのだとこの時確信した。

「私達に用があるんでしよう：他の人達も初めてまして、ようこそ血翹蝶へ」



## 第9話 もつれる糸

血翅蝶からの依頼を受けてベルベット達は動いていた。

彼らに与えられた依頼は三つ。

- ・ゼクソン港の倉庫に集められている赤箱の破壊
- ・ガリス街道で行方不明になったメンデイという学者の捜索
- ・ダーナ街道を進んでやってくる王国医療団の護衛

これらの達成の見返りとしてアルトリウスの行動予定の情報を教えるという条件を提示してきたのだ。

他にすぎるもののないベルベットは躊躇いなくそれを受け入れ、すぐさま行動に移した。

そして効率性を重視して三つある依頼を二組に別れて達成するとベルベット・ライフィセット・ガイアがゼクソン港の赤箱の破壊を、ロクロウとアイゼンがメンデイの捜索に乗り出し、先に片付いた方が残りの王国医療団護衛を行うという体制をとった。

依頼を遂行するにあたって障害となるのは倉庫の警備だ。そこでガイアはローグレスを発つ際シルフモドキを飛ばしベンウィックに警備を引き付ける旨を伝えた。

「…」

「何か気になるのか、ライフィセット?」

ゼクソン港への道すがら何やら思い悩む様子のライフィセットにガイアが言葉をかけた。

「ロクロウは業魔の剣士、アイゼンは聖隷の死神、マギルウは変な魔女…僕はなんなんだろう」

「自分が何者か、か…難しい問題だな」

ガイアもライフィセットと同じ疑問を持った経験があるだけに彼の悩みは他人事には思えない。

だからこそないがしろにせずきちんと向き合って答えるのが、ライフセットのためになるとわかっていた。

「難しい?」

「ああ、自分が何者であるのか…その答えを見つけることは口で言うより簡単じゃない。一生かかっても見つけれられるかどうかもわからない。それだけ難しいんだ…自分の中で自分自身の存在を確立することは」

「ガイアはできたの?」

「できたつもりだけどうだろうな…今はそのつもりでもまた自分がなんなのかわからなくなるかもしれない。そうなる可能性は充分ありえる」

ガイアの言葉を受け止めたライフイセットは漠然とだが自分が直面している問題の過酷さを知って、表情を曇らせる。

「どうすればいいんだろう?」

「そうだな、俺が思うにまず自分を好きになることから始めたらどうだ?」

「自分を好きに?」

「そうだ。ライフイセットは今の自分好きか?」

言われてライフイセットは考え込む。

テレサの使役聖隷だった時は自分に何の感慨も持つことはなかった。

ただ命令に従い、ただ道具として存在する、それだけでいいんだと思っていた。

そうして使われ続けることが自分がこの世界に生を受けた意味なんだと決めつけていた。

でも今は違う。そんな自分をライフイセットは受け入れられない。

「好きかはわからないけど嫌いじゃないかな…ベルベットがくれた名前は好きだから」

「ならまず第一段階はクリアだな。後は自分をよく知っていいこう…嫌いなところも好きなのところも」

「そうすれば見つかるかな？」

「前進はすると思う。答えを見つけれられるかはライフィセット次第、自分が納得できて自分を好きになれる答えを精一杯悩んで探す…俺に言えるのはもうこれぐらいだ」

「よくわからないけど、わかった…ありがとう」

ライフィセットはガイアに礼を呟くと彼は快く頷いてみせる。

その時だった。

ゼクソン港の方角からシルフモドキが飛来しガイアの目前で翼を羽ばたかせ、停滞した。

脚には紙が結ばれており、ガイアはおもむろにそれを外して手に取る。

「手紙？…ベンウィックから？」

「いや…」

封がされた手紙を破かぬよう剥がしガイアは中身を改める。

失礼だとわかっていても内容が気になったライフィセットは真下から文面を覗き込む。

『拝啓 グラン様』

貴方がいなくなってもう二年が経ちました。先日まで私はビアズレイの街で巡察官の任に励んでいました。現地の人達との交流から学ぶことも多く、失敗もしてしまいましたがその度に貴方のことを思い出し貴方ならどうするのだろうとつい考えてしまいます。巡察官は貴方が望んでいた役職、その役職に私が就いたからには全身全霊をかけて励むつもりで日々精進しています。

この手紙が貴方に届いているのかわかりません。

ですが私は今も貴方がどこかで生きてくれている届いて信じています。いずれまた必ず会いましょう。

ローグレスで待っています』

(この手紙：聖寮の人から？どうしてガイアに？それにグランって…)

巡察官は聖寮の職務の一つ、ということとは差出人は聖寮の人間だ。だが何故聖寮の人間が海賊に手紙を宛てるのだろうか。

その疑問を解消するために差出人の名前を見ようとするがガイアの指先がその辺りに添えられていて、名前を隠す形になってしまっていた。

「ねえ、その手紙って―」

「人違いだな」

「え、でもシルフモドキが」

それが嘘だというのはライファイセットにもわかる。

シルフモドキは人の波長を読み取り連絡を取り合うことを可能とする優秀な鳥だ。

その鳥が人を判別し間違えるなど、聖寮で数多くの書物を読破したライファイセットにはない情報だ。

「名前が違う。おそらくこのグランと俺の波長が似てたんだろうな…」

本当にそれだけだろうか。違うならどうしてそんなにも哀しげな雰囲気をするのか

ライファイセットはますます疑問が膨れ上がる。

懐疑的な眼差しを向けるライファイセットを余所にガイアは手紙を折り畳み、封筒に戻す。その際できるだけ開かれた痕跡が目立たぬよ

うにしながら

「手紙戻しちゃうの?」

「俺に宛てられたわけじゃないからな…相手に届いていないことを送り主に教えてあげないといけない」

そう注釈を入れたガイアは手元に寄せたシルフモドキの脚に手紙を巻き付け、空中に飛ばす。

ライファイセットは引き返すシルフモドキを眺めていると、先を歩くベルベットから注意されてしまう。

「遅いわよ!早く来なさい!」

「う、うん!」

若干ライファイセットは萎縮するも即座にベルベットの元まで駆け出し、その小さな背中を温かな瞳に映したガイアは速度を速めて歩く。

「ごめんグランはもう…いないんだよ」

グランという人間は死んだ。

今ここにいるのはグランの身体を借りたガイアという名の全く別の人間だ。

ゼクソン港に着いたベルベット達はすぐさま倉庫に進んだ。

倉庫の前に人の影はなく侵入は容易に可能だった。

「ベンウィック達は上手くやったようだな」

「壊す箱ってこれだよな。何が入ってるんだろ」

「確認する必要なんてない。ライファイセット、火をつけて」

ベルベットの指示通りにライファイセツトは火属性の聖隷術で赤箱に火を放ち、瞬く間に炎は成長し燃え広がっていく。

依頼を達成したベルベット達は早々に引き上げるべく足早に倉庫を後にする

しかし

「待ちなさい！」

それを阻む者がいた。その凜とした声と姿を認めた瞬間ガイアに喉の奥が張り詰めるような、強烈な感覚が走った。

「嘘だろ……」

ずっと会いたかった。でもできることなら出会わない方がいいとも思っていた。

なのにどうして……どうしてこんなところに君がいる

—エレノア

数刻前エレノア・ヒュームはヘラヴィーサからの長い航海を終えこのゼクソン港に帰還した。

彼女は飛ばしたシルフモドキの脚に巻き付いた手紙を手に、悲痛な面持ちでローグレスに向かうところであった。

「……またですか」

何度も何度も手紙を送っては待ち望んだ返事が来ることはなく、読

んだ痕跡すら見受けられない。

「やはりもう…」

口ではそう言うも尚も返事の帰ってこない手紙を送り続けているのは、やはり自分が彼の死を受け入れられずにいるからだ。

両親も彼も次々と目の前からいなくなっていく。

どうして自分だけがこうして生きているのだろうかと思う時がある。

そんな思いを胸中に秘めて歩いていると視界の端に黒いコートを映し取った。

何気なくそのコートを辿っていくとエレノアが目付きは鋭く変わり、歯を食い縛る。

「業魔ッ！」

ヘラヴィーサで対峙した業魔がそこにいた。

両親と幼馴染みをエレノアから奪った存在の同類が

「待ちなさい！」

エレノアは迷わず槍を握り締め業魔ベルベットの前に立ち塞がる。

ベルベットの他にもテレサの聖隷二号と見知らぬフードの男がいるが、彼女の意識は彼らにはまるで向けられておらず敵意の的になっているのはベルベットののみ。

「涙目の」

「一等対魔士エレノア・ヒュームです！」

エレノアは使役聖隷を呼び出し槍を片手に飛び出す。

真っ向から突っ込んでくるエレノアをベルベットはブレードで応

対し、二体の使役聖隷にはライファイセットとガイアが一人ずつ受け持つ。

エレノアと同じ槍持ち聖隷にライファイセットは間合いを保ちながら術を唱える。

「重圧砕け！ジルクラッカー！」

重力を操る聖隷術が使役聖隷に乗りかかり発動しかけた相手の術を中断させ、全ての行動に制限をかけた。

自分の意思で戦うのはまだ慣れていない。

アイゼンを参考にしようにも彼とは同族であるものの、積んだ経験値に差がある上に戦闘スタイルも異なる。

どうすべきか悩むライファイセットをガイアが叱咤した。

「ライファイセット、自分流でいけ！」

「自分流で……うん！」

ガイアの声にライファイセットは力強く頷いて答える。

戦闘経験の未熟なライファイセットに長期戦は不利、故に強力な聖隷術を連続で撃ち込み早期にケリをつける。

「鏡面輝き熱閃手繰れ！カレイドイグニス！」

重力の檻に囚われた使役聖隷の四方より光の熱線が襲いかかり、その身を焼き焦がす。

それで決まりだった。

使役聖隷は糸が切れたように顔から地に倒れ伏して意識を失う。

「やった！」

初めての単騎での勝利に喜びから握り拳を作るライファイセット。



それを端目にガイアは敵の放った炎の聖隷術をスライディングで回避する。

滑りこんでやり過ぎした聖隷術の影響で巻き上がった熱風が背中を温めるのを実感しつつ、ガイアは銃口から光弾を連射。

低威力の赤い光が使役聖隷の右肩の付け根や両の膝元に命中し、使役聖隷は隙を見せた。

そこを見逃すつもりのないガイアは体術―三散華を叩き込む。

「いつでどうだー！」

スライディングを併用して間合いを詰めたガイアはパンチを一度、二度と決め最後の回し蹴りで使役聖隷を壁に吹き飛ばす。

これで使役聖隷は使い物にならなくなった。

(あっちはどうだ)

金属音が打ち合う方を見やるとそちらは互角のようだった。

ベルベットとエレノアの剣と槍は互いに相手に迫るも後寸前というところで阻まれ、有効打を与えられずにいる。

だが使役聖隷が全滅したとわかったエレノアは一瞬動きを乱しベルベットに槍を落とされる。

気合いで槍を手放すことなかったものの、自らの状況的不利を瞬時に読み取ったエレノアはベルベットとの距離を置く。

「聖隷も役に立たなくなった。終わりね」

「まだです！」

「そう、なら」

―まずい！

ベルベットはエレノアを殺す気だ。

彼女にとって復讐の妨げとなるものは全て敵とみなされる。

導師アルトリウスの命に従う対魔士であるなら尚更だ。

もう諦めてくれ、ガイアはエレノアにそう願うも彼女は断固としてベルベットに牙を向く。

そしてベルベットもまた同様に刃をエレノアに突き刺そうと身構えている。

「くそっ！」

どちらも死なせたくない。その一心でガイアは銃口を突き動かし発砲しようとしたが

「エレノア様はボクが守るでフよ〜！」

「……は〜！」

戦場に不釣り合いな真の抜けた声は何処からか飛び出した。

虚を突かれたベルベットとガイアが瞳を巡らせ声の出所を探すと、エレノアの体から緑色の輝きと共に小さな聖隷が地に足をつけた。

シルクハットの目深に被った小悪魔のようなビジュアルのそれは如何にもやる気満々の目で、ベルベットを威嚇する。

「かかってこいでフー！」

「…かわいい」

「そ、それでフか〜！」

ライフィセットのぼやきに途端に照れくさそうに頬を赤らめる仕事をさせる小悪魔聖隷。しかし数秒後、その頬が恐怖で真っ青に染め上げられることになろうとは彼も想像だにしていなかっただろうが。

「見いつけたぞおおおおお……！」

「このバッドなお声は〜!?!」

(まさか…)

地を這う大蛇を思わせるねちねちとした陰湿な声。  
そんな声などガイアの知る限りでは一人しかいない。

「裏切り者ビエンフリー！神妙にお縄につけく！」

「で、でたああああ!!」

「こ、こら！戦いなさい！」

(やっぱりな)

船頭から降り立ったその者はライフイセット曰く変な魔女ことマギルウ。

彼女の全容を認めた小悪魔聖隷は大袈裟な震え声をあげてエレノアの中に引つ込む。

そうしている間にも倉庫の火は激しくなっており、ついには窓を割って屋外に進出するまでに悪化した。

「火が上がる時間は稼いだ。逃げるわよ」

「うん」

「お前も来い」

「こおら！儂も坊のように優しく丁寧に扱わんかーい！」

「あんまり喋ってる舌噛むぞ」

走りながら乱雑な運び方をするガイアにマギルウは猛抗議するも彼はそれをスルーし、ベルベットとライフイセットの殿を勤める。

逃すまいとエレノアは追撃に出ようと体が動くも燃え上がる倉庫の存在に思い留まり、足を止めた。

「くっ…どうして私はこんなにも無力なのですか！」

ヘラヴィーサでもここでも業魔を仕留め損ない、対魔士の任を果たせない自分に苛立ちを募らせるエレノア。

彼女は消火作業に取りかかりながら、もし今の自分を見たなら彼は何を思うのだろうかと考えていた。

## 第10話 マギルウ復活

タバサからの三つの依頼をこなしたベルベット達。

成功を報告するとタバサからアルトリウスの情報ともう一つ依頼を授かった。それはミツドガンド教会大司祭ギデオンの暗殺。

三つの依頼には赤聖水ネクターという常習性の強い薬物が絡んでおり、その売買で教会が大儲けをしている傍らで血翅蝶にも被害が出ているとのことらしい。

司祭は毎晩ローグレスの離宮で祈りを捧げているらしく狙うなら深夜という方向性で話はまとまり、ベルベット達はそれまで一時の休息を得た。

ロクロウとガイア、ライフイセットが同じ食卓で夜食を取っているとガイアはロクロウからふとこんなことを訊ねられた。

「なあガイア、お前の武器って変わってるよな。俺も初めて見るしどういいう武器なんだ？」

「知りたいか？」

「まあそうだな。ライフイセットもどうやら気になってるみたいだぞ」

「そうなのか？」

「うん、ちよつと」

マーボーカレーの漬が口元に付いたまま答えるライフイセットに苦笑しつつ、ガイアは銃を卓上に置き数種類の弾丸を取り出す。

「これはアイフリードやアイゼンと異大陸を旅していた時に手に入れた代物だ。いくつかの弾を装填することで異なる効果を発揮する…例えば」

緑の線が縁取られたカプセルを銃倉に差し込み、ガイアは何もない

空間目掛けてトリガーを引く。

すると光で構成された緑の網が発生し、宙に浮かんだまま、暫し仄かな粒子を撒き散らしていた。

「この緑の弾を使えばこんな風になる」

「おお…」

「他にはどんなのがあるの？」

「色々あるぞ。赤い弾なら威力倍増、青い弾なら速度強化って具合に色んな用途がある」

「色の違う弾によってそれぞれ効果が違うわけか、ロマンがあるな！  
なあライファイセット」

「触ってみていい？」

「いいぞ、気をつけてな」

キラキラと輝く好奇心の眼差しを向けるロクロウとライファイセット。

そんな彼らを一步離れた位置から傍観していたアイゼンは彼らの話題を察したのか、自分も話の輪に加わった。

「カッコいい…」

「その銃は効果もそうだが造形の美しさもそこいらの武器とは格が違う。秘められた多種多様な能力と異なり一切の無駄のない銃身、加えてダイヤなどの宝石が素材として使われていないにも関わらず宝石と見間違える程にきらびやかな造形をしている。更には――」

「この紫の弾はどんな効果があるんだ？」

「その弾は牽制用だ。それを込めて発射すると弾が複数に分裂して広範囲に拡散する。しかしその反面威力は他のに比べて低下する」

銃の外見に見惚れるライファイセット、誇らしげな顔で解説に徹するアイゼン、見た目より武器としての性能に興味を示すロクロウ、彼に説明をしながらライファイセットの手つきに気を配るガイア。

そんな彼らにマギルウはお手上げとばかりに両手を挙げて辟易する。

「全く男共は道具一つでよくぞあそこまで盛り上がれぬのう」

マギルウの発言を受けてベルベットも男子共の盛り上がりぶりを冷ややかに眺めながら、呆れたように呟く。

「男子にはそういうくだらないことに何よりも夢中になる時があるのよ」

「十四歳ぐらいの年頃にの…」

見た目はそれぐらいのライフイセットは許容範囲にしても他の三人はすべからく例外だ。

フードのせいで顔立ちはわからないが、声色からしてベルベットと同年齢らしいガイアはまだかろうじて許せる。

だがその彼らより大人で業魔と聖隷であるロクロウとアイゼンは確実に論外だろう。

(ほんと男の子ってどうしてああなのかしら)

けどなんか懐かしい

そんな感慨にふけながらベルベットはライフイセット達を見つめていた。

そして深夜、ベルベット達は地下道を通ってローグレス離宮への侵入を開始した。

地下道といえども王都の中であるために何の問題もなくすいすいと目的地に到着できると思われたが、そううまく事は運ばないようだ。

彼らの進行を邪魔する者がいたのだ。

「地下道に業魔……？」

「これも死神の呪いのせいかな？」

広い空間をうろうろ彷徨く業魔の群れを壁越しに警戒するベルベットとロクロウは物思いの言葉を呟く。

同じくこの光景を目にしたガイアも驚きを隠せずにいるものの、冷静に状況を分析する。

「これだけの数の業魔だ。呪いのせいとも一概には言えないだろう……しかし聖寮のお膝元にこんな景色があるとはな……民衆に知れたら混乱は免れない。何故野放しにしているんだ……」

「真偽のほどは何にせよここを突破せんことには復讐の道は拓けんぞ。ベルベットや」

「そんなの最初からわかりきってる。とつとどこいつらを片付けるわよ」

何が来ようと問答無用だと言わんばかりに仇敵のみを見据えるベルベット。

彼女が壁から飛び出したのに続いてロクロウやアイゼンも業魔に飛び込み戦闘を始める。

「ちよつと待つのじゃ」

一瞬遅れて参戦しようとするガイアをマギルウが手招きをして呼び止めた。

こんな時に何を、と如何にも怪訝そうな表情をとるガイアだがやむなく彼女に歩む。

素直に従ったガイアの耳元でマギルウは囁く。



「—そういうわけじゃからきちんと頼むぞ。やれるじやろ？」

「……本気で、言ってるのか……？」

マガルウの言葉に耳を傾けたガイアは深い溜め息と共にそうぼやく。

「当然じゃ、このマガルウ様は遊ぶ時すら本気じゃぞく。とまあ、あやつめが現れた時は任せたぞ」

つくづく本気とふぎけの境目が読めない奴だ

マガルウと会ってから何度そう思ったかと呆れながらもガイアも戦列に加わった。

そして地下の業魔を蹴散らしたベルベット達は離宮の図書室へ出て、そのままギデオンス司祭いる祭壇へ直行する。

「ライフイセット、その本鞆に仕舞ったらどうだ？大事にしたいのは分かるが持ったままだと走りづらいだろう？」

「う、うん。そうだね」

後生大事そうに図書室から持ち出した本を両手に抱えて廊下を走るライフイセットにガイアが忠告する。

言われた通りライフイセットが本を鞆に入れた丁度そのタイミングで彼らはギデオンス司祭のいる祭壇の前に到達し、閉まりきった扉をベルベットが強引にこじ開けた。

「あんたがギデオン？」

祭壇の前に佇む白衣の男の背中にベルベットが問う。

「祈りの途中だぞ。何者だ？」

「先に聞いたのはこつちよ」

「無礼な。だが業魔なら当然か」

「そこまでです！」

何故自分の正体を知っているのか。

目前の司祭にベルベットが詰め寄ろうとすると柱の陰からエレノアが使役聖隷を召還すると同時に、姿を現す。

「待ち伏せか」

「これも死神の力か？それともあの婆さんに売られたかな？」

ロクロウがある可能性を示唆する一方でベルベットは自らの内でそれを否定し、エレノアに断言する。

「調べたのね。赤水晶の元締めが大司祭だつて」

「そう。あなた達が起こした事件の関連を洗って大司祭に辿り着きました」

「知った上で守るの？」

「処罰は聖寮が厳正に下します」

「処罰だど!?!私がどれだけ聖寮に便宜を測ってきたか！」

ベルベットとエレノアの間答にギデオオンが割って入り、エレノアを糾弾するような声色で唾を喚き散らす。

「貴方の言い分は後で聞きます。今は業魔の方が先決です！」

ギデオオンを黙らせたエレノアが使役聖隷を引き連れてベルベットらに踊りかかる。

数はエレノアの他に使役聖隷が四体。

エレノアはベルベットを集中的に狙っているために他の方まで手

が回らない。

数の上ではベルベット側に優位な立場なのだが、どういうわけかマギルウとガイアは戦いに交じらず傍観していた。

マギルウはいつものことにしてもガイアは何故戦わないのか…

「何してるの！きつさと戦いなさい！」

「そうしたいのは山々なんだが…このとおり」

腕を後ろ手に回されマギルウに拘束されているガイア。

彼は悪びれた様子で答え、アイゼンは彼女の奇行に不満があるのか使役聖隷を殴打しながら問いただす。

「何の真似だ？」

「こやつにはやってもらうことがある。無駄な労力を使わせたくないんじゃないよ。まあ一人や二人欠けたところでお主が負けるようなことはあるまいて、精々頑張つての〜」

「勝手なことを！」

槍の刺突をブレードでかわすベルベットが毒づく。

ただでさえ戦力が欲しい状況下で、何故自分達から進んで戦力を削ぐような真似をしなければならないのか。

エレノアと斬り結びながらベルベットはマギルウに舌打ちを打つ。

「飛燕連脚！」

「くうっ…！」

足技と剣術をくみあわせた斬新な戦闘スタイルを得意とするベルベットにエレノアはてこずるが、負けじと応戦。

「このぐらいで、描け蒼弓霊槍・氷刃！」

槍より放たれた霊力で構成されたいくつもの氷刃が銃弾のようにベルベットに飛びかかる。

迫る絶対零度の脅威にベルベットは眉をピクリとも動かさず、それをブレードではたき落としたちまちま粉末に変えた。

「二等対魔士とサシでやり合って優位に立つとはやはりベルベットの奴大した腕前じゃな」

「今更言うか…てかいつまでこうしてるつもりだ？俺は加勢に入りたいんだがこのまま突っ立ってるわけにもいかないだろ？」

未だ束縛されたままのガイアはマギルウにそう注釈を入れる。

「我慢せんか、あやつめが姿を現すまでの辛抱じゃ」

「目的はあくまでもギデオ司祭だ。他に時間を割いてるうちに逃げられるぞ。それにこの騒ぎを聞き付けた増援だっていつ来るか」

「増援が来るその頃にはもうカタがついておろう…」

「おい—」

「そんなに心配なのかえ？」

「……」

黙りこくるガイア。

マギルウはその様子に何かを察しつつも意図的に追及を続ける。

「心配せんでもあやつらの実力はお主も知っておろうに……それとも、他に何かあの場に行きたい理由でもあるのかえ？」

その問いかけを囁いた時ガイアの反応が変わった。

微々たるものであったがマギルウの瞳には、確実にさっきまでとは大きく異なる反応に映った。

「ま、お主が何を思おうがどーでもいいわい。それより儂は―」

「エレノア様を苛めるなでふ〜!」

マギルウの言葉を遮る形でエレノアを擁護する種類の声を上げる小悪魔聖隷が姿を現出した。

マギルウが探していた裏切り者、ビエンフーという名の使役聖隷だ。

彼は業魔手をもってしてエレノアを潰さんとするベルベットの進行上に立ち塞がり、勇敢にも主を守らんとする。…が

「ビエ〜〜〜!」

造作もなく一払いで弾き飛ばされてしまいビエンフーは無念の涙を流して、床に落ち行く。

その小さな肉体はひんやりした床下に触れるより先に落下点に偶然居合わせたライファイセットの手中にぴったり収まり、両者は目を合わせる。

「わあ…!」

初対面で可愛いと言ったライファイセットの温かな目を間近で見たビエンフーは照れくささからか、ほんのりと赤く頬を染める。

この時点で彼も予想もしなかっただろう。

その温かさが数秒も持たずして凍てつき、己の肌に寒気が突き刺さることになるうとは

「会いたかったぞ〜ビエンフー。よくも儂から逃げてくれたのう」

「マ、マ、マギルウ姐さん!?!」

ようやく見つけた因縁の相手の登場にマギルウは瞳をギラつかせ  
ビエンフーの頭を鷲掴み、ぶら下げる。

こうなってしまうてはビエンフーに逃れる術はない。

「あ…ああ…」

「元鞘に収まってもらおうぞ」

怯えるビエンフーを他所にマギルウはそう言ううと魔法陣を頭上に  
展開し、滑らかに唇を動かす。

「七つ目の社もりに生まれし一族よ。今再び契りを交わし我が悶々たる祈  
念混沌を極めし一滴とならん。覚えよ汝に与える真名まなを『フューシイ  
||カス』!」

「ビエ〜ン!ソーバツ〜ド〜!!」

マギルウが真名を告げ、ビエンフーは緑色の光となって彼女の体へ  
と入ってしまった。

「ふっふっふ…みなぎってきた〜!」

「この力は…対魔士!」

使役していたはずの聖隷を強引に奪取された事実じじつに驚くエレノア。  
そんな彼女を前にマギルウは威風堂々と言いつつ。

「ちがーう!儂けんこそは乾坤宇宙けんこんうてんを玩具にし鬼をもおちよくる大魔法使  
い!」

マギルウが口上を唱える最中、やつとこさ束縛から解放されたガイ  
アは露骨に嫌そうな顔をしながら銃に黄色のカプセルを使う。

そして

「あ、マギルウ姐さんと覚えおけ〜い!!」

名乗りと同時に背後で銃口から飛び出した閃光が幾重にも輝き、マギルウを照らす。

さながら見世物のような演出をバツクに決めポーズをとったマギルウは喜ばしい表情をする。

「これで満足か？」

「うむ上出来じゃ。さすがは我が一番弟子、誉めて遣わすぞ〜」

「遅れは取り戻す…マギルウ、今度はこっちの言うことを聞いてもらうぞ〜」

ガイアがマギルウにそう告げるとベルベットとエレノアの間  
眩き光弾を撃ち込んだのは、ほぼ同時だった。

「人間が業魔に味方するなんて…恥を知りなさい！」

飛び退いたエレノアはベルベットと間隔を空け、横槍を入れたガイアに毒づく。

「一気にカタをつける。やれるだろうか？」

「もちろんじゃ誰に物を言うておる」

「それともう一つ、ここにいる聖寮の奴らは殺すな。聖隷も人間も全部」

「ちよつと何を勝手に―」

「注文が多いの〜。ま、構わんわ…可愛い愛弟子の頼み、答えてやらんでもない」

ベルベットの抗議の言葉を無理やり遮断したマギルウは小汚なく、  
魔女らしい笑みを浮かべてそう口を開く。

「誰がいつ誰の弟子になった」

律儀にマギルウの軽口に返答したガイア。

彼は紫の銃弾を装填し、天井に向けて引き金を引く。

すると一筋の光が銃口より伸びたかと思えば次には無数に分裂し、秋雨の如く使役聖隷とエレノアへと降り注ぐ。その着弾の余波は彼らだけでなくエレノアと対峙していたベルベットをも巻き込み、彼女は寸前で後方へ引き下がった。

「ぐううー！」

「ちいー！」

「マギルウー！」

「マギルウ復活の記念じゃとくと受けとれい！アクアスピリット！」

エレノアと分断された使役聖隷達にマギルウの詠唱した水流が覆い被さる。

その威力たるや並大抵のレベルではなく、まともに浴びた使役聖隷達は放水が止むと地べたに這いつくばっていた。

「そんな！ああっ！」

あつという間に使役聖隷を倒されたエレノアにガイアは光の鞭を巻き付け、彼女を拘束。

それにより敵の戦力を完全に絶つことになった。

「なんじゃもう仕舞いか。歯応えないの〜」

「くっ…ほどけないっ！」

「おいギデオン司祭はどこだ？」

煽るマギルウにエレノアが歯噛みするのを尻目にロクロウはギデ



オンの存在を思い出し小さく呟く。

するとアイゼンが視界の隅に部屋を抜け出て、遠ざかる聖職者の背中を目撃する。

「あそこだ」

「逃がすわけにはいかない。追うわよ」

「待ってベルベット、ガイアは!？」

「構うな。先に行け」

「でも」

「本人がああ言ってるんだ。ここは任せようぜライフィセット」

先立つて走るベルベットにライフィセットがそう指摘するも、本人とロクロウに反論されライフィセットは後ろ髪を引かれる思いのまま走り去る。

去り際に目が合ったガイアとアイゼンはお互いに何かを察したように無言で頷き合い、アイゼンはガイアを残して姿を消す。

そうして場に残りかつ意識があるのはガイアとエレノアの二人だけ。

(こんなものに…!)

エレノアは自らを縛る光の縄に顔をしかめ、ガイアを鋭い目付きをもって睨みつける。

直接的な敵意を注がれる対象になっているガイアは部屋の内外から音が途絶えたのを確かめると、拘束を解き銃を下ろした。

「え…!？」

体の自由を戒めていた光が粉粒のように消え行き、残留粒子が宙に舞う。

暗がりも相まって幻想的な景色を演出するきらめきを気にも止め

ず、エレノアはガイアに問う。

「何故とどめを刺さないのですか？」

「俺は海賊だ。人殺しを生業にしているわけじゃない」

「よく言いますね。ギデオンの司祭を暗殺しに来たのでしょうか」

「不本意ながらな」

「不本意…？そうやって罪の意識から逃れるつもりですか？貴方とい  
いあの魔女といい、業魔に肩入れして命を奪って何が違うと言うので  
すか！貴方と業魔に一体何の！」

問答を繰り返すうちにエレノアは苛立ちを募らせる。

人間の身でありながら業魔の味方をし、聖寮に牙を向く彼。そして  
ギデオンを暗殺しようとしているそんな輩らに敗北した自分。その  
両方にエレノアは怒りを覚えざるにいられなかった。

「自分が何をしているのかは重々理解している…殺した命に報いるつ  
もりはない。だがその命の重さを理解していない程愚かでもない。  
いずれ裁きは受けるだろうな…だが俺を裁くのは聖寮ではない…」

そこで言葉を途切らせたガイアは一拍間を置く。

「この世で唯一俺を裁ける資格があるのは一人だけだ」

その先を音にすることなく言葉を断ち、ガイアは前に両の足でしっ  
かり立つ少女を見据える。

場違いであるとかわかっていながら、自分が長らく同じ時を共に過ご  
した幼なじみと気付いていないとわかっていながら、彼女が彼女で  
あったことにそつと安堵する。

彼女の目線の先にいるのがグランであったなら再び聖寮の対魔士  
として業魔と戦う道もあるだろう。むしろそうしたいと思う自分が  
ほんの少しだけでもいる。

しかし今ここにいるのはグランではない。ガイアという名前の異なる別人だ。

彼女とはさほど面識はないし、情けをかけるだけの義理もない。ベルベットと行動するならば彼女はまた自分達の障害と成りうる。先のリスクを考慮するのであれば今ここで始末してしまうのが最善の選択なのだ。

照準を定めて引き金を引けばそれで済む単純な作業。だがガイアにはそれができずにいた。

「一つ忠告しておく。自分や組織を信じるのは構わない。だが絶対的な正しさなどどこにもないことだけは覚えておけ」

「何が言いたいのです…」

「盲目的になるなどということだ。それではいずれ自分の身を破滅させることになる」

「貴方は一体―」

再度エレノアが問いただそうとした時、遠方よりどたばたと慌たらしい足音が響く。

(警備兵か…)

一方的に忠告を投げかけたガイアは銃口をエレノアに定め、閃光を放つ。

発光を直に受けてしまいエレノアはたまらず目を閉じる。

バリイーン！とガラスが碎ける音がした。

時間をかけながら視力を取り戻したエレノアの瞳には無人の空間と床に散らばるガラス片だけが映った。

ガイアの行方を求めて四方八方を見渡すもその姿はどこにもない。

「あの男…何故あんなことを…?」

暗闇と静寂が包む室内は、響いたエレノアの弦きは一層戸惑いを色濃く強調させていた。

## 第11話 風のザビード

「離宮の地下に巨鳥の業魔が？」

「ああ、怪獣並みの大きさの鳥が結界に封じられていた」

ゼクソン港の街角でガイアとアイゼンは声を潜めて話し合う。

ガイアが離宮を離れた頃ベルベット達は最下層まで逃亡を謀った  
ギデオンス祭を発見した。

だが彼女達がギデオンス祭を視界に納めた時にはその体は既に息  
絶えていた。

グリフオンのような巨鳥の業魔がギデオンス祭を嘴で貫き、白衣を  
鮮血に染め上げたというのだ。

幸いにも聖寮の張った結界の外にベルベット達はいたために、ギデ  
オンス祭と同じ末路を辿ることはなかったようだが、この一件で新た  
な謎が一つ生まれた。

「なんだって聖寮はそんな業魔をこのローグレスに隠しているんだ：  
？」

安全と信じきっている街中の、それも聖寮の管理する施設に大型の  
業魔がいる。

その事実を知ればローグレスの人々は蜘蛛の子を散らすように、大  
混乱に陥るであろうことは想像に難くない。それだけ人々は業魔の  
存在を恐れているのだ。

「わからん…だが余程見られては不味いものようだ。あの対魔士も  
業魔の存在を知らなかったようだ」

「対魔士、それってまさか…」

「離宮でギデオンを庇ったあの女対魔士だ」

「やっぱりあの後アイゼン達を追ってたのか」

「安心しろ。殺してはいない、余計な危害も加えていない」

それを聞いてガイアは安堵し、そつと胸を撫で下ろす。

「あれが以前お前の言ってた幼なじみか」

アイゼンの問いかけにガイアはこくりと頷き眉を細める。

「できれば会わずにいたかった…彼女にとつての幼なじみはもういないんだ。だから無関係なままでいればよかった」

「しかし思惑に反して出会ってしまった…皮肉な話だな」

「ほんとだよ」

ひとりごちるガイア。淡白な口振りとは裏腹に表情は険しく、アイゼンは彼の心中を汲み取った上でこう言い出す。

「今回は殺さずに済んだが次もまた同じ選択が取れるかはわからん」

「わかってる…いずれまた戦うことになる。間違いなく」

「なら俺から言うことはない」

突き放したような物言いだだがそれが彼なりの気遣いだとガイアは知っている。

無言の感謝を心中で送りつつ、姿なき幼なじみに思いを馳せる。

(ノア…今の僕を見て君はどう思った?)

「副長！リーダー！」

そこにベンウィックがやって来てアイゼンとガイアの目前で足を止める。

「何かわかったか？」

ベンウィック達アイフリード海賊団の一員らには現在アルトリウスのいる聖主の御座に関する情報収集及び偵察を依頼していた。きっと進展があったのだろう

「それがペンデュラムを使う聖隷がいたんだ」  
「何？」

アイゼンの目付きが一変し眉間に皺を寄せる。  
その彼とは対照的にベンウィックはいささか興奮気味で捲し立てるように話を続けた。

「しかも検問の対魔士を全員ぶっ飛ばしたんだ。あいつなら船長ともやりあえる」

「わかった。俺が直接行って確かめる。ガイア、ベルベット達には」

「説明しとく…ただなるべく暴走しないように」  
「わかっている」

ガイアに後を任せたアイゼンは聖主の御座があるとおぼしき方向へ駆け出す。

ほとほと心配になりながらもガイアは腕を組み、思索する。

「その聖隷がアイフリードと互角ならランクはアイゼンと同じ。協力を結びつけることができればAランクの聖隷が四人揃う」

タバサからの情報によれば聖主の御座の周辺に張られた結界を破るにはAランクの聖隷が四体必要とのこと。

こちらの手元にはライフィセット、アイゼン、ビエンフーの三人。つまり後一人ランクAの聖隷が必要になる。

ベルベットは対魔士から奪えばいいと言っていたが、わざわざそんなことをする必要はなくなるかもしれない。

「なら船長のことを聞くついでに協力してもらおう。まさに一石二鳥だ」

「それはそうなんだが…」

「なんか困ったことでもあんの？」

「アイゼンってああ見えて暴走しがちなところあるだろ？」

「確かに：口が聞けなくなるまで相手がボコボコにされてなきやいいけど」

ガイアとベンウィックが二人揃って不安な予想していると、ちょうどそこにベルベット達が情報の進捗状況を訊ねるために歩み寄ってきた。

「ちよつと何どうしたの？」

「アイゼンが先走って検問に向かった」

「マジかよ」

「困ったのゝ鍵が一本脱走したぞ」

ベルベットの質問に隠し事なく簡潔に受け答えたガイアにロクロウとマジルウは、率直な感想を口からこぼす。

何故そんな行動に出たのか、と気になるベルベットの顔を見たガイアは彼女が訊ねるより早く口火を切る。

「アイゼンは聖寮の検問を襲ったペンデュラム使いの聖隷を探しに行った」

「ペンデュラムは船長が行方不明になった現場に落ちてた武器なんだ」

「そいつが連れ去ったってこと？」

「わかんないよ。でも無関係とは思えない」

「なるほどな。それでアイゼンは自分の船長を連れ去ったのがその聖隷かどうか真偽を確かめようと検問に向かったわけか」



会話の流れを総括したロクロウにガイアは正解だと言わんばかりに首を縦に振る。

「ウチの船長の失踪にその聖隷が関わっているにしてもそうでないにしても、聖寮の検問を襲撃したのなら聖寮を敵対視していると考えていい。上手くいけば結界の破壊に一役買ってくれるかもしれない」「そうね…どっちにしてもまずアイゼンを追うのが先、急ぐわよ」

ベルベットの賛成が得られたというわけで一行は早速行動に出る。

「情報助かる。ベンウィック、バンエルティア号は任せた。万が一俺達が戻って来なかった時のために備えて出港の手筈は整えておいてくれ。何かあったらシルフモドキを飛ばして連絡する」

「ラジャー！」

親指を突き立てサムズアップするベンウィックの表情にガイアは心の内で返し、ベルベット達とアイゼンの後を追いかけた。

空の色が夕焼けの橙から夜の黒に変わった頃、エレノアは一人森の中にいた。

離宮での事件の顛末を報告するためアルトリウスのいる聖主の御座。

そこからローグレスへの帰路についているのだ。

「なんてこと…ローグレスに業魔の侵入を許してギデオンの司祭を守りきれないなんて…自分が情けない」

ヘラヴィーサで、ゼクソン港であの女業魔を討てていればこんなことにはならなかった。

そうしていればギデオンの司祭は命を落とすことはなく、災いの種が振り撒かれることはなかったはず。

なのに自分はできなかった。

「次こそは必ず——っ！」

落胆するエレノアだがどこからか不穏な気配を感じ、武器を手に取り、

静けさの中故に余計に不気味さが増す得体の知れない気配にエレノアは息を飲む。

そして木々に潜む茂みが微かに揺れた。

「何者です！姿を現しなさい！」

自ら感じた気配が気のせいではないと確信したエレノアは語気を凄めて言う。

そんな彼女の前に茂みの奥から出てきたのは

「久しぶりだな。エレノア」

「ジャグララー……？」

エレノアは驚きの余りに息を詰まらせ、目を見張る。

目の前の存在が信じられないとでも言うかのように。

「鳩が豆鉄砲でも食らったような顔だな。どうした？俺の顔がそんなに珍しいか？」

しかし彼女の困惑に反して現実にジャグララーはここにいる。

対魔士の名残はなく黒衣に身を包んだ格好ではあるが、言葉を発し笑みを浮かべる男は間違いなくエレノアの知るジャグララーだ。

「本当にジャグラーなんですね？無事でよかったです！」

彼の存在を認めた瞬間エレノアの中に懐かしさと喜びが込み上げる。

すっかり警戒心をほどこいたエレノアはジャグラーとの距離を縮め、早口で話す。

「二年前何があったのですか？今までどこにいたんですか？」

「エレノア：落ち着け。そんなにまくし立てられては話せることも話せない」

「あ、すみません！つい」

「ふん、お前は変わらないな。記憶にある通りだ。昔のままだ」

「昔つて程前の話じゃないでしょう？最後に会ったのは：でも無事で良かったです」

聖寮にいた頃と変わらないジャグラーにエレノアは目尻に涙を溜めていた。

彼女は指先でその雫を拭うとジャグラーに提案を持ちかける。

「ここではなんですからローグレスに行きましょう。オスカーにも貴方が生きていることを伝えたいんです。それに私も聞きたいことがたくさんありますから」

「そうだな…だがその前に一つ頼みたいことがある」

「なんですか？」

「ここに来る道中で傷を負ってしまってな。治療をしてもらえないか？」

「わかりました。そういうことなら喜んで」

ジャグラーの頼みをすんなり買って出たエレノアは自らの使役聖隷を顕現し、彼の治療を命じる。

ローグレスの方角を見つめていたエレノアはジャグラーへと向き

直る。

「ジャグラー、貴方が無事ならひよっとしてグランもー」  
「うわああああ!!」

期待を込めて投げかけたエレノアの質問は断末魔の悲鳴にかき消されてしまった。

「え…?」

それ以上の言葉は出なかった。  
使役聖隷から治療を受けていたはずのジャグラーが聖隷<sup>ソレ</sup>を切り捨てる。

目を疑いたくなるような光景を見せつけられては、エレノアにはそうするしかできなかつた。

「ジャグラー…何を?」

震えたか細い声を漏らすエレノア。

ジャグラーは彼女を尻目に懐から一枚のカードを取り出す。  
人差し指と中指の間で怪しい光を放つと足元に転がる聖隷は光へと変化し、カードに吸い込まれるように消えていく。

聖隷の消失を見届けたジャグラーは再び刀を手にエレノアに狙いを定める。

「ッ!」

刀の軌道が自分に近付いていると直感したエレノアは残る二体の使役聖隷を召還し、守勢に転ずる。

使役聖隷二体は協力して防御陣を展開した。

だが禍々しい気を帯びたジャグラーの刃は防御陣を一太刀で突き

破り、使役聖隷もろともエレノアの体を木の幹に叩きつけた。

「がっ!!ごほっ、ごほっ!」

「無様だなあエレノア」

受け身も取れず背中を打ち付けたエレノアは咳き込み、顔を歪ませつつもジャグラーを見上げる。

二人の使役聖隷も同じく刃の元に切り伏せカードに吸収するとエレノアに近寄り、跪く彼女に視線を合わせるために膝を曲げる。

その拍子にエレノアは目撃してしまった。

月光の輝く星空に下でジャグラーの瞳が鮮血にも似た淀んだ光を放っているのを。

「その目、ジャグラー…そんな、あなたはまさか業魔に…?」

「ああ、お前のだいつ嫌いな業魔だ」

ジャグラーは恥じる素振りもなく口角を吊り上げて笑う。

業魔の瞳も相まって一層不気味さを醸し出すその笑みにエレノアは瞬きすらできず、絶句する。

「アルトリウスの耳に入れておけ。そのうち貴様の首を跳ねるとに來るとな」

ジャグラーはエレノアの喉元から頤にかけて指先で搦うようになぞると彼女の前から立ち去る。

「なんてこと……いえそれよりも今は…」

極度の驚きと恐怖から動けずにいたエレノアは我に帰るなり、元來た道を全力で引き返す。

「こうしてはいけない…急いでアルトリウス様に報告しなければ！」

検問の区域まで足を運ぶと辺りには対魔士達が意識を刈り取られ、地べたに倒れ伏していた。胸の付近が浮き沈みしていることから気を失っているだけで死んではいないようだ。

「対魔士達が気絶している。アイゼンはどこ？」

「あそこにいるよ。誰かと戦っている」

土の上に寝そべる者が多数を占める中で、きちんと両足で立ち、戦いを繰り広げる二者の姿をベルベットとライファイセツトは捉えた。徒手空拳で攻めるはアイゼン、振り子のような形状の武器を手に彼と渡り合うは褐色肌を黒服で隠した聖隷。

「あれが検問の対魔士を襲った聖隷か。珍しい武器を使っているな」  
「アイゼンが攻めあぐねている。アイゼンと互角とは…並みの相手じゃないな」

ロクロウとガイアがペンデュラム使いの聖隷を観察し、そう呟く。  
ガイアの言葉が示すようにアイゼンは間合いを詰めるべく懐に飛び込もうと接近するも、ペンデュラム使いは己の武器を手足の如く器用に扱いそれを阻止してみせる。

ベルベット達が居合わせても両者共に一步も譲らず、対等なバトルを継続している。

「やるじゃねえの。おたく何者だい？」

「俺はアイゼン。アイフリード海賊団の副長だ」

「アイフリードの身内かあ、こいつは楽しめそうだ」

「やはりアイフリードをやったのはお前か」

さも愉快そうに笑いながらペンデュラム使いの聖隷は闘志を保つ。相対するアイゼンも一見して落ち着きを払っているように見えるが、その鋭き目付きの奥には覇気が宿っていた。

闘う気のアイゼンにベルベットが制止の声を送る。

「アイゼン！こいつは聖寮を襲った上手くいけば結界を破れる」

「つまらねえ理屈言うなって」

「俺は、俺のやり方ではじめをつける」

「邪魔するな」

何の偶然かペンデュラム使いの聖隷とアイゼンの言葉が呼応し、まったく同じタイミングで重なる。

そしてまた己の直線上の相手に向かっていく両者にベルベットはブレードを抜刀し、介入の意思を表明した。

「そう、じゃああたしもあたしのやり方でやらせてもらうわ。あんた達を動けなくして結界を開ける！」

そう言うが早いがベルベットはアイゼンとペンデュラム使いの聖隷との私闘に割って入り、場の状況は完全に一変した。

「なんでこうなるんだ？」

「薄々予想はしていたがな……」

「その者ども何を呆けておる！さっさとベルベットを助けるんじゃ、そうせんと後が怖い」

「確かに、すまんアイゼン！」

「う、うん」

呆れたようにぼやくロクロウとガイアにマギルウは一喝し乱入を

促す。

それを受けてロクロウとライフィセットはやむなくベルベツトに協力し、ガイアも後々殴られるのと喰われるのとどちらがマシかと一瞬考えた後参戦を決意した。

ベルベツトとマギルウ、ロクロウはアイゼンを抑えにかかり、ライフィセットとガイアはペンデュラム使いの聖隷を鎮圧に取りかかる。

「邪魔すんなつての！怪我するぜ」

「忠告には感謝するがこうでもしないと後でもっと怖いのが待ってるんでな」

宙を鳥のように縦横無尽に駆け巡るペンデュラムを光弾で撃ち落としながら、ガイアはそう言葉を返す。

風の霊力を伴うペンデュラムは光弾と交わる寸前で軌道を変更し、自ら目掛けて飛来するそれをガイアは横向きに飛んで回避する。

「いい得物じゃねえの。お前もあいつと同じアイフリードの身内か？」

「だったらなんだ？」

「そいつも異大陸から手に入れたアイフリードからの貰いもんか？」

余裕めいた表情のまま言ったペンデュラム使いの聖隷をガイアは一瞬、回避行動を止める。

「どうやら色々とアイフリードから聞いたみたいだな…他には何を知ってる？」

「さあな、知りたきや自分で確かめな」

「そうだな。ならお前の言う通りそうさせてもらう。意地でもな」

ガイアは弾を込め、夜空に放つ。



紫の光条は暗い空に煌めき、複数の流れ星と化してペンデュラム使いの聖隷に迫る。

「いいねえーこれだこれ、ノリの良い奴は好きだぜ！」

気を高ぶらせるペンデュラム使いの聖隷は自らの武器を器用に操り、蜘蛛の巣のような形状の膜を描く。

分散した光弾は残らず全てペンデュラムに阻まれ、聖隷に触れることは叶わなかった。

息をつくまもなく攻守が変わり、ガイアはペンデュラムの反撃から懸命に逃れる。

あまりに無駄のない反撃の糸口を掴めずにいた。

「相性が悪いな」

直線的にしか進まない光弾と自在に好きなタイミングで軌道を変更できるペンデュラムとは、真つ向面からぶつかった場合の結果は先の通り。

接近戦に持ち込む手もあるにはあるが、相手はアイゼンの猛攻にも物怖じしなかった。

懐に入る前に返り討ちに遭うのが関の山だ。

とてもではないが勝ちを掴み取るのは不可能に思われた。ただそれはガイア一人であつたら話だ。

「ライフイセット、力を貸してくれ。重力の術を使ってくれタイミン  
グは指示する」

「う、うん」

複雑な軌跡を描いて身を貫ぬかんとするペンデュラムに回避しか有効な選択肢のないガイアは、背後のライフイセットに助力を乞う。

受け答えはしたが、微かに不安が込もっているようなその声にガイ

アは銃を握りながらそちらを振り向く。

「心配するな自信を持って…お前は自分が思っているより強い。アテにしてるぞ」

「うん！」

今度の返事は違った。ちゃんと自分がやってやると意気込みが表に出ていた。

—これならば任せても大丈夫

そう確信したガイアは赤の威力強化の弾丸を装填し、逃げ回るのを止めた。

何かを企んでいるのはペンデュラム使いの聖隷にも判断できた。

「回避を止めた…誘ってやがるな。面白れえ、受けてやろうじゃねえの」

何かを企んでいるのは容易に想定できた。

だがあえてその挑戦に乗りペンデュラムの矛先をガイアに向けた。

全力の靈力を注ぎペンデュラムの速度はこれまでの比ではない。体のどこに刺さっても風穴が開く程に貫通力を増している。

「今！」

「重圧砕け！ジルクラッカー！」

あわや胸元に切っ先が刺さるか否か寸前のところでライファイセツトの術が発動し、ペンデュラムはガイアもろとも重力空間に捕らわれた。

進行も退却もできなくなったペンデュラムを余所にガイアは指先を使い、既にペンデュラムの使い手である聖隷に発砲する。

「—やべっ！」

鉛なら当然重力に巻き込まれ役立たずになるが光は別だ。光は重力には縛られない。ペンデュラム使いの聖隷は着弾よりいち早くそれに気づき、握った自らの武器を手放し右に跳ねて直撃を免れる。草の上を二転三転しつつも体勢を整え、反撃に出ようとするペンデュラム使いの聖隷。

しかし彼が風の術を詠唱し効果を発揮することはなかった。

「ここまでか」

「これで終わりね」

ベルベットに背後から首筋にブレードを突き立てられたペンデュラム使いの聖隷は諦めたように、手を上げる。

アイゼンもロクロウに羽交い締めにされており、アイゼンとペンデュラム使いの聖隷の私闘に幕が引かれた。

「俺の負けだ。やるじゃないのお前、さすがアイフリードの身内ってところか」

「露骨な誉め言葉は返って相手の機嫌を損ねるぞ：負けてたのは俺の方だ」

「だろうな。確かにあのままやり合ってたら負けてたのはお前かもな：だがケンカはケンカだ。勝ったのはお前達。んで、負けたのは俺だ」

「変わった奴だ：だが嫌いじゃない」

敗北を喫したというのに晴れやか笑みを浮かべるペンデュラム使いの聖隷。

表裏のない潔い微笑みに、彼の人となりが見られているように思えてガイアは掛け値なしにそう評価した。

「んで？どうするんだい？」

「導師を殺す。そのためにあんたの力が必要な」

「一緒に導師を殺せつてか？」

「そうしたいのなら別に構わないわ。こっちは最低限結界を開いてくれればいい」

「面白くないあんたも、いいぜケンカに勝ったのはあんたらだ：結界を破るぐらいは協力してやるよ」

ガイアの代わりに語ったベルベットの答えにペンデュラム使いの聖隷は楽しげに口角を吊り上げる。

「では聖隷のお歴々、結界の前へ♪」

マギルウの言葉にビエンフーが外界に召還され、アイゼンやライファイセットそしてペンデュラム使いの聖隷と並び立つ。

ライファイセットが結界に手を翳すと彼の指先が触れた瞬間に結界は砕けたガラスのように飛び散り、道先を開く。

「後は任せませ。その方が対魔士の慌て顔が見られそうだ」

「待て、まだ肝心なことを聞いてない」

呼び止めたアイゼンに場を去ろうとしたペンデュラム使いの聖隷は、まるで意に介さないと叫びたげな口調で振り返る。

「それ以上はやめとこうぜアイゼン。命の取り合いになつちまう」

「…何者だ？お前は」

「風のザビーダ、ただのケンカ屋さ。縁があればまた会えるかもな」

それだけを言い残してペンデュラム使いの聖隷いや、ザビーダは星空の街道を徒歩で去っていく。

彼の後ろ姿を見つめていたアイゼンにベルベットの声をかける。

「結界は開いたわ。追うなら止めないけど」

「いや神殿に向かう。アイフリードの行方に近いのはメルキオルの方だ」

「バカね。割り切れるなら最初からそうすればいいじゃない」

「そんなに器用じゃない。だからここにいる」

てつきりアイフリードの行方を気にするあまりザビーダを追うだろうと考えていたばかりに、あっさりと割り切りを見せたアイゼンにベルベットはつい一言口を滑らせた。

「…バカね、本当に」

——まったく男つてのはどうしてこうも不器用な連中ばかりなのだろう。

神殿の奥深く、聖主の御座の最深部に座禅を組んで佇むは導師アルトリウス。

彼は何者かの気配を察知し、視線を合わせることなくその存在の名を呼んだ。

「何用だ？ゼブブ」

その名前がアルトリウスの口から音として放たれると中肉中背の対魔士の男がゆらりと現れ、彼に告げた。

「カノヌシの復活は滞っているようだな」

「問題ない。穢れは着々と揃いつつある。復活は時間の問題だ」

「それなら構わないが…そう猶予はないぞ」

ゼブブがそう言葉を残し去った時祭壇の紋章が強力な輝きで空間を照らしだした。

「この輝きは…何が近付いている」

聖隷術で張られた結界の仕掛けを攻略し、空にまで伸びているのではないかと億劫になるぐらいの長い階段を上がったベルベット達はやっとの思いで神殿の入り口に到達した。

そこでガイア達は中に侵入する前にベルベットからアルトリウス打倒の戦法を聞かされたのだが、その内容は奇想天外な発想の産物だった。

「ライフイセットの術を使ってアルトリウスの間合いに突っ込む。あたしは斬られようが焼かれようが構いはしない。あんたはあたしが動けるように回復し続けなさい」

ダメージを貰うこと前提の捨て身の特攻とも言える戦法だ。自らの命をも武器として認識していなければまず考えとして出てこない策に、ライフイセットとガイアは息を詰まらせる。

「なるほど。捨て身覚悟の戦法か…それなら敵の意表を突くことではできな」

「隙を作る前にくたばってしまわなければよいがの」

しかしそんな彼らとは異なりロクロウとマギルウはそれに自分の意見を告げる余裕があり、ガイアは己が共に行動している者達の異常

さを改めて感じざるを得なかった。

「でもそれじゃベルベットが―」

「これは命令よ」

異常だと知りそれでも尚も、彼女の身を案じ考え直す機会を与えようとしたライフィセットにベルベットは無慈悲なまでにそう言い捨てた。

有無も言わせぬ彼女の対応にガイアは寒気すら覚えていた。

しかし無理矢理寒気を収め、意識を切り替える。

(他人の心配ばかりしてる場合じゃないな…僕も)

アルトリウスの前に立つということがどれだけ危険かよく知っているだけにガイアは顔を強張らせ、ベルベットに感じていたのとは別の冷たさが全身を支配する。

そんな彼の心境なぞ露知らずベルベットは我先に神殿内部に足を踏み入れた。

## 第12話 仇敵との邂逅

「アルトリウス！」

神殿の最深部にてベルベットがアルトリウスの後ろ姿を視界に捉えて叫んだ第一声がそれだった。

「業魔に聖隷、ずいぶん風変わりな仲間を集めたものだな」

眉間に皺を刻んだ貫禄ある容姿にベルベット達は一層の警戒心を抱き、それぞれ戦闘体勢に入る。

ガイアもまた銃の引き金に指先を添えながら視線をアルトリウスの頭先から靴元の全身に至るまで、上下に動かしていた。

（導師、アルトリウス…）

直接この彼の姿を目の当たりにしたのは二年前のブルナーク台地の遺跡調査、その勅命を受けた時。

それ以外でアルトリウスの姿を見たのは二度。

二年前の密談の時と数日前の演説の時だ。最も二年前は直に見たわけではなく、九つ首の龍が見せたものにすぎないのだが…

いずれにしても彼の實力をガイアはよく知っている。

余計な思考が芽生えた瞬間それは致命的な隙を生み、自分にとって最悪の結末を招く。

―必ず生き延びる。ここにいる全員と共に

ガイアは瞳に闘志をたぎらせこの一戦に挑む。

「今度は前のようにはいかない！あんたを殺してライフセットの仇を討つ！」

ベルベットもまたアルトリウスに対して瞳にある感情を宿してい



た。

アルトリウスは姉セリカ・クラウの夫だった。

開門の日にセリカを業魔に殺されて以来ベルベットとライフイセツトの世話をしてくれた。

左腕に深い傷を負ってしまった体で血の繋がりのない義理の妹と弟の面倒を見てくれていた。

そんな彼にベルベットは恩義を感じていたし、仄かな恋慕のような感情を寄せてもいた。

だがアルトリウスはベルベットを裏切った。

ベルベットの目の前でライフイセツトを殺し、彼女を監獄島タイタニアに三年もの長い年月そこに幽閉した。

許せるはずもない。

―必ず殺す。例え何を犠牲にしようとも

ベルベットは暗闇の中で膨れ上がらせてきた思いを込めてアルトリウスに刃を向けた。

「業火刃！」

「緋閃！」

刀身に炎を走らせベルベットとロクロウはアルトリウスを両側から挟み込むように攻める。

一秒も変わらず迫る二種の刃をアルトリウスは眉をピクリともせず、彼は真後ろに跳んだかと思いきや床に足を付けるより前に長剣を振るう。

横風ぎの軌道を描いて振るわれたそれは接近していたベルベットとロクロウを一度に切りつけ、二人は攻撃を受けた拍子に転倒してしまふ。

「ベルベット！」

「援護するぞライフイセツト！」

無防備になった二人に追撃を加えまいと、ライフィセットとアイゼンが光と風の属性による聖隷術をアルトリウスに放つ。

アルトリウスはそれすらも剣ではたき落としてみせ、聖隷術による攻撃も失敗に終わる。

「これで終わりじゃない！」

「同時に撃てマギルウ！」

「ええい仕方ない。しっかり儂に合わせい！」

ベルベツトは立ち上がり再びアルトリウスに突進する。

その後方からガイアの威力強化の光弾とマギルウの水弾が発射され、今度はやや異なる方向からの三つの攻撃がアルトリウスを襲う。

「無駄なことを」

そう呟いたアルトリウスはまずベルベツトの突撃を長剣で受け止めると、動きが止まった一瞬の隙を付いて彼女の腕を掴み投げ飛ばす。

「な!?!うああ!!」

ベルベツトを飛ばした方向にはガイアの光弾が向かって来ており彼女は背中にそれを受けてしまう。

そして残りの水弾を弾くとアルトリウスは一行の内の一に目を留める。

(あのフードの男、あの男からはほんの微かだが高い霊力を感じる…だが聖隷ではない…)

奇抜な身なりの者が多い中で一際目立って映えるフードを被った者。

体格と声からしておそらく男だろうが、顔はフードに隠されていてわからない。

(あの者が宿しているというのか…)

「どこを見ている!」

自分ではない誰かに目を向けているアルトリウスにライフィセットの治癒を受けたベルベツトは、剣を突き出す。

「まだ来るか…そろそろ終わりにする」

—来る!

直感が働いたベルベツトは咄嗟に攻撃を中断し、守りを固める。

無駄に足掻くベルベツトにうんざりした様子もなくアルトリウスは刀身に冷徹な輝きを映し、剣を振りかざす。

「一太刀とは言わん。全身に死の慟哭を刻め。漸光狼影陣!」

「ああああっ!」

人間離れた速度でベルベツトは全身を四方八方から切り刻まれ、地べたを転がり回る。

元よりボロボロだった服に赤い血が染み付き、アルトリウスの力量の高さが伺えた。

「ベルベツト!」

「まだよ…まだ…回復…しなさい」

慌てて駆け寄り回復術をかけるライフィセットにベルベツトは返答にならない言葉を寄越し、尚も立ち上がろうとする。

ロクロウとガイアはそんな彼女の前に踏み出て、アルトリウスの攻撃を届けまいと立ち塞がった。

「もうよせ、無意味な行為だ」

「黙れ！」

「おいベルベット！」

「馬鹿、よせ！」

ガイアとロクロウを押し退けてベルベットはアルトリウスに肉迫する。

声を荒げて留まらせようとするガイアの叫びもむなしく、ベルベットはアルトリウスの間合いに踏み込んでしまう。

「ああああああああ!!」

猛獣にも似た雄叫びをあげるベルベット。

しかしベルベットが剣を突き刺すよりも早くアルトリウスの冷たい長剣は彼女の体を貫いていた。

「があ、あっ…」

脇腹を貫く長剣から血が滴り落ちるのを見てライフィセットとガイアは頭に絶望的な予想が浮かんだ。

どうにもならないと諦めかけた思考に陥ってしまいながらもライフィセットは、ベルベットの命令通り彼女に治癒術をかける。

「戦訓その四」

「―ッ!？」

だがベルベットはそんな二人の予想を裏切り、長剣が腹に刺さったままブレードを振りかざす。

「勝利を確信しても油断するな！」

まさに自らの身を削つての攻撃。  
決まれば確実にアルトリウスに重傷を負わせられる。

「ぐう……」

そして確かにベルベットのブレードはアルトリウスの体に食い込み、彼の体から血飛沫が舞い上がった。

手応えを感じたベルベットの全身に残る痛みで顔を歪ませつつ、片膝を付くアルトリウスを見下す。

「これで終わりよ」

「勝利を確信しても油断するな……か。私の教えたことをよく守ったようだな……だが、お前達を取りこぼすわけにはいかない。戦訓どおり全力で相対そう」

アルトリウスが身体をふらつかせて立ち上がると、それを待っていたかのように彼の背後にある祭壇の紋様が白き輝きを放つ。

清らかな輝きは瞬く間にアルトリウスを包み、傷を即座に癒す。

「一瞬で回復しやがった！」

「この力……まさか本物！」

ロクロウとアイゼンが驚きの言葉を口にし、ガイアも音にせずとも彼らに同意する。

「ッ、まずい！」

紋様から溢れでる強力な力を前に、これから起こる最悪の事態を直感的に予期したガイアは躊躇なく懐に潜めたエスプレンダーに手を伸ばす。

「聖主カノヌシと共に」

アルトリウスの言葉に反応して紋様から生じた衝撃破がベルベツト達全員を襲い、彼らは紙くずのように軽々とまとめて飛ばされる。

「そりゃ反則じゃろ…」

「まだ…まだよ」

マギルウが悪態をつく傍らでベルベツトは傷付いた身体に鞭を打って起き上がらんと尽力する。

その様子を見かねたライファイセットは彼女に思い切って自分の意見をぶつけた。

「もう無理だよ！逃げないと皆死んじゃう！ベルベツトも！」

「逃がしませんよ今度は」

(この声、まさか！)

ライファイセットの言葉を否定する声にガイアは覚えがあった。

声の出所とされる入り口を振り返ると彼にとって馴染みのある顔触れが退路を塞ぐように並んでいる。

一等対魔士テレサ・リナレス、その彼女の義弟オスカー・ドラゴニア、エレノア・ヒューム。

そして長き髭を蓄えた老人の特等対魔士メルキオル。

「聖寮のトップクラスの戦力が集結か…！」

「熱烈な歓迎じゃの〜ちつとも嬉しくないが」

しかめ面をするガイアに同調するようにマギルウが呑気にぼやく。

一等対魔士が三人、特等対魔士が二人

たかだか業魔二匹と聖隷二体、人間二人の集まりを刈るのにこれだけの戦力を投入するとは聖寮も見る目がない。

そう思ったガイアだがそれを言葉にする度胸も余裕もなかった。

彼らの厄介さをよく熟知しているが故に

「申し訳ありません。アルトリウス様シグレ様が警護していると思いき油断しました」

「シグレなら修行に出た。そもそも私を一番切りたがっているのはあいつだ」

「シグレだとー！」

「まったく勝手な奴だ。アイフリードの時と同じだな」

「アイフリード……やはりこのジジイが」

アルトリウスに送られた言葉に含まれた人名にロクロウとアイゼンが似たり寄つたりの反応を露にする。

ガイアもメルキオルの発した名前に気を引かれている内の一人だが、彼の頭はあくまでも現状を打開するための策を考案していた。

（アイフリードの行方も気になるがまずはこの状況を切り抜けなければならぬ……逃げるしか手はないがそれでもできるかどうか）

戦力差が圧倒的にある以上ガイア達は撤退するしかない。

特等と一等、加えて聖主の力が相手ではどうなるか馬鹿でもわかる。

「ロクロウ……ベルベットを頼めるか。こうなつては勝ち目はない。逃げるぞ」

「それには同感だが、逃げ切れるのか？」

「前門の導師に後門の対魔士……完全に囲まれておる。まさにベルベツト<sup>野</sup>包圍網<sup>獣</sup>じゃ。これでは逃げるのも危ういぞ」

ロクロウとマギルウは自分達を取り巻く状況を言葉にする。

「メルキオルさえどうにかしてくれば残りの三人は俺一人でもどうにかなる…かもしれない」

「かも、とはまたアテにしてよいのか困る回答じやな。簡単に言ってくれるがメルキオルは特等対魔士、どうにかするのさえ至難の業というもの…」

マギルウの言葉は正論だ。

しかしそんな正論をすんなり聞き入れるなどできはしない。

何もせず殺されるのを待つか、指先が動かなくなるその時まで抵抗し一筋の光明を見出だすか。

自分達に待ち受ける未来は二つしかない。

「戸惑うのはわかる。だがもう時間も手段もない」

「わかった。メルキオルはオレが引き受ける、ベルベットはアイゼンとライフィセットに任せよう」

「悪い…貧乏クジ引かせるようなこと頼んで。後でベンウィックに言つてバンエルティアに積んでる上質の心水をくれてやる」

「応、なら尚更生き延びないと。それにベルベットに恩を返せないままここで死なせるわけにはいかないしな」

ロクロウの快諾をもらったガイアはちらりとアイゼンを向き、彼の反応を伺う。

常日頃から変わらぬ強面の顔をしたままアイゼンは無言で頷き、了承の意を伝えた。

続けてマギルウに目で訴えると彼女もガイアの策戦に乗った。

「ジーツとしてもドーにもならんか…えーい！こうなればなるだけどうにかなってしまえい！望み通り猫の手ならぬ魔女の手も存分に



使えい！その代わり成功した暁には儂にも褒美を寄越してもらおうぞ」  
「褒美？どんな？」

「儂の好物のキャベツの炒めものをたんまり用意して貰おう。そうでもせねば割に合わん」

「魔女ならそのくらい自分でしろ」

「なんと無償で協力しろとは、魔女使いの荒い奴め。これは後でみい  
くっちり魔女の常識を教え込まねばならぬのう」

「お互い生きてたらな」

軽口を叩いたガイアは青の弾丸を頭上に放つ。

舞い上がった光は多方向にバラけアルトリウス達に落ちて行く。

急速に接近するそれらをアルトリウスは一太刀の元に振り払い、メルキオルも術による防壁でダメージを免れる。

「おおおっ！」

そこにロクロウがメルキオルに勝負を仕掛け小太刀を突き立てる。

二刀が防壁に食い込むもメルキオルの皮膚に達するには至らず、当然ダメージは通らない。

「業魔風情が…聖寮に牙を向くなどと。愚かな」

「愚かで構わん。それもひっくるめてオレなんぞな」

テレサやオスカーも回避行動を取り難なくかわし、初見ではないエレノアが真っ先に体勢を持ち直し、直行してくるガイアへと反撃に転じた。

「そう何度も同じ手が通用すると思いませんか！」

槍の先端を向け繰り出されたエレノアの刺突をガイアは速度を

保ったまま身を翻し、すれすれのところでやり過ぐす。

エレノアの真横をすり抜けたガイアは彼女に攻撃を加えることはなく、紫の弾を装填しながらその後ろにいたテレサに狙いを定める。自らに迫る敵にテレサは聖隷一号を呼び、聖隷術の発動を命じた。

「対魔士に普通の人間が戦いを挑もうなど身の程を知りなさい」  
「つぐー！」

一号の放った火炎が目前に到達しガイアはそれを左腕を差し出して、顔面への直撃を避ける。

左腕の皮膚が焼け焦げ苦痛に顔を歪ませるガイアであるが、唇を噛み締めながら構わずテレサに接近した。

そして照準を合わせた紫の弾を一号に撃つ。鞭のように形状を変化させた光が一号の腕を絡めとる。

手応えを感じたガイアは銃ごと右手を真横に振り、強引に一号をテレサから引き剥がす。

錫杖を手にテレサは照射されたガイアの光弾を応対し、彼の攻撃を無に帰す。

「聖隷を剥がせば勝てるでも？生憎聖隷どうぐがなくとも貴方を倒すことなど造作もないことです」

「勝つつもりは毛頭ない」

そう言い返すガイアにテレサは何の感情を抱かず、杖を振りかざす。

垂直に下ろされたそれをガイアは横にステップを踏んで回避し、拳が届く間合いにテレサを捉える。

「姉上ー！」

そこにオスカーが割って入りテレサを援護するべく剣を頭上にか

ざし、ガイアに迫る。

しかし彼の参入を予想していたガイアは振り向き際に威力強化の赤い光弾をオスカーに撃ち込み、彼の体は元来た側へと押し返されてしまう。

「ぐああ！」

「オスカー！この、よくもオスカーを！」

義弟を傷つけられ激昂したテレサの攻撃をガイアは一切の反撃を停止し、受け止める。

冷静さを欠いたせいで攻撃は単調となりよく相手の動きを見れば無傷で済みますのはガイアには容易いことだった。

「テレサ！」

その様を見かねたエレノアは加勢に入ろうとする。

だが

「おっと、あやつのところには行かせんぞ」

駆けつけようと踏み出したエレノアの足元で水が弾け、彼女の足止めをした。

水弾を唱えた張本人のマガルウは不敵な笑みを浮かべエレノアに告げる。

「余計な邪魔を！何故そこまで業魔に肩入れするのです！」

「なあに単なる暇潰しじゃよ」

「ふざけるな！」

暇潰しというマガルウのいい加減な言葉にエレノアはこれまで蓄積した鬱憤を爆発させ語気をあらげる。

マギルウの魔術に一騎討ちを仕掛けるエレノアの目線の先では、ガイアがテレサの錫杖を銃身で防いでいた。

「うっとおしい…対魔士でもないのに！」

羽虫のようにテレサの周囲を付かず離れずの間隔で動き回り、ひたすら回避に専念するガイア。

対魔士ではないのに、何度攻撃を加えようとも回避や銃身で直撃を避け、何度も接近する彼にテレサは苛立ちを覚えていた。

しかしそれがかえって相手に攻撃を読まれやすくしてしまうのに、テレサは気付かない。

(思った通り平静さを欠いたな)

目の前でオスカーを傷付けたことで平常心を欠いたテレサの術をガイアは半身になつてかわす。

テレサは霊応力にも判断力にも優れた対魔士。まともにぶつかれば単騎では勝機は薄い。ましてやオスカーも加勢に入るとなれば確実にガイアは数分と持たず破れ去る。

高度な連携を可能とする固く結ばれた姉弟の絆は厄介だが、それがガイアが生き延びかつ時間を稼ぐポイントだった。

テレサはオスカーを溺愛している。その彼が傷つけられたとなれば彼女はかなりの確率でガイアを目の敵にし、手をガイアに集中させる。

それはオスカーも同様だ。公私共に慕う姉が苦戦しているとなれば、そう簡単にマギルウやロクロウの方に行くわけにもいかないだろう。

その読みはうまい具合に的中しオスカーの目はガイアに釘付けにとなり、一号に関しては命令がない上に無闇に術を放って主君に当ててはまずいと手が出せずにいた。

（メルキオルはロクロウが、ノアはマギルウが抑えてくれてる。このまま時間を稼げれば―）

そんな考えが過ったまさにその時背後から忍び寄る存在にガイアは気付かなかった。

一方、ベルベットは言うことを聞かない体を強引に叩き起こし、アルトリウスの命を己の剣で絶とうとする。

捨て身の特攻のおかげでライフィセットの回復術による治癒も追いつかず、ベルベットの全身には途方もない激痛が残っているはずだ。

「うっ…くううっ…」

「撤退するぞ」

「離せ、ライフィセットの仇を討つ！」

腕を掴むアイゼンの手を振りほどいてベルベットはアルトリウスを睨み付ける。

アルトリウス以外の者など眼中にないような彼女にアイゼンは憤ることなく、冷ややかに己の意思を貫き通す。

「共倒れには付き合わん」

「あんたの協力なんか頼んでない！」

「ぐわあああああ！」

あわや仲間同士で対立しかねない一触即発の雰囲気の中、誰かの苦し気な叫び声がベルベットとアイゼンの耳にこだました。

「ガイア！ちい！」

そちらに首を動かすとテレサとオスカーを抑えていたガイアが、後ろから伸びる赤紫の光に体の自由を奪われている。

両の掌を不気味な赤紫に輝かせ暗がりから姿を現したのは眼鏡をかけ、知性的な雰囲気な白髪を漂わせる白髪の男。彼はガイアを拘束したまま戦いを静観するアルトリウスに言葉をかけた。

「聖主への祈りを捧げる場所にしてはずいぶん騒がしいなアルトリウス：おまけに業魔まで入り込んでいるとは」

「ガッツ：丁度いいところに来た。そのままそれを拘束している。絶対に殺すな」

「新手か！」

「導師を呼び捨てにする程の実力の持ち主か：最悪にも程があるぞ」

対魔士の装いをした者の登場にロクロウはメルキオルの魔術を小太刀で防ぎ、焦燥感を露にする。

マギルウもまた口調こそおちやらけてはいるがやや表情がひきつっている。

そんな二人を見向きもせずテレサはガッツに身動きを封じられたガイアへ一歩足取りを進めた。

「離せ、がっ！」

憎しみを込めた眼差しを注ぎ、テレサは錫杖を振り上げもがくガイアの頭を殴り付ける。

行動を制限された彼に身を守る勢いを殺せず、頭部に強い振動と鈍痛が走り、フードに隠れた額から血がぼたぼたと白染めの床に落ちた。

「すぐにでもとどめを刺したいところですがお前は後回しです。先にオスカーの右目を奪ったあの女業魔を始末します」

そう面と向かってガイアに告げたテレサは彼に背を向けてベルベットとの距離を詰める。

「やらせるか！」

アイゼンが腰を落とし身構えるが

「うおわ！」

「ぐうう！」

「アイゼン！ロクロウ！」

そこにメルキオルの光球により飛ばされたロクロウが飛んで来て、アイゼンは彼もろとも壁に叩き付けられてしまう。

ベルベットを看取っていたライファイセットが不安そうな声色で彼らの名を呼ぶ。

そんなライファイセットを見下ろしたテレサは無慈悲な目付きを送り、命令を下す。

「業魔と馴れ合うとは二号。お前には罰を与えましょう。命令です、その業魔を殺してお前も命を絶ちなさい」

「…嫌だ」

与えられた命令にライファイセットは拒絶の意を示し抗うも、未だに残された契約がそれを許さない。

「契約を忘れたか！これはお前の主の命令です！」

「ああああああ!!」

テレサの放ったその言葉がライファイセットの意思を縛り付ける力を更に強める。

頭の中を直接かき混ぜられているような言葉にし難い衝撃に苦しみながらも、ライファイセットはまだ抵抗を続けた。

「やめろおー！があああああー！」

「貴様は黙って見ているがいい。貴様がしでかした事の愚かさを」

悲鳴を上げるライファイセットを見かねてガイアは叫ぶが、ガッツに自らを戒める力を強められ制止の要求はたちまち絶叫へと変わる。

「命令なんて、嫌だ…僕は…ベルベットが死ぬなんて嫌だ！」

ガイアの叫びすらも耳に入らぬ程に苦しむライファイセットであったが、テレサの命令に抵抗する内に彼の矮小な体が光を帯び始めた。

「きやあああああー！」

「姉上！」

輝きと共にライファイセットより生じた風圧がテレサを弾き飛ばす。

「あれに飛び込め！ガイア！ロクロウ！」

「おおっ!?!」

そしてその風圧が止むと空間に裂け目が発生し、それを見たアイゼンがガイアを拘束するガッツに風の槍を飛ばし、全員に叫ぶ。

「応ー！」

「こら、儂を忘れるな〜！」

ベルベットを脇に背負ったアイゼンとライファイセットを担いだロクロウに続いて、マギルウとガイアも空間の亀裂に走り込む。

「逃がしはしません！」



エレノアは逃亡を謀るベルベット達が裂け目に完全に入る前に叩くため、槍を片手に走り出す。

だが裂け目は徐々に閉じていき縮小すると、近づいたエレノアを吸い込む。

「ぎ、きやあああああ！」

エレノアを呑み込んだ裂け目はそれを機に消失し、聖主の御座には静けさが戻った。

「カノヌシの力と地脈の反応とはな。珍しいものを見た」

エレノアが裂け目に吸い込まれた後、そこに黒き球体を送り込んだメルキオルは己の髭を触ってそう呟く。

その発言を聞いたアルトリウスは一人、納得したように聖主の紋章を見上げていた。

「そういうことか」

「……………」

闇の中に眠っていた意識が覚醒しガイアは目を開ける。

「……は…あの時の」

怠さを感じつつ体を起こし、周囲へ視線を動かすと彼の視界には青

と緑が一面に広がっていた。

「おう無事だったか」

「やっと思つかったぞ」

ガイアが眼前の光景に目を奪われていると、ロクロウとマギルウがそれぞれ真逆の方角から歩いて来た。

「ロクロウとマギルウか。アイゼンやベルベットは？一緒じゃないのか？」

「わからん。お主らに会う前にここをさ迷っていたが誰にも遭遇せんかった」

「オレもだ。どこだかわからん場所を延々と歩き回ってる。ここはどこなんだ？」

「ここは――」

「おそろくここは地脈じゃ」

ガイアの声を遮ってマギルウがロクロウの質問に答えた。

「地脈？」

マギルウが発した言葉にロクロウは首を傾げ聞き返し、彼女は右の人差し指を立てて教鞭を振るう先生のように語る。

「大地の中を走る自然エネルギーが流れる空間のことじゃよ。地脈は世界中に広がっておるのじやが普通は見ることも触れることもできません。ましてや入ることなど持つての他」

「入ることができない空間？なら何故オレ達はその地脈にいるんだ？」

「さくぱりわからん。ここが地脈であることは間違いないが地上に戻る方法は儂も知らん」

「入り方がわからなければ出方もわからない、か」

—絶望的な状況は変わらないな

ガイアはそうぼやくと、努めて思考を冷静に働かせクロクロウとマジルウを見やる。

「立ち往生してもしようがない。ひとまず出口を探そう」

「だな。入ってこれたなら出口もあるはずだ」

「あればよいがの〜」

出口を探すべく三人が足並みを揃えて歩き出してかなりの時間が経った。

どれだけ歩を進めようとも代わり映えのしない風景にほとほと嫌気が差していると

『アアアア』

「この声は…」

何かの鳴き声が聞こえ三人は一斉に後ろへと体を反転させる。

すると先程まで何もいなかったはずの場所には、九つの首を持ちし龍がいた。

その龍をガイアは知っていた。忘れもしない。

ガイアを取り巻く全てが変わったあの日彼に光を授けたあの龍だ。

## 第13話 地脈に住まいし龍

音もなく眼前に姿を現した九つ首の龍にガイアとロクロウそれにマギルウは一瞬言葉を失う。

「あれは…」

「九つもの首を生やしたドラゴンとはこりやたまげたの〜」

「でかい龍だな…斬り甲斐がありそうなやつだ」

『アアアア』

ロクロウが実にらしい率直な感想を告げると龍は鎌首をもたげ、一声澄みきった叫びをあげる。

すると青と白が混ざったような輝かしい光が三人を包み、彼らの傷を瞬時に癒す。

ロクロウがメルキオルから受けた傷も、ガイアがテレサに錫杖で殴打され額から流れたままであった出血も、全て治されていた。

「おお、体が楽になったぞ」

三人が見ている前で九つ首の龍はもう一度、咆哮を唸ると彼らの前に青白い空間の歪みが生じる。

歪みを生み出した九つ首の龍は半透明になり、何処かへと消えていく。

「オレ達がここに来たのと同じやつか？これは、この中に入れということか？」

「わざわざ農らの目の前で作り出したということはそういうことじゃろう」

「どこに出るんだろうな？」

ロクロウの疑問はもつともだ。

万が一歪みの出口が危険な場所であるなら現状の戦力でどうになるかどうか危うい。アイゼンやベルベット達と合流が叶うまでは、選択は慎重に選ばなければならぬ。

「まともな場所であることを祈るが少なくとも敵はいないだろう。とにかく実際に通ってみないことには何もわからない」

前に一度同じ経験をしたガイアは安全面だけは保証できるだろうと判断してから、そう言った。

「だよな。よし試しにこの中に入ってみようぜ、なあマガルウ！」

「ちよつと待てい！何故儂なんじゃ!？」

「魔女なら何かあっても大抵どうにかなるだろう」

「儂で保険をかけるつもりかいな!？」

「師匠なら大丈夫だろう。さあお早く」

「都合の良い時だけ弟子ぶるんでないわい！」

「だったら多数決で決めるか？それなら平等だし問題ないだろ」

「問題おありじゃ！どのみち儂が負けるのが目に見えてるではないか！」

ロクロウとガイアに揃って生け贄扱いされるマガルウ。

彼女は真っ向から反論するも徒党を組んだロクロウとガイアには勝てず、やがて腹を括ったマガルウは神妙な面持ちで歪みの前に立つ。

「はあ…あの中に入って確かめればいいんじゃないやろ。魔女狩りのような真似をしておつてからに、これでもしも何かあったら主らの血族を末代まで呪ってやるわい…」

愚痴を溢したマガルウはビエンフーを呼び出すと彼の頭をがっしり掴み上げ

「ではお望み通り確かめてやるわい。ビエンフーがの〜♪」

「ビエエーン！姐さんそれはしないでフよく！ソーバア〜ツド〜！」

マギルウに片手で歪みに投げ込まれたビエンフーはそんな哀れな叫びをあげて、三人の視界から姿を消す。

閉口したまま時が過ぎ、沈黙した空気の中マギルウが呟く。

「…ふむ、どうやら平気みたいじゃのう」

「そうか、なら行こうぜ」

ビエンフーに対する罪悪感にはべもなくマギルウとロクロウは淡々と言葉を並べる。

一方でガイアはビエンフーに同情の気持ちはあれど謝罪の気持ちはなく、マギルウの行為を責め立てることはしなかった。

ロクロウとマギルウが躊躇いなく歪みの中に飛び込むとガイアは九つ首の龍がいた場所に視線を留め、立ち止まる。

既にいなくなってしまう存在に思うところがあるガイアであったが、暫し止めていた足を動かさそうとする。

すると狙いすましたかのようにガイアの足元より光球が浮き出て、彼の視界を包み込んだ。

戸惑っている一瞬の間に目にしていた景色と色彩が一変し、周囲は白と青の二色に映え変わる。

穏やかな波風を立てる海とあらゆる形をした貝殻が落ちる砂浜にガイアはいた。

「砂浜と…海？…今度は何を見せるつもりなんだ」

光の球が実際に遠く離れた場所の事象を映し出すことは身をもつ

て経験済みだ。

九つ首の龍はまた自分に関連する何かを見せるのだろう。

ガイアが警戒し身構えていると、足元を巨大な影が覆い尽くしているのに気付く。

「あれは……！」

『オオイ！』

『キャアアアアア！』

ガイアは目を見張った。

彼の視線の先には砂浜とは正反対の密林で戦う二つの存在がいる。

三日月状の二本角と長き尾を持つ黄色の怪獣と青を基調とした体躯をした巨人。

それらが大地を震撼させて相手の身を削り合っていた。

「青い、巨人……」

驚きのあまりガイアがそう呟く最中も二者の戦いは続行中だ。

怪獣エレキングが剥き出しにした歯より、角と同じ三日月状の放電を発射するが青い巨人は右手を翳してそれを易々と受け止める。

右手から僅かに煙が立つも巨人はまるで痒くもないと言うように、それどころかもっと撃ってこいと言わんばかりに、その右手を振って挑発した。

その煽りを真に受けたのかそれとも別に勘に触る何かしらがあつたのかエレキングは尻尾を伸ばし、巨人の体の自由を奪おうとする。

『デエヤアアア！』

腕に巻き付き電流を流されても微動だにせず巨人は尻尾を掴み上げ、エレキングを海岸の方角へと投げ飛ばす。

「ッ!?」

自分へと飛来する巨影にガイアは動じることできず、無駄だとわかっていながら、両腕で己の頭を庇うように差し出した。

だがエレキングの巨体はガイアのちっぽけな体をすり抜けて、遙か後方の海面に落ちた。

「すり抜けた? やっぱりアイゼンが言ってた通り…これは過去の記憶、僕が今見ているのは過去の出来事を具現化したものなんだ」

物体に触れなかった自分の体に瞳を丸くしながらもガイアはアイゼンの言葉を思い出し、一人納得した。

『ハアア…』

その間にも巨人は額の前で両の拳を交差する。

尖った額より生じた青い光の筋と右腕を天空に伸ばし、必殺の一撃に備える。

水飛沫を巻き上げてエレキングはダメージを負った肉体を引き摺りながらも起き上がった。

だがもう遅い。

『デエア!』

左腕は真っ直ぐに右腕は腰の位置で曲げて前屈みになった巨人の頭の先端部より青き光条がエレキングに届き、刃のごとくその全身を切り刻む。

絶命間際に断末魔の叫びが澄みきった青空の下に響くことはなく、エレキングは爆発した。

「すごい、なんて強きなんだ…」



青い巨人の戦いぶりを目撃したガイアが思わずこぼした感想がそれだった。

無駄のない洗練された立ち回り、余力を残しつつも敵の攻撃にも動じぬ強さ。

どれをとつても自分とは比べ物にならないぐらいに別格だ。

「……」

エレキングを打ち倒した巨人は戦闘終了を確かめると体と同じ色の輝きを放ち、青い閃光は収束していく。

光の集中点に青い巨人の変身者がいるはずと考えたガイアは即刻砂を蹴ってその地点を目指した。

木々を合間を縫って走るガイアの視線の奥に人影が映り込む。

「あれがああ巨人に変身した人なのか。僕と同じ光を与えられた」

ガイアが明確にその風貌を拝むことはなかった。

声をかける寸前、森の木々に歪が生じる。

風が止み、羽を翻した鳥の動きが静止し、世界が色をなくしていく。

「これは、一体……!？」

理解の範疇を越えた現象に狼狽するガイア。

彼の戸惑いを見捨てて色をなくした世界は脆いガラスのように派手な音を立てて砕け散った。

「……!？」

意識が覚醒した時ガイアの目前は苔の生い茂った石壁が縦横に広がっていた。

どこに目を走らせても海辺も森もあの人影もない。  
代わりにいるのはロクロウとマギルウといった見知った顔だけ。

（あれがアイゼンが言っていた大地の記憶。アイゼンは地上で起きた出来事を映し絵のように映し出すって言ってた…なら僕が見ていたのは世界のどこかにいる青い巨人の戦いの記憶？）

ガイアが脳内で考えを巡らせる傍らでロクロウはマギルウに訊ねた。

「どうやら無事に戻れたようだな。あの龍は一体なんだったんだ？」

「あの風体からするとおそらく聖主ミズノエノリユウじやろ」

マギルウが発したその言葉にガイアは現実に戻され二人の会話に加わる。

「聖主ってアルトリウスが言っていたカノヌシみたいな奴か」

「ああ。だが聖主は地水火風の四つのはずだが」

「その通り。お主らの常識では聖主は四つとされておる。じゃが世界を構築する聖主は実は五つなのじゃよ。火を司るムスヒ、風を司るハヤヒノ、地を司るウマシア、水を司るアメノチ、そして光を司るミズノエノリユウ。まあ最もミズノエノリユウはその存在を記した文献が残されていないこともあり、いるのかどうかもわからぬひじよくに曖昧な存在じゃがの」

マギルウは己が知る莫大な知識の中から適切に二人の問いかけに対する答えを選び取り、語りかける。

「いやはやよもやこの目で見る日が来ようとは、本当にお主らとおると退屈せんですむわい」

「四聖主が実は五聖主だったということか。いやカノヌシも含めたら数は六、聖主が六つもいたとは…」

衝撃的な事実にはガイアがフードに隠された唇で驚きの言葉を吐く。著名な学者の書物にすら記されていない世界の真実に好奇心が沸き立つ一方で別に疑念を抱いてもいた。

あの龍が聖主だとするならば尚更何故自分にあの光を授けたのか自然を司る四聖主と同等な存在が何故人間の自分に強大な力を秘めた光を与えたのか。

知れば知る程謎が深まるばかりだ。

しかし考えてばかりもいられないとガイアは考え事を一時中断し、何の偶然かマギルウが示し会わせたかのように話題を切り替える。

「しかしベルベットの復讐見物もこれまでじゃな。つまらんオチじゃったわ。ま、どーでもいいがの」

「まだ死んだとは限らん」

「生きておつても終いじゃよ。あれだけの力量差を見せられて折れんはずがない…100ガルド賭けてもいいぞ?」

「その賭け、乗った」

ロクロウがニヒルな笑みを浮かべてそう宣言すると次にガイアに声をかけた。

「ガイアも賭けるか? オレは当然ベルベットが折れない方に100ガルドだが」

「そうだな。じゃあ俺もそっちに100ガルド」

「待て待て待てーい! またこの二、一の構図になるんかい!」

数刻前にも見たようなデジャヴにマギルウが猛烈に抗議の異を唱える。

「賭けなんだから好きなた方に賭けるのは当然だろう。なあ？」

「そりゃあそうだ。負けて損したがる奴がいるか？」

「お主はこつち側じゃろうにく儂の一番弟子を名乗るのなら損得なぞ考えず黙って儂の味方をせんか！」

「魔女の弟子にはなつても魔女の操り人形になるのは御免だ」

「なんと可愛げのない、生意気な弟子を持つて儂は臉から滝のような涙が吹き出る思いじゃ〜」

大袈裟に落胆の心情をアピールするマギルウ。

そのわざとらしい仕草もあつてか不思議と場の空気が少しばかり和んだような気がする。

そんな中突如として宙に光が出現し、目を覆わんばかりに強烈な閃光が炸裂した。

視界が回復した時ガイアとマギルウの目に飛び込んできたのは、ベルベットとアイゼンの姿だった。

「ライフイセット!?!あの女対魔士は!?!」

ベルベットはライフイセットの姿を求めて彼の名前を叫ぶも、期待していた姿はなかった。

付近にはいないのだとわかり落ち着きを取り戻したベルベットがふと足元の感触に違和感を覚え、見下ろす。

ベルベットの真下には背中を踏みつけられ、不満そうに彼女を見上げるロクロウがいた。

それでようやく自分がどういう状態にあるのか理解した。

「何があつた? アイゼン」

「ああ」

アイゼンは自分の目で見、耳で聞いたことを感じたことそのままに口にした。

ベルベットとアイゼンも聖主の御座から地脈に飛ばされており、同じく地脈にいたライフィセットが力を使い果たしたせいで業魔化の危機に苦しんでいたこと。

彼を救うために対魔士であるエレノアがライフィセットの器になり事なきを得たこと。

「そうか例の女対魔士がライフィセットの器になあ。それでそいつはどこへ行ったんだ？」

「ロクロウ達がここにいたということはあの女対魔士も近くにいるはずだ」

「すぐに探そう」

アイゼンの言葉を聞くなりガイアが間髪入れずにそう言う。

身を案じているのは確かだろうがそれがライフィセットに向けられたものなのか別の誰かに向けられたものなのか、あるいはその両方なのか。

少々気になったマギルウであったがどうでもいいと頭の片隅に放り投げて、興味の対象をベルベットに定める。

「もうどうでもよかろう」

「助けるって決めたのよ。それに—あの子の力は戦力になる」

ベルベットは諦めてはいなかった。

圧倒的な力の差を見せつけられたという彼女はまだ戦う気ではないのだ。

「オレ達の勝ちだな」

「そういうことだ。さっきの賭け忘れるなよ」

「へなぷしゆく儂の20ガルド」

「さ、いくわよ」

ロクロウとガイアの嫌味を受けて落ち込むマギルウを無視してベルベットは我先に苔の生えた石造りの階段を上がり、皆もその背中を追う形で場を後にする。

階段を昇り外へと向かう道中、壁や柱の特徴を調べたアイゼンによつてここは地の聖主ウマシアを祀るイボルグ遺跡であると発覚した。

ひとまずは自分達のいる場所がどこか判明しただけでも安心材料となり、一行は遺跡に迷い込んだとされる野生の業魔を片付けつつエレノアとライファイセットを搜索。

外に出ると星空の下、草原の上に佇むエレノアを発見する。

「こんなところにいたのね。てつきり逃げたかと思った」

「姿を消したことは謝罪します覚えずして思わぬところに出てしまいました」

「ライファイセットは？」

「私の中に、容態は落ち着いたようです」

臆せずベルベットと向き合うエレノア。

彼女も中にいるライファイセットも心身共に傷ついてはいないようでガイアはひとまず安堵した

しかし

「エレノア…だっけ？あたしが勝ったら器として死ぬまで従ってもらわよ」

「承知しました。代わりにあなたが負けた時は命をもらいます」

「待て、そんなことしてる場合じゃー」

戦り合う気満々の会話にガイアは止めに入ろうとするも彼の肩をアイゼンが掴む。

肩に手を置かれそちらを振り向くとアイゼンは首を横に振って、仏頂面のままガイアを見据える。

その視線が手を出すなということと心配するなということ。

両面の意味が込められたものだとは判断したガイアはやむ無しと頷き、それに納得したアイゼンは手を納める。

「いつでもきなさい」

「では参ります」

先に仕掛けたのはエレノア。

長槍の穂先をベルベットに定め刺突を繰り出す。

直線的な槍をベルベットは他愛なくかわし手甲から抜いたブレードで反撃を行う。

しかし初撃を外したところに反撃が来ると端から予測していたエレノアは降り下ろされた刀身に槍の体部分を当てて、身を守る。

そして両端にある槍を支えている腕を使ってベルベットのブレードを自身の右半身の側へと反らす。

バランスが崩れ脇ががら空きになったのを逃さずエレノアは身を翻して追撃に出た。

だがベルベットはあえて流れに逆らわず草原へ前のめりに倒れ込む。

横一文字に振るわれた槍に多少黒髪が犠牲になったものの、相手の思惑道りの結末にならなかつたことに落ち着く間もなくベルベットは体勢を起こして二の次に移る。

跳躍して右脚を重力に任せて打ち下ろしエレノアの槍にヒットする。

槍の体を伝わって起きた痺れにエレノアが顔をしかめたところをベルベットはまた強襲に出る。

「水蛇葬！」

スライディングしながら水を纏いし右脚がエレノアの足元を風ぐ。上方から次いで下方からの攻撃だがエレノアは瞬時に対応し、後方に跳んで避ける。

蹴りが失敗に終わってもベルベットはすぐさま次の手に打って出た。

エレノアが反撃の姿勢に移るより前に間合いを詰め、彼女に槍を叩き落とすと同時に剣先を突きつけた。

「勝負ありよ」

体勢を崩したエレノアには冷ややかに告げる。

――勝負あった

言葉通り一騎打ちを見物していたギャラリーもそう思っていた。

その矢先状況は変化した。

「勝利を確信しても油断するな！」

エレノアはその言葉と共にベルベットの刃を払いのけ、彼女の喉笛に槍の穂先を伸ばす。

数秒も持たずして形勢は塗り替えられたのだ。

思いも寄らぬ反撃をくらったベルベットは虚を突かれつつ、トドメを刺さないエレノアに問う。

「何故とめる？」

「あなたは器の私を殺せない。同じ条件で戦ったままです」

「勝ったら殺すんでしょう？」



「それはそれ、勝負は勝負です」

「面倒ね…」

呆れた溜め息がベルベットの口からこぼれる。

脱力感を露にするように肩の力を抜き、ブレードを下ろす。

その次の瞬間、素早く槍の柄を掴み引つ張ると同じ一動作でベルベットは自らの身を反らす。

予想していなかった動きにエレノアは反応できず、体ごと誘導され足を引っかけられ草花の上に倒れこむ。

「剣を抜いたら油断するな。非情の戦いは非情をもって制すべし、でしよ」

尻餅を着いたエレノアの喉元にブレードの切っ先を突き付けベルベットが勝利宣言をする。

「アルトリウス様の戦訓…」

敗北したエレノアは苦汗を飲まされたような顔をし戦う気をなくした。尻餅を付き刃を向けられたとなれば先のように不意を突く真似もできない。

ベルベットは刃先を収めエレノアの返事を待つ。

「約束は…守ります。あなたの命令に従う…」

「私が死ぬまで！」

「よせ！」

エレノアは自ら槍を首筋に添え不吉な予感的中しガイアは焦燥を露にし、止めに入ろうと駆け出す。

『駄目!』

刹那、エレノアの中で眠りについていたライファイセットが目覚め反射的に彼女の行為を諫める。

自害を謀ろうとしたエレノアの肉体の自由をライファイセットが奪い、彼女を強い干渉力が束縛した。

指先すらも微動だにせず、ありとあらゆる動きを強制的に封じられたエレノアは気を失う。

「聖隷が器に干渉するなん…て…」

彼女が草木に倒れ込むのと同じくしてライファイセットがエレノアの中から出て、ベルベットの前に姿を現した。

「ライファイセット!もう大丈夫なの?」

「うん」

ライファイセットの頷きにほっと一息ついたベルベット。

一方ガイアは彼女の横を通りすぎて横たわるエレノアの首元に触れ、脈を確かめる。

「眠ってるだけか」

「器になった反動が出たようだな」

「儂も覚えがある。高熱を出してしばらくは目を覚まさんじやろうて」

アイゼンとマギルウがエレノアの身に起きた症状を推察し、それぞれの見解を告げる。

「足手まといをどこだかわからん土地を進むのは危険すぎるな」

「こいつが回復するまで休もうぜ。道連れなんだろうライファイセット

の器なんだから」

そうね、とロクロウの言葉にベルベットは何秒か間を置いて返す。

「エレノア大丈夫だよね」

「ちよつと疲れて眠っただけだ。心配ないさ」

エレノアが自分を助けるために器になったことに負い目を感じるライフィセットを、安心させるようにガイアはそう言う。ガイアはエレノアをおぶさる。

彼女の横顔に目を向けたガイアはフードの奥で笑みを綻ばせた。

「懐かしいな」

「え?」

不意にガイアが漏らした呟きにライフィセットが反応する。

いつもとは感じの違うその言葉が気になったライフィセットが尋ねる間もなく、ガイアはエレノアを担いで遺跡に入ってしまった

---

—温かくて懐かしい。

小さい頃よく触れた感触に似ている。

ちよつとのんびり屋で間の抜けたところがあるけれど、温かくて優しく心地よさを与えてくれる彼の背中。

お互いにまだ幼い子どもと言える年頃だった頃は怪我をして歩けなくなったりすると、よくその背中におぶさっていた。

たいして腕力があるわけではないのに、無理して自分を背負ってくれる彼に不安よりも安心感を覚えていた。

でもそれは忘れられない思い出の一部。もう二度と温もりに触れることはない。

幼い時からずっと隣にいた彼はもうどこにもいない。

---

深い眠りから目を覚ましたエレノア。

倦怠感が思考を鈍らせるも状況確認に勤めるべく周囲の光景に目を配る。

ベルベットもライファイセットもロクロウもマギルウもアイゼンも皆眠りについていて。

彼らの姿を確認したエレノアは、眠りに落ちる前に何があったのかを鮮明に思い出す。

「…私は彼らに負けたのでしたね」

—なんて未熟な！

業魔に敗れその上看病までされた事実、エレノアは忸怩たる思いにならざるを得なかった。

(この罪を償うにはもう…)

エレノアは槍に力を込め腕に顔を沈めるベルベットを見下ろす。

眠っている今なら手にかけることは容易い。

だがそれでいいのだろうか。

器のことがあつたとはいえ自分は命を奪われずに介抱までされた。にも関わらず戦いの舞台に立つてすらいない相手を始末するのは、例え業魔でも自らの義に反する行いだ。

なら他に残された道は

―自死

今度は邪魔をする者はいない。  
エレノアは槍の矛先を切り替えピタリと己の細い柔肌に密着させる。

(ごめんなさい)

心中で誰かに謝罪し持ち手に力を込める。

冷えきった槍の先端がエレノアの首を掻き切るより前に、彼女の視界の端に白い光を放つ球体が映り込む。

「あれは…」

その正体に心当たりのあるエレノアは槍を下ろし、遺跡の通路を浮遊する発光体を追いかける。

この時彼女は気付いていなかった。

眠っていたと思われていたベルベットとアイゼンが彼女の動きを見守っていたことに

夜風が体に沁みる。

草花の上に座りこけるガイアは右手に掴んだエスプレンダーの鏡面に憂鬱を帯びた視線を落とす。

「…僕達は明日にはまたアルトリウスの命を奪うために旅に出る。エレノアも一緒に…」

ライフイセットの器になった以上ベルベットはエレノアを手元に置こうとするだろう。

そうなれば聖寮を敵に回す旅路に対魔士である彼女を引き摺り混

むむということも当然ある。

「…今更何考えてるんだ…もう対魔士でもグランでもないのに」

彼女の幼なじみグランなら全力で味方しただろうが彼はもういない。二年半以上も前に死んだ人間だ。

今ここにいるのはアイフリード海賊団の一員ガイアであって、彼女の幼なじみで対魔士だったグランとは無縁の存在だ。

身を危険を犯しても彼女を助ける理由はない。

だがどうしてもグランの感情がちらつく。

揺れに揺れる彼の心情を知ってか知らずかエスプレンダーの内部が赤と黄に輝き、鏡面越しにガイアの顔を照らす。

ただ無為に時が過ぎていく。

空虚なそよ風が微かに音を立てて横切る夜空の下、暗闇に蠢く光があった。

次いでその光に導かれるようにして現れたエレノアを発見したガイアは、姿を悟られぬよう岩陰に身を隠す。

『メルキオルに地脈を辿らせてみれば妙なことになっているようだな』

光体から発せられた声にガイアは僅かに体が反応するのを感じた。

聞き間違えるはずがない。この声は

「アルトリウス様！この失態は―」

『顔を上げなさいエレノア。お前に導師の特命を授ける』

「導師の、特命」

アルトリウス直々に下される命令と聞いてエレノアは期待と緊張を同時に抱く。

『ライフイセットと名乗る聖隷とフードの男を保護しローグレス聖寮本部へ回収せよ』

(ライフイセットも?)

アルトリウスの言った内容にガイアは聞き耳を立てながら困惑する。

偶然の合致と言うべきかエレノアも彼と同様に戸惑いを表しつつ、アルトリウスの指示に耳を傾けていた。

『なおこの特命は特等対魔士以上の機密事項とする』

『あの聖隷とフードの男を守って王都に連れ帰れと?』

『しかも内密にだ。巧まず器になれたのは好都合だな』

『ですがあの聖隷は器である私の行動に干渉できるのです』

『聖隷が意思を持つのならそれを操れば済むことだ。導師アルトリウスの名において特命完遂に必要な如何なる行動も許可する』

如何なる行動も許可する。エレノアは自らに与えられた命令の重大性を思い知る。

必ず果たさなければならぬ。

しかしその責任感とは別にエレノアには気になることがあった。

『業魔に従うことも含めてですか?そこまでするとはあの聖隷と男は一体…』

『できないか?』

エレノアは返答に言葉が詰まる。

業魔は憎むべき存在だ。大切なものを奪った平和な世に不要な存在。

そんな存在の手足となることにエレノアは嫌悪感を持っていた。だが個人的な感情を持つことこそ理に反する。

「屈辱は所詮一時の感情。理と意志こそが災厄を切り祓う剣この命はアルトリウス様の教えに従って使います」

『まもなく地脈が閉じる以後は独自の判断で任務を果たせ』

それを最後にアルトリウスからの交信が途絶え、光球も何処かへと消えてしまう。

話す相手がいなくなっても尚、その場を動こうとしないエレノアの後ろ姿にガイアはもやもやとした払拭し難い感情を覚えていた。



## 第14話 セカンドエンカウント

イボルグ遺跡で一夜を過ごしたベルベツトはライフィセット達と外の平原でエレノアと対峙する。

昨晚のエレノアとアルトリウスとの密談を盗み聞いていた彼女は、一層警戒心を向けるよう努めていた。

「起きたな。具合はどうだ？」

「問題ありません」

「あの、もうあんなことしないでね。痛いのは、怖いでしょ？」

「…大丈夫、私はもう逃げません」

身を案じるロクロウとライフィセットにそう返事をするエレノア。自害を凶ろうとした昨晚と比べて心に落ち着きを保ったているのがベルベツトのみならずアイゼンとガイアにも、ありありと感じられた。

「ぼくはライフィセット。よろしくね」

「え、ええ。よろしくお願いします」

自己紹介を始めたライフィセットに呆気にとられたエレノアは戸惑いつつも、礼節を持って応えた。

「もし逃げたりしたりしたら手足を食らうわよ。生きてさえいれば器としての役割は果たせるんだから」

「ご心配なく。私は貴方との決闘の前に誓約をかけました。負けた場合相手に従うという枷によって自身を力を引き上げる誓約です。一度発動した誓約は自分でも解除できない、私は貴方との約束を守らざるをえないのです」

脅迫めいたベルベツトの言葉にエレノアは真つ向から食ってかか

るように言う。

凜とした佇まいで自身を睨むように見つめるエレノアにベルベツトは猜疑心を持ちながら、彼女に忠告をもたらす。

「誓約ね…なら何としてでもライファイセットを守りなさい。器なんだから。相手が誰だろうと、対魔士でもね」

「ええ、わかっています」

半強制的とはいえ、これから共に旅する関係となった二人の殺伐とした空気にガイアは今後の行く末を案じつつ、話題を切り替えた。

「それでこれからどうするんだ？ひとまず近くの街に向かうとしてその後の行き先は決まってるのか？」

「もちろん決まっておる。儂らの次なる旅路の行く先はイズルトじゃ」

「イズルト…何でまたそんなところに」

マギルウの発した地名にガイアはそこに向かう理由を問う。がマギルウは答える素振りを微塵も見せず、何故かライファイセットに話を振る。

「その説明は坊にしてもらおうかの」

「え、ぼく!?!」

「本を持っておるのは坊じゃぞ。そもそもかーつてに人様の所有物を奪いかーつてに自分の鞆にしまったのじゃ。ともすれば当然本の所有権は坊にあり、それが大きく関わっている以上説明する義務ももちろん坊にある」

何とも無茶苦茶で適当で無責任な言い分。

だが筋が通っている部分も少なからずあったのでライファイセットは小言をしまつて、ガイアを始めとするベルベット以外の面々に説明

する。

「ぼくがローグレスで見つけた古文書なんだけどこの本の表紙見て」  
「御座にあったのと同じ紋章か」

「ということはこの中にはカノヌシについての記述が記されていると  
考えてよさそうだな」

「カノヌシ打倒の手がかりがあるかもな」

ライフィセットの提示した本の表紙を見たロクロウとアイゼンが  
意見を交わす。

そんな中まじまじと書物に目を留まらせたガイアはライフィセッ  
トに質問をかけた。

「古代語か、ライフィセットちよつとその本見せてくれないか」  
「うんいいよ」

所有権を有する本人からの正式な許可を得たガイアはそれを受け  
とると、ページを開き瞳を右から左へせわしなく動かしていく。

「読めるの?」

「古代語の勉強は昔よくしてたからな…うん、読めないことはないか  
…しばらくこれを預らせてくれないか?」

「解読、やってくれるのね」

「ああ、ただあんまり期待しないでくれよ。古代語の知識があると  
言っても王都から持ち出した書物が相手じゃ付け焼き刃同然だ。こ  
の中の全てを解読することははっきり言って自信はない」

「少しでも可能性があるならいいわ。時間は気にしなくて構わない。  
でもできるだけ急いで」

「そのつもりだ。善処する」

「まあ最悪どうにもならんようならグリモワールを頼ればよい」

「グリモワール?」

ベルベットと会話をしていた最中、割って入ってきたマギルウの言葉にガイアは書物を閉じて顔を上げた。

「イズルトにおける儂の知人じゃよ。最も儂の元に来た最後の便りがイズルトからだったというだけで今もそこにおけるかはわからん」

「マギルウの知人か…」

短い付き合いながらもマギルウの人物像を把握しているガイアはグリモワールなる彼女の知人を、脳内でイメージして思い浮かべる。

マギルウと同じく常日頃からふざけた言動で他人を煽るのを趣味とする底意地の悪い人間なのか。

もしくは頭に火が付こうとも動じぬ常人離れた精神力の持ち主なのか。

いずれにしても自分の物差しでは計り知れない何かを持った人物なのだろうと、ガイアはマギルウの印象から予想した。

「まともじゃないことだけは断言できるな」

「ガイアや、その発言の主旨をくわしく説明してもらおうかのう」

「まずはここがどこなのか知る必要がある。バンエルティア号との連絡を取らなければならん」

「そうならそろそろ行くわよ」

「だな」

「こーら！儂の言葉は無視するでなーい！」

アイゼンとベルベットに会話を遮られただけでなくガイアにすら、あつさりスルーされたことに腹を立てたマギルウは声を大にして叫ぶ。

しかしガイアを始めとした何人かは彼女の声に反応するでもなく歩みを始めた。

「軽い：最近儂の扱いが軽い：」

「そうか？元からこんな感じだったろ」

「納得いかん！お主ら全員魔女裁判にかけてやる！異議の申し立てをしてやるわい！」

遂にはロクロウにまでトドメを刺されたマギルウの不平不満は天までぶちまけられた。

イボルグ遺跡周辺の地形は溪谷となっており、谷底に落ちぬようベルベット達は細心の注意を払いながら進む。

道中ライフセットにエレノアに警戒するよう指摘するベルベツトと、少し離れて歩くガイアの耳元にアイゼンは横から小声で進言する。

「エレノアのことだがあまり信用するな。あいつは――」

「わかってる。夜の話し合いのことだろ？」

アイゼンの言わんとしていることにガイアは検討がついていた。

昨晚のエレノアとアルトリウスの密談の話だというのは想像に難くなかった。

「警戒はしておく」

「知ってるならいい。だが念のため言っておくが昔の付き合いがあるといつて油断はするな。紛いなりにもあいつは対魔士だ：最もお前には余計なおせっかいだったか」

「いや感謝してる。親切な忠告ありがとう」

その言葉が自らを氣遣つてのものであると理解していたガイアはそう言うときアイゼンはほくそ笑み、彼の返答に満足したのか追及することはなかった。

「にしても人がまるでないな。そろそろ誰かしらオレ達の前に姿を現してくれないと困るんだが：道がわからん」

「ロクロウ、そう都合よく事は上手く運ばんよ。何せ業魔と海賊、無法者が集まりじゃ。日頃の行いが悪い儂らにそうそう神様が振り向いてくれるはずがなからう」

「人がいた」

「うそーん」

「マギルウ、嫌い」

マギルウが言った矢先に人影を発見したライフィセット。

彼の言葉通り下り道には褐色の鎧を着こんだ男がおり、予想を裏切られたマギルウは己の頬を二つの掌で押し潰し、おちやらけた表情を作る。

そんなマギルウにベルベットはもはや呆れるのすら放棄し一言だけ投げかけると、男に近付く。

「ちよつといい聞きたいことがあるんだけど」

ベルベットの声に振り向いた男はアイゼンとロクロウを見渡すと、突如叫び声を上げて彼女に斬りかかった。

「ひ!? 刀斬りの仲間か！来るなああ！」

垂直に下ろされた剣を奇襲にも関わらずベルベットは容易に回避し一時男の間合いから離脱する。

「俺が悪かったああ！」

「謝りながら斬りかかるな！」

「何なのこいつ」

錯乱したかのように剣を振り回す男にロクロウとベルベットは似

たような反応をしつつ、応戦する。

完全に怯えている男の剣の軌道は読みづらいが動き

はちやめちやな剣筋に対しベルベットはブレードを横払いに振るわせ、衝突した男の武器を軽くあしらう。

頭上にまで押し返された男にロクロウが二刀小太刀を縦割りに下ろし、一振りの元に刀身を叩き切った。

「ふん！」

「剣が…斬られた!?そ、そんな…」

もはや戦う術のない男は全身から力が抜け落ち片膝を付く。

「頼む、いやお願いします！業魔様どうか命だけは、命だけはお助けを！」

「心配するな。お前の命を取る気はない」

「嘘をつくな！そうやって油断させて俺を殺す気だろ！」

「落ち着けて。オレ達は別にお前を取って食おうって話じゃないんだ」

「騙されないぞ！俺を殺しても何の得にもなんないぞ！」

「あのーとりあえず話を聞いてくれないか？」

「嫌だ！俺はまだ死にたくない！」

「ちいつーともこつちの話聞く気ゼロじゃな」

ライファイセットを除く男三人集の声に耳を傾ける気も一切なく男は恐れ戦き、命乞いに熱心になっている。

その醜態にマギルウは溜め息を付き、見かねたライファイセットはどうにかせんと一計を講じた。

「怖がらないでこの人对魔士だよ」

「え…あ、わ、私は一等対魔士エレノア・ヒュームです。落ち着いて話を聞かせてください」

「確かに対魔士だ…けどなんで対魔士がこんな奴らと一緒に？」

エレノアの着る対魔士の服装を認めようやく男は冷静さを取り戻したが、恐る恐る湧き出た疑問を口にする。

その疑問は最もだろう。

清廉潔白なイメージが世に浸透している対魔士が身なりの悪い女や目付きの悪い男、フードで目元を隠した不審な男と行動を共にしているのだから。

違和感を覚えない方がおかしい。

「極秘任務の途中なのです。ここがどこだか教えてもらえませんか？できれば港の場所も」

「どこって、アイルガンド領のカドニクス島だ。この渓谷を進めば港に出る」

エレノアの嘘のおかげで安心しきった男は先ほどの狼狽えぶりは鳴りを潜め、ベルベット達に情報を提供した。

「バンエルティアにシルフモドキを飛ばす」

「お願い」

腕組みをしたアイゼンがベルベットに許可を得たのを確認したがいアは、ゼクソン港でベンウィックに伝えた通りにシルフモドキを送る。

その一方でロクロウは別に気がかりなことがあったのか男に訊ね問うた。

「もうひとつ刀斬りつてのはなんだ？」

「ああ、最近この辺りで暴れてる業魔だ。剣士ばかりを狙ってその刀を叩き斬るんだ。一等対魔士まで何人もやられてる」

(一等対魔士まで…相当の腕の立つ業魔みたいだな)



「だから刀斬りか」

刀斬りなる業魔にガイアは危惧をロクロウは好奇心を、それぞれ異なる感情を抱く。

「そいつの刀は異国で作られた業物でな。盗んでやろうと住処を探してたら襲われちゃったんだ。あんたも気を付けた方がいい。背中の大太刀、刀斬りに見つかったらやばいぜ」

「応、やばそうだな」

親切心からであろう男の警告にロクロウはどこか楽しげに応えた。

「しかし業魔相手に盗みを働こうなどとは自業自爆じゃな」

「さすがにバカすぎたよ」

マギルウのからかいを真に受けた男はがくりと肩を落として項垂れる。

「きつとこれを機に足を洗えということですよ。業魔に殺されなかった幸運な命をもう悪事で穢さないでください」  
「……………」

まるで慈母のような言葉とまごうことなき真摯な気持ちを持つエレノアに男は呆気にとられ、暫し茫然と佇む。

無言になった男にライフイセットが首を傾げた時彼はエレノアに二の句を告げた

「そうだな…あんたの言う通りだ。山賊から足を洗ってこれからは真つ当な人間として生きるよ…」

「それがいいです。まともに生きるということとは素晴らしいことですから」

「それでよ、あんたさえよかつたら俺と一緒にやり直してくれないか？ 姉ちゃんと一緒になら俺、なんとかやっつけていける気がするんだ」

そう男が大胆な告白をエレノアに言っただけで数秒と待たずして、ライフィセットは隣から何か負の気配を感じた。

威圧のようなそうでないような。恐怖のようでそうでないような。とにかく強い力を感じさせる何かの正体がライフィセットはひどく気になった。

彼はその源泉たる人物に話しかける。

「ガイア、どうしたの？」

「…どうしたって、何が？」

「なんだかよくわかんないけど、なんか変だよ？」

「…変？ 俺はいつも通り普通だぞ……」

ガイアが感情は読み取れないがその言葉が嘘である事実だけはわかる。

そうでなければあのガイアが、抑揚のなくかつ感情の込もっていない声色を出すはずがないのだから。

「ごめんなさい。私は対魔士としての職務がありますので貴方の手助けはできそうにありません。ですがそのお気持ちだけはありがとうございます」

「……そうか…残念だ」

律儀に断ったエレノア。

すると不快な気配はなくなりライフィセットはガイアに話しかける。

「元に戻った」

「さつきから何言ってるんだ？ ライフィセット」

「ううん、何でもない。僕の気のせいだったみたい」

今度は声の調子が戻った。いつものガイアだ。  
ライファイセツトは安心すると一つ新たに気になる疑問を抱いた。

(でもなんでガイアの様子が変わったんだらう)

その理由を彼がわかるようになるのはいつになるだろうか。それは他ならぬライファイセツト自身もわからない。

「刀斬りとは物騒じゃのーしかしこうも先々でトラブルが起こるなぞ儂らには疫病神でもついとるのかのう?」

「疫病神はいないだろう。死神はついているがな」

「そりやますます洒落にならんわ。儂はまだまだ長生きしていたいんじゃ。後数百年はピチピチのまま生きる予定じゃしのー」

「もしマギルウが長生きしたら憎まれっ子世に憚るって言葉は真実と  
いうことか」

「…ほんとに口が辛辣になってきたのう」

盗賊稼業から足を洗うと宣言した男と別れて早々にマギルウが愚痴を溢し、アイゼンの自虐めいた返しにますます肩を落とす。

その上ガイアにまで追撃を加えられてしまう始末だ。

一方で

「死神の、呪い?」

「…アイゼンは自分の周りにいる人達を不幸にする力を持つてるんだって」

「それはどういった類いの力なのですか?」

意味が理解できないエレノアはライファイセツトに助け舟を求め、彼

はエレノアの期待に一分の狂いもなく答える。

「力というよりは加護といった方が正しいだろうな」

そこにガイアも交ざりちよつとした講座が始まる。

「加護…ですか？」

「アイゼンは聖隷だ。そして聖隷は本来人々の祈りを受けてそれぞれの力に応じた加護をもたらすんだが…アイゼンは少し違う…アイゼンはその力の及ぶ範囲、領域に反転した加護を与える」

「それがライファイセットが言った…」

「死神の呪い…それがアイゼンの加護だ」

ガイアはエレノアの呟きに首を縦に振ると会話を切り上げる。

そしてライファイセットと並んでエレノアの元を離れる。

(彼らにも意思がありそれぞれの交友関係がある…まるで私達と変わらない、人間みたいに)

海賊の副長を自負しているのもだがそれより何より聖隷が自我を持ち、自らの意思で行動している事実の方がエレノアには信じられなかった。

だが信じようと信じまいと現実として事実が目の前にある。

ベルベットやマギルウと仲睦まじく会話するライファイセット。ガイアとロクロウの二人と何事かを言い合っているアイゼン。

彼らがそのようにしているのが覆しようのない証拠だ。

聖寮での全てが否定されているような気がしてエレノアは整理のしにくい思いが去来する。

これまで信じていた物が揺らいでいきそうになる思いを、揺らぎかけている聖寮への信頼をエレノアは無意識に繋ぎ止めていた。

「あれは…」

先頭に行くベルベットが歩行を止め、他の面々は彼女の視線の先を辿って行く。

血を滲ませたような黒塗りの甲冑と刀を携行した業魔が仁王立ちでそこにいた。

「刀斬りってのはこいつか」

「その刀、征嵐か」

ロクロウの目に留まったのは刀斬りの手にある業物。

彼はどうやらその刀を知っているようで口角を吊り上げる。

「やる気みたいね」

刀斬りはベルベット達を刀の錆びにせんと業物を振りかざし斬りかかる。

狙いはベルベット。

彼女はブレードを抜刀しすかさず応戦する。

数瞬の内に幾度も刃を交わすが一等対魔士を蹴散らしたと噂されるだけあって刀斬りの剣技は冴え渡っていた。

結び合う中でベルベットは剣での対決は不利と悟り攻め方を変える。

「これなら、…説破！」

『くうー！』

剣技に蹴りを混ぜた戦法で刀斬り業魔の刃を退けるベルベット。

更に左手の業魔手を解放しその指先刀斬りの鎧に触れる。いや正確には掠めた程度なのだが彼女の業魔としての特性を發揮するにはそれでも申し分ない。

「ジェットブリザード！」

―業魔手

業魔の象徴たる黒き左手で敵に触れることによって、その対象に応じた技を引き出すことを可能にするベルベットの特殊技能。

左右に高速で移動しながら、冷気を纏わせた刃による斬撃を繰り出し刀斬りを翻弄していく。

彼女によって生み出された隙を突くべくガイアは橙色の弾丸を銃身のスロットに込め、アイゼンも聖隷術の詠唱を整える。

「風の刃よ断絶しろエアスラスト！」

一度の銃撃で連続して射出された三つのオレンジの光弾と円盤状をした風の刃が、真っ直ぐ刀斬りの元へ飛んでいく。

『ふんっ！』

刀斬りはそれらを気迫の込もった一振りで霧散させるが、すかさずエレノアとライフィセットの攻撃が待ち構えていた。

「貫け緑碧！・霊陣・空旋！」

「白黒混ざれ、シェイドブライト！」

槍の高速回転により引き起こされた旋風に足を取られて移動能力を奪われた刀斬り。

その足元より這い出た黒き腕の束が鎧に纏わり付いた時、刀斬りは鎧を貫かれたわけでもないのに苦悶の叫びをあげる。

『ぐおおーっ、こしやくなー！』

「まだまだ終わらんぞフラッドウォール！」

息つく暇もなく闇の腕が引つ込んだ地点から水流が巻き上がる。数多くの猛攻を浴びても刀斬りは膝まずくことなく鎧を水浸しにしてでも、耐えしのぐ。

だがそこにロクロウが二刀を両手に颯爽と飛び込む。

「うおおおおー！」

—キイイン！

二刀と大太刀どちらも勝ちを譲る気はないと誇示する持ち手の意思を反映するように甲高い反響音を、ぶちまける。

「ふっ！せい！」

『むあああー！』

最初の衝突から何度も刃を斬り結ぶロクロウと刀斬り。

彼らの間合いからは何者の立ち入りも許されない緊迫感が生まれており、ベルベットもガイアも固唾を飲んで見守っていた。

「うおっ！なかなかの手練れだな。斬り甲斐があるぜ」

拮抗していた両者の状況にも終わりが告げられ刀斬りの一太刀を受けて吹き飛んだロクロウ。

小太刀で防いだために体に外傷はないようで嬉々とした微笑を浮かべてまた、太刀を翳す刀斬りに突撃する。

しかし

「ロクロウ！」

助太刀をしようとライファイセットが白銀と黒紫の光を放ち、刀斬りの一太刀を弾き返す。

ロクロウの身を案じての行動だったのだろうが、彼にとってその善意は邪魔以外の何物でもなかった。

ライファイセットの介入にロクロウは業魔の証たる右目を赤く光らせ、味方である彼に矛先を変える。

「邪魔をするな！」

「う…!?!」

その切っ先がライファイセットに届くより速く動いた者達がいた。ベルベットとエレノアだ。

彼らはライファイセットの身を守るように前に出ると各々の得物をロクロウに突き付ける。

「仲間を殺す気ですか！」

「ならあんたを殺す」

強引な落ち着かせ方であるがロクロウは理性を取り戻す。

「すまん」

ライファイセットやベルベットに詫びを入れて刀斬りの方を振り向こうとするが、地面が激しく揺れそれを阻む。

「な、何だ!?!」

「地震…!?!こんな時に…!?!」

「いやこれは地震というより――」

突如として発生した揺れに戸惑うロクロウやベルベット達は対照的にアイゼンは冷静に地面を観察する。

すると溪谷を囲むある山が崩れそこから巨大な怪物が姿を覗かせた。



『グウウ!』

背中に山一つを背負っているかのような甲羅が特徴的な風貌の怪物が、四足歩行でベルベツトや刀斬りに向かって進行してくる。

「なんじゃあのバカでかいのはー!」

「怪獣!?こんなところにまで現れるなんて」

マギルウとエレノアが狼狽えるのを余所に怪物ーゾンネルは左の前足を挙げてベルベツト達の頭上へと振り上げる。

「全員よけろ!」

アイゼンの喚起で弾かれたように全員が横に飛んで前足をやり過ぎす。

そして立ち上がって攻撃を開始しようとするがゾンネルの方が動きが早かった。

口がベルベツトの近くにいたガイアへ向けられそこから放たれた火炎が地面に接触。

巻き上がった爆発によりガイアは谷底へとまっさかさまに落下してしまう。

「うわああああ!」

「ガイア!」

その光景を目の当たりにしたライフィセットはガイアの名を叫ぶがゾンネルは彼を無視して、鋭い目付きをロクロウに向ける。

「見た目からして固そうな奴だな。だが面白い」

「呑気なこと言ってる場合じゃないわよ。とつとと蹴りをつける」

先の興奮がまだ残っているような言動をベルベットが咎めると、二人揃ってゾンネルに斬りかかる。

「容赦しない！消えない傷を刻んで果てろ！」

「瞬撃必倒！この距離なら外しはしない！」

これから彼らは同じタイミングで繰り出すは術技を遥かに凌駕する技。

今の彼らができる全てを込めた最上級の奥義だ。

「リーサル・ペイン！」

「零の型、破空！」

どす黒い気を伴う左腕と研ぎ澄まされた剣士の技を光らせる二刀小太刀。

それらは怪獣の身体を両断し、横倒しになったゾンネルの脚からは緑の体液が溢れ出す。

だがまだ絶命までにはいかない。

『グアアア！』

「ちっ、そう簡単にはいかないってわけね」

「なあに、なら倒れるまで叩き斬るだけだ」

「ふう…危ないところだったな。まあある意味好都合だが」

岩壁にアンカーを引っかけたガイアは足場の見えない暗闇を見下ろしてそう呟く。

命の危険に晒されたがおかげで姿を隠す手間が省けた。

左手で銃身ががっしり掴みながら懐からエスプレンダーを取り出

し、自らの胸の前で突き出す。

エスプレンダーより解き放たれた赤と黄の光がガイアの体を包み、変異させる。

「今度はなんだ!?!」

深い谷底から赤い光が昇った。

ゾンネルと一戦交えていたロククロウ達はそちらに意識を向ける。

「似てる…あの時見た光に」

競り上がる赤き光の柱にベルベツトは三年前に起きた彼女の記憶に深い爪痕を残した光景を重ねる。

弟ライフィセットをアルトリウスに剣で貫かれ、そのか弱い体が故郷の祠に落ちた際に天に走った金色の光の柱。

ベルベツトの瞳に映る赤い光の柱はそれに酷似していた。

「来たか」

誰もが光に着目する中でアイゼンだけが確信したように呟く。そして赤い光の巨人となったガイアは膝を抱えて空中で一回転し、大地に立つ。

「あれってヘラヴィーサで見た!」

「光の…巨人…」

これが自我を得て初めての対面となるライフィセット。

彼の後ろ姿にエレノアは巨人が超越たる存在であることを感じ取った。

「ジャア！」

着地するや否やゾンネルを見据えて構えをとるガイア。

両膝と左腕を曲げ右腕を突き出すポーピングを保ったまま、ガイアは右にじりじりと動きゾンネルの挙動を窺う。

ゾンネルもまた自身に匹敵する背丈の見慣れぬ存在に戸惑っているのか、手を出す様子はない。

『グルル』

沈黙から一転、先に動いたのはゾンネル。

相手を寄せ付けまいと火炎弾を発射するもガイアに腕で防がれてしまう。

そしてガイアは火球を全て防ぐとゾンネルへ向かって前進。

火炎の発射口たる顎を蹴り上げその頭を掴み、上から肘打ちを叩き込む。

『グウウ…』

脳天を振動させる一撃にゾンネルはくぐもった声を出すも、負けじと身を翻して尻尾を振り回す。

側面から迫るそれをガイアは両手で捕らえ投げ飛ばそうと試みる。

しかしゾンネルは抵抗し尻尾を右に泳がせた。

それによってガイアは尻尾の動きにつられてしまい岩盤と体を衝突させてしまう。

「オアッ！」

巨体が激突したせいで岩肌から石が溢れ大なり小なり地表へ落ちた。

「おわああああ!?!」

その内のいくつかがマガルウの頭上に飛び彼女は能天気ともとれる声色を発して、逃れ回る。

それを尻目にガイアは周囲への被害を避けるべく、必殺光線クアータムストリームの発射体勢に突入した。

「デュア! ジャアアア!」

組み合わせた左の手首と右の手首が十字に交差し、橙色に発光したのを確認すると頭上へと振り上げる。

しかしエネルギーが収束するより先にゾンネルの火炎弾が複数ガイアの胸部で爆裂した。

「ジョア!?! ウワアアア!」

せつかく集めた光も霧散してしまい、ガイアは背中から倒れ込む。

巨大な質量の物体が重力によって倒れたためにまた地面が揺れ、その影響で岩肌から岩がこぼれ落ちる。

大人二人を余裕で押し潰すのも容易い大きさの岩が落下し、その地点にはライファイセットがいた。

「逃げてライファイセット!!」

「っ!」

次第に自らの視界を覆い尽くす巨大な岩を目前にライファイセットは動くことができなかった。

ベルベツトは彼を救うため全力疾走で距離を詰めるがそれでも間に合わない。

頭の中で最悪のイメージが浮かぶ。

(ダメ、そんなの…絶対に!!)

そう己を鼓舞しベルベットはライファイセットの元に辿り着き、彼の体を抱き締めるように自身を盾にした。

このままでは二人共死んでしまう。

そう誰もが思った時、二人の頭上に迫っていた岩を横から飛んだ火炎が消し飛ばした。

「助けてくれた…?」

「あの怪獣が…?さっきまで戦ってた相手を助けたってこと?そんな馬鹿な話があるわけない」

「でも見て、怪獣から敵意を感じないよ」

ライファイセットに言われてベルベットはゾンネルをじっくり眺める。

先程までの刃物のような形相はどこへやら今は他人から借りてきた子犬のように大人しいではないか。

—急に何故?

そう思わざるをえない状況にマギルウはある予想を打ち明けた。

「おそらくあやつはこの近辺を根城にしておるのじやろう。本来は気性の大人しい可愛げのあるやつじやが、儂らがこの辺り一帯でどんなちやん騒ぎをしたせいで怒り心頭に達して顔を出してきたんじゃない」

「それにあいつはベルベットやロクロウばかり狙っていた。お前達二人の業魔としての気配があいつの闘争本能を刺激したんだろう」

「そう、なのか?」

そんな馬鹿など言いたくなるロクロウの気持ちはベルベットにもわかる。

マギルウやアイゼンの話はあくまでも仮説の域を出ないものだが、そう仮定してみると納得のいく点一つがある。

ゾンネルはライフィセットへの攻撃は避けているように見えた。それを踏まえるとゾンネルは無差別にベルベット達を襲ったわけではないという裏付けにはなる。

「お願い！もうあの怪獣に攻撃しないで！」

ライフィセットの懇願にガイアはこくりと頷くと構えを解いてゾンネルに向き直った。

そして戦う気はないと頷き、乳白色の目で訴えかける。

『ガアアア』

するとゾンネルはそのメッセージを受け取ったのかベルベット達に申し訳ないことをしたと謝るように、首を縦に動かし出てきた山に帰っていく。

「あの怪獣は自分の住処に戻っていったのでしようか？」

「かもしれないな。いつの間やら刀斬りも退散しておるし何はともあれ一件落着。やれやれ一時はどうなるかと思っただわい。山賊風情に刀斬りに果ては怪獣…死神の呪いとはよく言ったものじゃ」

「嫌ならバンエルティアに乗る必要はないんだが…？」

「ダメだよアイゼン。僕達にはマギルウの助けが必要なんだから」

「そうだな。置いてくならせめてグリモワールに会ってからするべきだ」

「そうそう、ってそんな侘しいこと軽々しく言うでない！」

「気を抜かないで！まだ巨人は残ってるわ」

自分を除いた面々にベルベットはそう警告を促す。

ゾンネルを攻撃したからといって巨人が自分達の味方とは言い切

れない。

―来るなら来い

ベルベツトはブレードを引き抜いたままガイアを睨む。

「…」

ガイアは体の向きを変えてベルベツト達を見下ろす。

ベルベツト、ライフイセット、ロクロウ、マギルウ、アイゼン、そしてエレノア

一同の顔に目を通したガイアは胸の前で両腕を交差して姿を消す

「ハッ…」

背後に何か強い力を持った気配を感じガイアは振り向く。

だがその前に

「ドワアアアアア!!」

何かが通り抜け様に手にした得物でガイアの背後を斬りつけた。

背中から火花を散らしたガイアは、人間で言う絶叫にも似た叫びを出して膝から崩れ落ちてしまう。

胸の三角形をした水晶体―ライフゲージを激しく明滅させて、ガイアは赤い粒子となって消える。

「あれは、あの太刀筋は…まさか!」

ガイアが消滅する間際、大地に降り立った人影を捉えたロクロウは脇目も振らず駆け出す。

「あたし達も追うわよ!」

「待ってベルベツト!まだガイアが!」



ロクロウを追おうとするベルベットにライファイセットがそう声を張り上げる。

しかしベルベットにはガイアの生存は絶望的と思われていた。

「この高さから落ちたんじゃないやもう助からない」

「まだ生きてるかもしれないよー!」

「ライファイセットの言う通りです。死んだと決めつけるのは早計ではないでしょうか?」

「あなたの意見は聞いてない」

ばつさりと言い捨てられエレノアは歯噛みする。

やりきれなさを見せるエレノア。

そんな中助け船を出したのは意外にもマギルウであった。

「お主が諦めるのは勝手じゃがええのかえ?」

「…何?」

「今古文書を持つとるのはあやつじゃぞ。あやつを見捨てるとなると主の念願の復讐のせつかくの手がかりをみすみす手放すことになるぞ?それでも構わぬのなら儂は文句は言わんが」

言われてベルベットは本格的に思索する。

そんな彼女の悩みを解消するための案をアイゼンが持ちかけた。

「あいつの搜索は俺が引き受ける。お前達は先に行ってロクロウと合流しろ」

「そうね、手っ取り早く連れて戻って来なさい」

「私も行きます」

「あんたはあたしと来なさい」

名乗りを上げたエレノアに間髪入れず、ベルベットが切り返す。

それでも反論を行おうとするエレノアに対してベルベツトは冷徹な目を注いで言い放った。

「これは命令よ…黙ってあたしに従いなさい」

「わかりました…」

誓約をしたと言ってしまった手前エレノアは齒噛みしながらもベルベツトに返す言葉を発することなく、黙りこくる。

そんな彼女を気にも留めずマガルウがアイゼンの側に移動してベルベツトに告げた。

「なら儂がアイゼンに協力してやるわい。構わぬじやろ？」

「あんたは好きにしなさい」

「アイゼン、マガルウ絶対ガイアと一緒に戻って来てね」

「…二人共、お願いします」

本気で彼の身を案じるライフィセットとやや抵抗感に苛まれているように思えて見えるエレノアは、一足先に動き出したベルベツトに付いていく。

去り際にアイゼンが煙たそうにマガルウを横目で睨んでいたような気がするがそれを確認する時間すら、今の彼女には惜しい。

怪獣との戦いが起こった場所とは到底思えぬ静けさに不気味さを感じる暇もなく、彼らはロクロウの後ろ姿を視認する。

洞穴の入り口とおぼしき穴の手前で先程対峙した刀斬りが敗北しており、ロクロウはそれをまじまじと眺めていた。

いや彼の目は刀斬りよりもそれを下した白猫を連れた大太刀の剣士の横顔を掴んで離さなかった。

## 第15話 號嵐（シグレ）を追い求める剣士

大太刀を背負うがっちりとした筋肉の引き締まった体格をした剣士。

刀斬りを撃破したと思われるその背中にエレノアは驚愕の声を上げた

「特等対魔士。シグレ様!？」

「お、久しぶりだなエレノア。なんだお前、業魔に捕まったか？それとも裏切ったか？」

「い、いえ…これは…その…」

底知れぬ強さを感じさせる風格に似合わぬ気さくな笑顔を浮かべるシグレ。

事情を説明したくともベルベットらがいる側ではそれも叶わず、エレノアは尻すぼみになり言葉を濁らせる。

しかしシグレは彼女の様子を気にかけるわけでもなく、興味なさげにさらっと話題を変えた。

「まあどつちでもいい。好き勝手やってる俺が言えた義理じゃあないわな…しっかし今日はついてる。いつにも増して騒がしいと思ってきてここに来てみれば、ばかでかい巨人がいるとはなあ…しかもおまけに征嵐にまで出会えるときたもんだ。こんだけ盛りだくさんな日はそうそうないぜ」

その言葉に嘘偽りはなくささも嬉しそうにシグレは白い歯を剥き出しにして、無邪気に笑う。

相方のそんな可愛げのある横顔を見上げる猫聖隷ムルジムは名残惜しさをほのかに感じていたものの、シグレに告げた。

「シグレ、なんかさつきからこつちを睨んで子がいるわよ。無視しちゃ可哀想」

「悪い悪い。昔から弟をいじめるのがクセでな、なあロクロウ」  
「シグレ…」

ムルジムに指摘されたシグレと目を合わせたのはロクロウだった。彼は敵意を剥き出しにしてシグレを仇敵を見るような瞳で睨み付けている。

「弟？」

「変わらないなシグレ」

「バカ野郎、メチャクチャ強くなってるっての、この近くにいたんなら見てたろ…俺が巨人を斬り伏せたのを。そっちこそ相変わらず俺を斬るなんてできもしないことを考えんのか？」

「ロクロウが斬りたい相手ってお兄さんなの？」

「こっちもあの時とは違うぜ…ライフィセット今度は手を出すなよ」

驚くライフィセットにロクロウは忠告し二刀小太刀を手に、刃先をシグレに向ける。

揺るぎない敵意を宿した赤い瞳を見たシグレは弟の変化に気づいたようだ。

「おお、お前業魔になったのか、そりやおもしろえ！」

およそ対魔士とは思えない反応だ。

弟が討伐すべき対象たる業魔になったというのにシグレは口元に笑みを保っている。

「だがよ結果まで変わるかな？俺の號嵐真打ちに號嵐影打ちを折られてしょんべん漏らしたあの時とよ」

「…後悔しろ、あの時オレを殺さなかったことをな！」

どちらともなく間合いを詰め両者の刀が中間で混ざり合う。

それを機にロクロウもシグレも己の技と剣を己の兄弟にぶつける。

「式の型醒地！」

ロクロウの突き立てる二刀小太刀をシグレは大太刀を片手で難なく振るいいなす。

剣技が弾かれたことに動揺を覚えずしてロクロウは一がダメなら二の技、二がダメなら三の技と続けざまにランゲツ流を仕掛ける。

洗練された冴えたわる技の応酬を繰り出すロクロウ。

息をもつかせぬ果敢な猛攻だと観戦するライファイセツト達は評価するが、受け手になっているはずのシグレは何食わぬ涼しい顔を保っていた。

「どうした？業魔になってもあん時とは変わんねえってことか？違うだろ？本気でかかってこいよ」

「ああ、望み通り全力でお前を斬ってやる」

「いい悪い顔だ。その意気でこい」

シグレの刀より走った衝撃波が土を抉り真っ直ぐロクロウに向かう。

特等対魔士の地位に身を置く者なだけあつて常人には到底出し得ない力がロクロウに迫るが、彼もまた常人を越えた存在。業魔である。

冷や汗をかかずかわすと、衝撃波が後方へと抜けたと直感するよりも彼の体はシグレへと進んでいた。

「うおおおー！」

足元を風ぐ大太刀を跳躍で回避しロクロウはシグレの頭上を飛び越える。

——とつた！

ロクロウは一点の曇りもなく自らの勝利を確信した。着地と同時に体を捻って二刀小太刀の一閃でシグレの首を斬り落とす。それで終わりだった。相手がシグレでなければ

「何!？」

ロクロウの二刀小太刀はシグレの皮膚に触れるか否かの位置で停滞していた。渾身の一撃は大太刀によって防がれたのだ。

しかもシグレは小太刀に一瞥もくれずに己の直感のみで防御を成功させてしまった。

さしものロクロウもこれには愕然とし、その口元から驚愕の声が溢れる。

「やるじゃねえか業魔になっただけはあるな。だが残念だったな。これぐらいじゃ俺の首はとれねえ」

「ぐうう…おわっ!」

シグレの反撃にロクロウは咄嗟に飛び退いて反応し小太刀で刀身を受けてみせたが、むなしくもその体は宙に舞い地面に激突する。

零距离に等しい間合いからの斬撃でありながら、その身に刀傷を負わずに済んだのは業魔の為せる業とでもいうべきだろう。

しかしそれでロクロウに勝利が傾きはしなかった。

「これでしまいだな」

「くっ…」

全身を地に付けたロクロウにシグレが大太刀を突き出す。

切っ先は目と鼻の先にありシグレがその気になれば、すぐにでもロクロウを殺せる程に近い。

「ロクロウ！」

ロクロウを助けたい、何とかしたいというライフィセットの思いが体を動かした。

だがそれは彼自身の体ではなく

「え!?体が、勝手に!?!」

エレノアだった。

金縛りをかけられたような強制力が彼女を蝕み、彼女の意思に反した行動をとらせた。

抗えず槍を手にロクロウの加勢に入るエレノアだが、そこに短刀が投げ込まれ彼女は柄の部分で身を守る。

「ぎゃー！」

「邪魔するな！」

業魔の証明たる右目を高ぶる感情によって赤く光らせたロクロウはエレノアに激昂し、再び小太刀でシグレに斬りかかる。

だがシグレはこれ以上斬り合う気はないのか、刀を肩に担いでロクロウに言い放つ。

「今日はここまでだ」

「シグレえええ！」

冗談ではないと言わんばかりにロクロウは疾走を続けるがシグレは顔色一つ変えずに、大太刀を彼に差し出すように宙に置く。

「はやるな。今のお前が強え刀を持ったら面白えと思ったのさ。そこ  
のじいさんに打ってもらえ。で、もういっぺんやろうや」

「じいさんっ！」

「その業魔はクロガネって言うのよ。征嵐の刀鍛冶よ」

シグレとムルジムは件の刀斬り業魔を一瞥して、更にこう続ける。

「この先のカドニクス港で待つてやる。俺を倒さねえと島からは出られねえぜ」

「勝手なことを！」

「気に食わなきやかかってきな」

ベルベットの反論にシグレは大太刀の素振りにより、引き起こした風圧をもって答える。

砂塵が飛び上がりベルベット達は腕で庇うように視界を隠し、突風が納まるのを待つ。

そんな彼女達をシグレは高らかに笑う。

「はっはっは！精々精進しろ業魔共！」

「シグレ様！私は特命を！」

「ああ、エレノア…お前マジで裏切りやがったんだな。次に会ったら叩き斬る」

弁解を試みるエレノアをシグレは拒絶し、ムルジムを連れて洞窟内へと去っていく。

不可抗力であるといえども、シグレを攻撃してしまったのだから何を言っただころでどうしようもない。

そうわかっている。

頭ではわかっているのだがそれだけにシグレの言葉はエレノアの対魔士としての心に傷を負わせた。

「……」

「エレノア、僕」



うつむき黙りこくるエレノアにライファイセットが謝罪の言葉を口にした時、アイゼンとマギルウそしてガイアが合流した。

ローブはところどころ黒焦げて穴が空き、アイゼンに肩を借りているガイアにライファイセットが目を向けるとマギルウが言葉を発した。

「なんじやお主らまだこんなところにおったのかえ？ ずいぶんとのんびりしてるの〜」

「何があつた？」

辺り一面の光景に目を走らせたマギルウとアイゼンの質問にライファイセットは一から説明しようとするも、ベルベットがそれを遮り代わりに質問で返す。

「それが―」

「後で説明するわ。ガイア、古文書は無事よね？」

「ああなんとかな…」

「ならいいわ。次からは気を付けなさい。代えがあるわけじゃないんだから」

ガイアが懐より取り出した無傷の古文書を見てベルベットはひとまず安心する。

古文書は未知の存在たるカノヌシを知る手がかりかもしれないのだ。

そう易々と失ってはしやれにならない。

「お前達この男の連れだろう。ついて来い」

ベルベットがそう思ったのと刀斬り業魔クロガネが話かけてきたのはほぼ同時だった。

「ついて来いって？」

「来ればわかる」

クログガネの先導で一行はヴェスター坑道を進む。

坑道として使われているだけあって整備も行き届いていて、通路の端に置かれた数多の水晶が窮屈な道筋を照らす。

いくつもの狭苦しい道を通って行き着いた場所は様々な刀と鍛冶器材が広がる工房のようなところだった。

「すごい…刀がこんなに…」

「伝説の刀鍛冶クログガネは號嵐に勝つために生き永らえてたんだな」

散らばった様々な形状と紋様の刀にライファイセットとロククロウは感心の声を出す。

「そうだ。俺は全て捨て號嵐を超える刀を打つことだけを考え続けた。そして気付けば―」

「業魔になっていた…か」

「貴様も號嵐の継承者…兄を斬りたいがためにその身を墮としたと見える…」

「同じ穴の貉だ。俺にお前の刀を預けてくれないか」

ロククロウはそう提案を持ちかけた。

永きに渡る年月を経ても尚號嵐を超える刀を造り続けた刀鍛冶に

「何十、何百と刀を打ち続けてきたが結局號嵐を超える刀は造れなかった…そんな俺の刀を求めるのか」

クログガネは地べたに無造作に散らばる己の作品を見下ろして言う。

クログガネの手によって打たれた品々を見たロククロウは何の掛け値なしの贅辞を送る。

「もちろんだ。何十年経つてもお前は刀を打ち続けている。お前はまだ折れていない」

負けることは恥ではない。

敗北したからと言ってそこで終わってしまったらそれこそ意味がない。

ロクロウの業魔の証拠たる紅い瞳がそう訴えているのをクロガネは見抜いた。

「お前になら任せてもいいかもしれんな」

ロクロウの姿勢に感銘を受けたのかクロガネは彼の要求に応じた。

「上の方でいいな」

「ああ。腕さえあれば打てる」

「破ッ！」

了承を得るなりロクロウはクロガネの首を斬り落とした。

これにはライファイセットやエレノアも肝を冷やした。

「な、何をするんですか!?!」

「慌てるな。刀の素材を斬り離したただけだ」

狼狽えもせず整然とした物言いにエレノアとライファイセットは眉を吊り上げる。

するとロクロウの言葉を裏付けるようにクロガネは頭を失ったというのに、何不自由なく立ち上がった。

「そういう業魔だったのね」

最初から意図があつてのことだろうと踏んでいたベルベットは腕

を組んで、府に落ちたように呟く。

ライファイセットもクロガネが無事だと分かり安堵から大きな息を吐いたが、ロクロウの言葉を振り返った途端また驚きの感情がぶり返す。

「この頭を刀にするの!？」

「ああ、恨みの塊であるこれで號嵐・影打ちを打ち直す」<sup>頭</sup>

「待て、これは昔の弱い心を忘れないための戒めにすぎん。俺はシグレに勝つためにランゲツ流の裏芸二刀小太刀を磨き上げてきたんだ」  
「……わかった。お前のために短刀を打とう」

ロクロウの主張を受け入れたクロガネは自らの頭部を抱えて作業台へ移動し、愛具を手に刀の精製に取りかかる。

金槌で刀を作り始めるクロガネを重たい眼差しで見守るロクロウ。彼らの邪魔になってはならないと、ベルベット達は工場を出てすぐのところまで小休止をとることにした。

それぞれが距離を置いて刀の製造を待つ中、ライファイセットは自然な座り方をするガイアに気づいた。

「あつ……」

気になって注視するとガイアの左腕から地面へ滴り落ちる赤いどろどろした液体が見えた。

慌てて駆け寄りライファイセットはガイアの容態を気遣う。

「血が出てるよ!」

「ライファイセット…平気だ、これぐらい」

「待ってて、すぐ治すから!」

ライファイセットの掌から迸る穏やかな光がガイアの左腕に照射され、傷口を塞いでいく。

「すまない…っ!？」

「まだどこか痛むの!？」

「いやもう大丈夫だ。ありがとう」

左腕の傷は完治したはずなのにガイアの口から漏れる苦悶の声。

心配するライフィセットにひたすら回復の必要はもうないと拒むガイア。

その様子を見かねたベルベツトはひとしきり深く呆れた息を吐くと、ガイアに近付きその背中を叩く。

「つつ〜〜〜!!？」

雷撃のように激痛が全身を一瞬で駆け巡る。

せめてもの抵抗か歯を食い縛り叫び声を上げなかったが、ガイアはピクピクと小刻みに震えていた。

必死で堪えているのは誰の目からも明白だ。

「これのどこが大丈夫なの？」

「…これぐらいどうってことはない」

「へえ、ならもう一度同じことしても平気なわけね」

「……」

意地らしく脅迫してくるベルベツトにガイアはぐうの音も出さず黙りこくろる。

「まったく自分の体のことぐらい自分で管理しなさい。わかったらさっさとライフィセットに診てもらいなさい」

ベルベツトの進言にやむなく従うしかないガイアはもう一切の文句を吐かなかった。

「背中が痛む。ライフイセツトもう一度治してくれるか？」

「もちろん！」

(背中…?)

ガイアの言葉にベルベットは訝しむように眉を上げる。

「大変でふ〜！船着き場にいた一等対魔士が大勢向かってくるでフ〜!!」

ちようどその時何処かへ行っていた様子のビエンフーが騒がしく、大声を上げて戻ってきた。

「シグレは港で待つつて言っつてわ。となると…」

「一等対魔士の独断か。シグレの意図でないにしても面倒なのは変わらないが」

「裏切り者エレノアを粛清するって言っつてるでフ〜！」

ガイアとベルベットが呟く中ビエンフーが興奮気味にまくし立てる。

「粛清…」

同じ志を持つ仲間であるはずの対魔士に命を狙われる現実に心を痛めるエレノア。

彼女の意に反して物事は動き、ベルベット達は迎撃に出る。

「迎え撃つわよ」

「俺も行くわ…」

やりきれなさが出ている表情のエレノアにガイアは言葉をかけず、立ち上がろうとする。

「あんたはここにいなさい。本調子じゃないのに来られても足手まといになるだけよ」

「心配するな。もう――」

「俺達だけで充分だ。手負いの手を借りる必要はない」

ベルベットだけでなきアイゼンにも制されガイアは二の句を口にすることなく、視線を落とす。

引き下がったガイアに数秒程目を留めたベルベットはエレノアに指示を下した。

「あんたは来なさい。誓約なんですよ、あたしの指示には従いなさい」  
「…わかりました」

反抗というよりかは傷心の色を強く見せるエレノアであったがベルベットやライファイセツトの追隨して、一等対魔士を迎撃に出る。

彼らの姿が見えなくなるとガイアは唇を強く噛み、拳を岩壁に打ちつけた。

マギルウは腰に手を当ててそんな彼を退屈そうに眺めていた。

## 第16話 再戦

「二等対魔士エレノアだな！業魔に屈するとは恥を知れ!!」

クロガネの工房から出てほどなくして一等対魔士の小隊と出くわした。

顔を見るなり小隊を指揮する女対魔士がエレノアに啖呵を切った。

仮面で表情は見えないが彼らの胸の内には一人の例外もなく、エレノアに対しての憤りが沸き上がっている。

「私は―」

「黙れ！対魔士が業魔に肩入れするなど聖寮への最大の侮辱、アルトリウス様に代わって我々が貴様を断罪する！」

「覚悟しろ。貴様の行いは聖寮の、聖寮だけではない民衆への反逆だ！死をもって償え!!」

エレノアの弁解に耳を貸さず一等対魔士達は攻撃を仕掛ける。

(どうしてこんな…)

やむなくエレノアも応戦する。

女対魔士の剣を槍で受け止め押し返すと、一時間合いをとって退避する。

しかし休む暇を与える余裕は敵方にはない。

後方から使役聖隷の火球が追い打ちとして放たれる。

「霊陣・空旋！」

エレノアの起こした旋風は火の球をブワツと消し、対魔士を強襲する。



「この程度どうということはない！」

強風に苦戦しながらも女対魔士は前へと踏み込みエレノアに接近する。

使役聖隷が身体強化の補助術をかけたことにより女対魔士の力はねあがり、旋風を一振りで凪いだ。

進行の障害がなくなり女対魔士は急速に間合いを詰めた。

「うおおおっ！」

「…くっ」

また剣と槍が音を立てて混ざり合う。

肉体が術の加護を受けて強化されている女対魔士の剣技とエレノアは顔を歪ませながらも、対等に立ち回っていた。

その様をアイゼンは一等対魔士の横つ面を殴り飛ばしながら見ていた。

(身を守るばかりで反撃には転じない…間違いなく手を抜いているな)

相手を傷つけまいという配慮がエレノアの戦い方には現れていた。

海賊であるとはいえアイゼンにもその行動は一定の理解はある。

理解はできるが同情はしない。

「貴様の相手をしている暇はない。そこをどけえ！」

「むんっ！」

エレノアに執着する一等対魔士にアイゼンの拳が直撃し、彼の体は宙に浮く。

慣性に従って空中に浮かんだまま対魔士は壁に衝突すると、気絶し

ぐったりと体の力が抜けていた。

「業火刃！」

「ジルクラッカー！」

戦う相手のないアイゼンが見渡して見ると、ベルベットもライフイセツトも襲いかかる対魔士を倒していく。

その刃で、その術で、反撃を許さず圧倒する様は格の違いを見せる戦いぶりだ。

「ご、業魔め、これ以上好きにはさせせん！」

「はあっ！」

「ぐわあああ!!」

ベルベットの業魔手の餌食になった対魔士が地べたにひれ伏す。

「終わったようだな」

「まだよ」

皆が皆同じ一方向に目を移す。

まだエレノアが戦っていたからだ。

「このお！舐めるな！」

幾重にも刃を交えるもすべからくエレノアに弾かれ女対魔士はよろめく。

体勢を崩したところに一矢加えることも可能なのにそうしない。

―手を抜かれている

エレノアが全力を出し切っていないのを女対魔士は刃を通じて実感していた。

だからこそ腹ただしく屈辱を味あわされている。

「裏切り者の分際でえ！」

沸き立つ全ての感情を込めた渾身の一撃を振り下ろす。

しかし軽く押し返され、即座に槍の穂先を突き付けられてしまう。

(これ以上は本当に…殺してしまう)

尚もとどめを迷うエレノア。

ほんの短い間でしかない迷いが生んだスキだがそれが、女対魔士が長槍を払いのけて反撃するだけの時間を与えてしまった。

「エレノア！」

ライファイセットの悲痛な叫びと共にエレノアは息が詰まり目を見開く。

彼女に死という形で処断が訪れようと凶刃が迫らんとした時、一陣の黒い疾風が駆け抜け剣を持ち主ごと斬り捨てた。

「がっ!？」

女対魔士の体が固い地面に投げ捨てられた。

二本の太刀筋が刻まれ清廉な対魔士の白き衣装が赤黒く染まり、体がピクリとも動かなくなる。

「借りは返したぞエレノア」

エレノアの助けに入ったのはロクロウ。いつもの軽い調子で告げた。

彼の手に握られた黒塗りの二刀小太刀がライファイセットの目に留まった。

「ロクロウ、刀が完成したんだね」

「ああ、後はシグレ<sup>あいつ</sup>を斬るだけだ」

「俺も見届ける」

ロクロウとクロガネ、各々の思いを持ってカドニクス港に足を向ける意思を告げる。

その傍らで横たわる対魔士を見つめているエレノアをベルベツトが冷徹な眼差しで咎めた。

「今みたいな戦い方じゃ死ぬわよ。あんたが死んだらライフイセツトの器がなくなる」

「わかっています」

目を合わせず素早く答えるエレノア。

少しばかりの沈黙に包まれる空間。その静寂を壊したのは対魔士の呻き声だった。

「う…う…う…」

まだ息がある。

ベルベツトは間髪入れずにどす黒い気を帯びた左腕を解放する。

背中越しながらもはつきり伝わった動きにエレノアは反応し、振り返る。

「やめろベルベツト」

ベルベツトの行為を否めたのはエレノアではなくアイゼンだった。アイゼンの言葉にベルベツトは気分を害した素振りは見せず彼と目を合わせた後、業魔としての左腕を下ろす。

「殺さない…のですね？」

「今はお腹が空いてないの…エレノア、対魔士とは死なないように戦いなさい」

「わかりました」

そう口では言ったもののエレノアの心境には未だに複雑さが残っていた。

次に対魔士と、これからシグレと戦う時に自分は迷いを断ち切り戦えるのだろうか

そんな自問自答をしている彼女に呑気な調子の声が狭苦しい壁に反響して聞こえる。

「どうやら厄介者共は成敗できたようじゃなく」

クロガネの工房のある道からマギルウが姿を見せた。

隣にはガイアとついでにビエンフーもいる。

「あんた達も準備はできてるわね」

「もちろんじゃ、儂は常にどんな奇想天外な事態にも対処できるよう万全な準備をしておるぞよ」

マギルウの余計な口に飽き飽きしながら、ベルベット続けてガイアに視線を移す。

「問題ない。傷はライフイセットに治してもらったからな」

「そう、ならさっさとここを出るわよ」

仕切るベルベットに続いて皆がシグレの待つカドニクス港に出発する。

そんな中ガイアは踏み出した足を止め、ふと女対魔士の体に目がいく。

片膝をついて女対魔士の服を調べ始めたガイアに気付いたライフェイスは、ベルベット達から離れて彼の元に引き返した。

「何してるの？」

「シグレは港で待つと言っていたらしいな。ロクロウとの対決をするために。にも関わらず対魔士達はここにきた：シグレが命じたわけじゃないだろうしたぶんこの対魔士の独断だ。それだけの指揮権を持つ対魔士なら……」

対魔士の懐からガイアは細紐で筒状にくるめられた紙を抜き取ると腰を上げる。

「こんな風に聖寮の動向を探れる何かを持っているかもしれないと思ってな」

「その紙、何が書いてあるんだろう？」  
「中身を見てみないことにはわからない。もしかしたら聖寮とは関係なくこの対魔士の私物の可能性もある：どのみちこれは古文書と一緒にバンエルティア号で見るしかない」

紙束を懐に仕舞うとガイアは意識を失っている対魔士達に視線を向ける。

五秒にも満たない時間だけその場で佇むとそれつきり振り返ることとはなかった。

「待たせてごめんな。急いでベルベット達と合流しよう」

ガイアはライフェイスに声をかけベルベット達を追うように歩みを始めた。

不思議そうな目でライフェイスは彼と対魔士を交互に見た後、彼も遅れまいと急いで足を動かした。

洞穴の奥深くの扉を開け一歩足を踏み入れると、そこは既にカドニクス港の中。

洞穴を抜けてすぐ目的地に繋がっているとは、と驚きを口にする者はおらず、皆が覚えたのは港町の様子に対しての違和感だった。

「人が誰もいませんね」

「決闘の邪魔になると判断して外に出ないよう指示を出したんだろう」

「好都合よ。戦いの最中に大勢にうろちよろされたら面倒なのはこっちも同じ」

「人質が取れぬのは残念じゃがの〜」

不気味な静けさを醸し出す町並みに思い通りの言葉を呟く。

「策はあるのか？」

宿の前に差し掛かったとけろでアイゼンがロクロウに聞く。

彼の言葉が発せられた瞬間に一行はピタリと止まり、ロクロウに視線を集中させて答えを待つ。

首を動かさず全員の顔を見渡す。

そして眉間にしわを寄せながらも口を開いた。

「策などない」

深刻な顔をしながらあまりにきつぱり言いのけてしまったロクロウに一部を除いて啞然とする。

「こりやまた随分とあっさり言っってしまうたの…お主らしいと言えづらいが」

「だがそれでもお前は俺の刀を手にここにきた。策はなくとも勝てる

見込みはあるんだな？」

「子供の頃から十年、あいつの授業相手としてオレは剣を受け続けてきた。あいつの剣はオレが一番よく知ってる…恐怖を消せば可能性はある」

恐怖を消す。常人には成しえそうにもないことだが業魔のロクロウにはそれができるといえるのだろうか。

そんな疑問を持ったままガイアは一行に合わせて足を進めた。

奥へ奥へと船着き場を目指していると、見つけた。

船着き場の手前の広場のど真ん中、そこに複数人の対魔士を控えたシグレとムルジムの姿を

「来たな」

「つてことは出向いた対魔士達は皆返り討ちにあっちゃったのね」

「あの対魔士達はやはりお前の差し金じゃなかったんだな」

「俺はやめとけって言ったんだぜ。無駄だったな」

ガイアの投げかけにシグレはそう返す。

自分の部下が叩き潰されたというのに顔色は変わらず、むしろ笑っている。

「そんなことはいい…お前どんな刀を打った」

ガイアに興味はないのかシグレはロクロウに期待の眼差しを込める。

しかし当のロクロウはというと彼の言葉に応じず、超えるべき目の前の敵を見据えていた。

ロクロウの顔つきを見てかシグレは曇りのない微笑みで大太刀を握る手を強めた。



「ま、やってみればわかるな」

「あの対魔士達とは僕達が戦う。ロクロウはシグレに勝ってね」  
「…頼む」

ロクロウはライファイセツトの申し出を受けるや否や真っ先に飛び出してシグレに斬り込む。

その進行を阻止するべくシグレの両側に控えていた対魔士達がロクロウを狙うが、マギルウの水流とライファイセツトの火に妨害される。

シグレとロクロウの太刀が交錯がした。

最初の激突で散った火花が消えるより早くロクロウは二の技を仕掛ける。

二刀小太刀から繰り出される高速の剣技を披露するロクロウ。

常人には到底引き出せない早業をもつてして迫るが、シグレは涼しい顔を保っている。

その表情を余裕と受け取ったロクロウは攻め方を変えて挑むことにした。

垂直に下ろされる大太刀を後方に引いて逃れ、地面を抉ったと同時に空へ躍り出る。

「これならどうだ！」

上空で身を捻りロクロウは小太刀を振るう。

左の刃は空を切り、空振りに終わったがそうなることはロクロウも承知していた。

本命は右の刃だ。

—懐刀

ランゲツ流に伝わる技であり二刀小太刀の利点を活かした技の一つだ。

が、シグレはその技をも軽々と防いでしまった。

「やはり当たらんか」

「そう簡単に終わるわけねえだろ…どうした？こんなもんじゃないだろ？」

「言われずとも見せてやるさ！」

二人は言葉と刃を幾度も交える。

衝突の都度発生する甲高い音を聞き、ガイアはそちらに気を取られた。

ほんの少し、一瞬にしか過ぎぬ程短い間だったが対峙する相手から目を背けてしまった。

「もらった！」

「っ！」

直進する危機に後方へ飛び退くが完璧にかわすことはできなかつた。

上段から振るい下ろされた斬撃は衣服を切り、肩先から微量ながらも赤い血液が滲み出る。

「さすがに手強い…後少し回避が遅れてたら危なかった」

一人ごちるガイア。

気づくのが遅れていたら一大事だったかもしれないというのどこか他人事のように感じられる。

そんな彼の背中にベルベットがやってきた。

彼女もまた聖隷術を主とする戦法を取る対魔士に間合いを詰められず攻めあぐねていたようで、一時距離をとるため後退してきたのだ。

「気になるなら行けば？」

「いやいい。助けに入ったところがかえってロクロウの気を損ねるだけだ…それにあいつが望んだ一騎討ち、なら尚更邪魔をしたくない」

お互い目もくれず正面の敵を見つめたまま口を動かす。

「バカね、それならいちいち気にする必要はないでしょ。変に余所見して自分の身を守れないんじゃないじゃ世話ないじゃない」

「最もな指摘だな…耳が痛い」

「そう思うならこれに懲りたら次は気をつけなさい。死にたくないならね」

「そうだな…なるべく治すようにはするが次で治せるか難しいところだな。なにせ俺も不器用な方だしな…だから素直に自分の気持ち言葉をするのは苦手だ」

銃を握る手でベルベットの手を二回叩くガイア。

その感触を確かめたベルベットの目の端にちらりと彼を映した後、改めて対魔士へと向き直る。

「どいつもこいつも、ほんとバカよね。面倒くさいったらありやしない」

「それは、悪かったな」

剣を持つ対魔士が踏み込んだのと詠唱された火球が飛んだのと、同じタイミングでベルベットとガイアは立ち位置を入れ替える。

垂直に下ろされた剣を下方から伸びたブレードが打ち払い、相当な威力が秘められているであろう火球は緑の光が形成するバリアに阻まれた。

「な、なにい!？」

二人の対魔士が啞然として口を開いたのも束の間、その時にはベル

ベツトとガイアは次の行動に転じていた。

禍々しく黒き腕が対魔士の体を捕らえ地面に叩き付けられ沈黙に落とす。

銃口より出た紫の鞭がもう一人の対魔士の腕に絡み、引き寄せた対魔士の腹部に蹴りを入れ同じく撃沈に追いやる。

「やるならもつと上手くやりなさい。不自然すぎて違和感丸出しだったわよ」

「…手厳しい評価だな」

そう言いながら二人は戦況を確認するため視野を広げる。

どうやら一等対魔士の方は全て片付いているようで皆等しく地に倒れていた。

「うおおっ…!!」

—これではシグレのみ

そう思った矢先ロクロウがシグレに弾き飛ばされ、膝を付く姿が彼らの目に飛来してきた。

「くう…」

「お前の腕は悪くはねえよ。だがせっかく業魔になったってのにただ出来のいいランゲツ流じゃねえか。それじゃ当主の俺に勝てるはずねえだろ」

「……なら見せてやるよ。俺の剣をな!」

言うが否やロクロウは片方の小太刀を乱雑に投げ捨てシグレへと突っ込む。

その最中ロクロウの右目、業魔の瞳が不気味に光り出す。

次の瞬間、ロクロウは奇策とも言える驚きの行動をとった。

「うおっ!？」

「もらったー!」

なんとシグレが突き出した大太刀にロクロウは自らの左手を差し出したのだ。

痛みを諸ともせず柄本までしつかりと押し込んだ左手でシグレの剣を掴んだロクロウ。

これにはさしものシグレも目を見張らせ、その反応に確証を得たロクロウは小太刀を首元に突き刺す。

しかし、シグレは咄嗟にロクロウの背中の鞆から折れた大太刀を抜き、本来の半分にも満たないであろう刀身で小太刀を止めた。

「なっ!？」

「せいっ!」

決死の反撃もかわされ、シグレに風ぎ払われるロクロウ。

尻餅を付き、悔しさから顔を歪ませる彼に対してシグレは嬉しそうに笑う。

「はっはっ!今のはよかったぜ、片手を捨てて首を狙うとはなあ!気付くのが一瞬遅れてたら死んでたぜ。それでいいんだよ、それで!」

歓喜の微笑みと共にその言葉を送ったシグレは奪った大太刀をロクロウに投げ返すと、気分良くロクロウと他の一行に告げた。

「よっし、今日はここまでだ。いいかてめえら!もつとすげえ刀を打って、もつと腕を磨いて俺を斬りにこい!」

「…斬ってやるさ。何百回負けようが、何百年かかろうがな!」

揺るがない意志を持ってロクロウはそう返す。

その時見せた表情をシグレはこう評した。

「いい悪い顔になったな。うん、いい悪い顔だ！」

最後まで笑いを保つシグレ。

笑いながら去っていくシグレにエレノアが驚いていると、ムルジムが去り際に彼女へ言葉を残す。

「なんという人……」

「自分の心配をしたほうがいいんじゃない？あなたが裏切ったことは聖察中に伝わってるわよ」

沈痛な面持ちのエレノアにそう言い残してムルジムも主の後を追っていった。

戦いが終わり再び静まりかえった空気の中でライフィセットが呟いた。

「あの人、強かったね。すごく強かった」

「ああ。奴は、奴らは強い」

「けど必要なら倒す。どんな手を使ってでも」

ベルベットが言い終わるとアイゼンの目に、バンエルティア号の船体が見えた。

「バンエルティア号が来たぞ」

「ここに長居すればまた戦闘になる可能性がある。さっさと出港してしまおう」

ガイアの言葉を皮切りに一行は停泊したバンエルティア号に乗り込む。

そこへ戦いを見守っていたクロガネがロクロウに頼み込んできた。

「俺も連れていってくれ……俺は必ず神剣を越える刀を打ってみせる。」

だが號嵐に勝つにはその刀を振るう神業を超える剣士が必要だ」

嘘偽りのないクロガネの意志を聞いたロクロウは傍らにいるアイゼンに問うた。

「アイゼン、船にこの鎧を乗せる場所はあるか？」

「なければ誰かに着せろ」

「はは、そいつはいい」

目を交わさずに返ってきた答えにシグレと似て異なる笑い声を出すロクロウ。

彼は改めてクロガネに言う。

「頼むぜ、クロガネ」

「任せろ」

同じ超えるべき存在を持つ業魔二人は互いの願いを託し合う。

## 第17話 無法者共、安らかな一時

「あああくわからない…」

南方の地を目指す航海の途中のバンエルティア号の一室。  
ガイアは頭を悩ませていた。

「この一文がクレミンだとすると意味は目覚めの時…いや仄かな恋心…あなたを思う心って意味にも…どっちだろ？…そもそもクレミンじゃない可能性もある」

自室であるためフードを外していた彼は赤い髪を掻きむしる。  
格闘しているのはライファイセットから託された古文書。  
カドニクス港を離れてからずっと部屋にこもりきりで解読を試みているが、思ったより難航しているようだ。

「この独特な文字からして古代アヴァロスト語だとは思っただけ…違うのか？…けど他の言語って感じはしないしな」

頭を抱えながら目を押さえる。

一時の休憩も挟まずずっと解読に専念していたのだ。

疲れが出て無理はない。

古文書を閉じたガイアはフードで顔を隠して自室を出た。

「一旦休憩…つてもう夜なのか。うつくはあ」

腕を頭上へ伸ばし薄暗く静かな船内を歩く。

騒がしい船員の声が聞こえず、非常に落ち着いた雰囲気がある。

「皆寝てるのか…なんかこっちも眠くなってきた気がする…ん？」



欠伸をかいたガイアの鼻がピクリと反応する。

「甘い香りがする…」

何度も鼻を動かしながら匂いの元を探っていく。

小さな隙間から漏れる明かりを見つけ、部屋の中へと足を踏み入れる。

「…何してるんだ？…(´▽´)」

扉を閉めたガイアは椅子に座っていたライフィセットに声をかけた。

声が自分に向けられたものだと知ったライフィセットは振り向き、その姿を視界に収める。

「ベルベットがお菓子を作ってくれてるんだ」

「お菓子？ああ、それで甘い匂いがしたのか」

ライフィセットと向き合う形で席に着いたガイアが呟く。

すると丁度そのタイミングで厨房からベルベットが顔を見せた。

「できたわよ。あんたもいたのね」

「解読の気晴らしにきたらいい匂いに誘われてな。迷惑なら席を外すぞ」

—ぐるううう—

ぶつきらぼうに言葉を返したガイアの腹が唸る。

静かな空間の中でその音は目立ち、部屋全体に行き渡るまでそう時間要塞を要さなかった。

珍妙な音の出所が自分の腹と認識したガイアはフードの奥で顔を真っ赤にし、反射的にそこを抑える。

「ははは、ガイアもお腹減ってたんだね」

「お腹が空いてるなら正直に言いなさいよ。人間なんだし腹が減るのは当たり前でしょ…あんたも食べる?」

恥ずかしがるガイアの様子をライフィセットとベルベットは楽しみながら言う。

ガイアは赤くなった顔色と冷静さを元に戻した。

「じゃあ、お言葉に甘えて。でもいいのか?ライフィセットのために作ったんだろう?」

「結構多めに作ったから一人増えてもそんな変わらないわ」

ベルベットが卓上に置いたのはクッキー。

丸い形をしたそれらが皿一杯に盛られており、部屋に充満していた匂いが更に強みを増した。

「わあ、美味しそう!」

「クッキーか…久しぶりに見たな」

ライフィセットとガイアは一斉に手に取り、同時に頬張る。

じつくり味を噛み締め、口内で砕いたクッキーを胃袋へ送ると表情が一変した。

「甘くて、温かくて、おいしい…」

「固さもちょうどいいな。こんなに味わい深いクッキーはなかなかない」

「気持ち嬉しいけどそんな気を使わなくていいわ。変におだてられても嬉しくない」

「いやそんなことはないぞ。正直に思ったことを言った。どこの出店にもこの味を出せるクッキーは並んでないと思うぞ。うん、俺は好き」

だ。」

「あんた…本気で言ってるの?」

「ああ」

感情が表に出るライフイセットの言うことならすぐさま受け入れられる。

だがガイアに関してはそうはいかない。どうしても半信半疑になってしまう。

それは不信感からくるもの、というよりよくわからないからというのが正しい。

ロクロウは業魔だが義理堅いところがあり、自分の剣に誇りを持っている。

アイゼンは流儀を貫くことを信念とし、聖隸なのに業魔に手を貸すような不器用で変わり者。

エレノアも同行者となって共にいる時間は少ないが、真っ直ぐで自分の心に嘘をつくのが得意でない人間だとわかった。

皆それぞれその性格と行動が一致していてかつ一貫していたために、特徴を捉えるのは難しくなかった。

だがガイアはそうではない。

彼を説明するとなるとどう言っているのか、彼を表現する言葉が探し出せないのだ。

(こいつだけはいまいち掴めないのよね…マギルウでさえ胡散臭いの一言で片付けられるのに)

「―ベット、ベルベット」

「…え?」

「大丈夫か?聞きたいことがあるから話しかけてたんだが」

考えに没頭する余り意識が散漫になっていたようだ。

変に自分の考えを悟られてはいけないと踏んだベルベットは、思考の深淵から意識を引き上げた。

「何でもない。で、聞きたいことって？」

「前からこういうの作ってたのか？」

「こういうの、それが何を指しているのかベルベツトは察しがついた。だからすぐ答えようとした

答えようとして一瞬口に出すのを躊躇った。

思い出してしまったからだ。

自分の作った料理を一番好きでいてくれた、一番気持ちの良い微笑みで『おいしい』と言ってくれた弟。

その死に際の姿を

「ええ…昔はよくライフイセットが、あたしの弟が好きだったから」

「ベルベツト……」

「…そうか」

また静けさが蘇る。

クツキーにも手を出しづらい気まずい空気をなんとかしようとして、ライフイセットは意を決して自ら話題を振る。

「ガ、ガイアは自分でお菓子作ったことないの？」

「あ、ああ。あんまりないな。子どもの頃何度か挑戦してみたことはあるけどとても料理なんて言えるモノじゃなかった」

「そうなんだ…」

「でもまったく料理ができないってわけじゃないぞ。パスタなら大の得意だ」

「意外ね。全然そんなイメージないけど」

ライフイセットの気遣いが効を奏して少しだけ笑みが浮かんだベルベツトの冗談めかした発言に、ガイアは真っ向から反論する。

「そう言うなら今度新鮮な魚を仕入れた時海鮮パスタを作ろうか。海の幸がたんまり乗ったパスタは格別だぞ、幼なじみにだって好評だったからな」

「幼なじみ…あなたにそんなのいたの」

「…他人をなんだと思ってるんだ。俺にだって幼なじみの一人や二人いるぞ」

失礼とさえとれる言葉をしれつと放つベルベットにガイアは心外とばかりに目を細める。

だがガイアもそれが冗談だとわかっているために気分を害した様子はない。

「ガイアの幼なじみってどんな人なの？」

「どんな人か…」

ライフィセットの純粋な質問にガイアは戸惑う。

どんな人も何もライフィセットは既に会っている。

会っているどころの話ではない。今まさにこのバンエルティア号に乗っているのだ。

ちよつと歩けば普通に会話できるぐらいには近い場所にいる。

「可愛いかったよ。優しくて、思いやりがあつて」

「可愛いかったって、ガイアの幼なじみは女の人なの？」

「そう女の子。その幼なじみもこんな風によくお菓子作ってくれたよ。他にもオムレツとか色々な料理を作ってくれて」

「仲良かったんだね」

「喧嘩したりもしたけどな…今となってはそれもいい思い出だよ」

思わぬ形で明かされたガイアの過去にベルベットは関心を寄せる。

ライフィセットに追従してベルベットは彼に前から抱いていた疑念を訊ねた。

「そんな幼なじみがいるあんたが何で海賊なんてすることになったのか知りたいわね」

その問いにガイアは苦虫を潰したような顔をする。

―人の触れて欲しくないところを…

心中で悪態をつき、深く重い息を吐く。

「…色々あつたんだよ。色々と」

また重苦しい空気が沈黙と同居して漂う。

ベルベットもガイアも会話を続ける気はないのか閉口したまま。

ライファイセットはもう一度どうかこの居心地の悪い雰囲気を断ち切ろうと、新たな話を考えるがそうそう思い浮かぶものではなかった。

(どうしよう…また窮屈な感じになっちゃった)

「お、うまそうな物食べてるな」

ライファイセットが苦心していたところにロクロウとアイゼンが部屋に入ってきた。

彼らはライファイセット達と同じく椅子に座ると、二人から何か感じ取ったガイアの嗅覚が眉を狭ませた。

「酒臭い…さてはお前達、心水を飲んだな」

「応、うまい心水があると聞いてな。今アイゼンと飲んできたばかりだ」

「それはいいけど、あんまりライファイセットに近寄らないでよ」

酒に耐性のないであろうライファイセットに気を使いベルベットは二人に忠告する。

「どうして?」

「酒臭い人間の近くにいたら嫌だろ? 匂いに慣れてない年頃なら特に」

「心配するな。この程度の酒で我をなくすような酔い方はしない」

「なんならここでもう一杯やってもいいぐらいだよな」

「やるなら別のところでやれ」

「飲むなら他でやりなさい」

アイゼンとロクロウに息の合った切り返しをするガイアとベルベット。

あまりにもタイミングがピッタリだったせいかわれど、言われた二人も見守っていたライフセットもにやけずにはいられなかった。

そんな彼らの態度が気に触ったのかベルベットとガイアはジト目を向けて、不満をこぼす。

「何がおかしいのかしら」

「どうして笑えるのか教えて欲しいな」

またしても噛み合う二人。

そこで我慢できなくなったのかロクロウもアイゼンもライフセットも声を上げて笑う。

「ははは、悪い悪い。それよりここにある焼き菓子は誰が作ったんだ?」

ロクロウに問われたガイアはベルベットを指指す。

「ベルベットがお菓子作りとはな、人は見た目に寄らないというのはこのことか」

「確かに意外ではあるな。正直こんな特技があるなんてこれまで考え

もしなかった」

「あんた達、不満があるなら食べてもらわなくてもいいんだけど」

「すまん」「悪かった」

アイゼンとガイアは口を揃えて謝罪する。

脅迫染みた言い方をしたベルベットだが特別気分を損ねたようではなく、呆れた様子でぼやいた。

「冗談よ。食べたいなら好きにきなさい」

「応、そうさせてもらう」

許しを得たことでロクロウとアイゼンもクッキーを口にする。

「おお、うまい。ベルベット、お前なかなかの料理の腕前だな」

「焼き加減も食感も申し分ない。少々甘めな気もするが、こういう味も悪くない」

「あんた達まで…いいわよ。そんなお世辞なんて」

「俺は本当のことを言っただけなんだがなあ。なあアイゼン」

「俺達がこんなことで嘘について何の意味がある」

「それはそうだけど…」

「もつと自信を持って、このクッキーの出来栄えは一朝一夕にできるものではない。お前の腕前は確かなものだ」

あまり誉められることに慣れていないのかベルベットはどんな対応をすればいいのか困り果てているようだった。

何時になく落ち着かない感じの彼女を面白おかしく思いながら、ガイアはクッキーをつまみ上げると

「何やら香ばしく騒々しい空気を嗅ぎ付けてきてみれば儂抜きでこっそり面白そうな集いをしておるのう」



後ろからそれをひったくられてしまう。

地を這いずる大蛇のようにねちっこい不吉な声に虚を突かれたガイアは素早く後ろを振り向く。

案の定そこにはクツキーを頬張るマギルウがいた。

「それ俺の…」

「ふん。儂を除け者にした罰じゃ。弟子の癖していつから師匠への氣遣いができんとは、お主は一体儂から何を学んできたのか…ひじょーに嘆かわしい限りじゃよ」

「教えてもらってないことをやれと言われても無理な話なんだがな」

「言われたことだけを教えと思うからいつまでも一人立ちできぬものというのに…見て学ぶこともまた教えというもの。儂のむだーのない立ち振舞いを見てお主は何も感じなかったのかえ？」

「そうだな…あんたを見てきて勉強になったことがあるのは事実だな。全部反面教師としてだが」

「それでも構わんど。役に立っているのならば師匠冥利に尽きる…というわけで授業料としてお主の分ももらうぞよ」

目を合わせるなり相手に対して遠慮のない言葉をすりと吐くマギルウとガイア。

新たなクツキーを手に取ろうとすれば、横からマギルウに空いている側の手で払いのけられてしまう。

「……」

手を伸ばしては弾かれ、弾かれては手を伸ばしと何度も何度も粘り強く勝負をしかけるも、マギルウの妨害を攻略できず、クツキーをゲットできない。

奪ったクツキーを食べ続けるマギルウと違い両手が空いているにも関わらず、片手で挑み続けるガイアにベルベットは目を細めてこう言った。

「両手使えば？それなら簡単に取れるでしょ」

「プライドの問題だ。両手を使った瞬間、負けた気がしてならない」  
「負けつて…別に勝負なんてしなくてもいいでしょ」

ベルベットにとってはガイアの言い分に凄まじく首を傾げたくなるのだが、アイゼンとロクロウは口には出さないながらも同意するよ  
うな表情で頷いている。

(男ってどうしてこう…)

ベルベットが呆れ返っている目の前で、さすがに断念したのかガイ  
アは負けを認めて体を動かすのを止めていた。

「つたく…困った師匠だことで」

「ガイアも大変だね。いつもマギルウに付き合わされて」

「その言葉、聞き捨てならぬぞ坊よ。それではまるで儂が嫌がるこや  
つを無理矢理従えているようではないか」

ライファイセツトの発言を心外と言わんばかりにマギルウは人差し  
指を左右に振る。

「違うの？」

「違う違うう！こやつは家来ではなく弟子、魔女は家来をぼろ布の如  
く骨の随までこき使った挙げ句捨てるが飼いだの犬のように愛しい弟子  
はとーてもだーいじにする。そういう生き物なんじやて」

―俺は犬と一緒にかい

身勝手にして理不尽な理屈にガイアは口を閉ざしたまま文句を呟  
く。

不満ありげな彼から刺のある眼差しを受けても、マギルウはどこ吹

く風と言いたげな笑顔でクツキーへ手を運ぶ。

「ところでいつまでそこにおるのじゃ？さっさと出てこんど全部儂が平らげてしまおうぞー」

食べながら喋るマギルウにガイアもライファイセットも首を傾げたくなる気持ちが生まれ、部屋の中で唯一死角となる出入口へ視線を移す。

マギルウが入ってきたきり開きっぱなしになっていた扉の陰から現れたのは、エレノアだった。

「エレノア…」

「立ち聞きをしましてしまい申し訳ありません…この船を散策したらこちらから声がしたのでつい」

「いつからいたの」

謝罪の言葉には興味はないのかベルベットはエレノアに訊ねる。

聖寮には裏切り者と見なされたがやはり対魔士なだけあってベルベットは警戒心を緩めない。

「私が扉の前に来た時見たのはマギルウとガイアが口論をしていたところですよ」

「声が聞こえたのは？」

「最初に聞こえてきたのはマギルウの声でした。他には何も」  
(だとするとマギルウが入ってきた少し後からエレノアはこの前にいたのか)

雰囲気に出さずガイアは安堵した。

もしエレノアがもっと早くに立ち聞きをしていたら危うくフードの奥に隠れた顔がバレる可能性が濃厚だった。

「エレノアも一緒に食べない？ベルベットのクッキーすつごく美味しいよ」

「え…よろしいのですか？」

ライフィセットの誘いにエレノアは戸惑いを口にする。

「いいよね？ベルベット」

「食べたいて言ったのはあんたよ。あんたがいいならあたしは言うことはない」

「ありがとう」

「…ではお言葉に甘えて」

エレノアも席に着きクッキーを頂く。

「これあなたが作ったのですか？」

「そうよ。何か文句ある」

「いえ、そういうわけでは…その、美味しいです」

業魔の手で作られたとは思えぬ一品だ。

甘くて、優しく、温かみがある。

真心が込められているのだとエレノアはこのクッキーから感じた。

(これが業魔の作った料理…人間が作ったものと変わらない)

エレノアは改めてクッキーを食べ、それからベルベットを見て思った。

「おっと、もうこれだけか」

ベルベット以外の全員が一度はクッキーを食べたため、残る数は僅かになっていた。

「七つか：ちようどここにいる全員に一つずつ行き渡るな」

「あたしの分も食べていいわよ。今はお腹空いてないし」

「では儂が頂くとしよう。もう一人の弟子の後始末を片付けるのも上に立つ者の義務じゃからな」

ベルベットの分はマギルウがもらおうということでも話がまとまり、皆一斉にクツキーを手取る。

「ではでは皆の衆、最後の一つ心して食そうではないか」

何故かマギルウが合図を出したものの、皆同時にクツキーを口に入れる。

が、ここである一人に異変が起きた。

「待つて欲しいでフ〜!!」

「ぶっ!？」

その者はクツキーに食い付く前に後頭部に衝撃を受け、行動が一時停止する。

生まれた数秒の隙にその者にぶつかった物体は、握られていたクツキーを一口で飲み込むと満たされたような顔をした。

「ふ〜ギリギリだったフね〜」

それはビエンフーだった。

彼は不満に頬を膨らませながらもクツキーを飲み込む。

「こんな美味しいクツキーがあるのにどうしてボクにも声をかけてくれなかったんでフか。ボクだって皆と一緒に美味しいお菓子食べたかったでフよ」

「悪い。完全にお前のこと忘れてた」

「僕も…ごめんね、ビエンフー」

「な、なんでフとく!?もしかして皆ボクのこと忘れてたんでフか!?悲しいでフよ…」

オブラートに包まずに真実を述べるロクロウと悪びれるライフイセツトを前にビエンフーは涙する。

誰もがビエンフーに目を向ける中、一人だけ異なる視線を送る者がいた。

「なんで他人<sup>ひと</sup>のを取った…ビエンフー」

抑揚のない声で呟くガイア。

ビエンフーの激突を頭にもらったのは彼だった。

「だってもうボクの分がなかったじゃないでフか」

「だからってなんで俺のにした」

「それはガイアが一番取り安そうな場所だったからでフよ。黙って取ったのは申し訳ないでフけど悪く思わないで欲しいでフ。食事も立派な戦いの一つ、非情の戦いは非情を持って制す…アルトリウス様の戦訓でフよ」

—それがわからないんじゃないやガイアもまだまだでフね!

ビエンフーは言うだけ言って部屋を去っていく。

「ベルベット、エレノア…確か戦訓の一つに『勝利を確信しても油断するな』ってあったよな」

無音となった室内で立ち上がったガイアをベルベットは黙りこんだまま見つめる。

エレノアもこの後ガイアがとるであろう行動が予測できていたの

か、何も言わずにいた。

「ごちそうさま。美味しかったよ」

ベルベットへ賛辞の言葉を差し出すとガイアは部屋を出る。

その姿が暗がり消えてどたばたと足音が鳴り、それからすぐ叫びが部屋に届いた。

「ごめんなさいでフ！悪かったでフ、ボクが悪かったでフから追いかけてくるをやめて欲しいでフー！ビエエエ〜ン!!」

足音が遠退いていくのに悲鳴だけは変わらずはつきりと聞こえる。

誰もがビエンフーに哀れみを抱き、ロクロウに至っては「南無」と両手を合わせていた。

「止めに行かなくていいわけ?」

「知らん知らん、弟子と家来の揉め事なんぞいちいち止めておつたら体がいくつあってももたぬ。ただでさえ儂の体は花の茎のように折れやすく、繊細なんじゃから」

マギルウの戯れ言はともかく、ベルベットは師匠マギルウに見捨てられた家来ビエンフーに微かな同情を感じた。

## 第18話 壊賊病

サウスガンド領へ進路を取るバンエルティア号。

波風に両側を結った髪を揺らすエレノアはある光景を見ていた。

「進路はどうだ。ライフイセット」

「大丈夫。この方向で合ってるよ」

「そうか。何か問題があれば遠慮なく言え。この船の舵を握っているのはお前だ」

「任せて。僕がちやんと皆をイズルトに着けるようにするから」

「大した心意気だ。そこまで言うなら心配ないだろうが、もし間違えたら承知しないぞ。気を緩めるなよ」

羅針盤を片手に進路を確認するライフイセットと彼を激励するアイゼン。

エレノアが捉えていたのはその両者だった。

「そんなに珍しいか？あの二人が。さっきからじっと見て」

ふと後ろから聞こえてきた声。

エレノアがそちらに目をやると彼女が想定していた通りの相手が、ガイアの姿があった。

彼に向けた視線を一旦切ってまたライフイセットとアイゼンに移したエレノアは暫し、間を置いてガイアに口を開く。

「彼らは最初からああなのですか？…初めからあのように彼らは自分の意思を持っていたのでしょうか？」

「…そうだな。二人共最初から意思があった…いやアイゼンはそうだったがライフイセットは違ったな。初めて会った時からあんな風にはつきり自分の感情を表に出していたわけじゃない」



エレノアの問いかけにそう答えたガイアは出会ったばかりのライファイセットの顔を思い浮かべる。

「ライファイセットが聖寮の使役聖隷だったのは知っているだろう？  
会って間もない頃は感情を表現することもなかったし喋るなど言われたら本当に何も言わなかった。文句一つ何も」

テレサに付き従っていた時からライファイセットは無機質な表情しか作らなかったし、どんな命令にも抗わず従っていた。

「それが今じゃあんな風に自然な笑顔を見せるようになったの本人の中で色々な要因があったろうが、たぶん一番は名前を与えられたことだろうな」

「名前…？」

エレノアの反復にガイアは頷く。

「二号なんて味気ない名前よりよっぽど意味のある名前を与えられてからライファイセットは大きく変わった。死んでいたも同然の扱いを受けていた使役聖隷だった時よりずっと生き生きしてる」  
「聞き捨てなりませんね」

温かい声色で語るガイアだったが、彼の言葉を黙って聞いていたエレノアに反発されてしまう。

「私達対魔士は聖隷に不当な扱いなどしていません。聖隷がなくては対魔士は業魔と戦うことはできない。だからこそ私達は聖隷を貴重に扱っています」

「道具として貴重に、だろ」

エレノアの言葉を制してガイアは低くそれでいて力強く否定する。

「例え聖隷が意思を持っていた事実を知らなかったとしても聖隷を道具として扱い利用していたのも事実。最期の時まで意思を封じられたまま命を散らした聖隷達の前でその言葉を堂々と言えるか？」

真っ直ぐ見据えエレノアを映したガイアの瞳は彼女を通して別の存在を被せていた。それはかつての自分。

昔聖寮のいた頃の自分とエレノアは瓜二つだ。

聖寮の教えが世界の真理と信じ、まるで疑わおうとしなかった。見えていた世界の姿を本当の意味で理解していなかったのだと、今の彼女を見ていると改めて実感させられる。

「…アルトリウス様の理想のためです。人々が幸せに暮らせる世界を、災厄のない世界を作るアルトリウス様の理想の実現するためにはやむを得ないことです」

「その理想を実現するためになら聖隷がどうなろうと構わない…ずいぶんと優しい救世主様だ」

「あなたのような無法者の海賊にはわからないでしょうね。アルトリウス様のかげける理がどれだけ多くの人の希望になっているか」

あからさまな敵意の込めて鋭く睨みつけるエレノア。

話に踏ん切りがついたと見なしたエレノアはガイアの横を通り抜けるが

「使役聖隷はどうした？」

エレノアが完全に体を横切る前にガイアからそう訊ねられた。

その質問の意味を察した途端、彼女は微かに体を震わせた。

思い出したのだ。かつて志しを同じくした者によって自身の使役聖隷をなくしたことを

「これまでの戦いでお前は本来使役していた聖隷を出すことはおろか素振りすら見せなかった。何故だ？」

「その質問に答える義務はありませんよね」

一度は止めた足を動かし、ガイアから離れようとする。

だが不意にエレノアの左手を温かい感触が包み込む。

「え……」

左手から伝わる感触にエレノアは目を張り、その正体を探る。

真つ先に見えたのは彼女の手を握るもう一つの手。

エレノアが目線を上げると、その手を伸ばしていたのはガイアだった。

「大事なことだ。これから背中を預けることになる以上は戦力の確認は欠かせない。だから、教えてくれ」

「え、あ、はい……」

思いも寄らぬ相手が意外な行動を目の当たりにしてエレノアは当惑しながら、浮いた返事をするしかなかった。

一拍間を置いて落ち着いたエレノアは呼吸を整えてから、語りかけた。

「ご推察の通り今私の聖隷はライフイセットだけです。以前使役していた聖隷は紛失しました」

「失った原因は？」

「それは……業魔に奪われました」

薄々予想していた回答だった。

ガイアは思考の海に浸かり、考え込む。

(やっぱり使役聖隷を失っていたか…離宮ではベルベットもロクロウも使役聖隷を殺していないはずだ。なら殺したのはもつと別の業魔…一等対魔士の使役する聖隷を殺せる強力な業魔が他にいるのか…)

そうガイアが考えを巡らせていると

「あの…もういいですか?」

「どうした…?」

「ですから手を離してもらえますか?」

「あ、ああ。すまない」

「い、いえ」

指摘されて初めてエレノアの手を掴んでいたのに気付いたガイアは。パツと素早く手を離し、そっぽを向く。

エレノアもまた気まずそうな素振りをしていた。

そのままどちらも動かず静寂が流れる。

「全員緊急体制ー!!」

居心地の悪い空気の中ベンウィックの伝令が勢い良く駆け抜けた。

「一体何事ですか?」

「アイゼンに話を聞く。一緒に来い」

戸惑うエレノアを連れ添ってガイアは階段を下りる。

そしてアイゼンやベルベットなど海賊員を抜いた全員が集まっているのを見ると、そこに合流して状況の確認を行う。

「何があった?」

「壊賊病だ。さっき三人倒れた。三日前に最初の兆候が見られた」

「三日前…それだけ前に発症してるならここにいる全員が…」

「おそろくな。エレノア、お前はどうか？体の不調を感じないか」  
「いえ問題ありません。ですが何故私だけに聞くのです？そもそも壊  
賊病とはどのような病気なのですか？」  
「壊賊病とは――」

アイゼンが答えようとするとそれを遮ってマギルウ代わりに説明  
する。

「原因不明の高熱を発し最後は砂のごとく崩れて死ぬという奇病  
じゃ。かつて四海を制した海賊団の船で流行し、一味が全滅したこと  
から『壊賊病』と呼ばれるようになったとか色々言われておる。空気  
中の塩分濃度が関係しているとも、海水に住む微生物のせいとか原因  
は未だに不明な病じゃが何故か人間にしか感染しないのじゃよ」

懇切丁寧に語るマギルウのおかげで壊賊病について理解したライ  
フェイスは、説明を聞く中で生まれた疑問を素直に言葉にした。

「人間しか発症しないならマギルウやガイアもじゃないの？」  
「ハッ!? そうであった！ なんとという悲劇、こんなところで死んでしま  
うとは――」

楽観的な声色で大げさな仕草でへこたれるマギルウ。

そんな彼女に誰も心配を寄せることはなくむしろ

(マギルウが奇病で死ぬなんて天地がひっくり返ってもありえない)

そう確信めいた思いを持っていた。

「少しでも体調が変だと感じたら言ってくれ」

「それはあんたもよ。あんたも感染するかもしれないんだから」

エレノアを気遣うガイア。

ガイアの感染を懸念するベルベットはそうはつきり告げるが、彼はきっぱりその可能性を否定する。

「俺は平気だ。そういうのには耐性がある」

根拠のない言葉であったがベルベットはそれ以上追及せず、話す相手をアイゼンに変更する。

「治す薬はあるの?」

「もちろんだ。海賊病にも特效薬がある。今進路を変えてそこに向かっている…」

「ここから近いのか?そこは」

「ああ…」

そこでアイゼンは一時ある人物の顔を伺った後、その場所を口にする。

「レニード港だ。壊賊病の特效薬サレトーマの花はそこで手に入る」

レニード、その地名に縁がある二人が驚愕に目の色を変えたのはほぼ同時だった。

「奴らはレニードに向かうようだ。今しがた報告があった」

海を隔てたログレスの聖寮本部にてメルキオルとゼブブは秘密裏に集まっていた。

「レニード、面白いところに足を運んだな。よもやアレの存在に気付

いたのではないか？」

「いやどうやら思わぬ事故があったようだ。報告を聞く限り、レニードに向かうことは奴らも想定していなかったと見える」

顎髭に手を添えるメルキオルの返事にゼブブは両腕を後ろに回し  
呟く。

「ゼブブ…少々手を貸してはくれぬか」

「ほう、お前が自ら儂に協力を申し出るとは珍しい。一体どんな無理  
難題を押し付けられることか」

「単純な人探しの延長だ」

「…なるほど。そういうことならば喜んで協力させてもらおう」

メルキオルが画策していることにおおよその見当がついたゼブブ  
はこれから起こるであろう未来に、口角を少し吊り上げた。

## 第19話 計略の地

レニードの地に無事降り立った一行はバンエルティア号をベンウィックに任せ、サレトーマの花を求めて街へ入る。

「この街に壊賊病を治す薬があるって話だったよな。サレなんとかって名前の草」

「サレトーマだ。ちょうど今はサレトーマが旬の季節だ。薬屋に行けばすぐに手に入るだろう」

「急がないと病気が悪化しちゃう。早くバンエルティア号に届けよう」

「ああ。わかっている」

アイゼンを先頭に一行は街中を進んでいく。

その最中对魔士の駐在所らしき建物の前で複数の人々が対魔士を囲んでいた。

「ローグレスの司祭が業魔の群れに殺されたというのは本当ですか？ 対魔士様」

「何度も言うがその事実はない。」

「でも大司祭様はいつまでたってもお仕事に戻ってないって言うじゃないですか。本当は業魔に襲われたんじゃないかって王都から来た人が言ってたんです」

喧騒から漏れる抗議の声。

それを見物しているロクロウは事情を察し、腕を組む。

「隠そうとした真実が漏れ始めたか」

「虚構で塗り固められた真実など脆いじゃよ。人の心に不安の種を生むはたやすく、その種は成長し恐れや恐怖となる」



そう冷淡にポツリと言うロクロウとマギルウの前で対魔士を取り囲む民衆は不安を口にする。

「また恐ろしい災厄の時代がきたんですか？」

「本当のことを教えてください対魔士様。俺達はもう業魔の恐怖に怯えた暮らしはしたくないんです」

「そうよ。もう二年前みたいに怖い思いはしたくないわ！」

「落ちついてくれ。司祭の件はいずれ正式発表があるまで待つてほしい。不安な気持ちはわかるが我々を信じて欲しい」

対魔士は人々の不安を取り除こうと試みるが、一度芽生えた不安の種はそう簡単に消えはしない。

「先を急ぐわ。こんなところにおいても時間の無駄」

対魔士の言葉を受けてもまだ場を去ろうとしない民衆を尻目にベルベット達は先を急ぐことにした。

街の隅の方で薬屋を発見すると、アイゼンがその店主に頼みを入れる。

「サレトーマが欲しい」

「珍しいものを欲しがるね。もしかして壊賊病かい？」

「ああ、最初の奴が熱を出して三日になる。早く手当てしてやりたい」「そうか：悪いが今は切らしてんだ。」

「何故品切れになる。今が花の季節だろう」

「サレトーマ咲くワァーグ樹林に業魔が出てな。聖寮が樹林への立ち入りを禁止しちゃったんだ」

急いでいる時に限って何故都合の悪いことが立て続けに起こるのか。

これまでの旅路を振り返ってベルベットはそう小言をこぼしたく

なる。

「立ち入り禁止…？退治してないのですか？」

「よくわからんが探してもめったに見つからないらしい。百回に一回  
出くわすかどうかだとか」

「それ、危険じゃないだろう」

ロクロウが最もな意見を述べ店主も顔にその通りと出しつつも、その言葉を否定する。

「だが出会って生きて帰ったやつはいないんだ」

「壊賊病、薬はない、聖寮に妙な業魔。いよいよ死神の呪い全開じゃのー」

店主に茶々を入れるマギルウ。

いつもならば誰かしらが一言言うなりしているところだろうが状況が状況なだけに、彼女の茶々に対する反応はなかった。

「他の街から取り寄せられるかもしれないけど発熱三日じゃ間に合うかどうか…」

正規の手段ではサレトーマの花を入手が不可能と知り一行は険しい顔をするが、その顔をしたのは店主も同様だった。

「やれやれ、二年前の一件に続いて今回のワァーグ樹林の業魔…この街はいつになったら業魔から解放されるんだ？」

「さっきの街の連中も言ってたな。二年前がどうのって」  
「二年前にここで何があったの？」

店主の口から出た言葉に覚えがあったロクロウとライファイセットが訊ねる。

「二年前ローグレスから対魔士の編隊がブルナーク台地にある遺跡の調査に来たことがあったんだ。だが不思議なことに遺跡に行つたきりその対魔士達が一人もこの街に帰ってくることはなかった」  
「……」

話を聞いている途中でエレノアは顔を俯かせる。

そんな彼女の様子を見逃さなかったベルベットとガイアはそれぞれ異なる心境を持ったが、それを口にしようとは思わなかった。

「その対魔士達はどうなったの?」

「それからちよつと日が経つてからまた王都から対魔士達が大量来て遺跡に搜索へ向かったものの、一人も生存者はいなかったそうだ」

「遺跡の調査をした対魔士が全滅した原因も業魔だったのか?」

「搜索から帰つて来た対魔士が言うにはそうらしい。調査隊を全滅させた業魔が出た危険な遺跡だからくれぐれも近付かないようにつてな」

「近付かないようにつてそれだけか?討伐は?」

「そこまでは知らないよ。それきり遺跡に対魔士が行くようなこともないし何がなんだか…まあ、はつきり言えるのはこの辺りも物騒になったつてことだけは確かだな」

それで話は終わりと店主は口を閉ざす。

「ワアーグ樹林に行けばサレトーマの花は咲いてるのね?」

「たぶんな、でも森には業魔が—」

「ワアーグ樹林へ向かうわよ」

店主の言葉を途中で断ち切る形でベルベットは街の出口に体を向ける。

他の面々もその後を追い、レニードの街を出て街道を歩き始めた。

「やはり死神は天運に見放されておるようじゃのう…まさかわざわざ花を取りに行くハメになるとは。ほんとお主らとおると退屈せんで済むわい」

例によつてマギルウがぐちぐちと文句を垂れるもそれに耳を貸す者はいない。

そんな折、元氣のない様子のエレノアを気に止めたライフィセットは彼女を心配する。

「大丈夫？エレノア。ずっと暗い顔してるけどどこか具合悪いの？」  
「いえ、体はどこも悪くありません…少し考え事をしてただけですから」

ライフィセットにそう返してまたエレノアは浮かない表情に戻る。その理由におおよその予想がついているライフィセットはエレノアに聞いてみることにした。

「考え事ってもしかしてさつき薬屋のおじさんが言つてたこと？」  
「ええ…」

重々しく肯定したエレノア。  
それからロクロウが疑問を言葉にする。

「聖寮は遺跡の業魔をほつたらかしたと言つてたがらしいがあれは本当なのか？」  
「怪しいところね。ワアグ樹林の業魔だつて退治はしてないみたいだし。呆れるわね、全のためなんて言っておきながら業魔を野放しにしておくなんて」

「ほお、神に身を捧げた司祭様を殺した挙げ句今また導師様をも殺そうと目論む凶悪な業魔はさすが言うことが違うわい」

嫌味つたらしくからかいをマギルウにベルベットは苛立ちから舌打ちをする。

「エレノア、あんたなら知ってることはあるんじゃないの？」

「薬屋の方が話した以上のことは私も知りません…」

「知らないの？対魔士なの？」

「ブルナーク台地の遺跡の件について聖寮ではほとんど何も聞かされていませんでしたから。アルトリウス様にお伺いしても調査隊は業魔によって全滅し、その業魔の行方はわからずじまいだとか」

「それだけしか知らないならどうしてそんな顔までして悩む必要があるんだ？」

答えるか答えまいか逡巡した結果エレノアは答える選択肢を選んだ。

「私の幼なじみがいたんです…小さい時からずっと一緒にいて同じ一等対魔士だった私の幼なじみが調査隊の一人に選ばれたんです」

「え、じゃあエレノアの幼なじみは…」

いいよどむライフイセツト。

その先が言えない彼に代わってベルベットが言う。

「死んだのね」

「…捜索に向かった隊が持ち帰った片腕が彼のものでした。他に遺体も生存者も見つからなかった…そう言っていました」

「エレノア…」

目を伏せるエレノアになんと言葉をかけたらいいかライフイセツトが迷っていると、ロクロウがふとこんなことを呟いた。

「一等対魔士を打ち破る業魔か…そこまで腕の立つ奴なら一度お目にかかりたいものだな。斬りごたえがありそうだ」

「ロクロウ！」

「つと、すまないエレノア」

無遠慮な発言をしたロクロウをライフィセットは声を荒げて咎める。

そこで失言だったと気付いたロクロウは素直に謝罪を口にした。

丁度その時一行は視界を緑一色で塗り潰す程に左右に広がるを森を目前にした。

ワアーグ樹林に着いたのだ。

「ここで間違いないのね」

「この奥にサレトーマの花が咲いているはずだ」

念のためアイゼンに確認したベルベットを先頭に一行はワアーグ樹林へ入り込む。

「さっきの話だがどうだ？」

「間違つてるところはない。ただ—」

「なんだ？」

「やっぱり本当のことを包み隠さず、つてわけでもないみたいだ。調査隊の一人はメルキオルの指示で動いていた…アルトリウスが何も知らないなんてことはない」

「メルキオルか…」

肩を並べ密かに話し合いながらアイゼンとガイアは思索する。

二人にとってアルトリウス以上にメルキオルが気になる存在だ。

ブルナーク台地の遺跡でのこととアイフリードの失踪。

どちらにもメルキオルが絡んでいる。

「アルトリウスの近くにいる対魔士の中でも一番素性がわからないだけに何を考えてるか全然読めない。たぶんエレノアもテレサもオスカーも、メルキオルのことをよく知らないと思う…聖寮にいた時は気にならなかつたけど本当に謎が多すぎる…」

「同じ組織に属していた者にすらそう言わせるとはな…アルトリウスが表立って動く可能性がない以上、やはり奴を引きずり出して情報を聞き出すしかなさそうだな」

ふと先頭を歩いていたベルベットが止まる。  
何事かと正面を見ると対魔士が二人いた。

「あの対魔士妙だな」

「業魔を警戒している…ようには見えないな」

ロクロウが違和感を感じたのは対魔士の動作だ。  
緊張感の欠片も見受けられない立ち振舞いはガイアの言う通り同じ密林にいる敵を意識しているとは思えない。

「片付けるわよ」

だがベルベットにはそんなのは些細なことだった。  
先に進むためには対魔士を蹴散らす必要がある。  
今重要なのはそれだけだ。

「貴様、何者だ！」

木陰から姿を現したベルベットに対魔士達は虚を突かれながらも武器を取り出し、身構える。

遅れてロクロウ達もベルベットの加勢に入り、戦闘が始まった。

対魔士の召還した聖隷が放出した水弾をマギルウが火の霊力弾で相殺し、両者の中間で水蒸気爆発が起こる。

その中を突っ切ったガイアが勢いのまま回し蹴りで聖隷は吹き飛び、木の下に転がる。

「破ッ！」

その聖隷を使役する対魔士も、剣をロクロウの小太刀に弾かれ無防備になったところを斬り上げられバタリと倒れ伏す。

「ヴォイドラグーン！」

「はああああ！」

「こいつら……まさか！うおおあああ!!」

残る一組の聖隷と対魔士もライフイセットとベルベットの波状攻撃に呆気なく敗れる。

「こいつら何だったんだ？業魔を探していたようには見えなかったが」

「力量から言って二人とも二等対魔士だろう。しかし業魔がいるとわかっていながら二等対魔士がたった二人でいるなんて……聖寮にしては珍しい編成だな」

這いつくばる二等対魔士を見下ろすガイアが何気なく視線を反らすと、自らをじっと見つめるベルベットの気付く。

「どうしたベルベット？」

「何でもないわ」

それよりとベルベットの森の奥地に目をやる。

彼女の態度に首をかしげかけたくなるガイア。

そんな彼の心情に構わず新たな出来事が起こる。



「あつ…」

ライファイセツトの持つ羅針盤の針が奇妙な動き方をし始めたのだ。不可解な現象を目の当たりにした彼らはライファイセツトの周囲に集い、羅針盤の動きに注目する。

「あなたが動かしているのですか？」

「違うよ、急に動きだしたんだ」

「アイゼンの金貨のようにこの子と同調を…？」

「アイゼン、お主は地の聖隷じやる？何か感じんのか？」

「いや俺よりライファイセツトの感覚の方が鋭いようだ」

アイゼンがそう断言したと時を同じくして羅針盤の異常な回転は止まる。

「止まったな」

「止まったけど、変な感じがする」

「どんな？」

「この前地脈に閉じ込められた時と似てるっていうか…」

ベルベットに自分の感覚を説明したライファイセツト。

それを聞いてベルベットとガイアはそれぞれの見解を心中で述べる。

（つまりカノヌシの力に近い…？この先にいるのは普通の業魔だけじゃなさそうね）

（地脈…ミズノエノリュウの力が影響してるのか…？）

考え事から意識を切り替えた二人は己と同様に思考していた相手と目が合った。

「あんたはどう思う?」

「判断材料が少ないし聖隷の二人がわからないんじや何とも言えない。とりあえず今は先を急いだ方がいいだろう」

「同感ね」

意見の合致を経たところでベルベット達は改めて森の奥地を目指す。

するとやがて拓けた場所に行き着き、そこに紫色の華が少ないながらも育っていた。

「あ!紫色の花が咲いてる」

「それがサレトーマの花だ」

好奇心もあつてか花へ一直線に駆けるライフィセット。

じっくり花を根元から花卉にかけて眺めるライフィセットにマガイルウが横槍を入れる。

「どうじゃ坊サレトーマの花はシユミの悪いじやろ?色の組み合わせも最悪じやし。ガイアもそう思わんか?」

「言われてみれば確かにどこかの誰かみたいな服の色してるな」

「ほうほうありがたいのう。それはシユミの悪い組み合わせだろうと華麗に着こなす儂への褒め言葉じやろう。何だかんだ言いながら常日頃儂をその見つけておつたとは意外じやな」

「自分で趣味が悪いって自覚はあつたんだな」

ガイアとマガイルウの下らない言い争いを間近で聞かされているのライフィセットは熱心に花の観察を続行していた。

「サレトーマはシユミが悪いね…でもこれでみんな助かる」

これではバンエルティア号に戻るだけ。

誰もが安心して胸を撫で下ろした時だった。

ライファイセツトがサレトーマの花の根元に昆虫を見つけたのは

(珍しい虫…)

図鑑でも見たことのない虫の発見に心を躍らせたライファイセツトはその虫に触れようとした。

だがそのタイミングを見計らったように虫は一瞬にして巨大化し、ライファイセツトは尻餅を付いてしまう。

「うわああ!？」

「ライファイセツト!」

「危ない!」

異変に真っ先に反応したベルベットが跳躍と共にブレードを振りかざして虫を遠ざけ、遅れてガイアもライファイセツトの腕を引っ張って助け出す。

「これが薬屋が言っていた業魔」

「違くない。これだけ大きな、まして虫の業魔だったとは思わなかったが」

「大丈夫?」

「うん」

エレノアとガイアが業魔の正体について呟く傍ら、ベルベットがライファイセツトの無事を確認する。

そんな彼らには興味がないのか巨虫の業魔は羽根を広げ、空へ飛び立つ。

別の場所へ移動しようとする業魔だったが、それを許すものかとばかりに光の結界に阻まれ地に落ちゆく。

「またあの結界」

ローグレスの離宮で同じ結界を見たベルベットはその時の記憶を思い起こす。

一方で対魔士だったガイアは業魔を閉じ込める形で張られている結界に目を見張る。

(あの結界は一等対魔士ですら展開するのは至難の技のはず。それが張られているということはこれを仕掛けたのは特等対魔士。これもメルキオルの仕業か?)

結界を張った人物として疑いのある特等対魔士の顔が頭の中を過る。

だが今はそれを深く考えていられる状況ではないと、目の前の相手に集中する。

「何にしてもこの空飛ぶ虫を倒さねばサレトーマの花は手に入らぬぞ」

「わかってる。やるわよ!」

ベルベットの激が飛ぶ。

各々武器を握り、対峙する中ロククロウがこんなことを言い出した。

「なあアイゼン。あれってもしかしてアレだよな」

「間違いなくアレだ」

「だよな」

「ああ」

ロククロウとアイゼンの二人は巨虫の業魔の姿を前に、どこか楽しげに笑みを浮かべた。

「あれはクワガタだ」

「あれはカブトだ」

両者一斉に声を発し、一斉に相手の顔に目を向ける。

「おいおいあれはクワガタだろ。どう見たってハサミがある」

「いやあれは一見ハサミに見えるが実は角とみた。あれは三角のカブトだ」

「いやいや普通のハサミでいいだろ。なかなかの名刀だぞこいつは：それに見ろ、見た目も強そうだ。あれは最強の昆虫、クワガタの一種だ」

「：聞き捨てならんな。昆虫界の王者、カブトを差し置いてクワガタが最強だと？」

敵の目の前だと言うのに敵をそっちのけで議論を続けるロクロウとアイゼン。

それを止めるべくベルベットは口を挟むが、そう単純にはいかなかった。

「ちよつとあんた達」

「すくい上げしかできないカブトが最強なんてありえん。その点クワガタは相手を挟み切ることができる」

「哀れだな。圧倒的なパワーで我が道をゆく。そんなカブトの生きざまを理解できんとは」

段々会話の雰囲気が悪くなってきた。

ただでさえ敵を前にしているのにこれはまずい。

見かねたガイアはベルベットに代わって会話を納めようとする。

「今は敵に集中しろ！そういう話は後で三人でじっくり語ればいい！」

「三人…？」

「さら〜つと自分も頭数に入れおつたの。さてはあやつ内心仲間に入りたくてウズウズしておつたではあるまいな…」

どこかズレたガイアの発言にエレノアとマギルウが呆れがこもつたジト目になる。

「僕も混ざっていい？」

「当然だ。ロクロウ、決着は後回しだ」

「応、まずはこっちの決着を付けてからだな」

「いくぞ！」

完全に目的と異なる方向性にする気を出す男性陣一同。

たかだか昆虫にムキになるその様に女性陣三人は素直に本音をこぼした。

「バカね」

「バカ丸出しじゃな」

「子供ですね」

## 第20話 仲間じゃなくても

三つ角の昆虫業魔グロッサアギトとの戦いが幕を開けた。

「はあっ！」

「せえい！」

先に動いたのはベルベットとエレノア。

ブレードと長槍を振るい飛びかかるも、グロッサアギトはその巨体からは考えられない素早さでかわしてみせた。

「ウインドランス！」

続けて放たれたのは多方向に拡散する青い光の弾と疾く切れ味の鋭い風の刃。

一斉に迫るそれらの攻撃に動ずる素振りにはグロッサアギトにはなく、むしろ被弾を省みず突進してきた。

「かわせー！」

「よけるー！」

流星の如く猛スピードで接近するグロッサアギトの突進を、ガイアとアイゼンは互いを心配しながら真横へ飛んで回避した。

ほんの数秒前までいた地点の土は深く、大きく抉り取られ、破壊力の高さをまじまじと見せつけられる。

「危なかったな。今のは」

「すばっしこい上に頑丈とは面倒な相手だ」

それだけの破壊力を秘める突進もそうだが、光弾と聖隷術をもろともしないグロッサアギトの頑丈さに二人は肝を冷やす。

「呑気に言うておる場合ではないぞ！また来るぞ！」

『グアアアア!!』

グロッサアギトは自らの体を回転させて再び突撃してくる。

マギルウが霊力を圧縮した光の爆発を起こすも、グロッサアギトの侵攻は止まらない。

「さつきより速いぞ！」

「今から回避は無理だ！間に合うか…！」

ドリルのような恐ろしい回転をするグロッサアギトを目前にガイアは緑のカプセルを銃に装填。

正面に向かって引き金を引いて、光のバリアを盾代わりに自分達の前に形成する。

バリアはグロッサアギトの突進を受け止めるが、勢いは殺せずグロッサアギトの勢いは削げない。

ピシピシとガラスに亀裂が入った時に発生するような音を立てるバリア。

それに焦りを覚えてガイアは叫ぶ。

「防壁が壊れる！これ以上はもたない！」

「ジヨ、ジヨーダンじやろく!!」

マギルウが狼狽えるがそれで結果が変わるなどありえるはずもなく…

そしてついにバリアがガラスの破片のように砕け散り、三人はグロッサアギトの体当たりを諸にくらってしまう。

「ぐわああっ！」

「ぐううう」



「ひよええ〜！」

ガイアもアイゼンもマギルウも、三人等しく背中から豪快に木々に叩きつけられる。

受けたダメージが相当でかかったためかガイア達は苦悶の声を溢し、立ち上がることも億劫だ。

そんな三人に追撃するためグロッサアギトは滑空を開始する。

その時ベルベットが割って入りグロッサアギトの角を刃で受け止める。

「ぐっ、うううっ！」

羽根を推進力として勢いを強めるグロッサアギトの突進に圧されながらも、ベルベットは堪える。

次第に足が後ろへ後退していき、さすがに限界かと思われたところにグロッサアギトに火炎と、白と黒の光弾が命中した。

「霊槍・獣炎！」

「シエイドブライト！」

エレノアとライフセットの聖隷術が炸裂し、グロッサアギトの装甲は命中した箇所から黒煙が立つ。

動きが止まった隙を逃さず、エレノアとライフセットの頭上を飛び越えたロクロウが二刀小太刀を振るう。

「瞬撃必倒、この距離なら外しはせん。零の型破空！」

ロクロウがグロッサアギトの真横から斬撃を浴びせ、遠くまで吹き飛ばす。

そのおかげでベルベットも、彼女に間一髪救われた三人も危機を脱することができた。

「助かった。すまない」

「ナイスじゃベルベット！ロクロウもぐつどタイミングじゃったぞ！」

「礼なら後、まだ終わってないわ」

「気にするな。しかし思った以上に厄介な業魔だなこいつは」

ガイアとマギルウから礼の言葉をもらったロクロウは業魔らしからぬ笑みを浮かべた後、グロッサアギトの吹き飛んだ先を睨みつけるように見据える。

『グワアアア！』

ロクロウの一撃が効いたのかグロッサアギトは怒りのままに木々を薙ぎ倒し、奇声を上げて浮かび上がる。

「しぶとすぎじやろく。まだピンピンしておるではないか」

「さてどうするか…つとー！」

グロッサアギトはロクロウに体当たりを仕掛け、かわされてもなお彼を執拗につけ狙う。

「ロクロウにばかり攻撃を…！」

「さっきのが相当頭に来たようじゃなく」

「丁度いい。俺がこいつの相手をしてる内に策を練ってくれ！」

人ならざる業魔の身体能力を活かしてロクロウはグロッサアギトの突進を難なくかわす。

一時ロクロウにグロッサアギトの相手を引き受けてもらい、ガイアとアイゼンはこれまでの戦闘を分析する。

「あの機動力が相手だ。下手に近づけばかわされてまた攻撃を食らう羽目になる…」

「だが接近戦を捨てて術で応戦しようにもあの装甲の前では決定的な一撃を与えられる見込みは薄い。隙を作ろうにもそう簡単にはいかないだろう」

「そんな…他に何か手はないのですか？」

悲観的な言葉しか出てこない状況にエレノアは困惑の色を露にする。

ベルベットも口にはしないが、明確な打開策が思い付かず険しい表情をしている。

「勝てるよ。皆で力を合わせれば」

そんな曇りがかった空のように暗い雰囲気から光が射し込む言葉を投げかけたのはライフィセットだった。

「今なんと言ったのじゃ？ライフィセットや。もう一度よくはつきり聞こえるよーに言ってくれんかのう？」

「どういう意味ですか？ライフィセット」

マギルウもエレノアもその言葉を言ったライフィセットの真意が気になり、彼に質問する。

「僕見てて思ったんだ。皆本当はもっと上手に戦えるはずなのにもつたないって」

「上手に戦えてないか…確かにそうだな」

「誰かの攻撃に続いたり、同時に攻撃を仕掛けたりはあれど基本個人力だけでどうにかしようとする考えが頭にあつた…全員で協力しようなんて発想自体思い浮かばなかつたろう。だが協力する意識を念頭において動けば…」

「数は私達の方が上です。ライファイセツトの言うように協力してその利点をもっと活用できればさつきより有利な戦いができるはずです」

ライファイセツトの主張を受けてアイゼンもガイアもエレノアも肯定の意見を並べる。

だがそうではない者もいた。

「坊よ。それは本気で言っておるのか？ここにいるのは仲間意識の欠片もない利害の一致で一緒にいるだけの連中じゃぞ。そんな連中に力を合わせるなどできると思うか？」

「今回ばかりはマギルウに賛成ね。あたし達は仲間じゃない」

マギルウのみならずベルベットもライファイセツトの言葉を否定する旨を告げる。

しかしベルベットは更に重ねてこう続けた。

「だけど利用できる物を最大限に使えてなかったってのはあなたの言う通りだわ：業魔だろうと聖隷だろうと人間だろうと関係ない。目的を果たすためなら利用できる物はなんだって利用する。それがあたしのやり方」

あくまでも冷徹な表情を乱さず言うベルベットにガイアは口元を綻ばせる。

「それならそれで構わないが、ただ利用されるだけってのは割に合わない。こつちも利用する時は利用してやるからな」

「勝手にしなさい。別にあんたに利用されようがどうにも思わないし、あたしもそう簡単に使われる気はないから」

「ふん、言ってる」

利用されることを甘んじて受け入れその上で相手も利用する。

それがこの面子ならではの協力関係の印と言ったところか。  
ベルベットとガイアのやり取りに、そう内心で苦笑混じりに呟やいたアイゼンはマギルウを見やる。

「マギルウ、お前はとうする？」

「…嫌じゃ」

「マギルウ…」

この期に及んで意地を張るマギルウにガイアは呆れながら諭そうとする。

だがそれを止めたのは他でもないマギルウ自身の言葉だった。

「頼みもまともできぬ者に力を貸す程儂の力は安くはないぞ。どうしても力を合わせて欲しくば『どうかお願いします。マギルウさん、あなたのお力添えが必要なんです』と言うがよい。そうすれば手を貸してやらんこともないぞ」

かなり上から目線のお言葉だったがそれでもライフィセットは聞けて嬉しかったようで、穏やかな微笑みでマギルウのご所望に応じた。

「どうかお願いします。マギルウさん」

「うーむ、いくらか足りておらぬ部分があったが、まあよいじやろう。ではでは皆の衆、共に一致団結。七人八脚の精神でいくぞ〜〜！」

打って変わってすっかり気を良くしたマギルウは万歳で喜びを示し、感極まった高らかな叫びが森に響く。

「俺とライフィセットで奴の動きを封じる。まずはそこからだ。ロクロウ、悪いがもう少し踏ん張ってくれ！」

「いこう、ガイア」

「ああ」

後半部分をロククロウに向かって大声で告げるとライファイセットとガイアは互いに頷き合うと共に動き出す。

二人が行動を開始したのをグロッツサアギトの執念の追撃をやり過ぎながら目撃したロククロウは、彼らに攻撃を委ね自らは回避に専念する。

そして何度目かになる体当たりをかわされたグロッツサアギトが旋回のため動きを止めた時

「重圧砕け、シルクラッカー！」

「シャープネス！」

ライファイセットの形成した重力場がグロッツサアギトを捉えた。

少し遅れてガイアの射出した紫の光も縄の形を為し、脚の一つを絡め取る。

筋力強化の術を自分にかけているため紫の縄の戒めは通常時より強力になっている。

『グアアアアア!!』

狙っていた獲物を仕留め切れずそころか横槍を入れられたことが腹に据えたのか、グロッツサアギトはくぐもった叫びを出す。

力場から脱出するため羽根をはためかせ浮上しようとするグロッツサアギトの抵抗に、ライファイセットとガイアは顔をしかめながらも抗う。

「今じゃ〜！伸びろ、伸びろ〜!!光翼天翔く〜ん!!!」

霊力を込めた式神を最大限まで伸ばしたマギルウの一撃がグロッツサアギトに決まる。

彼女らしいふざけた技名だがそれに反して威力は凄まじいようで、グロツサアギトはふらつき抵抗が弱まる。

「続けい！エレノア、ベルベット！」

マガルウの合図の元彼女が操る式神の上に乗ったエレノアとベルベットが、グロツサアギトの頭上…上空に向かう。

「ぐくう、くそっ…ここで逃すわけには！」

その最中、先の攻撃による痛みに襲われたガイアが苦悶の声を口元からこぼす。

銃身を握る手に込められた力が一瞬弱まり、それに伴ってグロツサアギトの挙動が激しくなる。

ぶり返す痛みに堪えながら銃を握るガイアの手にくと大きな手が重なる。

「持ちこたえろよ。ガイア」

「何度も面倒をかけさせるな…ロクロウ」

ロクロウの支えもあつて姿勢が安定し、銃身も固定される。

束縛が強まったせいでグロツサアギトの挙動は緩慢となり、そこにベルベットとエレノアが仕掛けた。

「容赦しない。消えない傷を刻んで果てろ！リーサル・ペイン！」

「参ります、奥義！スパイラル・ヘイル!!」

重力落下の補助を得た剣と槍から繰り出される一撃がグロツサアギトの体を左右から襲う。

ベルベットとエレノアに切り刻まれたグロツサアギトは浮遊する力をなくしたのか、地に全体を付け倒れた。

だが間もなくして再びグロッサアギトは起き上がり、反撃に出ようとする。

「いい加減にしつこい……!」

「大丈夫だ。次で終わる」

「その通りだ」

ベルベットの悪態に対してのガイアの言葉に応えるように金貨を指で弾いた音が鳴る。

と同時に二人の間を黒き衣が颯爽と駆け抜けた。

「覚悟はいいか?かわせるものなら、かわしてみな!ウエイストレス・メイヘム!!」

間合いを詰めたアイゼンの拳がグロッサアギトの腹に当たる部分にぶちこまれる。

疲弊していた状態で強力な一撃をもらったグロッサアギトは悲鳴すら上げられず、激しく吹き飛ぶ。

どこまでも宙を漂うと思われたその巨体はやがて結界に接触し、止まるとピクリとも動かなくなった。

そしてその体から禍々しい黒い煙が霧散し、グロッサアギトは普通の虫と変わらない元のサイズに戻った。

「ふくとんだ昆虫採集じやったの〜」

戦いを終えてマギルウがそう感想を告げる。

その一方でライフィセットは大人しくなったグロッサアギトを手の平に乗せて、ベルベットに頼み込む。

「この虫連れていっちゃー」

「ダメよ。処分するからどいて」



ライフィセットの言葉を最後まで聞かずしてベルベツトは即答する。

処分するという言葉を実行するべく業魔の腕を解放した彼女だが、何を思ったのか振り上げた腕を下ろさず停止させていた。

「聖寮が守ってたんだ。殺さずに様子を見た方がいいんじゃないか？」

「…」

背中でロクロウの一言を受けたベルベツトは考えた後、業魔の腕で結界に触れた。

ベルベツトによって結界は粉々に砕け、破壊した張本人は一度目を瞑るとライフィセットに視線を留めて呟く。

「ちゃんと面倒みなさいよ」

「うん！」

許しを頂いたライフィセットは気持ちの良い笑顔と眼差しをグロツサアギトに注ぎ、その彼と虫の元に残る男三人が集う。

「よかったな。ライフィセット」

「名前、決めないとな」

「新種ならば発見者の名前の付けるのが通例だ。ライフィセットオオカブト」

「いやそれならライフィセットオオクワガタだろ。この方がカッコいい」

—まさかまた

ベルベツトら女性組は揃ってこの後の展開が容易に察せられ、そして清々しいまでにその通りの流れになった。

「あ？さつきも言つたろうが。こいつはカブトだ」  
「わっかんねえ奴だな。これはどう見たってハサミだろ、つまりこいつはクワガタだ。大体一年やそこらで死ぬカブトのどこがいいんだよ」

「死ぬのはあえてだ。太く短く、それがカブトの生きざまだ」

このままでは論争に終わりが見えない。

そうとわかりきっていたガイアは二人の会話に割り込む。

「そんなにクワガタかカブトで揉めるならもう二つ混ぜた名前にすればいいだろ。ライファイセットオオカブガタとか」

それはガイアからすれば平和な解決策になると思っていた。だが彼の予想に反して現実はずれた。

「それは、ちよつと…」

「センスないな」

「もう少しマシな名前があるだろ」

「語感も悪くて言いづらいでフしね」

ライファイセットのみならずロクロウにアイゼン、果てはビエンフーにまで酷評されてしまう始末。

「ライファイセットに言われるならまだわかるがお前らに反論される筋合いはないはずだ。お前達がクワガタだのカブトだの言い争うから考えた折衷案だぞ」

「にしたってカブガタはないだろ。名前からしてすごく弱そうな感じがするぞ」

「見た目と名前の差が激しすぎる。とてもこの虫に相応しい名前とは思えんな…」

「お前らな…」

情け容赦のない批判の嵐にとうとうガイアも声を震わせて怒りを惜しみ無く前面に出す。

さすがにもう虫の名前で言い争うアイゼン達を見ていられなかったライフィセットが彼らに、自分の考えた名前を言う。

「クワブト！クワブトはどう？」

「クワブトか。悪くない名前だな」

「カブガタなどというふざけた名前よりかなりな」

「他人ひとの考えた名前にしれっとそういうことを言うな…いやまあ、それはそれとして…いいんじゃないか。その名前ならアイゼンも口クロウも納得するだろうし」

どうやら満場一致でクワブトに決定したようだ。

グロツサアギト改めクワブトと名付けられた虫をライフィセットはキラキラした純粋な目で、名残惜しそうに見つめた後そつと鞆の中にしまった。

「やっぱりクワブトって新種なのかな？」

「おそらくそうだろう。数々の大陸で様々な虫を見てきたがクワブトのような虫は初めてだ」

「明らかに他の昆虫と違うもんな」

「初めからこうだったのか、それとも何らかの過程で変異したからこうなったのか気になるな」

「生息環境の違いが原因だとしたら樹林にはクワブトのような昆虫がまだ存在する可能性はあるな」

「クワブトみたいなのもつといるの？」

「実際に本当にいるか保証はできないがな。だが仮にいたとすればワアグ樹林の環境が変異の原因ということの証明になる。そうならば昆虫学会に革命が起こるのは間違いない」

「とにもかくにもまずクワブトについてよく調べてみないと。そうだな…まずは普通のカブトとクワガタとの生態の比較を試みることから始めてみるのはどうだ？そこから何か違いが発見できるかもしれない」

「ならばカブトとクワガタが一匹ずつ必要になるな」

「花を届けたら後で取りに行くか。虫取りには自信がある」

「でもベルベットが許してくれるかな？」

「……」

ライフセットの言葉に男性陣一同は頭を捻らせ、皆一斉にベルベットの方を見る。

「ダメに決まってるでしょ」

その視線に込められた要求を見抜いたベルベットは当たり前だと言うように、きっぱり否定する。

「そこをなんとか…」

「しっこい」

それでもなお粘り強く交渉するガイアに付き合っていないベルベットは彼を冷たくあしらう。

そのやり取りを見届けたエレノアとマギルウは口を揃えてぼやく。

「男の人ってどうして皆虫にあんなに夢中になれるんでしょう」

「こればかりは儂にもまるで理解できぬわ。ライフセットはまだしも何故にその他の奴らはあそこまで興奮できるのやら…虫なんぞに浮かれる年頃でもあるまいに」

「好奇心に年も人種もない。謎を解き明かしたいその思いは皆等しく持っているものだ」

「あくわかったわかった。もう何も言わぬわ。お主らが暑苦しく盛り上がるうが何をしようが勝手にすればよからう」

今のアイゼンを相手に話を長引かせても面倒臭いだけと見なしたマギルウは適当に話を打ち切る。

利害の一致で組んでいるだけと言いなながらも不思議なことに和やかな雰囲気、レニードに戻るベルベット達。

するとレニードに着くまでに渡る最後の橋を目前にして、反対側から誰かが歩み寄ってきた。

「よおう、元気かい？」

「ザビーダ…！」

気さくに声をかけてきたザビーダ。

彼の第一声と姿を認識したアイゼンは先の浮かれっぷりを捨てて、ザビーダへと駆け出す。

接近するアイゼンに牽制するように銃口をけしかけるザビーダは彼の気迫に物怖じせず、軽い調子で言葉を発する。

「おっと、ケンカの相手はまた今度だ。デートに遅れるわけにはいかないんでな」

「デート…？」

「それはアイフリードの物だ。何故てめえが持つてる？」

訝しげに眉をひそめるガイアに構わずアイゼンは問いかけをする。しかしザビーダはそれに真面目に答えはしなかった。

「拾ったんだよ。どっかで」

「茶化すな。ケンカ屋、力づくでも話させる」

「ハッ！副長さんよ、あんたは殴られたら口割んのか？」

「試されるのはてめえだ」

「話したけりや話す。殴りたきや殴る。それを決めるのは俺の意志だけだ」

アイゼンと問答を続けたザビーダはそう言っただけで自らのこめかみに銃口を突き付け、迷わず引き金を引いた。

甲高い発砲音がした途端ザビーダは緑色の気を一瞬纏い、ニヤリと不敵に笑う。

「ちよいとアゴヒゲのかわいいこちゃんを待たせてんだよ。終わったら語り合おうぜ…拳でな」

「っ！まちやがれ！」

それだけ告げて風の力を使って何処かへ消えたザビーダ。

そして逃すまいとそれを追うアイゼン。

「アイゼン！」

「皆に花を渡さないで！」

「お前達に任せる！」

ガイアとライフィセットの声にそう返したアイゼン脇目も振らず、ザビーダの気配を追いかけた。

「どうするの？」

「花を届ける。アイゼンを追うのはその後だ」

「なら急ぐわよ」

念のためガイアに確認を取ったベルベットは返答にそう切り返した。

「ベンウィック！花を持ってきたぞ!!」

レニードの船着き場まで駆け足で着き、ガイアは事前にライフィセツトから預かっていた

「リーダー、よかった!…あれ、副長は？」

待ち望んでいた薬の到着に喜んだのも束の間戻ってきた中にアイゼンの姿がないと知り、ベンウィックは表情を曇らせる。

「アイゼンは―」

「ケンカ屋の聖隷を追ってピューとどこかへ消えおったぞ」

ガイアの言葉を妨害する形でマギルウが代わりに事情を説明した。それを聞いたベンウィックはマギルウの緊張感のない口調が癪に触らない程、気がかりなことがあるように声を荒げてガイアを問い詰めた。

「その聖隷ってザビーダって奴だろ！何で一緒にいかなかったんだよ！」

「壊賊病の仲間を放っておけるか！心配するな。すぐアイゼンを連れ戻しに行く」

「ですが追うにしても場所がわからなくてはどうしようもないのでは？」

エレノアの指摘は最もだ。

ザビーダもアイゼンもどこに行ったのかわからない。

これでは連れ戻そうにも、それができない。

「ザビーダって奴を追ったならたぶんロウライネだ。聖寮に出入りしてる商人から聞いたんだ。メルキオルって対魔士が手配してる聖隷

を捕らえるために大がかりな罫を張ってるって」

「メルキオルだと…！情報は間違いないんだな？」

「ああ、本当だと思う」

手をこまねいていた時ベンウィックからもたらされた情報と名に、ガイアを始めとする一同はそれらに食いつく。

（メルキオル…今度は何を企てているんだ？）

まさかここでメルキオルの名を聞くとはいわず、ガイアは顧みず、手当てて考える仕草をとる。

その彼から少し離れたところでエレノアも同様に思案していた。

（メルキオル様が直接指揮を取るなんて一体ザビエラに何が…いえそれよりも）

エレノアはライファイセットとガイアを横目で見つめる。

（この二人をメルキオル様に渡せば聖寮に戻れる）

アルトリウスの命令が果たせれば晴れて聖寮に復帰できる。

もう裏切り者の汚名を被ることもなく、業魔と一緒にいることから解放されるのだ。

「ベンウィック、いつでも船を出せる準備はしといてくれ」

ガイアはそう指示を下すと、ベルベットに向き直る。

「メルキオルが待ち構えているなら確実に危険が付きまとう。それでもアイゼンを連れ戻すのに協力してくれるか？」

「危険なんて今更よ。それにどうせ断つてもあんたは行くでしょ。あ



んた達の船長も連れ戻せるチャンスなんだから」

「アイフリードを？」

「アイゼンだって何も考えず一人でザビーダを追いかけるなんてしないはずよ。それでもそうした理由なんてアイフリードしかないでしょ」

言われて初めてその可能性に至ったガイアは確かに…と頭の中で納得した。

アゴヒゲの可愛いこちゃん、ザビーダはそう言っていた。

アイフリードの武器を所持していたことといい、ザビーダはアイフリードとどこかで面識があったのは明白だ。

だとすればアゴヒゲの可愛いこちゃんとは、おそらくアイフリードを指している。

あの時点でそれにいち早く気付いたこそあえてアイゼンは誘いに乗ったのだろう。

アイフリードの行方を知る数少ないチャンスを逃すまいとしてそしてアイフリードの安否が心配なのはガイアも同じ。

ガイアにとってもアイフリードは自身に大きな影響を与えた人物だ。

聖寮に囚われているのなら何としても助け出したい。

「どうするのじゃ？行くのか行かぬのかはつきりせん<sup>と</sup>間に合わなくなってしまうぞ〜」

「そうだな…悪いが、もう暫くアイフリード<sup>海</sup>海賊団<sup>達</sup>に付き合ってもらうぞ」

こうしてベルベット達と共にガイアもロウライネの塔を目指す。

## 第21話 流儀（ちかい）

ザビーダとアイゼンの後を追うべくレニードの町を発ったベルベット達。

今現在湿原を越えてブルナーク台地を横断していた。

「エレノア、ロウライネって場所について詳しく教えなさい」

足を止めずベルベットがやや後ろに並ぶエレノアに聞く。

今の内に敵が待つ場所について知っておこうと考えての発言だろう。

「ロウライネは塔のような形をした遺跡で、元々は単なる古代遺跡だったのを聖寮が訓練施設として管理下に置いた場所です。対魔士の適正試験や各対魔士ごとの霊力に応じた聖隷の付与、その他に聖隷術の修練と規律を享受するために利用されていました」

「下級の対魔士が聖隷術の特訓をして上級の対魔士を目指す道場か」

ロクロウは自分なりの解釈でまとめる。

だがエレノアは肯定せず間違っている部分を訂正した。

「いいえ、対魔士の霊力は訓練で強化できる類いのものではありません。私達は生まれ持った素質によって聖隷を与えられ、自らに適した技術を学ぶだけです」

つまり一等対魔士は生涯ずっと一等対魔士のまま、二等対魔士は生涯ずっと二等対魔士まま、どんなに努力しても上の位になれはしない。

エレノアの言うことはそういうことだ。

「そんなんじゃないや張り合いがないだろう。強くなりたいとか出世したい

とか思わないのか？」

「等級の上下は使える聖隷の種類や数といった適正の違いでしかないのです。私達は皆、業魔から人々を守り世界を良くしたいという願望を持って聖寮の門を叩くのです。それ以外に意味などありません」

「そういうものなのか…」

エレノアはにべもなく言うがロクロウからすれば少々納得できないところがあるだろう。

自分の腕を磨いて上を目指す価値もなければ、格上の相手と勝負して地位や名を上げる名誉を求めることもない。

世界のために勤める献身の精神がなければ、自分から進んでわざわざ入りたがるような場所ではないな。

とロクロウは思った。

「塔にはそういう対魔士達が待ち構えているわけか…」

「そういうことになるな…」

ベルベットとガイアの二人はあくまでもロウライネの戦力に注目を寄せているようだった。

「ん…利用されていたと言っていたな。エレノア、ロウライネの塔は今訓練施設として使われていないというのか？」

「仰る通りです。二年前の調査隊の全滅の一報があつた後、聖寮は全面的に塔の利用を禁じました。理由は調査隊を襲った業魔の危険性を認知してのものと」

ガイアの問いかけにエレノアは頷いて応対する。

それを聞いてベルベットはまた別の疑問が出てきた。

「既に使われていない施設をどうしてメルキオルは利用した…?」

「確かにな。訓練施設なら対魔士が大勢いると踏んでいたが、戦力目

当てで塔に罨を張ったわけじゃなさそうだな」

「もしかすると塔に求めたのは戦力ではなく記号なのかもしれない」  
「記号?」

それぞれが議論を重ねていく中で出されたガイアの主張にライ  
フェイストは疑問の声を上げた。

ガイアは彼に目を向けつつ、自ら発した言葉の意図を説明する。

「訓練施設としてもはや機能していない塔。しかしそこでは特等対魔  
士が手配聖隷を確保するために動いている。これだけの記号があれば  
聖寮と対立する奴が気にならないはずがない」

「しかもそこにいるのはメルキオル。メルキオルはアイフリードの失  
踪についての手がかりを握ってる。罨とわかっててもザビーダやア  
イゼンが食いつかざるを得ない…目的の相手を確実に誘き寄せ絶  
好な場所にしたってわけね」

納得したように呟くベルベット。

「なににせよこんなところでいくら憶測を立てようとさほど意味なか  
ろう。今は先を急ぐのを優先したほうがよい。どのみちあのジジイ  
の元に辿り着けばお主達の疑惑を晴らす答えが得られるのじゃし」  
「そうね」

マギルウの言葉を皮切りに一行はロウライネの塔に向かうことに  
集中する。

その道中何気なく周囲の景色に目を向けたライフェイストの口か  
ら感嘆の声が出た。

「うわあ、きれい…山がお湯を吹き出してる」

「しかも虹がすごい…」

緑の生い茂る草木の奥で岩山から吹き出る間欠泉。

その上でアーチ状に鮮明に光る虹の数々。

それらが上手く合わさった景色はまさに素晴らしいの一言に尽きる。

状況が状況でなかったらライフイセットでなくとも足を止めて、じっくり眺めていたい美しい眺めだ。

現にその風景はベルベットの視線をも釘付けにしていた。

「有名な世界七不思議のひとつ、ブルナーク間欠泉ですね。地下で温められたお湯が吹き出しているんですよ」

「付け加えればお湯に溶けた鉱物に含まれる塩分が光を反射させて無数の虹が生まれるんじや。その鉱物が少しずつ溜まってあんな奇岩に育ったんじやよ」

「へえ〜！」

「今みたいに見晴らしがいいと澄んだ青空と色んな形の雲もあって格別な景色が見れる。まさに絶景と呼ぶに相応しい」

エレノアとマギルウ、そしてガイアの解説もあってライフイセットは瞳を輝かせる。

その一方でベルベットはマギルウの博識ぶりを皮肉を交えて評価した。

「常識はないくせに妙な少知識はあるわね」

「ちなみにお湯の元である地下水脈は海と繋がっておるらしい。そのせいで間欠泉からは時折茹でられたタコやカニが飛び出すらしいぞよ。先の塩分がいい感じに加わって味は絶品じゃとかなんじやとかー」

「タコやカニが…」

「本当か。それ…」

「あり得ない話ではない…かも…」

「まあ一応…は、な。可能性としては大分薄いが」

ベルベットの小言などお構い無しとマギルウが更なる知識を披露する。

だが内容が内容だけにでたらめではないのかと疑う声も少なくないようだ。普段がふざけて見えるだけに尚更だ

そんな雑談を交わしながらも一行の目に飛び込んできたのは聖寮の紋章が刻まれた白いテント。それがいくつもあるところからしておそらく駐屯地なのだろう。

周りには十数人の対魔士らが手足をだらりと伸ばして倒れており、その中心にアイゼンの後ろ姿があつた。

「アイゼン！無事だったんだね！」

「サレトーマの花は届けられたか？」

「うん。ちゃんとベンウィックに渡したよ」

「そうか。すまないな」

そうライフイセットに礼を言うアイゼン。

彼の足元に散らばる対魔士達を見下ろしてベルベットは彼に訊ね聞いた。

「あんたがやったの？」

「俺が来た時にはこうなっていた。ザビーダの野郎だろう」

「まだ息があります」

「こつちもだ。たぶん全員気を失ってるだけだ」

近くの対魔士の脈を確めたエレノアとガイアが口々に報告し、それを聞いたベルベットは顔色を変えずに呟く。

「一人も殺さない流儀か」

最初に遭遇した時もそうだった。

敵対する者であろうと戦闘の継続ができないまでに攻撃の手を留

め、命までは奪わない。

相手が対魔士であろうともそのスタンスを崩さない。

それがザビーダの流儀でありこだわられる理由もあるのだろう。

「ザビーダは先へ行ったようだな」

「奴もこの先にあるのが罠だとわかっている。わからんのは何故アイフリードの存在をほのめかし俺を巻き込んだかだ：手を組む気がないのならハナからそうする必要はない」

「だがザビーダやメルキオルの思惑が何であれ塔に行くのは変わらない：：：だろ？」

「ああ」

誰かの思惑が絡んでいようと、真意がどうであれ、塔に向かう。

そうはつきり意思を示したガイアとアイゼンにエレノアは改めて問う。

「罠だとわかって行くのですか？どうしてそこまで」

「確かたいからだ」

アイゼンは岩山の方角に体を向けると、雄大な景色を瞳に刻み込みながら語る。

「アイフリードは、あいつは死神の呪いを解く方法を見つけようと躍りになっていた俺に言った。『無駄なことはやめろ。呪いの力を持って生まれたのなら呪いごとお前だろう。自分の意志で舵を切れば、死神だって立派な生きる流儀になるはずだ』ってな。だから俺はバンエルティアに乗った」

「生きる流儀…」

流儀、アイゼンがよく口にするのをライフィセットもこれまで何度も見てきたし、彼自身もベルベットの仲間になって間もない頃もよく

言われてきた。

自分の舵は自分で取れ、自分の流儀に従って生きろ、と。それらの言葉を言ってくれたアイゼンもまたアイフリードに言われていたのだと、この時ライフィセットは気付いた。

同時にアイフリードの存在がアイゼンの中でどれだけウエイトを占めているのかも

「例えアイフリード殺されたとしてもそれがあいつの意志の、流儀の果てならそれでいい。だがあいつの流儀を踏みにじったとしたら誰だろうが絶対に許さん」

アイゼンの言葉を聞いてベルベットらの間暫しの静けさが訪れる。そんな中ライフィセットはガイアに目を移した。

向けられている視線に気付いたガイアは彼の言いたいことを察し、口を開く。

「俺もアイゼンと似たようなものだ。アイフリードには大きな借りがある。だからこそアイフリードを――」

「誰だ!?!」

ガイアの言葉を潰す形でベルベットがテントに向かって叫ぶ。テントの陰に潜んでいる気配を感じたのだ。

そして気付かれて観念したのか潜んでいた人物が姿を現す。それはザビーダだった。

「立ち聞きとは行儀が悪いな」

「内緒話ならお家でやんなって」

皮肉を皮肉でもって返しあうアイゼンとザビーダはお互いに刺のある視線で向かい合う。



「アイゼン、ザビエーダ一緒に行くことはできないの？」  
「ケジメを付けなきゃ手は組め（ん／ねえ）」

二人にライフイセットは協力の提案を持ちかけるが彼らは揃ってきつぱりと断る。

息はピッタリだというのに共に力を合わせるのは御免だそうだ。

「ま、そういうことだった」

そう言っただけザビエーダはまた単独でロウライネの塔を目指して行った。

「わざわざ出て来んでもよいのに訳のわからん奴じやの〜」

「まったくね」

むちやくちやで合理性のないザビエーダにマギルウもベルベットも、理解できないとばかりに呆れた声色を発した。

いなくなつたザビエーダの姿を見送つたアイゼンは憎たらしげに舌打ちを打つと、歩みを進める。

「俺達もいくぞ」

その言葉を合図として他の面々も一拍遅れてアイゼンの後に続いた。

そうしてしばらくして、彼らは塔のような形状をした遺跡の前に行き着いた。

「これがロウライネの塔。天辺が見えないぐらいすごく高い」

塔を見上げたライフイセットが門前で感想を呟くのを他所にアイゼンは真つ先に扉に手をかけ、中へと踏み入れる。

中はサークル状に広がっており、いくつかの壁や水路あるぐらいの侘しい感じの印象を与える空間だ。

「お目当てのザビエーダが入り込んだ割にはずいぶんと静かだな」

「ここはもう敵陣よ。敵が攻めてくるかわからないし、罨だつてある……気を緩めないで」

「待て」

辺りを警戒しつつ、奥に進んでいこうとするベルベット達だがそれを制したのはガイアの声だった。

「この奥に行っても無駄だ……罨を張るとしたらこの階層じゃなくおそらくこの上だろう」

ガイアが親指を向けたのは上層へと繋がる階段。

「根拠は？」

「ただの勘……それもあるが、罨を仕掛けるには水路ばかりのこの階は少々不向きだと思つてな」

疑つてかかるベルベットにそう断言するガイア。

アテにしていいものかと悩むベルベットにロクロウが助言をする。

「見たところこの階に敵が隠れている気配もなさそうだし、ガイアの言う通り上へ行つた方がいいんじゃないか？」

「……そうね。上へ行つてみましょう」

階段を登つて上層へ進むベルベット達。

螺旋階段を駆け上がりながらエレノアはある人物の背中をじっと見つめていた。

(きつきの言葉、まるでこの塔の内部を知っていたような言い方だった。彼は以前にもここに来たことがあるのでしようか：いえ既に使用されてないとは言ってもここは聖寮の管理下にある施設。その内部構造を外部の者が把握できるとは思えない)

先のガイアの発言が引つ掛かっていたエレノアは心の中で疑問を口にする。

(もしかして彼は…でもまさかそんなはずは—)

—ありえない。だってあの時に彼は死んだのだ。仮に生きていたとしても海賊なんてやってるはずはない。人々の平和のために対魔士の道を選んだ彼が業魔と行動を共にして、聖寮に歯向かうなんて行為をするはずがない。

そうであつて欲しいと思う一方で、それを認めたくないと望む自分がいる。

どちらが本当に自分が望んでいることなのだろう。

結論のでそうにない思考をするエレノア。

その合間に彼女とベルベット達は拓けた場所に出ていたた。

訓練施設の名残りを残した遮蔽物のない広い砂だらけの場所。

その中央で十字架に縛られている赤紫の衣装の男にアイゼンは過敏に反応を示した。

「アイフリード…」

「あれが海賊アイフリード」

これまで名前しか聞いたことのない男が目の前にいるとわかりベルベット達はアイフリードに視線を集中させ、縛られている彼にアイゼンが近付く。

同じ船に乗った仲間との再会にアイフリードは苦い顔をしながらも、静かに微笑む。

「アイゼン、ガイアも一緒か…久しぶりだな…」

「生きてたんなら手紙くらい寄越せ」

「くくく、お前、男に手紙出したことあるのかよ？」

からかうように笑うアイフリード。

彼の冗談交じりの皮肉に吊られてアイゼンもクールさを表情に意地したまま、そつとほくそ笑む。

「ふっ…弟以外には一度もねえな」

「弟…？」

アイフリードは一瞬怪訝そうな顔をする。

だが気を取り直したのか、崩した笑みを戻してアイゼンに答えた。

「…ああ、そうだったな…ぐはっ！」

瞬間、アイフリードの体は十字架に固定されたままでありながらもくくの字に曲がる。

彼の腹部にアイゼンが一撃を入れたのだ。

「何故だ…アイゼン…!？」

「俺に弟はいねえんだよ」

カマをかけられたと気付く間もなくアイフリードは跪き、体と彼を戒めていた十字架は緑の光となって消える。

「消えた！」

「幻覚だったのか」

ライフェイスとベルベットが消滅したアイフリードの幻影に驚

く。

そんな彼らの前、つまりアイゼンの後ろにまた別の姿が音もなく現れる。

無論アイゼンも出現に気付いている。

「下手な幻覚は―」

通用するものか、とでも言おうとしたのだろうが彼がそれを最後まで音にすることはできなかった。

振り向くと同時に彼は絶句した。そしてそれはベルベット達も同じだった。

鮮やかな黄と白の服を着込み、小さく可憐な体を日差しから守るように傘をさしたアイゼンと同じ髪色の少女。

その少女の背中しかベルベット達には見えないが、目を丸くするアイゼンの反応を見るに彼にとって重要な人物なのだろうか。

少女が傘を閉じ、アイゼンにしっかりと顔を見せようとした時

―タアン！

小気味の良い音と共にどこからか緑の光が少女の頭を撃ち抜く。

衝撃で吹き飛んだ少女をアイゼンもベルベット達も目で追うと、その幼い姿はどこにもなく代わりに聖寮の使役聖隷が一体転がっていた。

それを視認したアイゼンは反対方向に目を移す。

「おとり役助かったぜ。副長」

緑の光の軌跡を辿った先に銃を握り締め、こちらを見下ろすザビエダがいた。

彼は高所から飛び降りるなり、左右に首を動かして声を荒らげた。

「出てきやがれジジイ！」

するとそれに呼応するように倒れる使役聖隷の近くにメルキオルの姿が先の少女と同じように現れた。

「メルキオル様……」 「メルキオル……！」

「儂の二重幻術を破るとは……」

「二度も同じ手くうほど間抜けじゃねえんだよ」

エレノアとガイアに己の名を呼ばれているのが聞こえていないのか、メルキオルの興味の視線はザビーダへと注がれている。

「……以前逃したのは失策だった。今回はそうはいかんぞ」

そう言うや否や彼は三体の使役聖隷を召還する。

その後に緑の光を浴びた使役聖隷も起き上がった。

「使役聖隷が四人も……」

「ただの使役聖隷じゃない。特等対魔士の使役する聖隷だ。これまでの聖隷のようにはいかないぞ」

「関係ない。全部潰すだけよ」

ライフイセットとガイアが自らの武器を体の前で構えながら言う。

先程エレノアから対魔士の等級の説明を聞いていただけに、特等対魔士の使役する聖隷を相手にする危険性をベルベットは理解していた。

だが邪魔だてするようなら容赦はしない。

そうベルベットが思いを胸に手甲から刃を引き抜いた時だった。

「う……何故、私は……に……??」

ザビーダの弾丸を食らった使役聖隷が意識を取り戻し、困惑の言葉を出す。

「意思が戻った…あれの力か」

自身の聖隷に起きた異常にメルキオルは驚く素振りを一切見せない。

それどころか眉一つ動かさずに、掌に形成したドス黒い気をその聖隷に浴びせた。

「うう、ああ…うああああ!!」

黒い瘴気を纏い、使役聖隷は断末魔の叫びと共に翼竜―ワイバーンへと変異する。

「聖隷を業魔に!」

「まさかそんな!」

ベルベットとエレノアがその現象に驚く一方で、ガイアはメルキオルの仕打ちに怒りのあまり唇を噛みしめる。

だが驚くにはまだ早い。

「ぐ…あつ…ぐああああ!!」

残る三体の使役聖隷も最初の聖隷と同様に黒い瘴気を発して、ワイバーンと化しその強大な両翼で宙を舞う。

そしてそれらは群れをなしてベルベット達に襲来する。

「死神の力が連鎖させたか…大した負の影響力だ」

いつの間にか入り口の方に移動していたのかメルキオルはワイ

バーンとベルベット達の闘いを見て、踵を返す。

「逃がすかよ!」

「ザビーダ!…すまない、ここは任せた!」

「ちよつと勝手に—!」

戦いの場から離脱するメルキオルを追うザビーダ。

彼一人でメルキオルと対決するのは危ういと悟ったガイアは四体のワイバーンをベルベット達に託し、二者の後に続く。

だが

『グガアアアアアアア!!』

不用意に背中を向けたのが間違いだった。

ベルベット達が相手していた内の一体が強襲し、無防備な彼の体を脚で捉える。

餌を狩る猛禽類のように空を駆けるワイバーンは、そのまま獲物を壁に叩きつける。

「がはあっ!」

「ガイア!」

ワイバーンの火炎を火の聖隷術で相殺したライファイセットがそちらに目を傾ける。

次の瞬間、彼の視界に映り込むガイアの体は壁に押し付けられたままワイバーンの脚に引き摺られていく。

「ぐっ、がああああ!!」

摩擦熱で皮膚が焼ける痛みに苦しむガイア。

悲痛な声を上げる彼に構わずワイバーンは飛行を止めることなく、



彼の体を塔の形状に沿って引き摺り回す。

「今助けます！ 霊槍・岩奴！」

エレノアが狙いを定めて地属性の聖隷術を発動させる。

いくつもの岩が放たれ巨大な体躯に炸裂すると、ワイバーンは動きを鈍らせてガイアを手放す。

解放されたガイアは着地の間際にかろうじて受け身をとって地上に転がり、どうにか事なきを得た。

だが受けたダメージは重く、肌は擦り切れ、頭から血を垂れ流し片膝をついていた。

「じつとして下さい。すぐに治療します」

「まったく世話を焼かせるのう。戦いの最中に余所見なんぞしよるか  
らそうなるのじゃ」

そこにエレノアが聖隷術で治癒に、マギルウがわざわざ皮肉を言いに駆け付けた。

「悪かった…今はこっちに集中する」

「時間がないので今は傷口を塞ぐくらいしかできません。多少痛みは軽くなったと思いますが、あまり激しい動きをするとまた傷口が開いて痛みが強くなりますから気を付けてください」

「いやだいぶ楽になった。助かる」

額の血を指で拭ったガイアが礼を述べてすぐエレノアの聖隷術の直撃を受けたワイバーンが敵意を向きだしに、三人を高めより見下ろす。

『ガアアアアアア！』

ワイバーンの咆哮が轟くロウライネの塔。  
四体の翼竜との戦いはまだ始まったばかりだ。

## 第22話 常闇より蘇りし過去

「後ろから来るぞ！気を付けろベルベット！」

「言われなくても……！」

対魔士の訓練施設であったロウライネの塔。

今ここでは四体の翼竜と七人の無法者達が激しく入り交じて、大混戦の場と化していた。

ロクロウとベルベットは迫り来るワイバーンの足爪を回避。あるいは各々の剣で払いのけてから反撃に転じる。

「風の刃よ、斬滅しろ。エアスラスト！」

「漆黒渦巻き軟泥捉えよ、ヴォイドラグリーン！」

アイゼンとライフイセットは術主体の遠距離からの攻撃でワイバーンを追い立てる。

いくつもの風刃と地より這い出る闇の魔手に両翼と脚を傷つけられ、近づくこともままならず苦しみの悲鳴をあげる。

そのすぐ近くで別のワイバーンと戦っているのはガイアとエレノアのコンビ。

宙から降りかかる二つの火の弾のそれぞれにガイアは橙の光弾を一つずつぶつけて、相殺する。

「そのまま突っ込めエレノア！」

火炎弾と光弾の交錯による巻き上がった黒煙の中を突っ切って、ワイバーンの片翼に長槍の先端を突き刺す。

深い食い込んだ長槍をエレノアごと振り落とそうと身を振る。

そうはさせまいとエレノアもグツと力を込めて足掻く。

簡単に抜けない槍に苛立ったワイバーンは体の向きを変えて壁に突進する。

「くっ……！」

ワイバーンがどこに向かおうとするのか見抜いたエレノアはやむを得ず槍を手放し、すんでのところで飛び降りた。

壁に自ら突進したワイバーンは雪崩れ落ちる壁の破片を被りながらも、まるで意に介さない様子でエレノアとガイアを細い金の瞳に納める。

「あんまり出張るなよ。今前に出たらかえって危なかつしい」

「お気遣いには感謝します。ですが心配は無用です。伊達に一等対魔士は名乗っていません」

「そうか……ならいいんだ」

エレノアの身を案じての言葉だったが彼女には刺のある言い方をされてしまい、ガイアは落胆する。

だがそれを態度に出すよりも前にワイバーンの火炎が迫り、二人はバラバラに散ってかわす。

『グアアアアア！』

高らかに雄叫びを上げて口から火炎を吐くワイバーン。

その一体を単身相手にするマギルウは前方に水流を扇状に展開して難なりと防ぐ。

自らの攻撃が受け止められた事実を目の当たりにしてワイバーンは激昂し、再度マギルウに火を放つ。

今度のはさつきより大きく、威力も上と思われる。

「アクアスプリットー！」

だがそれすらマギルウは楽々と水弾で打ち消してしまい、ワイバー

ンに格の違いを見せつける。

「案外大したことないのう。この程度かえ？威勢がよいのは凶体と耳障りな叫びだけなのか？」

現に彼女は涼しい顔をしてワイバーンに軽口を叩く程に余裕たっぷりな様子だ。

「ふん、悔しかったら文句の一つや二つ言ってみるがよい…最もそうなってしまつてはもはや何も言えぬか…」

意思の疎通も、気持ちを口にすることも叶わない。

理性を失い、ただただ獣としての本能のみで動く化け物と成り果てた存在にマギルウは哀れみにも似た感情を向ける。

『ゴワアアアア！』

火炎が通用しないとわかったワイバーンは手段を変えて、直接彼女を喰らうべく急接近する。

「うそじゃろおおおお!!そりゃ反則じゃてえええ！」

自身の聖隷術の直撃を堪えて進行を続ける翼竜にマギルウは逃げながらも、緊迫感をこれっぽっちも感じさせない悲鳴を声の限り叫ぶ。

足で逃げるマギルウと翼で追いかけるワイバーン。

両者の間隔が縮まるのはあつという間で、ワイバーンの顎がぐわつと開かれた。

「ひよえええ!!?儂なんぞ喰らつても腹を壊すだけじゃぞー!!」

ワイバーンの胃袋に収まりかけたマギルウを、すんでのところで横から抱え込んで救助した者がいた。

ガイアだ。

「間一髪、だったな」

少しヒヤリとした感じでガイアはマギルウを抱えたまま、ワイバーンとの距離を置く。

俗に言うところのお姫様抱っこの格好でワイバーンの餌になる危機から助けられたマギルウは彼の首に腕を回して、感謝の言葉を声高らかに並べ立てる。

「助かったぞガイアや！ちよくどよいところでよくきてくれたではないか！…己の身を省みず助けてくれるとは、お主の優しさが目に染みるわい…!!」

「っ抱き付くな、うるっさい！耳元ではしやぐな！」

「かわいいのくなんじゃ？緊張しておるのか？こんな大胆な行動に出ている今更恥ずかしがることもないぞ。まあ気持ちはわからんではないがの」

「黙れバカ！自惚れも甚だしい！」

「バカとは何か！バカとは！悪魔も名を聞いて恐れ腰抜かす、このマギルウ様に向かってそのような暴言を吐いて」

四匹の竜が目の前にいるというのにもいつも通りのやり取りを交わす二人。精々違う点を挙げるとすればガイアの語気が荒くなっていることぐらいであろうか。

そんな彼ら二人にマギルウを付け狙うワイバーンが翼を広げて前進してくる。

「かわせ！全速前進で逃げるのじゃ！」

「前進したら自殺行為になるだろ！てか密着するな！動きにくい！」

「律儀に突っ込んでおる場合か！前を見よ！すぐ目の前まで来ておるのじゃぞ！」

ぎやあぎやあと無駄な口論を喚き散らすマギルウとガイア。

既にワイバーンは凄まじい速さで迫っており、回避するゆとりは残されていなかった。

「ほれ見たことか、もたついておるせいで逃げることもできなくなつてしまうたではないかあゝ！」

「誰のせいだと…！ああ、もう腕はそのままでもいいから背中に回れ！早くしろ！」

限りなく恫喝に近い指示にマギルウはぶーたれたように唇を縦に尖らせながらも、言うことに従い首に両腕を回したまま背中におぶさるような姿勢で大人しくなる。

おかげで両腕が自由になったガイアはシャープネスを自らにかけてワイバーンを待ち構えた。

『ガアアア!!』

ワイバーンの巨体がガイアとマギルウを壁に押し潰さんとする。

筋力を強化したガイアは両腕を前方に差し出して、ワイバーンを受け止めているが、時間が経つに従って背後の壁際に追い込まれていく。

「んん…こんなつくそおお…！」

「しつかりせい！踏ん張るのじゃ！儂は挽き肉なんぞにはなりとうないぞー！」

「やかましい…黙ってる…!!」

さらっと不吉なことを耳元で口煩く言うマギルウに苦情をぼやく

ガイアだが次第にその余裕もなくなり、限界を迎えようとしていた。

(まずい……もうもたない！)

あわやこれまでかと諦めかけた時、右方から業魔手を解き放ったベルベットが飛びかかり、ワイバーンの巨体を引き剥がす。

「さ、さすがの儂も今にはヒヤリとしたわい」

「…本当に挽き肉になる寸前だった」

ペタリと脱力して地べたに座り込むマギルウと痺れた腕をだらりと伸ばしたままその場から動けそうにないガイアは、安心感からお互いに大きく息を吐く。

彼らの窮地を救ったベルベットは地面に叩きつけたワイバーンの首筋を切り裂いて、トドメを刺す。

他の二体のワイバーンもライフィセットとエレノアの支援を受けたロクロウとアイゼンの攻撃によって沈黙し、今なお活動している個体は一体のみとなる。

「策士策に溺れるとはこのことだなジジイ」

ザビーダがメルキオルを捕らえて戻ってきたのはちようどその時だった。

ペンデュラムで両腕ごと身体を縛り上げたザビーダは彼に銃口と敗北を突きつける。

「溺れたのはどっちかな？」

「あん？」

余裕の笑みを乱さないメルキオル。

直後撃沈していた二体のワイバーンが起き上がり、すぐさま攻撃を



再開するような所作を取り出した。

それに真つ先に反応したのはアイゼンとベルベット。

逆襲の一手を食らう前に拳と業魔手を叩き込み、相手を完全に仕留める。

「何!？」

「残りはあたしがやる!」

躊躇いなく命を奪った彼らにザビーダは心の底から驚きの声を上げる。

その彼の前でベルベットはまだ息をしている最後のワイバーンをも排除しようとしていた。

業魔としての彼女の腕がワイバーンに触れる間際、メルキオルの拘束を解いたザビーダがペンデュラムを飛ばしてそれを防ぐ。

そして次に彼はワイバーンを守るようにベルベットの行く手を阻んだ。

「どういふつもり…?」

思わぬ妨害にベルベットは顔をしかめてザビーダを糾弾するように問い詰める。

しかしザビーダは無言のまま、ワイバーンに銃口から緑色の光弾を打ち出す。

すると緑色の光を浴びたワイバーンは弱っていたのが嘘であるかのように、気力を取り戻し悠々と空へと羽ばたいていったのだった。

「ワイバーンを助けた?」

「あっさり殺しやがって…それがためえらの流儀かよ!」

ザビーダの取った行動に戸惑いを隠せないエレノアを他所にザビーダはベルベット達に憤りを露にする。

「素晴らしい。ジークフリート、まさに求めていた力だ」

声が出たかと思えばメルキオルは誰にも察知されずにザビーダの背後を取り、彼の持つ銃に緑色の光線を照射。

銃身を組まなく解析するように光は当てられ、その光が消えたとメルキオルは陽炎のごとく姿を消して部屋の入口に転移していた。

「目的は達した。もうここに用はない」

そう言って駆け足で階段を下るメルキオル。

「待ちやがれ！」

「俺達もいくぞ」

逃亡を謀るメルキオルの後を追ってザビーダとアイゼン達も部屋を後にし、ロウライネの塔を出る。

「逃がしてたまるかよ」

草原の上を走るメルキオルの背中を目視したザビーダは全速力で追隨する。

ベルベット達もまた彼の後ろに並ぶようにして走る。

「野郎、どこへ向かうつもりだ」

（この方角…まさか）

ブルナーク台地から通じるレニードともヴォーティガン開門とも、どちらとも異なる道を行くメルキオルの逃亡先にアイゼンは見当がつかずにいた。

しかしガイアはただ一人、周囲の景色とメルキオルの走る方角から

ある場所を思い浮かべる。

そして予感は的中した。

ところどころ散らばる岩の数々、踏み荒らされた草花、焼け焦げた大地の跡。

記憶にある風景とはやや異なるもののそれらはガイアにとって忘れられない出来事を思い起こさせる。

「くそ、どこに消えやがった!!」

ザビーダがメルキオルの姿を探して辺りを見回す一方、ガイアは眼前の景色をじつと見つめていた。

(間違いない。ここは、僕が初めて巨人になった場所…)

「見て、あそこに何かある」

ガイアがかつて巨人として戦った記憶を呼び起こしている傍らで、ライファイセツトは岩山の一带に何かを発見したようだ。

ベルベット達は皆ライファイセツトの指指す方向に目を向ける。

そこには支柱が無残に倒壊しているものの、遺跡の入り口と思われる建造物があった。

「遺跡、みたいだね」

「まさかあいつ、ここに逃げやがったのか」

「中に入ってみりゃわかるさ」

そうアイゼンに言うときザビーダが一番乗りで中へと入る。

アイゼンも遅れを取るまいと足を進め、ベルベット達も彼と同じくザビーダの後に続く。

階段を下り、一本道の通路を警戒しながら歩いて行く彼らを拓けた部屋が待っていた。

かなりの広さがあり、奥には祭壇があるが何かを奉っていた物置か  
れていたであろうその上には埃しかない。

しかもあちこちの床も黒く染まっており、その近くには砂のように  
金属の破片が散っている。

とても神聖さは感じられず、まるで廃墟のような虚しさが蔓延して  
いた。

「乾いた血の跡…?」

「それに金属の欠片だな。しかもこれは剣や鎧の材料によく使われる  
金属だ」

「血や武器の欠片があるということはここで以前何かしらの争いが  
あったということか…」

「争いだあ?こんな遺跡の中で誰がどんな理由で争うってんだよ」

ザビーダの問いはベルベットも気になっていた。

遺跡の内部に何故血や武器の破片が散らばっているのか。しかも  
量からしてかなり規模の大きな争いが起こったと思われる。

そこまで考えたところでベルベットは何かに気づき、エレノアに訊  
ねる。

「エレノア、聖寮の対魔士が業魔に全滅させられたのはレニードの近  
くの遺跡って言ってたわね。その遺跡ってこのこと?」

その問いにエレノアは口を閉ざしたまま俯く。

ぎゅっと何かを堪えるように拳を握って、エレノアは目線を落とし  
たままか細く呟く。

「…おそらく間違いないと思います」

「じゃあここにあるのは対魔士と業魔の戦いの痕跡か」

絞り出すように告げたエレノアの回答にロクロウが合点がいった

とばかりに声を上げる。

「メルキオルを追って来てみればトンでもない場所を訪れてしまったのおくもしやあやつがここに逃げ込んだのは志し半ばに死んだ対魔士の怨念で儂らを呪い殺すつもりためかもしれんな」

「マギルウー！」

不謹慎な発言だと言いたげな目を向けてライフイセットはマギルウを咎める。

けれどもマギルウはそれで反省する素振りを表さず、エレノアに謝ることもしなかった。

そんな彼女の態度にいちいち指摘するのも面倒だと、ベルベツトは祭壇の奥に目をやる。

奥まで歩いてみると祭壇の裏側には扉があり、開けてみると十字の通路があるのがわかった。

「道が別れてる。手分けして先に進んだ方がいいわね。もたもたしてたらメルキオルに逃げられる」

「それには賛成だが問題はどうかやって戦力を分配するだ。ただでさえ数が少ない上に相手が相手、戦力はなるべくにわたる必要がある」

「道は三つ、人数がザビエダを入れて八…となると一つの道に多くて四人少なくて二人か。シンプルに戦闘方法で分けるか？前衛と後衛で組んで、互いの不得意な距離を補い合うって具合で」

「単純だがそれが一番かもな。あんまり長々と話してる時間もないしな」

話し合いがまとまったところで今度は三つのグループに分かれるためのメンバー決め段階に移行する。

「後衛だったらライフイセットと俺、後は――」

「儂がいるぞ〜」

「…これでちょうど三人だな」

「ならお前達は別々に行動した方がいい。特に治癒術が使えるマガイルウとライフィセットはバラけるべきだろう」

「あたしはライフィセットと行くわ」

「ならオレはマガイルウの方に行くとするか」

後衛組はライフィセットとガイア・マガイルウに決定し、ベルベットとロクロウも即決する。

「私はガイアと行きます。構いませんよね？」

「…ああ」

ガイアの了承を得たエレノア。

その様子を静観していたアイゼンは先程からじっと黙っているザビーダに呼びかける。

「お前は どうするつもりだ」

「フン、好きにさせてもらおうさ」

ザビーダはそう言つてガイアの近くまで寄ると、彼の肩に腕を回す。

「俺はこっちに行かせてもらうわ。いいだろ？副長さんよ」

「好きにしろ。だが妙な真似はするなよ」

念のためにザビーダに釘を刺したアイゼンはマガイルウとロクロウの方に加わることに成り、これで全員の割り振りが完了した。

「進んだ先に何もなかったところはすぐに引き返してここで他の方を待つこと。もし暫く待っても戻つて来なかったところがあつたらすぐそっちの方に行くこと…いいわね？」

ザビーダを含めて全員の顔を見渡してベルベットが言う。

異論がないのを確認するとベルベットとライフィセットは真ん中の道、ガイアとエレノア・ザビーダは右の道、マギルウとロクロウ・アイゼンは左の道へ進む。

「なあ、ちよつといいか？お前はなんでアイフリードやあの副長と海賊やってんだ？」

「…昔色々あつてな。他に行く宛のなかった俺をアイフリード達海賊は受け入れてくれたんだ。あそこはある意味普通の世界じゃ生きられない奴らの集まりだからな。そういうお前はなんで一人で聖寮に敵対してる？」

「気に食わねえんだよ。聖隷の意識を封じてそいつの意思に構わず道具にして従わせる聖寮のやり口がな…けどなお前らもはつきり言つて気に入らねえ。ドラゴンになったからって簡単に殺しちまう…お前らのやり方が俺は好かねえ」

ロウライネでメルキオルがワイバーンにさせた聖隷達のことを言っているのだろう。

それらを躊躇いなく殺した事実にはザビーダは憤りを感じている。そんな彼に対してガイアが反感を持ちはしなかった。

「認めるよ…お前の言ってることはたぶん間違つてないと思う」「だったら—」

「でも殺すことが間違つていようと…どうしようもない状況だったら…俺はドラゴンだろうと殺す。殺すことを躊躇ったせいで大切なものが傷つくのなら俺はそうすることを選ぶ」

「あくまで殺しを否定しないってわけか…対魔士の嬢ちゃん。あんた

はどうなんだ?」

「…え?」

「あんたもこいつと同じ考えか? 守るためとは言え命を奪うのを肯定するか?」

どこか上の空で話を聞いていたエレノアは一瞬何を質問されているのか理解が追い付かず、返答に手間取る、

「…私は、対魔士は人々の暮らしを守るためにあります。人々の安全が業魔やドラゴンによって脅かされるのであれば当然私はそうします。個の犠牲で全を犠牲にしなくて済むのなら…それがアルトリウス様の教えですから」

「理の元にか…聖寮の模範みたいな回答だな。さすがは対魔士様だ」

—個よりも全

聖寮の唱える理念をそのまま口にするエレノアにザビーダは苛立つ。

それきり誰かが声を発することのないまま歩き続けていると、前方に壁が見えた。

「行き止まりか」

「こっちはハズレみたいだな。さっきのところまで戻ろう」

「特に何もなさそうだしな。引き返した方がよさそうだ」

来た道を引き返す三人。

戻る道すがらこれまで自分からは言葉を話さず、固く口を閉ざしていたばかりのエレノアが唐突にガイアに向かって声をかけた。

「ガイア…あの、一つお尋ねしてもよろしいでしょうか?」

名を呼ばれて一時止まると、そちらを振り返るガイア。



フードの奥でどんな顔をしているのか定かではないがしつかり目を合わせてくれているのを認識したエレノアは呼吸を整え意を決めて、ある問いを彼に投げかける。

「グランという名前に心当たりはありませんか？」

「……知らないな。聞いたことのない名前だ」

「……そうですか。すみません、変なことを聞いてしまって」

「いや大丈夫だ……気にするな」

それきり何も言わず黙る二人。

ザビーダも今の質疑応答にただならぬ雰囲気を感じ、エレノアに質問の意図を聞く真似はしなかった。

言葉を交わすことのないまま祭壇のあった部屋まで戻ると、そこには既に先客の姿があった。

ベルベットとライフィセットだ。

「あんた達の方には何もなかったみたいね」

「そっちなか。ロクロウ達は……まだか」

どちらの選んだ道も収穫がなかったのを認めると、ベルベットとガイアは揃ってこの場にまだ帰還していない三人が進んだ道を見据える。

「未だ戻って来ないとするとメルキオルはこっちなか……」

「その可能性が高いだろうな。俺達も行こう」

合流を果たした二組もロクロウ達が選んだ道を進む。

階段を使って下の階層へ降りて真っ直ぐな一本道の通路を、会話もなしにただただ先を目指して前進するだけの彼ら。

その道中ライフィセットがエレノアに、彼女にしか聞こえない程度のか細い声で喋りかける。

「エレノア、辛かったら無理しないでね」

「え…？大丈夫ですよ。私は全然無理なんてしてませんから」

「嘘だよ。だってエレノアここに來てからずっと元氣ないし…だからちよつと心配だったんだ」

自分に明るい笑顔向けるエレノアだがそれが本当の笑顔でない作り笑顔なのは、ライフィセットにはお見通しだ。

現にライフィセットに指摘されたエレノアの表情は暗く強張ったものへと変わっていた。

「ごめんなさい、あなたに余計な心配をさせてしまつて」

「ううん、僕でよかつたらいつでも話を聞くから。一人で抱え込んで辛い時は誰かに話をしたら少しでも気持ちが悪くなると思うし」

「ありがとうございます。ライフィセット、あなたは本当に優しい子ですね」

エレノアの顔に少しだけでも元氣が戻つたのを見てライフィセットも自然と笑みが浮かぶ。

安心したライフィセットが目線を正面に移すと、ロクロウとマジルウそしてアイゼンが立ち止まっていた。

「お、お前達の方から來てくれるとはな。おかげで手間が省けた。丁度今呼びに行こうとしてたんだ」

「こんなところで何を立ち止まってるの？」

「これを見ろ」

ベルベットの疑問にアイゼンが首を向けて示したのは、薄暗い空間…ではなくその中に入らせないように張られている結界。

「これって結界？」

「その通り、これがあるせいで先に進めんのじゃよ」

「結界があるってことはこの先に何かあるのは間違いないな」

「だからお前達と合流してから先に進むべきだと判断した。それにこの結界は俺達では破れなかった」

「なるほど…」

アイゼンら三人が先へ行けず立ち往生していた理由を知り納得したベルベットは業魔手を解放して、結界の前に立つ。

そして業魔の証たるそれを結界に押し付けるように突き出すと、音を立てて結界は形を失い消滅する。

「う…っ…」

結界によって遮られた部屋の中に入るとすぐ自分達以外の何者かの声が耳に響く。

それは部屋の中央奥の壁際から聞こえた。

「何かいる…」

遺跡内の暗がりもあつて声の主が何者なのか分からず、ベルベット達は身構えて一層警戒を強くする。

壁際まで距離を詰めて姿を確認したベルベット達の中で驚愕に瞳を大きく見開いた者が二人いた。

「嘘…」

「バカな…」

エレノアとガイアは信じられないとばかりに目の前の存在を凝視する。

その人物は壁から伸びた鎖で両腕を繋がれていた。

だが二人の注目を集めていたのはそこではない。

肩より下の辺りまで垂らしたやや乱れた茶色の髪と黒い瞳、そして何よりもところどころ破けているもののエレノアと同じ色彩の青い衣服。

それらの特徴から二人がある人物を連想されたのはほぼ同時だった。

エレノアの幼なじみにして、二年前にかつてこの遺跡を訪れた対魔士にして、ガイア自身であり、今彼らの前にいるその人物の名は

―グラン

## 第23話 仕組まれた再会

「嘘……」

エレノアは自分の目が信じられずにいた。  
てつきり死んだと思っていた彼が生きている。

ボロボロの身なりでやつれた顔をしているが、見間違えるはずもない。

動揺する彼女の心境を表すように瞳は揺れる。

「ノア……？ノア……だよ？……そこにいるの」

彼はエレノアの存在に気付いたのか、彼女の名前を口にした。

か弱く、しかしそれでいてしつかりとした意味を持って耳に届いた言葉にエレノアは目を大きく見開く。

「グラン……？本当に、あなたなの？」

「そうだよ。僕はグランだ」

改めて声を聞いてエレノアは驚きから一転して喜びの感情で表情を変え、一目散に彼の元に駆け寄る。

「よかった……生きててくれて……よかった……」

「ちよつと、苦しいって……でもよかった、元気そうで」

彼の首に腕を回して、その体をぎゅつと力強く抱きしめるエレノア。目尻には大粒の涙が溜まっている。

そして彼もエレノアを拒むことなく、嗚咽をもらす彼女を暖かな目で見つめていた。

ベルベット達もガイアも二人を今はただ黙って見ているしかなかった。

「ありがとう。おかげで助かったよ」

それから少し時間を置いたところでベルベットは彼の鎖を解き、ずつと聞きたかった疑問を訊ねた。

「エレノア、その男は誰なの？あんたとはどういう関係？」

「彼はグラン。私の幼なじみの一等対魔士です」

――幼なじみの対魔士

先ほどからのエレノアの様子からその可能性を予測していたが、よもや本当にそうだとは思っていなかったのかベルベットにしては珍しく驚きが微かに面に表れた。

「あれがエレノアの幼なじみか…案外大人しそうな奴だな。てつきりもうちよつとやんちゃそうなのを想像してたんだが」

「だけど優しそうな人だね」

ロクロウと一緒にライファイセットも驚きを隠さずにいる一方で、彼の中には嬉しさもあった。

幼なじみの話になる度ずつと暗い影を落としていたエレノアが笑っている。

それがライファイセットには喜ばしいことであった。

「お前は本当にエレノアの幼なじみか？」

だがアイゼンはそうではなかった。

猜疑心を募らせた目付きでアイゼンが凄みを効かせていた。

「他の対魔士が全滅した中でお前だけが生き残り結界の中で捕らわれていた。それは何故だ？」

「やめてくださいアイゼン。その言い方、一体彼の何を疑っているのです?」

あからさまな敵意を剥き出しにして追及するアイゼンをエレノアは食ってかかるように糾弾する。

「メルキオルはここに俺達を誘い込むように逃げた。奴がわざわざこんな場所に逃げ込んだのは無策仕掛けるために違いない。さっきのように俺達を欺く幻術を仕向けてもおかしくはない」

「彼は本物です。そんなはず」

「二度目がないとは言えない。そもそもお前がいくら本物だと叫んでも俺達には完全に信じられる根拠には乏しい。俺達はお前の幼なじみを知らないからな」

「それは…」

先程ロウライネの塔でメルキオルはアイフリードの幻影でアイゼンを惑わそうとしていた。

エレノアとて忘れてはいない。

だがもし本当にそうだったら、その可能性を考えるだけで心が張り裂けそうになる。

「大丈夫、僕は本物だから」

「ならば証明してみせろ。お前がエレノアの幼なじみなのだと言うのなら昔話の一つや二つあるだろう。エレノア」

エレノアの肩に手を置いて安心させようとするグランにアイゼンがある提案を持ちかけた。

「一緒に初めて釣りに行った時のこと覚えていますか?」

「うん。餌の結び方とか竿を引くタイミングとか丁寧に教えてくれたよね。同じ村のテネブおじさん直伝の業だって自慢気に」

「私がお義母さんに叱られて外に出されたのは？」

「それノアじゃなくて僕のことでしょ？母さんが僕達のおやつに買ってくれたプリンを黙って僕がノアの分まで食べてそれを隠してたのが母さんにバレて外に出された…だよね」

淀みなく答えるグランにエレノアはほっとして胸を撫で下ろす。

アイフリードの時と違ってカマをかけても引っかからず、間違いをきちんと指摘した。

本物でなければできないはずがない。

「引っかけにも間違いませんでした。紛れもなく彼は本物です。これでもまだ彼を偽物と疑いますか？」

「…いや。もういい」

さつきから静観しているだけのガイアを横目でちらりと見たアイゼンはこの場を引き下がった。

「あんたがエレノアの幼なじみだったのはわかった。で、なんでここで捕まってたわけ？」

「私もずっと知りたかったんです。話してくれませんか？あの日何があったのか」

ベルベットだけでなくエレノアからの頼みもあって、グランは拒む間を一切置かず口を開いた。

「アルトリウス様の命令を授かって僕達はこの遺跡に調査としてやってきた。祭壇のところまで中に進んだ僕達は突然現れた業魔の群れに襲われて、僕以外の対魔士は皆業魔に殺された…ただ一人残った僕も最後まで戦ったけれど業魔の群れの中に強大な力を持った業魔がいて、僕はそれに負けて目が覚めた時にはもう結界の中に閉じ込められていたんだ。きつと僕の霊力が目的だったんだと思う」



「霊力を？」

「業魔の中には霊力を吸収して自分の力にする業魔がいるんだ」  
「どうなのマジルウ？」

言葉の真偽を確かめるためベルベットは体の向きを変えると同時に名を呼ぶ。

呼ばれたマジルウは『確かにそういう業魔もおる』と、グランの証言を裏付ける台詞を吐く。

―対魔士の霊力を自らの力の糧にする業魔

それがどれだけ危険な存在になりうるか想像したライフィセットはグランに業魔の居所を問うた。

「その業魔はまだここにいるの？」

「この下にいる。捕まっている間ずっと僕から抜け出た力が下の方に流れていくのを感じてた」

「まさかメルキオルはそいつを使って俺達を始末しようって腹積もりでここに逃げたのか」

「だとしたらあのジジイはもうこの遺跡にはいねえってことだな。いたとしても外で俺達が罠にかかるのをゆっくり見物してる。さてどうする？下に降りてわざわざジジイの思惑に乗るか、このまま大人しく外に出てここを去るか。俺はどっちだって構わないぜ」  
「…」

ロクロウとザビーダの発言を受けてベルベットは腕を組んで考え込む。

もうこの遺跡の探索でかなり時間を費やしている。

ロウライネで見たように、一瞬にして正反対の位置に転移する術を持つメルキオルが自分たちに気付かれることなく、逃げ仰せるには十分な時間を与えてしまった。

ザビーダの言う通りおそろくもうメルキオルはここにはいない。当初の目的を考えればこれ以上遺跡に留まるのは無意味だろう

そこまで思考した時、何気なく動かした瞳がエレノアと交差した。彼女の瞳から覗かせる心境を踏まえてベルベットが出した答えは

「下に行ってみましょう」

「業魔が気になるのか？」

「さっきロクロウが言っていたようにメルキオルがそいつを使って何かしようとしてたならあいつは最初からその業魔の存在を知っていたことになる。ここで相手しなかったとしても次また利用して来ないとも限らない。潰しておくに越したことはないわ」

言葉を切ったベルベットはそれに、と一呼吸置いてグランの方に向き直る。

「そいつが関わった二年前のこともある。この遺跡を徹底的に調べれば聖寮の目的を知る手がかりがあるかもしれない」

「ベルベット…」

「ならとつと先に進むとするとするぞ。善は急速発進というしの」

てつきり遺跡から去ると言うのではと思っただけに、ベルベットの出した結論を意外だと言わんばかりに彼女の名を呟くエレノア。マギルウもまたエレノアとその隣にいるグランに一瞥をくれた後、独特の言い回しを用いてベルベットの決定に肯定した。

「本当に夢を見てみたい。こうしてまた話せる時がくるなんて…」

「僕も驚いてるよ。もう君に会うことなんてないと思ってたし」

先頭でグランの隣に連れ添って語り合うエレノア。

二年もの間会話する機会が絶たれていただけあってエレノアは陰りのない晴れた表情をしている。

そんな二人の仲睦まじいやり取りをベルベット達その他の面々は  
一歩離れて観察する。

「私もですよ。けど私、心のどこかであなたがどこかで生きてくれて  
いるかもつてずつと思つてたんですよ。だつてジャグララーが…」

思いがけず口に出してしまった人物を思い出してエレノアは言葉  
を濁らせる。

月夜に怪しく光る赤き双眸、人間ではなくなつていた男の姿が脳裏  
に浮かぶ。

「どうしたの?」

「いえ、前にジャグララーと会つたんです…」

(ジャグララー!?)

エレノアが紡いだ名はガイアに思いきり鈍器で殴られたような衝  
撃をもたらした。

(ジャグララーが、生きている? そんな…馬鹿な、でもエレノアが嘘をつ  
くはずが…)

突如として浮上した予期せぬ事実ガイアは激しく心を揺さぶら  
れていた。

「ジャグララーと会つたんだ。どうだった?」

「えっ、と…少し雰囲気変わつてましたけど元気でしたよ」

「そっか、ならよかつた」

しかしそんな彼の動揺に関わらず二人の会話は展開を続けていく。  
アイゼンは訝しげにそれを眺めながらガイアの耳元で囁くように  
意見を求めた。

「一体あれはなんだ？」

「…わからない…ただ…あつちが本物だとしたら僕は…」

ガイアはエレノアの横顔を見ながらそう儂げに呟く。

視線の先にあるのは自分と一緒にいる時には見せなかった、昔から大好きだった穏やかな笑顔。

心から生まれた感情のままに微笑むエレノアをガイアは共に行動をするようになってから今まで見たことがない。

そしてその笑顔と感情と引き出しているのはあのグランであって、ガイアではない。

その現実をこうして前にしているからこそどうしても自分の存在を疑ってしまう。

自分はエレノアの幼なじみのグランとは別人なのではないか、グランという人間の記憶を持った別の何かなのではと

「まだあいつが本物と決まったわけじゃない。そう悲観的になるな」

「アイゼン…頼みがある。ここにいる間は僕をアテにしないで欲しい。今の僕には周りを気にする余裕はない…」

状況に頭が追いつかずまともな判断ができない状態の自分が足手まといになるのは、わかりきっていたガイアはそう低く言った。

声色と表情から精神的にかなり動揺をきたしていると見抜いたアイゼンは無言の了承をすると、彼の数歩先を行き言葉をかける。

「…いいか、これだけは忘れるな。お前がグランでなからうがお前はガイアだ」

どうやら不安を見透かされていたようだ。

おかげでガイアは心に余裕が戻っていくのを感じていた。

それでもまだ普段通りの思考ができるまでにはいかないが、さつき

よりは大分落ち着いた気持ちになれた。

(ありがとうアイゼン)

心からの言葉を見かけに寄らず世話焼きな死神へ声に出さず伝えたガイアは気を取り直して、意識を己の外側へと向けた。

「あつー！」

長い一直線の階段を下る最中ライファイセットの体に奇妙な感覚が走った。

以前にも体感した感覚にライファイセットは鞆から羅針盤を取り出して確かめる。

「また針が回ってる」

「ワアーグ樹林の時と同じね」

数時間前にも同じ現象が起こったのをベルベツトは思い起こす。

ワアーグ樹林にいた時にもライファイセットの羅針盤は異常な回転をしていた。

そしてその反応の後、進んだ奥地には聖寮の結界の中に巨大な虫の業魔クワブトがいた。

つまり

「この奥にはクワブトに近い業魔がいるってことか。そしてその業魔が調査隊の対魔士を全滅させた奴」

「ならば聖寮がここに人の出入りを禁じたのも説明がつくが、この先にいるのが何であれ油断はするなよ…全員肝に命じておけ」

ベルベツトの考えを読み取ったようにロクロウに同調してアイゼ

ンも忠告を投げかける。

それから少ししてようやく最下層に辿り着いた。

広々としてはいるが辺り一面至るところに瓦礫が散乱し、壁や天井もほとんどが亀裂や穴が生じていたり、遺跡の原型を留めていないほどに崩壊している。

「驚く程何もねえな。本当に業魔がいるのか？」

「隅々まで念入りに探してみましよう。必ずどこかにいるはずですよ」

壁や岩の破片ぐらいいしか目立った特徴のない周囲の様子を見回して辟易するようにザビーダがぼやく。

だがその矢先にエレノアが輪をはみ出して搜索を始める。

ベルベット達も顔を見合わせてそれぞれ別れて部屋を調べ出すし、ザビーダもまた後ろ髪をかきながらも同じように行動を始めた。

しかしどれだけ調べても業魔の姿は発見できず、時間だけが過ぎ去っていく。

「影も形もないのう。うゝ…目が疲れを訴えてしよぼしよぼしておるわい」

痕跡一つまともに見つからず、マギルウが大袈裟にわめく。

ベルベットやライフィセットも彼女のように声には出さないものの、本当に業魔がいるのかと疑惑が芽生えている。

誰もが半信半疑で搜索を継続する中で一人、山のように連なった岩の前でしゃがみこんでいる者がいた。

(パール…)

以前使役聖隷だった存在を、初めて自分の意思で言葉を発した瞬間を、その最期が、彼の死に場所を前に蘇る。

(この記憶もグランだった時の記憶…でも君を思う僕の心が偽りだなんて思えない)

目の前の岩の下で散らした命を思い、その死を悼んでガイアは右手を胸に添えた。

無意識に当たった右手が服の内側にある物体に触れ、その感触を不審に思った彼は服の中からそれを取り出して正体を確かめる。

(これは…)

ガイアに何か忍び寄っていた。

無防備に背中を晒す彼との距離を着実に縮め、手を伸ばせば体に触れるのも容易い位置までガイアはその何かの接近を許してしまった。

しかしガイアはその接近に気付いていないのか、そこから動くことも振り返りもしない。

その何かは不穏な紫の光で覆った腕を彼の背中に目的を定め、垂直に降り下ろす。

が、その腕は彼の背中に届く寸前で真横から伸びてきた手に掴まれ動きを止めた。

「何の真似だ。これは」

何かは自らの腕を掴む手の主をその目で見た。

アイゼンだ。

彼はタカが餌を足爪で捉えるように左手をがっしり相手の腕に食い込ませ、束縛を強める。

「アイゼン…？どうしたの？」

「一体何があったんだ？」

ベルベット達もアイゼンの声で異変を感じ取り、彼が腕を掴む者の

顔を視界に収めた。

そしてその直後一番先に大きな動揺を示したのはエレノアである。彼女の目にはアイゼンに腕を掴まれ、彼を憎々しげに睨むグランがはつきりと映っていた。

「説明してもらおうか？お前が今何故ガイアを襲おうとしたのか」

一連の出来事を目撃していない者達が見守るしかできない中、アイゼンは腕の束縛を解いてグランを問い詰めた。

「襲おうとしたって…ガイアを？」

「ああ」

アイゼンの告げた言葉にライフィセットは瞳をグランとガイアの間を歩き来させ、じつとグランの回答を待つ。

「黙るか。何か言ったらどうだ」

アイゼンそう追い込みをかけられても尚何も言おうとしないグラン。彼を庇うようにエレノアが横から両者の中間に割って入った。

「待ってください。確かに疑われても仕方ない状況でしたけどグランがガイアを襲うなんて」

「対魔士の嬢ちゃん、気持ちはわかるがそいつの怪しさは満載だぜ。さっきのそいつの顔、ありや良いところを邪魔されて腹を立てた奴の顔だ」

「ものすごい形相だったのゝ悪鬼も恐れんばかりに憎しみを募らせておったぞ。それこそ目つきで人を刺し殺せんばかりにの」

エレノアの心情を汲みながらもアイゼンと同じくグランを疑うザ



ビーダといつもと変わらぬ調子ながらも、目を細めてグランを注視するマギルウ。

彼らの話の後にベルベットがエレノアに向けて言葉をかけた。

「あんだだって間抜けじゃない。わかってるでしょ。この状況でそいつが怪しいってことぐらい」

「それは…」

俯くエレノア。

やがて意を決した彼女は落としていた顔を上げて、グランの方へと向き直る。

「グラン、お願いです。本当のことを全部包み隠さず話してください。あなたは本当にガイアを…？」

「エレノア…」

神妙な面持ちでグランを直視するエレノアをライフィセットは心配しそうに見つめる。

ライフィセットは感じていた。エレノアがまだグランを信じようとしているのを

「この辺りが潮時か」

「え…？？」

グランの口から飛び出た思いがけない言葉にエレノアは目を丸くする。

「すぐそこから離れろ！」

「エレノア！逃げて！」

聖隼としての感覚がよからぬ何かに反応してアイゼンとライフィ

セツトが叫ぶ。

「きゃっー！」

と同時に誰かがエレノアの体を突き飛ばした。

「ぐあぁっ!!」

エレノアがいた場所には右腕から血を垂らすガイアの姿があった。床に尻餅をついたエレノアが見上げた時、それがまず真っ先に目に飛び込んだ。

当然彼女は驚くが一番衝撃的だったのは違う。

ガイアの右肩を貫く物体だ。

赤紫色の触手のようなそれが伸びる元を恐る恐る目で辿っていくと、それを伸ばしていたのは左腕を赤紫色の変異させたグランだった。

「グラン…?」

震えた声でグランの名を呼ぶエレノア。

それが合図となったかのようなタイミングでグランの体から突如紫の霧が溢れ、たちまち彼の体を覆い遺跡の天井を突き破るまでに巨大になっていく。

その過程で遺跡を支えていた柱が破壊されたせいで、遺跡全体がガタガタと嫌な音を立てて揺れだした。

「まずい、崩落に巻き込まれる前に急いで脱出するぞ！」

怪我を負ったガイアに肩を貸しながらロクロウが声いっぱい叫ぶ。

皆即座に反応し降りてきた階段へと走る。

ベルベットも階段の方へ走るが、尻餅をついたまま一人動こうとしないエレノアの存在に気付くと舌打ちしながら彼女に駆け寄る。

「ぼさつとしないで立ちなさい！死にたいの！」

立ち上がる気力のないエレノアの腕を引っ張って無理矢理起こして、ベルベットと一緒に階段を駆け上がる。

ベルベットとエレノアが辛くも遺跡の入り口まで引き返すことができた。

その数秒後に遺跡が完全に崩れ、大地を強い振動が駆け巡った。

どうにか全員遺跡の崩落の犠牲にならずに済んだが、まだ危険は去ってはいない。

『ギヤアアアアア！』

遺跡のあつた場所から異質な声が轟く。

集約していた紫の霧が解けると死霊を思わせる人間と同じく二足の足で立つ異形が。ワイバーンをも上回る巨体が現れた。声が止んだ瞬間、醜悪なその顔には陽炎のようにグランの顔が一瞬浮かび上がった。

「あれがあいつの正体」

「このデカさドラゴンには見えないし怪獣か？いや怪獣にしては何か違う感じがする…」

「違う感じって何よ？」

「何て言うかこう、薄気味の悪い感じって言えばいいのか？とにかくあいつは普通の怪獣とは違う気がする」

ロクロウの表現にベルベットは彼の言わんとしていることが何となく読み取れた。

あの怪物は怪獣と同じくらいの大きな体を持っているが、発せられ

る気配はこれまで見た怪獣とは格別異なる。

(メザードとは…なるほどのう。ここまでの全てがあのだジジイどもの筋書き通りということか)

目を細めるマギルウの脳裏にメルキオルと他にある人物の容姿がよぎる。

『グギクルウウ!』

異形―サイコメザードは蕾状の胸部から紫の光弾を放つ。

自分達目掛けて直進するそれをベルベット達はそれぞれ真横に飛んでかわす。

するとサイコメザードは巨体から紫の光を天へと照射し、上空で拡散したその光はサイコメザードとベルベット達の周囲を囲うように特殊なフィールドを形成した。

「結界を張りやがった。外に出られねえぞ」

「問題ない。要はこいつを仕留めりゃいい話だろ?」

「そういうことね」

サイコメザードの展開したフィールドを結界と見破ったザビーダの言葉にロクロウとベルベットは即座に剣を引き抜いて構えると、走り出す。

アイゼンとマギルウも聖隷術の詠唱を開始し、後方からの援護をする。

ライフェイスツトも同じように戦いに加わりたい思いがあったが、それができないでいた。

その理由は

「そんな…どうして…」

「エレノア…」

槍も構えずサイコメザードに目を止めたまま動かないエレノアがいたからだ。

今の彼女はとても戦えるような状態ではない。

「坊主はその嬢ちゃんの側にいてやれ。何かあつたらすぐに守れるようにな。後は…おい、あいつどこいった?」

「あいつ?」

「副長の仲間、ガイアだったか。あいついねえぞ」

「ガイアがいない?」

攻撃を加える仲間達の中にガイアの姿がないのを認識した、ライファイセットは辺りへ視線を巡らせる。

傷を負っていたから戦いに参加せず見守もっているのかと思つたが、どこにも彼の姿は見当たらない。

—どこに行つてしまつたのだろうか

当然のごとくそんな疑問が浮上するが、サイコメザードがロクロウ目掛けて放つた流れ弾がすぐ近くで爆発し、それどころではなくなつてしまう。

「うっ…くうッ…」

ガイアは右肩を抑えながら近くの岩壁の陰に身を潜めていた。

視線がないのを確認するとエスプレンダーを取り出して変身しようとするが、いつものくせで右手で持つて前に突き出したせいで右肩に再び強い激痛が走る。

「ぐうっ…くそっ…!」

苦痛に顔を歪めてエスプレンダーを落としかけるガイア。

だが菌を食い縛り左手に持ち変えたガイアは痛みには耐えながら変身を果たす。

自らを赤い光に変化させたガイアはサイコメザードがベルベットへと放たれた光弾を防ぐ形で、巨人として降臨する。

「あいつまた…」

またしても自分達の前に姿を現した光の巨人。

怪獣が出現に合わせたようなタイミングで自分達の前に出てくるのはどういうことなのか。

そういう考えがベルベットの頭を横切る一方で身を包んでいた変身時の赤い光が消えたガイアはすぐさま振り返って、サイコメザードに向かって走り出す。

「おいおい今度は何だあの巨人は？」

「安心しろ。害はない」

「お前、あいつが何なのか知ってるのか？」

「仲間だ。俺達のもの」

巨人となったガイアを見るのは初めてとなるザビードはその登場に困惑するが、アイゼンが敵と誤解せぬように簡潔に説明する。

アイゼンの言葉に少なくとも敵ではないと信じたザビードはサイコメザードにパンチを突き出すガイアを眺めた。

「メユア！」

左の拳で顔面を真っ正面から殴り、身を捻って軽く跳んで同じ箇所を右の踵で蹴りつけるガイア。

彼の攻撃で怯んだサイコメザードにマギルウの水弾とザビードの風の聖隷術による刃が命中し、ベルベットとロクロウの斬撃が続けざまに切りつける。

着弾の衝撃で体から火花を散らすサイコメザードを更にアイゼンの鉄拳が飛び、サイコメザードは疲弊する。

「今だ！決める！」

「ジユア、ハアアアア」

アイゼンの声にガイアは両腕を広げてフォトンエッジの準備に入る。

「いや…やめて…」

腰を落としたガイアの頭頂部に赤い光が収束していく。

あの光がサイコメザードに直撃すればどうなるか。

エレノアには容易に想像できた。

—お願いだから、やめて

エレノアの願いもむなしく無情にも光は滞りなく溜まり、ガイアは上半身を前に出すと共に光の鞭を伸ばす。

「ジャアアアア!!」

その鞭はサイコメザードの全身を切り裂きそして、サイコメザードは爆発の中に消えた。

「いやあああああ!!」

エレノアの絶叫が響き渡る。

悲痛な叫びを上げて力なくへたり込む彼女にライフェイスツトもザビーダも、トドメを刺したガイアも胸を痛めいたたまれない気持ちになる。

だが倒さなければならなかった敵は消えた。これで

「待て、何かおかしい。結界がまだ消えてないぞ」

ロクロウが放った言葉に皆がまさかと思いながら一斉に周囲に目を向ける。

すると紫色のフィールドは自分達を取り囲む檻として確かに存在していた。

「このテの結界は仕掛けた術者がいなくなった時点で消滅するはず、それが残っているということは――！」

嫌な予感がしアイゼンとベルベット、そしてガイアは未だ立ち込める黒煙の中心に目を凝らす。

煙が揺らめき、そこから青い雷撃が這い出た。

「ドワアアアア！」

完全に油断していたガイアは対応する間もなく胸を焼かれ、背中から地べたに倒れこむ。

煙が晴れると、そこにはやはりサイコメザードがいた。

胸部にあつた蕾状の器官は人面に変わり、ベルベット達に与えられたダメージなど微塵もない健在な姿で



## 第24話 瞬く星の下で

「あなたはどうして対魔士になったの？」

対魔士になってまだ日が浅いある日の昼時に私は彼にそんなことを聞いてみた。

私のやや手前を歩いていた彼は視線だけを向けて、何故そんなことを聞くのかと不思議そうな顔をしていた。

「どうしたの急に」

「だからグランはどうして対魔士になったのかって聞いているの」

「それはわかっているんだけどさ。今更って感じがさ、今までノアそういうこと聞いてこなかったじゃん。なんで今になって聞いてきたの？」

「だってあなた昔から争いごと嫌いだったじゃない。前に自分でもそう言ってたぐらい。なのにどうして父さんや母さんの反対を押しきってまで対魔士になったの？」

彼が人に暴力を振るったところを私は一度だつて見たことがなかった。

義父さんと喧嘩になった時も一緒に遊ぶ友達と揉め事が起こった時も

「それ前に話さなかったっけ？」

「聞いてません」

「そう…だっけ？」

「とぼけないで」

「…バレたか」

視線を泳がせる彼は頑なに理由を語ろうとしない。

昔からこうだ。

彼は自分にとって言いたくないことや都合の悪いことがあると、すぐ誤魔化そうとする

けれどその癖顔に出やすいから分かりやすい。

「はあ、いつもそうやって誤魔化そうとするのね。その癖そろそろ治さないとダメだつて言ってるじゃない…」

「ごめんごめん。つい」

「まあ私にやる分には慣れてるからいいけど…それよりさっきの質問に対する答えまだ聞いてませんかからね」

「…やっぱ言わなきゃダメ？」

「そんなに言うのが嫌なの？」

「わかった。話す、話すよ。けど絶対笑わないでよ」

ついに折れた彼はそう前置きすると、一呼吸整えてから話してくれた。

「そりゃあ争い事は好きじゃないよ。業魔が相手でも殴ったり剣を向けるのは良い気持ちはしない。だけど」

そこで彼は噴水の前のベンチで和む母親と少女の親子に目を移す。

「それでもあんな風に家族が笑いあえる日常を守れるならやってみようと思っただ。霊応力に目覚めて対魔士として人を守る力があるのにそれを使わずにいるのはなんか違う。ちっぽけな力だとしても僕が戦うことでああやって笑いあえる家族が一つでもいるのなら僕の中の霊応力が目覚めた意味もあるんじゃないかって…急に聖隷が見えるようになってからずっと考えてた」

「それが対魔士になった理由？」

「そうだよ。悪い？」

「全然そんなことない。すごく素晴らしい理由だと思う。むしろなん

で今まで頑なに言わなかったのかその理由の方がわからなくらい」

素晴らしいと褒めたその言葉に嘘はなかったと今までも言える。

だからこそ何故その動機を言わずにいたのかその時も疑問に思っていた。

「…恥ずかしいじゃん。こういうの他人に言うの…。子どもの時からずっと一緒にいる君なら特に、さ」

「…ふふふ」

耐えきれずに私は笑ってしまった。

「ほらやっぱり笑った！笑わないって言ったじゃん！」

「ふふ、ごめんなさい。けど、だって…ふふふ！」

彼に悪いとわかっていてもどうしても私は笑いを抑えることができなかった。

「ごめんなさい。でも恥ずかしいなんてことないわよ。正直あなたがそこまで考えてるなんて思わなかった」

「やっぱり馬鹿にしてるよね」

「ううん、尊敬してる。尊敬してるけどちよつと寂しいかな」

「寂しい？寂しいってなんで？」

「それは…秘密にしとく」

「え？教えないって、なに？いいじゃん、教えてくれたって」

追及してくる彼の反応を楽しみながら私は彼にそう返す。

でもやっぱり納得がいかなかったのか根気強く何度も聞いてくる。

それが予想してた通りの反応で気を良くした私はちよつと意地悪をしてみたくなった。

「さ、そろそろ戻りましよ。この話しはまた今度ね。そのうち気が向いたら話すわ」

「えええ…それずるくない？こっちはちゃんと話したじゃん」

ずっと育ってきたのに私の知らない内にいつの間にか大きくなってた。体だけでなく心も

その成長が羨ましくもあつたし、その変化をちよつと残念に思つた。

だけどそんなあなたが私は――

「カアアアアア！」

より不気味で醜い容貌となつて奇声を上げるサイコメザード。

フォトンエッジの直撃を食らつても平然としているサイコメザードにロクロウは驚愕する。

「まだ生きてたのか！」

「耳障りなのよ。あんたの声！」

高笑いのようにも聞こえるその声にベルベットは嫌悪感を露にした。

「業火刃！」

高く跳躍して業火を灯した刃を胴体に斬り込む。

肉に食い込んだ感触はあつた。

だがサイコメザードは口元を綻ばせニヤリと笑つた。

その笑みに身の毛のよだつ悪寒が走つたベルベットは直感に身を任せて、その場から飛び退いた。

直後そこをサイコメザードの稲妻が穿ち、小規模ながらも爆炎が上がる。

「おおおおおー！」

ロクロウが岩壁を足場にサイコメザードの頭上をとる。

それに気付いた触手を差し向けるが、ロクロウの小太刀はそれらを一つ残らず斬り落とす。

「これならばどうだ！食らえ、零の型破空！」

全てを斬り払ったロクロウは遮る物のないサイコメザードの体を斜め一文字に両断する。

仕留めた、そう確信したロクロウは振り返るなり目を見開く。

ロクロウの小太刀に切り裂かれた箇所から白い光をサイコメザード

「バカな、何故だ！確実に肉を裂いたはずなのに何故まだ動ける！」  
「デヤア！」

サイコメザードの注意がロクロウに向けられた隙にガイアは間合いを詰め、左手で殴りかかる。

この一撃もサイコメザードに命中していた。

けれどもサイコメザードにとっては虫に刺された程度だとも言うのか、平然としておりガイアの足元を両手の触手で掬い上げると、両手と腹部の面から眩い光を灯らせる。

「オアアアア!!」

両手から電撃が、腹部から熱線が一斉に放たれた。

後ろから体を思い切り糸で引っ張られたかのようにガイアは土砂

を巻き込んで吹き飛ばされる。

岩壁に強く打ち付けられ、その衝撃で岩肌が剥がれたせいで彼の体に雪崩のように岩石が覆い被さる。

「ジュ…アア…」

あまりの威力にガイアの胸の結晶体ライフゲージが赤く明滅を始めた。変身前に右肩を貫かれたのも点滅を早めた要因となっているのだろう。

「巨人の胸のランプがピコピコ鳴り出したぞ！なんかヤバそうだぞ」

ロクロウの言葉につられてガイアは仰向けに倒れながら自らの胸に目をやって危機感を覚えた。

ライフゲージの光と音が途絶えることは巨人として活動の限界を意味する。

活動時間の限界を越えた時巨人の姿を保てなくなり、ガイアは人間の姿に逆戻りになってしまう。

そうなればエレノアに巨人の正体がバレ、そこから聖寮に露見する恐れがある。

いやそれより以前にこの状況を切り抜けるのも危ぶまれる。

「手伝いな副長！同時に仕掛けんぞ！」

「チイ、状況が状況だ。仕方ねえ、しくじるんじゃねえぞ！」

勝ち誇ったような声を轟かせるサイコメザードにザビーダとアイゼンが踊り出る。

左右から挟み込む陣形を取り、ウィンドランスをサイコメザードに放つアイゼン。

風の槍は命中したがダメージは皆無であるようだ。

しかし注意を惹き付けることはできたようで、サイコメザードはアイゼンに向けて電撃を放出する。

それらを機敏に回避するアイゼンを尻目にザビーダはペンデュラムでサイコメザードの体を絡めとる。

「食らいな！ビート上げるぜ？ルードネスウィップ！」

「ウエイストレス・メイヘム！」

ペンデュラムが体全体に尽き刺さり、高威力を誇る拳がサイコメザードに炸裂。

先のガイアと同じように岩壁に吹き飛んだサイコメザード。

その巨体はもくもくと立ち込める土煙に隠れ、ザビーダとアイゼンは手応えを感じながら目を凝らして晴れるのを待つ。

「アアアアア！」

「おいおいマジか…どう考えてもしぶとすぎんぞ」

「これだけの猛攻を受けても平然としているとは…面倒な相手だ」

土煙が薄れた時、彼らの視界に飛び込んだのは傷一つとして刻み込まれていないサイコメザード。

その姿を目の当たりにしたザビーダとアイゼンは揃いも揃って、サイコメザードのしぶとときに小言を並べた。

「いくら攻撃しても殺せないどころかさつきより強くなってる…こんなのだうやって倒せっていうのよ！」

「方法ならあるぞ」

手の内様のない特性を持つ相手に弱音を上げるベルベットにそう告げたのはマガルウ。

「あやつを消す方法ならばある。それもこの上なく単純な方法がの」「ほんと？マガルウ！」

期待の眼差しを向けてくるライファイセツトの視線にマギルウは何時になく真剣な面持ちで答える。

「あやつにはある意思が働きかけておる。あやつの死を望まぬ者の思いがああ怪物を蘇生させ、死ぬ程の一撃を食らう度に力を高めさせておるのじゃ。つまりはその思いの源を断てばよい」

「死を望まない思い…」

「その源って…?」

「すぐそこにおるじやろ。自らの大切な幼なじみとやらを思うものが」

マギルウが言う人物。

それが誰を指しているのか彼女の説明を聞いたベルベットとライファイセツトにはすぐ判明した。

「もしかしてエレノア?」

「ズバリその通り。自我を失い暴れるだけの異形と成り果てたかつての幼なじみを受け入れられず、かつその死を望まぬ心がある限りあやつは何度でも蘇るぞ」

そんなまさかと、ベルベットもライファイセツトも半信半疑だった。

あれが業魔にしても怪獣にしても、人の意思が生死に影響を与える存在がいるとはとても信じられなかった。

「にわかには信じられぬと言いたげじゃのう…では、よく見ておれ」

言うなりマギルウは詠唱を始め、水弾をサイコメザードに打つ。

ダメージは入っていないものの邪魔をされて癩に触ったのか、サイコメザードはマギルウに電撃をお返しする。

その間マギルウはエレノアの背後に逃げ隠れ、彼女を盾代わりに利用する。



「馬鹿！マギルウ、何考えて——！」  
（ノア！）

ベルベットだけでなくガイアもマギルウの突拍子もない行動に驚く。

今のエレノアに雷撃を避ける余裕などあるはずもない。

雷がエレノアに当たるのを阻止するべく二人は体をそちらに走らせようとしますが、距離が開きすぎている上にガイアは全身を襲う痛み  
に立ち上がることをすらかなわない。

「きゃー！」

エレノアが雷電に身を焼かれる。

…かに思われたが雷はエレノアに当たる寸前で横に反れ、近くの地表に激突した。

あまりに不自然な軌道に、それを見た者達は誰もがマギルウの語った言葉が真実だと悟った。

「これでわかったじやろう。あやつはエレノアに危害は加えられん。あやつを仕留めるにはエレノアが完全に思いを断つ必要がある。エレノアを直接始末するのも一つの手ではあるが…これはなるべく避けたいところじゃ。エレノアを殺せばライファイセツトの器がなくなってしまうからのう。じゃが、こやつがいつまでもあの怪物への未練に拘っている以上儂らには待つのは破滅のみ…さて、どうしたものやら」

表情こそ深刻だが口振りにいまいち緊迫感のないマギルウに腹を立てたくなるベルベット。

だがいちいち突つかかっけいらられる場合でもなく、ベルベットはともかく危機的状況を脱することだけを考える。

「エレノアが思いを断ち切ればアレは消えるのね？」  
「うむ。さつきも言ったようにアレは生きて欲しいという思いを糧に  
しぶとく生きておる。エレノアが死を望めば間違いなくあやつは消  
える」

死を望めば消える。

それだけ聞けばごくごく簡単で単純なように思えるが、この場合に  
おいてはその限りではない。

「それってエレノアに幼なじみを殺させるのと同じことですよ、ダメ  
だよそんなの！エレノアにそんなことさせちゃ絶対に！」

「しかしのう坊よ、エレノアがやらなければ儂らはここで終わってし  
まうぞ。可哀想、などと言ってられんのじゃよ。」

エレノアの気持ちを汲んでのライフセットの言葉にマギルウは  
この上ない正論で返す。

「私が…グランを…そんなの…」

そしてこれまでの会話は当然エレノアの耳にも届いていた。

愕然とした目でサイコメザードとアイゼン達の戦いを見ていたエ  
レノアは唇を震わせていた。

「このままだと全員死ぬわよ！あんたも私もライフセットも全員！  
あんたはそれでいいわけ！」

「でも…私には…グランを殺すなんて…」

「目を覚まさない！あれが人間に見える？あんたの幼なじみはもう  
いないの！」

—できない

その言葉が答えとして返ってくるのは想像に難くなかったが、実際に言われるとやはりくるものがある。

「あんた対魔士でしょ！個のために全を犠牲にするんでしょ！情に流されてる場合！」

「それは…」

我ながらこれを持ち出すのは卑怯だと思うし最低とも思った。

この世で最も忌み嫌う男の謳い文句を口にするのは許せなかったが、状況が状況だ。

背に腹は代えられない。

「できないなんて言わせないわよ。これまでだつて業魔を倒してきたでしょ！それとも顔見知りが業魔になったら殺せないとも言うつもり！」

「わかってます！でも！」

ベルベットに肩を掴まれるエレノア。彼女は今身も心も揺さぶられていた。

「うっ…！」

ライファイセツトの胸に激痛が走った。

刃物で刺されたような、聖隷術で撃ち抜かれたような、上手く言葉で言い表せない痛みがライファイセツトの中で渦巻いていた。

(胸の奥がすごくズキズキする…。痛いだけじゃなくてなんだか気持ち悪い)

体感したことのない痛みに苦しむライファイセツトとベルベットに揺さぶられるエレノアを見下ろしたガイア。

(ノア……くっ、こういう時のマギルウはいい加減なことは言わない。だがノアに倒させるわけには！)

「ジャ……」

ライフゲージの点滅音を鳴らしながら両腕にエネルギーを溜め、ガイアはクアンタムストリームの発射体勢に入る。

サイコメザードも対抗すべく人面に青紫と白の入り交じった輝きを集わせていく。

「ジャア！」

「アアアアアア！」

同時に打ち出されたクアンタムストリームと寒色系の熱線がガイアとサイコメザード、両者のほぼ中間で衝突する。

ぶつかり合う両者のエネルギー。最初こそ互角の勢いだったが、やがてクアンタムストリームの方が力負けし徐々に押され始めた。

「ジュ……アアア！」

残された僅かなエネルギーを絞るようにガイアは光線の出力を上げてみせる。

だがその努力は空振りし、次第に上半身が後方へ反りサイコメザードの熱線の光がガイアに近づいていった。

そして

「オワアアア!!」

押し負けたガイアの体に熱線が直撃し、胸部から火花を散らす。

「アア…」

火花が消えるとガイアは力なく前のめりに倒れ伏す。

クアンナムストリートの発射とダメージの蓄積のせいでライフゲージの点滅は速まり、一秒の間を置かずして音が鳴り響く。

もう牽制用の光線を発射するエネルギーも残されていないだろう。

「カアアアアア」

「グウ、アアアア！」

だがサイコメザードにはそんなものどうでもいい。

触手をガイアの腹と首筋に巻き付け容赦なく持ち上げると、ケタケタと薄気味悪く笑う。

「トドメを刺すつもりか！」

「まずいぞ！いくらあの巨人でもまたアレをくらったら…」

「させるかよ！」

サイコメザードの人面に再び満ちる光を見たザビーダ、ロクロウ・アイゼンはその発射を中断させるため、全力で駆け出す。

そんな彼らの接近に気付いたサイコメザードは瞳を青白く発光させる。

すると三人共何かに体を押さえつけられたように身動きがとれなくなってしまう。念力のようなものだ。

「体が…動かねえ！ちくちよう、次から次に奇妙な手を使いやがって！」

なんとか念力を破ろうとする三人の無駄な抵抗をサイコメザードは嘲笑い、自らが捕らえた相手に目を戻す。

「霊子解放、仇なす者に秩序をもたらせ！ バインド・オーダー！！」  
「アアアア！」

全力でライフイセットが放った白銀の閃光がサイコメザードの触手を切断した。

ガイアの体は地に落ち、腹部の人面に収束していた光は形をなくす。

サイコメザードは横やりを入れたライフイセットに熱線の矛先を変える。

「あっ…」

「ライフイセット！ くっ！」

「まさかロクロウらを抑えたまま儂らにまで念力をかけるとは。あのクソジジイ共め、あやつのあざ笑う眼が実に気に食わぬ」

ライフイセットのみならずベルベットとマギルウも念力の影響下に捕らわれてしまい、唯一念力をかけられていないガイアももうライフイセットの盾になることもできない程に体が動かない。

サイコメザードの攻撃を阻む者はいなくなつた。

自らの邪魔をした愚か者にサイコメザードは熱線の裁きを下す。

ライフイセットの小さな体が熱線にかき消える。

そうベルベット達は数秒後に訪れる光景を恐れ、彼らの視界を青紫の光が埋めつくした。彼らは声を上げられもしなかつた。

しかしその時

―ザシュ！！

そんな音と共にサイコメザードの挙動がピタリと止まった。まるでサイコメザードの時間だけが止まったかのように

奇妙に感じたベルベット達がサイコメザードの体を上から下まで視線を動かしていくと、その胴体の真ん中に風穴が空いていた。

穴から覗くサイコメザードの後方には高く飛び上がり、槍を握り締めたエレノアがいた。

「…ぐめんなさい…」

喉につかえていた言葉を絞り出すように呟くエレノア。

彼女の目から溢れた透明な宝石が風に乗ってサイコメザードの体に触れて弾けた。

それと時を同じくしてサイコメザードは爆発四散し、今度こそ完全に消滅した。

「エレノア！」

「ジュア！」

爆発によって生じた強烈な風にさらわれたエレノア。高さからみて受け身を取れたとしても確実に命はない。

ライファイセツトの叫びを耳にしたガイアは最後の力を振り絞って飛行し、宙を舞うエレノアの体を卵を乗せるように優しく掌に包み込む。

受け止めたガイアは大地に降り立ち、エレノアをそっと下ろす。

だが彼女は腰を落として項垂れたまま反応はない。

かける言葉が見つからず、またかける時間の猶予もないガイアは夕暮れの紅い空に飛び立った。

「エレノア！大丈夫！」

そこにライファイセツト達もやって来た。

ライファイセツトの心配の声に返事一つまともに返さないエレノアの姿にベルベットもザビーダも、遅れて合流したガイアも口をつぐんだまま見ていた。

レニードの宿に戻った頃には既に夕日は落ち、空には暗闇とそこに浮かぶ星達が浮かび上がっていた。

「んじや、俺はもうおいとまさせてもらおうわ」

「もう行っちゃおうの?」

「成り行き上ここまで付き合ったがもうお前らと馴れ合う理由もないしな。また機会があればそのうち会えるだろうさ」

「待て、まだ肝心なことを聞いてない。何故ジークフリートをお前が持つてる」

とつとと去ろうとするザビエダをアイゼンが問いを投げかけて引き留めた。

てつきりまたはぐらかされるだろうと予想していた彼だが、その予想に反してザビエダは振り返って彼の要求に応じた。

「渡されたんだよ。頼むって、対魔士に使役された頃あいつの捕獲作戦に駆り出されてやり合った時にな」

「ザビエダも使役聖隷だったの?」

「ああ。カノヌシの領域で無理矢理自我を封じられてな。だがアイフリードが撃ったこいつの一撃で目が覚めた。そっからのあいつとのケンカは最高だった。人間のクセにやたら強くてよ、魂の芯まで震えたのが肌で感じた」

そう言つてザビエダは腰元から引き抜いたジークフリートをアイゼン達に見せて、その時のことを思い出したのか興奮が声に込もっているのが伝わる。

アイフリードとのケンカと聞いてアイゼンも昔似たような出来事があったようで、同調するようにフツと軽く笑う。

「なのにジジイが幻術で割り込んでアイフリードをさらっていきやがった。気に入らねえんだよ…人の意思に小細工しやがって!」



「メルキオルはジークフリートが目的だったようだが何故その時ジークフリートではなくアイフリードを連れ去ったんだ？」

「探してるお宝がこれらだと知らなかったんだらうよ。狙いに気付いたアイフリードはジジイに連れ去られる寸前、奴の目を盗んで俺に超越したんだ…これが俺の知ってる全部だ。信じようが信じまいがお前さんの勝手だがな」

「アイフリードは信じた相手にしか頼むとは言わん」  
「そうかよ」

ロクロウの質問にも丁寧な当時の状況を説明したザビーダはこれで話は終わりと、口を閉ざした。

「そんじやな、お前らがアイフリードの行方を探してんからまたどっかで会うだらうぜ」

「あの口振り、あいつもアイフリードを探してるのね」

「奴もまたアイフリードに拘っているんだらう」

宿を出ていくザビーダ。いなくなった彼にベルベットとアイゼンは思い思いの言葉を呟いた。

「くうく!! 儂はもう疲れたわい。今日一日樹林やら塔やら遺跡やらあちらこちら行ったり来たりで足がガクガク悲鳴をあげておるわ…そんなわけで今日のところはもう寝るぞい！」

どたばたと大急ぎでマギルウは自らの寝室に乗り込み、その早業にロクロウが舌を巻く

「疲れてる割にかなり体力有り余ってるよな」  
「ははは」

最もな指摘にライフィセットの口から自然と乾いた笑いが出る。

たぶん自分達の中で一番元気だろうな…そんなことをライフィセツトは考えた。

するとロクロウが一人の人間がいなのに気付く。

「エレノアの奴はどうした?」

「エレノアならさつき風に当たって帰ってくるって外に出て行ったけど…すぐく落ち込んでると思う」

「そうか、あまり追いつめすぎてないといいんだが。まあ、あいつなら大丈夫だろう。きつとすぐに立ち直るさ」

心配こそすれどあんまり気にしていないのか、はたまたエレノアを信頼してなのかロクロウも自らに当てられた寝室に入る。

マギルウとロクロウが場を離れ、夜の宿に静けさが戻った。

「ガイアも部屋にいくの?」

「外に出てくる。今の気分のままじゃ寝られそうにない」

居間のソファから腰を上げたガイアはライフィセツトに目を向けずに宿を出た。

バタリと後ろ手にドアを閉めたのを確かめると夜の肌寒い街中をゆっくり歩く。

冷たい夜風がまだ癒えていない傷口に突き刺さる。

それでも構わずにガイアはエレノアの姿を求めて歩き続けた。

建物の死角、大きな木の下、一通り落ち着ける場所を探したが見つからない。

(いないな…どこにいるんだ。…もしかするとあの辺りに)

子どもの頃の記憶を頼りにガイアは彼女の行きそうな場所へと足を運んだ。

—いた

海を跨いで船着き場とレニードの町を繋ぐ大橋。そこに腰掛けるエレノアを見つけた。

一人遠くを眺めている彼女に声をかけようとするが、彼は自分より先にエレノアに近付く者の存在を視認した。

「ライファイセット…」

気配に振り向いたエレノアが名前を呼ぶ。

ライファイセットを見つめる視界がぼやけているのに気付いた彼女は、そこでようやく泣いているのに気付いた。

「ごめんなさい。こんな情けないところを見せてしまつて」

「情けなくなんかないよ。隣座つていい？」

目元に浮かび出る涙を拭うエレノアの真横にライファイセットは座る。

海の水面に映る満月を見て彼はこう言葉を漏らした。

「静かで綺麗だね。いつもバンエルティア号で見てるけど僕こんな風に夜の海を見るの初めてだから。いつもと違う新鮮な感じがする」

「同じ海でも時間や場所によって違って見えますからね。それに普段見ている何気ない景色でも毎日ずっと同じ景色を見ているわけではないんですよ」

「どういうこと？」

「上を見てください。ライファイセット」

言われるがままライファイセットが見上げると夜空には幾千もの星が瞬いていた。

「うわぁ…」

「綺麗でしょう。海に浮かぶ貝みたい」

「すごく綺麗だし、本当に海に浮かぶ貝みたいに見えるよ」

夜空を海とするならば、そこに光る星々は貝。

星は今までも見たことはあるがそれを聞くと全く違った印象を持つ。

その例えはライフセットに新しい刺激をもたらしてくれた。

「こうやって夜に星を見るのもやろうと思えばいつだってできますけど同じ景色はその日限り、二度見ることはないんです。昨日は輝いてなかった星が見えたり、昨日強く光った星が今日は昨日より弱く光っていたりして…海にも同じで波の立ち具合や音だけじゃなくて海の下にいる生き物達がずっと同じとは限らない。日によって違うからこそそういう風景を見る時は目だけじゃなく耳で音を聞いて、目ではわからないところを自分で頭の中に想像してみる。それが飽きずにより風景を楽しめる方法なんですよ」

なんとなくわかる気がする。

実際にライフセットが波の音に意識を向け、大人しい海の下にどんな生物がいるのかを想像してみると確かに全然違う。

自然の雄大さを、生命の存在を、前より身近に感じられる。

「なんて得意気に言ってますけど本当は他人の受け売りなんですけどね」

「その人って…」

「…グランです。彼も今のライフセットみたいにこうしてよく星を見てたんです。星を見てると気分が落ち着くからって」

暗い空に穏やかで明るい幼なじみの思い出を映すエレノア。

どうでもいいことで笑いあって、つまらないことで揉めて…遠い過去の記憶が鮮明に蘇る。

けれどももうその記憶を共有する相手はいない。自分がこの手で消

してしまった

「薄々自分でもわかってたんです。あのグランは別人なんじゃないかって…片腕をなくしたはずなのに両腕があったり、二人きりの時にしか言わないって決めた名前を人前ではつきり言ったり、今思えば私の知ってる彼にしては不自然なところが多すぎて違和感のようなものを感じていました。でも私はそれに見て見ぬふりをして誤魔化したんです。対魔士失格ですよ。感情よりも理性を優先して人々に尽くすのが対魔士なのに」

「エレノア…」

彼女の心情をライファイセットは痛い程理解ができるし、責められるはずもなかった。

大切な人に無事でいてほしいというのは人として当たり前の思いだ。

「エレノアは間違ってるよ。そうやって人のために悩めるエレノアだから僕は好きなんだ。だからもう自分を責めないで」

「ライファイセット…」

柔らかい声色で自分の手に手を重ねるライファイセットの姿がグラッと重なった。

無論、ライファイセットはグランではない。

だがライファイセットの言葉でグランから許された気がした。

「…うう…ああっ…!!」

とめどなく涙が溢れ出る。

ライファイセットはそんなエレノアに何も声をかけず、彼女が泣き止むまでそつと手を重ねた。

「ライフィセット、こんなにしてもらったのに申し訳ありませんが失礼を承知で最後に一つだけお願いを聞いてもらっていいですか？」

しばらくして涙を拭いたエレノアはまだ肩を震わせながら、ライフィセットにある頼み事を要求した。

「今から私が言う言葉を聞いてほしいんです。生きていたらいつか彼に言うはずだった言葉があるんです」

「うん。いいよ、僕でいいなら喜んで」

「ありがとうございます」

ライフィセットの快諾を得てエレノアは落ち着いて呼吸を整えようと、言葉を紡ぎだす。

「ねえ、覚えてる？前に対魔士になった理由を聞いた時のこと。あの時私が寂しいって言った理由まだ話してなかったでしょ？その理由はね、あなたが凄く成長してたからなの。子どもの頃からずっと一緒にいたのに私が気づかない間あなたは立派になってた。それに気付いた時羨ましいって気持ちもあったけど寂しいとも思った。子どもだった時のあなたはもう遠くになってしまったような気がして。だけどね」

そこでエレノアは一旦言葉を切る。

次の言葉をライフィセットと壁に隠れて様子を見守っていたガイアは待つ。

「だけど今でも私はあなたを好きって気持ちは変わらない。今も昔も、子どもから大人になっても……だからありがとう。今まで私の側にいてくれて」

エレノアの言葉が終わると同時に冷たい横風が吹く。

「ありがとうございます。ライフィセット。もう私は大丈夫です」

礼を告げられたライフィセットは「どういたしまして」と首を縦に振ると、視界のはしつこにキラリと光るものを捉えた。

「見てエレノア」

彼の指差した先には夜空の中に浮かぶ一際大きく光輝く一番星。

「僕前に本で読んだことがあるんだ。死んだ人は星になるんだって。きつとグランも空からエレノアを見守ってくれるよ。これからずっと」

「…ならもう恥ずかしい姿は見せられませんね。彼に見られても恥じないようにしっかりとままたからかわれてしまいます」

空を見上げてエレノアはライフィセットとグランにそう誓った。

ライフィセットとエレノアの会話を一部始終見聞きしたガイアは宿に踵を返す。

その時前にある人物がいたことに驚いた。

「行かなくていいの？」

ベルベットが腕を組みながらそう声をかけた。

一体いつからそこにいたのか、そう心でガイアはぼやいた。

「ライフィセットがいれば大丈夫だ。もう俺は必要ない」

歩みを止めずベルベットの横を通りすぎたガイアはそう言って宿へと戻って行った。

—これでいい

エレノアの悲しみはライフィセットが受け止めてくれた。

もうグランの役目は終わった

今日この日を境に自分もガイアとして完全に生まれ変わる。

(もう二度と君に悲しい涙は流させない。グランとしてでなくガイアとして君を守っていく)

満天の星空へ思いを馳せる二人の少年少女はお互いに誓いを立てた。



## 第25話 激フアイト!! キャラ札三本勝負

レニード港の一画、停泊するバンエルティア号の手前には張りつめた空気が漂っていた。

その中心ではロクロウが神妙な顔で座っており、後ろでは他の男性陣が固唾を飲んで彼を見つめている。

「うゝむ…どうしたもののか」

「さあ、お兄さんの番だよ」

「いやあ、わかつてはいるんだがなどれにしようか迷ってな」

ロクロウと向かい合っているのは東の大陸に伝わる古の怪奇、天狗をモチーフとしたお面を被る少年。

こちらはロクロウとは違って声に余裕が表れている。

(はあ…どうしてこんなことに)

ロクロウ以外の男性陣から少し距離を空けている女性陣の中でベルベットが目一杯の呆れを込めて、心中で愚痴を吐く。

ジト目をする彼女の視線はロクロウと少年と、その間にある複数の札に留まっていた。

---

時を遡ること数刻前。

懐賊病にかかっていた海賊達が快復に向かったとの報告をベンウィックより受けて、一行は当初の目的地であるイズルトへ旅立とうとしていた。

食料や備品などを軽く買い揃えてからバンエルティア号に乗り込もうと港へ赴いた時

「待てい！」

一行の進路を阻むようにお面をした少年が立ちはだかったのだ。

「オレはキャラ札一家の中でもなかなか才能のある三男秀才だ！ここから先に通りたいならボクと勝負しろ！」

突然勝負をふっかけてきたどこの者とも知れぬ謎の少年『秀才』。彼は小さい体で精一杯威厳を出して、ベルベット達に勝負を持ちかけた。

「キャラ札？アイゼン知ってるか？」

「いや初めて聞く」

「聞いたことがあります。複数の札を用いて点数を稼ぐ遊びですよ。ローグレスでも対魔士カードに並んで子ども達の間で流行っているそうですよ」

(対魔士カード？え、何それ、そんなのあるの？初耳なんだけど)

アイゼンに説明するエレノア。

その中に出てきた対魔士カードなる物にガイアは謎の興味を惹き付けられるが、今大事なのはそこではない。

「要は子どももの遊びってわけ。くだらない」

「キャラ札をバカにするな！キャラ札は奥が深いんだ！大人だってドハマリするぐらいなんだぞ！」

「そんなのあたしが知ったことじゃないわ。どきなさい、さもないとあんた怖い目にあわせるわよ」

「な、舐めるなよ！お、お前なんか怖くもなんともないんだからな！！ボクと勝負しろ！じゃないとここをどかないからな！」

「おー恐ろしや恐ろしや。さすがは天下の対魔士様も恐れる業魔じゃて」

子どもが相手だろうと凄みをきかせるある意味で平常運転なベルベット。

一貫してらしさを貫く彼女と威圧に怯む秀才。

蛇に睨まれた鼠のような構図にマギルウも面白おかしくブラックジョークで茶化している。

「おいおい子ども相手に大人げないぞベルベット。少年、その勝負オレが受けて立とう」

そう自ら名乗りを挙げたのはロクロウだった。

秀才の方へ歩み寄る彼にベルベットが咎めるように声を出す。

「あんた本気で言ってるの？」

「勝負事とあっては黙っていられないのがオレの性分だな。それにこの少年はお前に睨まれてたじろぎはしても道を譲らなかつた。なかなかの度胸だ。こんな年下にそんな姿を見せられてその男気に応えないのはオレの性分じゃない」

「そんな勝負受ける義理などなからうて」

ロクロウの自論に猛反発するマギルウ。

そこに加勢するようにガイアがロクロウの名を呼んだ。

「ロクロウ」

「おお、言ってやれいガイア！こんな小僧めに構わずさっさと次なる地へ目指そうとなー！」

何故だろうか。

まだそうなると決まっていなのに、ベルベットにはこの時点で凄まじく嫌な予感しかない。

「その勝負受けてやれ」

「そうそ…って違うじやろー!!何故そうなるんじや!今のはロクロウの暴挙を止める流れじゃったろうに何故に助け船を出すんじや!」

「そんな時間もかからなさだろうし少しぐらいいいだろ。懐賊病の連中は治ったんだしイズルトも逃げやしない。むしろあなつたロクロウを止めるとなるとそつちのが時間使うぞ…たぶんウチの副長も許可しないだろうし。なあ?」

「男と男の意地をかけた勝負に水を刺そうなどと無粋な真似はせん」

ガイアが話を振るとアイゼンは当たり前だとばかりに頷く。

「言うとする場合かこんの馬鹿者どもめ!意地などとそんなしようもないのが目的よりそんなに大事か!こうなればライフイセット、お主が最後の頼り。あの三人の能天気者を止めてくれんか」

「ごめんマギルウ、僕もロクロウを止めたくない。キヤラ札がどういうのか見てみたいし」

「それにあの様子だとこつちが折れるまでしつこく粘るぞ。変に騒ぎになって悪目立ちしたら何かと面倒だろ」

「な、な、なんということじゃ…坊までもが三人のアホたれにたらしこまれてしもうた…」

(やっぱりこうなったわね) (やっぱりこうなりましたね)

あらかじめ覚悟していたとは言えまさかここまで綺麗に実現するとは

失意に両手を地べたに付けて項垂れるマギルウに同情を寄せるベルベットとエレノアは一種の諦めを持って傍観に徹していた。

「じゃあお兄さんがボクと勝負するってことでいいんだよね」

「ああ。いいよな?ベルベット」

「…勝手にしなさい」

何を言っても徒労に終わるとわかりきっていたベルベットはロウラの好きにさせる。

「よし、連れの許可も降りたし早速やろうぜ」

「ちよつと待っててね。準備するから。そうだ、お兄さんルールの確認はする？」

「そうだな…大まかなルールだけ教えてくれ。後は見て覚える」

「ならボクが先攻になってお手本を見せるよ。で、キャラ札のルールだけどねー」

秀才はキャラ札を場に広げながらロウラに説明する。

「つまり相手より早く高い得点を稼いだ方の勝ちってことか」

「基本的なルールはね。最初にお互い八枚の手札から始めてるんだ。出した札とペアになる札を真ん中の場にある十枚の中から取って、これを交互に順番に繰り返し返して、先に札を組み合わせて役を作った方の勝ち…ざつとこんなところかな。あ、先に組み合わせを作った方の勝ちって言ったけど勝負を続けるか続けないかは自由に決められるから」

「その場合勝敗の条件は変わらないのか？」

「もし続けた場合先に役が完成したしなに問わず続けると決めた次に役が完成した方に続けるかどうかの決定権が渡る。そこで中断するならその時点でのお互いの役によって得た得点によって勝ち負けが決まるんだ」

「ふむふむなるほどのう。つまりこういうことじゃな」

1、最初に配られた八枚が自分と相手の持ち札になる

2、順番に手札から中央の場にある札とペアになる札を出して、更に山札からもう一枚札を引いてペアとなる札があれば同じようにし、なければ場に置く。

それで取ったペアが得点稼ぎに利用できる札となる

なお中央の場の札がなくなる、もしくは場に札があってもペアとなる札が手札にない場合は手札から一枚場に捨て、山札から一枚取って同じようにする。

3、これを交互に繰り返して、取った札で決められた組み合わせを先に完成させた方の勝利となる。

だが先に組み合わせを完成させた方はこの時、勝負を続けるか続けないかを選ぶことができ、続ける場合は次にどちらかが組み合わせを完成させた時点で最終的に得点が高い方が勝利者となる

「よく考えられてるな。てか、なんだかんだ言いながら説明聞いてたんだな」

「あのような穀潰しにもならん娯楽興味なんぞ更々ないがの。あまりに退屈し過ぎてついつい耳に入れてしまっただけじゃよ」  
「そうか」

ぶつきらぼうな態度にそぐわない簡潔でわかりやすいまとめをしてくれたマギルウをらしいなと思いを寄せながら、ガイアはあちらの様子を伺う。

どうやら説明とキャラ札の準備が同時に終わったようだ。  
秀才によつて配られた手札となるカードをロクロウは確かめる。

「面白い絵柄だな。お、この男なかなか剣の腕が優れていそうだな。顔を見ればわかる。現実には是非とも立ち合ってみたいものだ」

手札の中にある一枚、クラトスという剣士の札を見てロクロウが呟いた感想がそれだった。

「こつちの青髪の男も強そうだ。まだ若いようだがこれはかなりの手練れだろうな」

「お〜いロクロウや。自ら手札を明かすような真似をしてどーするつもりじゃ？始める前から勝負を捨てるのか？」

「つと、そうだったな。すまん、助かるマギルウ」

ロクロウは彼女に札を言うのと改めて手札を確認し、秀才へと準備万端だと目で合図を送る。

「準備はいい？ボクから始めるよ」

「ああ、どんと来い！」

こうして今に至るわけであるのだが試合の進捗状況はというと

「今はどちらが優勢なのでしょう？…」

「キャラ札とやらの役がどれだけあるのかどんな組み合わせで成立するのか、役を成立させるのに何枚の札が必要なのかさすがの儂もわからぬがどちらが優位にかあやつらの顔を見れば一目瞭然じゃな」

ロクロウは眉間にシワを寄せて、秀才は余裕たつぷりに涼しい顔をしている。

マギルウの言うように彼らの表情が戦況を物語っていた。

「勝てるよね、ロクロウ。まだ出せる札ありそうだし」

「言うほど不利には思えないけどな。ただなんであいつさつきから男の札ばかり出してるんだ…？」

ライファイセットとガイアはまだロクロウの勝利を諦めていなかったが、ガイアには一つ引つかかることがあった。

秀才の場にはアスベル・ソファイ・コレット・ゼロス・カロール・レイヴンがある。

対するロクロウの場はヒューバート・マリク・コングマン・リオン・ジュード・ローエン。

清々しい程見事に男性の札しかない。

中央の場にはしいな・アルヴィン・キール・ジェイド・ロイド・ナタリア、そしてロクロウの手札はすとジーニアスがある。

「やったことないから正しいかどうかはわからないが服装の似通ってる札を揃えてたら得点が入ってたんじゃないか？ロクロウの手札にある茶色い髪の女の子と真ん中にでてる紫っぽい髪の女の子の二枚、似たような格好してるしあれで何か役ができそうだと思うんだが」

ずずとしいなの二枚で組み合わせができるのではないかと、予測を立てるガイアにライフイセットも同調する。

「きつとロクロウにも考えがあるんだよ。まだ勝負は終わったわけじゃないし勝てるよ」

「だな。最後の最後まで諦めなければ必ず勝利の兆しは見える」

「はてさてそれはどうかの。儂らは極悪非道の限りを尽くした大悪党じゃからな。天が味方してくれるとも限らんど。おまけにこちらには不幸に恵まれた死神がおるからの」

ロクロウに応援としての言葉を送る二人。

通常ならばここからロクロウの怒涛の逆転劇が始まり、一気に勝ちをもぎ取るベタで熱い展開となるのがお約束なのだろうが、そうそう上手く事が運ぶわけではない。

むしろ二人のおかげで最悪な展開への扉が開かれたとマギルウは考えていた。

「はいボクの勝ち」

そしてそれはすぐ現実となった。

ジーニアスを出してロイドを取ったロクロウは、エリーゼでアルヴィンをペアにした秀才にトドメを刺された。

ゼロス・レイヴン・アルヴィンの組み合わせで成立する『袂を分か



つ者たち』を完成させたのだ。

「うおっ！オレの負けか…」

「お兄さん、初めての割には頑張ってたと思うよ」

「そうか？嬉しいこと言ってくれるじゃないか！」

「でもお兄さん勿体ないね。この二枚の札を先に出してればボクより先に役を完成させて勝ってたのに」

「そうなのか？」

「ずとしいなの札を指差しての秀才の言葉にロクロウは目を丸くする。」

「なんだオレ勝ってたのか。それは確かに勿体ないことをしたな。はっはっは」

「笑い事ではないわ！勝てたはずの勝負をみすみす逃しおって！」

「ああ、悪い悪い」

「それが詫びる者の口振りか！謝罪するにあたる誠意が欠けておるぞ！」

「誠意がどうかロクロウもお前に一番言われたくないと思うぞ」

「お主には言うておらんから黙っておれ！ええい、そこに直れ！今から儂がきついお説教をかましたるわ！」

「まあそうカリカリするな。余計に疲れるぞ」

「誰のせいだと思っておる！とにかく儂の目の前で座れ！正座じゃ！」

途中口を挟んだガイアをマギルウは邪険に扱おうとロクロウに正座を強要する。

「断る理由もないのかロクロウもすんなりと従い、石の床に膝を付く。」

「次は誰がボクと勝負するの？」

「次なんてないわよ。遊びはもうお仕舞い」

新たな対戦相手を望む秀才にまたしてもベルベットは目付きを尖らせる。

ますます末恐ろしさを増しているその目を向けられてビクビク震える秀才にガイアが声をかけた。

「次は俺が相手になろう」

「は？何言ってるの？」

「やり方とルールは今ので大体理解したつもりだ。この一戦で終わらせてみせる…ロクロウ、お前の無念は俺が晴らしてやる」

「頼んだぜ、ガイア！」

「ガイア頑張って！」

―何を遊びごとときにこんな雰囲気になれるんだこいつらは

そう口に出したくなるベルベットのジト目を背中に受けながらガイアは秀才との対決に挑む。

「今度はフードのお兄さんかい？役の説明はする？さっきのお兄さんはよくわかってなかったけど」

「いや大丈夫だ。すぐに始めてくれ」

キャラ札第2戦、ガイアと秀才の対決が始まった。

「このキャラ札という遊び…手札と中央の場を確認してどんな役で点を稼ぐかだけじゃなく相手の場を見て相手が何の札を狙っているのかを推理し、自分の札で相手の役の完成を妨害する。確かに…君の言うように奥が深い」

「初めてでそこまでキャラ札を理解するなんてスゴいねお兄さん」

「年上を舐めるなよ？これでも頭を使う遊びは好きなんだ」

両者滞りなくゲームを進めていく。

マリク・パスカル・エステル・ジュディス・ルーク・ティア、リッド・メルデイ・レイア・エリーゼ・ジエイド・ガイが場に出る。

3 順目まで進んだところでガイアがエステルとナタリアの札で役を完成させた。

「この組み合わせで役はできるか？」

「できるよ。『王家の姫君』、10ポイントの役だね」

「これで終わりね。さっさと行きましょ」

役を完成させて決着がついた。

よつてもう子ども遊びに付き合う時間も終わったのだと肩を撫で下ろすベルベット。

だが

「まだ続けるぞ」

「はあ…!？」

数秒も経たずしてその思いは儂くも裏切られた。

思わずベルベットは絶句し、説教に熱中していたマギルウもエレノアもその言葉に凍り付く。

「いいの？…ここで止めたらお兄さんの勝ちなのに」

「構わない。続けてくれ」

ベルベット達の戸惑いに関わらず対決は再び動き出した。

「まったくもう何考えてるのよあいつは…これで負けたら承知しないわよ」

「さ、さっき勝ったし次も勝てるよ」

「だどいいけどね」

苛立ちが溜まりに溜まるベルベットを宥めようとライフィセットは懸命なフオローを試みる。

バンエルティア号が積み降ろししていた空き箱に腰かけるベルベットは、せめて早々に終止符を打つてくれと願うが思わぬ形でそれは実現した。

「はい、ボクの勝ち」

「嘘お!? え、ほんと?」

メルデイ・アニス・エリーゼの組み合わせで『可愛い相棒』の役を成立させた秀才が得意気に勝ちを宣言する。

「…続けてくれたりする?」

「終わりにするよ。悪いけど」

「そっか…終わるか」

力なくほくそ笑むガイア。

負けを受け入れたガイアは自分の場にあるティア・ジュディス・パスカルと山札の中にあつたミラを手にして、最後に秀才に訊ねる。

「ちなみにさ、この組み合わせで何かできたりする?」

「できないよ」

「え、ないの? バリボ一的なそういう役ないの?」

「ないよ」

「あ、そう」

「もしかしてお兄さんが続けた理由って」

「うん。そう、この組み合わせでできる役があると思ってた…負けたけど楽しかったよ」

そう言つてガイアは目線を下に落としてベルベット達のところに

戻る。

—合わせる顔がない

そんな雰囲気を纏いながら

「わかっておるな。自分が何をやらかしたか…そこに座らんか」

「…はい」

マギルウに言われるがままガイアはロクロウの隣で正座する。

それを見たマギルウはガイアの前で仁王立ちすると静かに尋問を行う。

「とんでもないことをしでかしてくれたのう？ロクロウに続いてお主まで同じ愚を犯しおって…いやロクロウが可愛く思える程にお主の過ちは許し難いぞ。お主は手にしていた勝利を自ら手放したのじやからな。答えい？何故あんな真似をした？」

「…最初にできた役が自分の狙ってたのと違ったので…狙ってた役で勝ちたいと思いました…」

「ほう、なるほどなるほど。要は自分の納得できる勝ちを優先したと…そういうことか」

「…はい」

言い分を聞いたマギルウは大きく息を吸って

「こんのアホンダラー!!」

一喝が周囲に響き渡る。

「今さっきルールを知った初心者が勝ち方に拘るなど一丁前にぬかすではない…そんなもんお主には二万年早いわ!」

「しかも存在しない役を狙ってたなんて…さっきのロクロウを見ていたのにどうしてルールを確認しなかったんですか」

「ロクロウと同じ条件でやらないと不公平だと思いました」  
「不公平って…もう、そういう問題じゃないでしょう」

マギルウだけでなくエレノアにも信じられないという顔で責め立てられるガイア。

言い逃れできぬだけにガイアは口調を敬語変えた挙げ句頭を上げられずにいた。

「くあくほんとに情けないわい。勝ち方に拘る意味がわからんわ。どんな勝ち方であろうが勝てれば全部一緒じゃろうが…」

「…わかるよなあ?」

「わかる。オレにはわかるぞ。勝負には時として勝ちそのものよりもっと大事なものがある。だがあいつらにそれを理解しようと求めるのは残念ながら無理なんだ」

「無駄とわかっていても無駄と捨てきれない。辛いでフけどそういう男の美学は女子には到底わからないものでフよね」

「あんまりそういうこと言わない方がいいと思うけど」

同意を求めるガイアの隣で横並ぶロクロウとビエンフーが共感の声を吐露する。

ライファイセットも彼らと同じ意見を持っていたが、今加わるのはまづいと判断し、むしろ彼らに注意を促す。

「負け犬がどの面下げてぬかすかー!」

「…なんで…俺だけ」

直後、やかましいとばかりにマギルウはどこから取り出したハリセンで横っ面をひっぱたく。ガイアだけ

「ねえ次の相手ー」

「は?」

ひい!？」

ベルベットの横睨みが秀才に炸裂する。

その恐怖と言ったらもはやさつきまでの比ではない。

八つ当たりで理不尽に殺されかねないと、そう思わせるぐらいに瞳に怒りしかなかった。

「しばらく目を離した間に妙なことになっているな」

そこにアイゼンが町の方からやって来た。

「アイゼン。今までどこに行ってたの?」

ロクロウの対決の途中くらいから姿が見えなかったのを今更気付いたライファイセットが訊ねる。

「ちよつとばかし買い物にな。これを探していた」

「キヤラ札の本?これを買ったの?」

「どこに行ったかと思ってたけどわざわざ町の方まで戻ってたのね。ちやつかり札まで買って」

「どうせ買うのなら合わせた方がいいと思ってな。それよりも、ガイアまで負けたか。ロクロウはおそらく負けるだろうと思っていたが」

「負けたって言うか普通の負けよりずっと無様な醜態さらしてくれたわよ。あんたの相方」

「そうか」

かなり毒を含んだ言い方だがアイゼンはすんなりとその言葉を受け止める。

ガイアはガイアで痛いところを突かれたのか「うっ!」と喉に小骨が詰まったような声を出して、ロクロウ共々マガイルウとエレノアのお叱りをもらっていた。

「俺に任せろ」

「アイゼンが？」

「これでルールと役は完全に把握した。安心しろ、遅れはとらん」

「…もうあんたにまかせるわ」

安心しろと言われても前二人のせいで不安が拭えないのは事実だが、事前に用意をしているだけアイゼンにはまだ期待できる。

そう思考したベルベツトはアイゼンを送り出した。

「頑張つてアイゼン！」

「オレ達の仇をとってくれよー」

「お前に俺達の命運を託したぞ。全てはお前にかかっている」

「負け犬風情が誰の許しを得て勝手に口を開いておるかー！」

声援を送った男子3人の中でまたガイアだけがマギルウの掌で頬から軽快な音を鳴らされる。

とことん慈悲のない仕打ちにライフイセットの顔には哀れみからくる力無い笑みが浮かんでいた。

「さて、始めるとするか。お前が先攻で構わない」

「う、うん。じゃ、じゃあ始めようか」

目付きの悪さならベルベツトに負けず劣らずのアイゼンに秀才はたじろぎながらも、第3戦を始める。

片や覚えたばかりの知識を引き出して、片や植え付けられた恐怖心と戦いながら、4順目に突入したがお互い会話のないまま展開が進む。

「オレ達の時より緊迫感があるな。見えない刃の鏝迫り合いが二人の間で幾度となく繰り広げられているようだ。これはどっちが勝つか



わからんな。ガイアどっちが勝つと思う？オレはもちろんアイゼンを応援するが」

「…」

「ガイア？聞いているのか？」

「…お願いロクロウ、頼むから今話しかけるの止めて」

二人の接戦に沸き立つロクロウに見向きもしないガイアから返ってきた返事がそれだった。

素っ気ない返しにロクロウは盛り上がり欠けると思ったがすぐに彼がそういう態度を取らざるをえない理由に思い至る。

「そうか、話してたらマガルウにまた仕置きされるもんな」

「そういうことだ…」

「いやあ悪い悪い。あまりに見てて面白い戦いだからつい興奮してしまつてな」

そう言つて軽快に笑い飛ばすロクロウ。

しかしマガルウからは何の鉄槌は下されない。負けは負けなのにこうも待遇が違うのだろうか

凄まじいまでの不条理を身に感じながらアイゼンらの様子に目を移すと、黙々と続いていた戦いが幕引きを迎えていた。

「俺の勝ちだ」

ロイド・コレット・ジーニアス・リフィル・しいな・ゼロスの組み合わせで『テイルズオブシンフォニア』を完成させたアイゼン。

「負けちゃったか…けれど楽しかったよ」

「俺の方こそ礼を言わねばならん。こんな娯楽に興じる時間は久々だった」

「次は絶対負けないからね。覚悟しといてよ」

「望むところだ。いずれまた手合わせしよう」

戦いを終えて硬い握手を交わす秀才とアイゼン。

「これでやっとイズルトに行けるわね」

「そう大した時間ではないはずなのにかかなり長い時間待ったように思えますよ」

観戦していたベルベットとエレノアはようやく目的地への旅を再開できると、安堵の言葉を呟く。

「やったなアイゼン。お前なら勝てると思ってたぞ」  
「本当によかった…これでもう責められなくて済む」

ガイアとロクロウがアイゼンに感謝を告げる。

ガイアなど胸中に溢れる解放感からか、正座で痺れた足のことなど気にも留めていないようだった。

だがそこに悪魔の一声が去来する。

「何を甘いことをぬかしおる。アイゼンが勝ったからと言ってお主の罪が拭えたなどそんなことはあるまいて…船の中でみいくちつり教育してやるからもう。心しておれ」

「へえ？」

思わず間の抜けた声が溢れるガイア。

「え？まだ言われるの？」

「百歩譲って責められるのはいいにしてもお主ってなんで複数系じゃないの？ロクロウは入ってないの？僕だけ？」

そんな彼の困惑を他所にマギルウを筆頭として女性陣はバンエルティア号に乗り込み、ロクロウとアイゼンはガイアの肩に手を置く。

「強く生きろよガイア。宿命を塗り変えて必ず帰ってこい」

「無事帰ってきたら一品物の酒を空けてやる。年齢だの細かいことは抜きだ」

「姐さんのお説教はもはや拷問：生きて帰れたら奇跡と思っしてほしいでフ。だけどボクはその奇跡が起きてくれると信じてるでフよ」

「頑張つてねガイア：僕には無事を祈るしかできないけど待つてるから…」

「やめてくれ：その流れは多分一生帰ってこれないやつ」

ライフイセツトにまで物語の中でこれから死にそうな人物に投げかけられる言葉を賜り、ガイアは益々畏怖する。

そこに彼の前を横切り天へと羽ばたく海鳥がいた。

何者の束縛も受けず気ままに快晴の空の下を飛ぶその姿を見上げ、ガイアは羨望の声で呟いた。

「鳥はいいなあ：誰にも文句を言われずに自由で」

もし生まれ変われるのなら鳥になりたい。

ある種の諦観を持ってガイアは一番最後にバンエルティア号の板を踏んだ。

## 第二章 さまよえる心達

### 第26話 帰郷

『クウアアアア!』

雲一つない晴れ晴れとした青い空に鳥の嘶きが轟く。

その嘶きは鳥が出す音にしては重く、寒気のするような不気味さがあつた。

事実声の主は普通の鳥ではない。

小さな山よりも大きな体長と赤緑の体色を持つその生き物はまさしく怪鳥とでも呼べる程に、自然界に現存するどの鳥類よりも異様な形容をしていた。

「くっ…くあっ…」

高速で空を飛び行く怪鳥―バードンの足爪にある男が捕らわれていた。

体全体を襲う風圧と左腕ごと胴体を掴む巨腕の圧力に苦しめられ、逃げようにも脱げ出せずにいた。

そんな男の様子などには一瞥もせずバードンは自らの意志の赴くままに、空を滑空する。

「いつまでも、凶に…乗るな!」

男は唯一束縛を逃れていた右腕に握っていた太刀をバードンの皮膚に突き刺す。

ズブリと音を立てて、紫色の血が溢れだした。

『クウアアアア!!』

捕らえていた獲物に手痛い反撃を食らったバードンは男を手放し、彼の体は重力に従って真下の砂浜へ落下する。

「うぐっ！・ああッ！」

かなりの高度から、しかもまともな受け身を取れずに落ちたはずだが男は絶命するようなことはなく、汗だくで荒い息遣いながらも海に降り立つバードンを凝視した。

『クウアアアア！』

身体を傷つけられていきり立つバードンの首筋から苦しそうに胸の辺りを抑える男に火炎が発射される。

男は咄嗟に飛び退き、男のいた場所から砂塵と爆炎が噴水のように沸き上がる。

連続して迫り来る炎をかわしていくが、直に砂の上に膝を付いてしまふ。

「ぐあ…がはっ！」

全身を激痛が駆け回る。

身を焦がすような熱が体の内側から生じている。

「くそつたれが…体が、まるで動かん…やはり、毒の類いか」

男が太刀で斬り込んだ時バードンは巨体からは想像もできない軽々とした身のこなしで回避し、嘴を身体に突き刺そうとしてきた。

空中で身体を捻ってどうにか掠り傷で済んだが、それから身体に異変が起きた。

たちまち体の自由が効かなくなっていく、動きが鈍くなったところ

を脚で掴まれ、バードンはそのまま空へと飛んだ。

『クウアアアアアア!』

標的が一步も動けないのを確認したバードンは歓喜の雄叫びを上げて、再び嘴を開く。

明るい光が口内を満たしていくのを男は砂浜に這いつくばって見上げる。

しかし

「あああああああ!!」

体内に循環する毒に抗って男は立ち上がる。

バードンの火炎はすぐそこまで接近していたが、太刀に赤黒い力を注ぎ、男は砂を蹴ってそれに自ら向かうように跳ぶ。

「おおお!!」

太刀の軌跡は火炎を二つに分け、バードンの首筋で赤い光が瞬く。

男が着地すると、バードンは呼吸を始めとするあらゆる動きを停止させ、首が体から溢れる。

―バシヤア!

まず首が、数秒後に胴体が水面に落ち男の背中を盛大に立ち上った水しぶきが濡らす。

振り返った男が輪っかの付いた道具を翳すと、バードンの亡骸は紫の障気となって輪っかの中に吸い込まれていく。

男の顔を正面から赤い光が照らし、輪っかの中にはバードンの絵柄が刻まれた赤色のカードが生成された。

それを手に取った男は道具と一緒に懐にしまいこむ。

だがしかし

「ぐっ!?がああ!!ああ!ぐうう、ああああ!!」

バードンが消えても毒は体に残っており、男は波打ち際に沈む。時間が経つごとに効力を増す性質があるのか、全身を襲う熱と痛みはさつきまでの比ではない。

まともな言葉も出せず、波と砂の上でもがき苦しむしかできない。

(こんなものに俺は……終わってたまるか……!俺は生きる、生きてやる。こんなところで死んでたまるものか……!)

生きようとあがく意志が込み上げるが、それに反して意識は段々薄暗い闇の深淵へと沈んでいく。

体にかかる波の冷たさも、砂の柔らかさも、何もかも感じられなくなっていく。

命の灯火が消えかかっているのだ。

—丈夫ですか?しっかり—て

(女の……声)

ふと突然声が聞こえてきた。

声の主が近付いてくるが、視界がぼやけているせいで相手の顔は見えない。既に視覚が機能していないまでに毒

が回っているというのに、不思議と声は毒以上によく彼の体に届く。

その声は懐かしく、彼の心に安らぎをもたらしてくれる。

—一体誰なのだろう

そんなことを考える余裕もなく男の精神は深い眠りについた。

船旅真つ最中なベルベットらはイズルトへ到着するまでの時間、バンエルティア号の甲板上で過ごしていた。

「懐賊病にかかってた海賊の人達もうすっかり元気になったみたいだね」

「元から元気の固まりみたいなの連中だからな、この船の奴らは皆。それに唯一の特効薬だけあってサレトーマは一度飲めば効き目は抜群だ。その分味も強烈だが」

「みたいだね。ベンウィックも言ってたよ。かなり癖のある味だつて。ガイアは飲んだことある？」

「…一度だけな。あの味はできれば二度と味わいたくない」

船尾でライフセットとガイアがそんな話をしていると、向かいで聞いていたベルベットが口を挟んでくる。

「ライフセット、エレノアはどうしてる？」

「エレノアも薬を飲んだからもう海賊病にかかる心配はないって」

「そうじゃなくて、そっちもだけどちゃんと今まで通りでいるかってこと」

「エレノアのこと心配なんだね」

「そんなんじゃない」

間を置かず素早くそう返したベルベット。

ベルベットの言葉にエレノアに対する気遣いの心があるのを、ライフセットもガイアも見抜いていた。

そしてそれは彼女も例外ではなかった。

「坊、覚えておけ。年頃の乙女は自分の気持ちを素直に出せぬものなのじゃ」

「ベルベットは年頃の乙女ってこと？」

「マギルウ、ライフセットに妙なこと吹き込まないで」



「ふひひ、坊のことには素直じゃの〜」

「ベルベツトってライフイセツトのことになると感じ変わるよな。雰囲気柔らかくなるっていうか接しやすくなるっていうか、見て安心する」

「何それ、変なこと言わないでくれる」

マギルウに続いてガイアにまで言われてベルベツトはそっぽを向く。

照れ隠しにも見えるその仕草にマギルウもガイアもライフイセツトも、一段高いところで聞いていたアイゼンまでもが、それぞれ異なる意味合いながらも頬を笑みで緩ませた。

そんな彼らを一段上のデッキから見ているエレノアは服の内側から取り出した金色の懐中時計に視線を落として思考に集中する。

（世に平和と秩序をもたらすために聖寮はある。聖寮やメルキオル様の行動もアルトリウス様の深い考えに従ってのこと：けれど、この不安や違和感は）

エレノアの心には聖寮の行いに不信感が芽生えていた。

ワアーグ樹林でクワブトを始末せず結界に閉じ込めていたこと、ロウライネの塔でメルキオルが使役聖隷をワイバーンに変えたこと、そのメルキオルが逃げた先にいたグランが異形となっていたこと

ベルベツト達と行動を共にする中で見てきたそれら一つ一つが、聖寮の理想に殉ずる行為なのか疑問があった。

『下がりなさい、お前が知る必要はない』

以前御座でローグレスの離宮にいた巨鳥の業魔について訊ねようとした時、アルトリウスに言われた言葉が蘇る。

あの時教えてくれなかったことを残念だとは思ったが、アルトリウ

スへの忠誠や信頼は揺らぐことはなかった。

けれど今はどうだろう。

アルトリウスや聖寮を完全に信頼できなくなっている自分がいて、そんな自分に戸惑う自分もいる。

(私はどうすれば…)

「どうかしたのか？」

「きやー！」

悩んでいるところにいきなり声をかけられてエレノアは悲鳴近い驚きの声をあげた。

声をかけたロクロウはまさかそんな反応をされるとは思わず、やや困惑した様子で後ろ髪を搔く。

「おいおい、そんなに怖がるなよ。いきなり声をかけたのは悪かったが」

「こ、怖がってなどいません！私に何か用ですか」

否定するエレノアだが内心完璧に否定できない部分があった。

現にそれを証明する材料として彼女の顔は曇りがある。

「お前、業魔が怖いのか…？」

そんなエレノアの様子を見てロクロウはそう言った。

「無理もないか。あんなことがあったばかりだ」

「違います！…業魔が憎い」

心中を言い当てられてエレノアは一旦は否定したが、やがて過去をロクロウに語った。

「…十年前業魔の群れに襲われて私の村は全滅しました」

「お前の家族も？」

「はい、たった一人の家族だった母がその混乱の中で…残されたのは母がくれたこの手鏡だけです。こんな思いをするのは私だけでいい。だから私は業魔を討つ対魔士になった」

「なるほどな…」

—そりや確かに業魔を憎むには充分すぎる理由だな

業魔への彼女の態度に納得したロクロウは両腕を胸の前で絡ませる。

「もうよろしいでしょうか」

「ああ…いやまだもう一つだけ聞きたいことがある」

「何でしょうか」

「全滅って言ってたがお前の幼なじみは一緒じゃなかったのか？小さい頃からずっと一緒だったんだろ？」

「彼と出会ったのはそれより後です…母を失い一人になった私は母の友人だった彼のお母さんに引き取られて、彼の家族に面倒を見てもらったんです」

「そうか」

「錨の準備をしろ！もうじきイズルトだ!!」

ちょうどその時ベンウィックの号令が船上に響き渡る。

ロクロウが進路上に目を凝らすと、一つの大きな大陸とその近くに浮かぶ小さな島々が見えた。

「やっと着いたわね。イズルトに」

ベルベットがバンエルティア号から陸地に降りたつて一言目がそ

れだった。

思わぬ不幸が起こり途中レニードに寄港したものの、無事船旅を終えて一行は当初の予定通りイズルトに到着する。

「ここにグリモワールがいるのよね。どんな人物なの？」

「端的に表すのであれば…」

早速本題に入ろうとベルベツトはマギルウにグリモワールの特徴を聞き出す。

それに対してマギルウは

「ふう、はあ…あつそ、こんな感じじゃ」

「全然わからん」

やけに落ち着きを祓った声色を出す。

おそらくグリモワールの真似をして声も本人に寄せたのだろうが、残念なことに誰一人としてピンときた様子はないようでそんな皆にマギルウは呆れて両手を上げる。

「やれやれ、想像力の乏しいお主らに合わせて言うどグリモ姐さんは『アンニユイな有閑マダムの黄昏』…的な雰囲気を纏った大人なオンナじゃ」

「ベルベツトやエレノアとは違う感じの女の人ってこと…かな？」

「要は大人の女を探せってことか」

ライファイセツトとロクロウはそう解釈して言うが、あまりに曖昧すぎてグリモワールの情報は無いに等しい。

これで本当に見つかるだろうかと一抹の不安を抱えながらもベルベツトは街の中へと歩を進め、ライファイセツト達も続くこうとする。

とそこでベルベツトは港から一步も動こうとしないガイアに気付く。

「ぼさつとしてると置いてくわよ」

「あ…ああ、今いく」

生返事に近い調子で言葉を投げ返したガイアはやや早歩きで彼らに追い付くと、正面を向いたまま目線を周囲にばらまかせた。

(まさかこんな形で帰ってくることになるなんてな。二度と帰って来ないだろうと思ってたのに)

イズルトの街の中心部へと足を踏み入れたベルベット達は辺りに目を凝らして、マギルウの言う『大人のオンナ』に近い女性を探す。

「大人な女ってどういう人を探せばいいのかな？」

「大人の女って言ったら、そうだなあ…オレもよくわからんが大人の女ってことは経験が豊富ってことだろうからつまり賢そうな雰囲気  
の奴を探せばいいんじゃないか？」

「賢そうな人…アイゼンみたいな感じの人かな？」

「あー大体そんな感じじゃないか？」

「いやいやよいか坊よ、アイゼンのあれは賢そうとは言わん。無駄に知識だけあってガラが悪いだけじゃ、賢いというのは儂のように知性が内面に納まりきらず見た目に出ておる者のことをいうのじゃよ」

「適当なことを抜かしてると海に叩き落とすぞ」

「これだから冗談の通じぬ男はつまらんのう。ちよつとしたユーモアな可愛らしいジョークではないか、見逃してお　く　れ♪」

ゴキゴキと派手な音を拳で鳴らすアイゼンにマギルウはどこ吹く風とさらりと軽く流す。

そんなやり取りを耳に入れるライフェイスは自分の右後ろを歩いて、首を左右に動かして辺りを見るガイアに意識を向ける。

「ガイア、何か見つかった？」

質問を投げかけてみたが返事はおろか反応がまるでなく、ライフイセツトは今一度、改めて彼の名前を呼んでみる。

「ガイア？聞こえてる？」

「…いや今のところそれらしいのは見当たらないな」

今度は答えてくれたがそれでもやはり変な違和感がある。

妙に思いながらライフイセツトはちらりと逆の方角を見る。

こちらにはエレノアがいるのだが、彼女も周りに目を配っているもののどこことなく落ち着かない雰囲気は漂っている。

（やっぱりガイアもエレノアもここに来てからなんだか様子が変わった。どうしたんだろう…この場所に何かあるのかな）

片方は反応が鈍くなり、片方は落ち着かない素振りをしている。

イズルトというこの場所がガイアとエレノアにとって何かしらの意味を持っているというのは明白だった。

その意味をライフイセツトが考えていると、先頭のベルベットがいきなり家の影に潜むように移動した。

「ベルベット？」

「声を出さないで。あいつらがいる…」

ベルベットと同じように家の影に身を隠したライフイセツト。

彼の後ろにエレノアもいて、残りも別の家の方に回っていたのを確かめた二人はベルベットの視線の先を追い、そこにいた人物の名を口にする。

「テレサ様…」

「テレサだけじゃありません。オスカーまで：何故二人がここに？」

「引き続きは全て済ませておきました。着任と同時にあなたの指揮で皆が動けるように」

「助かります。でも姉上の手際と比べられて僕の至らなさが皆に知られてしまいそうだ」

「心配しなくても大丈夫、あなたには特別な力と素質がある。パラミデスへの派遣もアルトリウス様の期待があればこそです。臆せずあなたの力を信じていつも通りのあなたでいればいいのです」

「はい。しっかりと努めさせて頂きます」

テレサとオスカー、二人の一等対魔士は倒すべき敵がすぐ近くで様子を伺っているのに気付かず、話し込んでいた。

「でも驚きました。アルトリウス様の命令とはいえまさかあなたがこの地域の警護に着くことになるなんて：奇妙な巡り合わせね」

「僕も命を賜った時は驚きましたよ。どういう偶然なのかと：これはしっかりとしないと彼に笑われてしまいそうだ」

「仲が良かったですものね。あなた達は」

「姉上は彼にあまり良い印象を持ってなかったような気がします」

「そうね：あまり好きではなかったかしら。いえ好きというよりかは苦手と言った方が正しいですね」

頤に指を当てて言ったテレサの言葉にオスカーはクスリと口元を緩ませる。

「確かに彼は姉上の苦手なタイプでしたね。覚えていますか？彼が僕

達と見回りをすることになった時目を離した隙にいつの間にか出店で焼き鳥を買って食べていたのを」

「ああ：ありましたね。本当に参りましたよ。何を食べてるのかと問い詰めたら平然と私達にも勧めてきて：あの時始めてあれに付き合わされるエレノアの気持ちが変わったと同時に素直に尊敬しました：よくあれにずっと付き合えるのかと」

「良くも悪くも自由奔放というか、真面目な時とそうでない時の差が激しかったというか、今思えばとにかく自分の心にも正直でしたね彼は」

思い出話に華を咲かせる二人。

二人とも呆れた言葉が飛び出しているにしては楽しげにしていたが、直後テレサの顔は険しくなる。

「誤解しないでくださいね。苦手ではありませんでしたけど嫌いという程ではなかったですよ。彼が亡くなったと聞いた時には衝撃を受けましたし」

「わかっていますよ姉上。だからこそ僕はこの地域の平穏を責任を持って守らなければならぬ。彼の犠牲を無駄にしないためにも。そして必ずエレノアも聖寮に連れ戻します」

「まだ信じてるのですか？彼女を。彼女は――」

「エレノアが聖寮に反しているのは知っています。ですが彼女が裏切りを働くとは思えません。けどそれには訳があるはずですよ。でなければ彼女が業魔の軍門に下るなどありえない……」

毅然としたオスカアの瞳をしかと見たテレサは安堵の笑みを溢す。

「その様子なら安心ですね。もう時間です。　いかないと……」

「道中気をつけて」

別れを告げるとテレサは身を翻して歩き出すが、まもなくしてピタ



リと足が止まる。

「そうそう、ハリアの業魔には気をつけてください。思いのほか手強く手負いの者も出ています」

「心得ました」

「それから生水は飲まないように」

「はい」

「それから――」

「姉上」

数歩進む度に歩みを止めるテレサ。

これにはオスカーも思わず苦笑いになってしまう。

自らを氣遣つてくれて嬉しいとは思えるのだが、あんまり度がすぎるのも考えものだ。

部下にでも目撃されたら正直氣恥ずかしさが生まれれないとは言えない。

テレサもわかっているのか自分自身に向けて溜め息をはく。

「いけませんね。これじゃあ…わかつてはいるのですが」

テレサは今一度オスカーの顔をじつと見つめて、名残惜しそうにしながらも今度こそ彼の元を離れていった。

そしてオスカーもまたテレサの後ろ姿が見えなくなるまで見送ると、彼女とは逆の方へと姿を消す。

二人がいなくなったのを見計らってベルベット達は物陰から体を出す。

「まさかあいつらがここに來てるとはな。参ったな…これではおおつぴらに探しにくくなった」

「思いつきし面が割れてしまっておるからのう。どこかのオソロしい業魔による救世主様襲撃に付き合わされてしまったせいで…しかしなんと言うか奇遇じゃのー儂らと同じタイミングであやつらがここにおるとは」

「…あたし達を追ってきたのか?」

聖主の御座でも一戦を交えた二人が先回りするようにここにいる。偶然にしてはできすぎている気がする。

—情報が漏れている

そう考えた時ベルベットはエレノアに懐疑の目を向けた。

「私を疑っているのはわかりますが証拠はあるのですか?」

「あんたがやってないって証拠もないわ。あんたは聖寮の理と繋がってる」

「儂らには仲間としての繋がりはないがのー」

痛いところを突かれたエレノアは反論できず、悔しさから唇を噛み締めぐつと拳を握る。

「エレノアは告げ口なんてしてないよ」

そこに擁護に入ったのはライフイセット。

エレノアを器としている彼は無実だと主張するが、それにマギルウは嫌らしい質問で食ってかかる。

「どうかのー?お風呂に入る時も監視しとるのか?」

「え!?お風呂の時は…僕、外にいるからわからない…けど」

「その間に聖寮とコソコソ話をするくらいはできるといいうわけじゃろ」

「う…それは」

「その辺にしておけ。追及なら後でもできる。それよりも他にすべき

ことがあるだろ。あの二人をやり過ぎしつっグリモワールを探すか、今何よりも優先すべきはまずそれだ」

ガイアの言葉通りだとベルベットは思案に耽る。

「この人間に聞いてみるにしても顔を覚えられたら後々面倒になりそうね」

「天下の対魔士様の前ではしもじもの人間はしょーじきに喋ってしまいうやもしれんからの。迂闊に聞き込みはできぬじやろうな」

「かと言ってただ闇雲に探したところで見つかるものでもないだろうしな。何より相手は物と違って動く、とてもじゃないがオレ達の力だけで探すのは骨が折れるぞ」

——一体どうしたものか

「私に任せてもらえませんか」

そう悩んでいるとエレノアが声を上げた。

「グリモワールのいそうな場所に心当たりがあるのか？」

「グリモワールがどこにいるのか心当たりはありません。ですがこの人に話を聞くことは可能です。聖察に私達のことを聞かれても黙ってくれそうな人を知っています」

「そのような人物がいるのなら何ゆえもつと早くに言わなかった？エレノアや」

「私達は、今の私は聖察に追われる身です。私が訪ねることです。その人に迷惑をかけたくなかったんです。それにそもそもあなたが私の言うことを信じてくれるとも思ってたので」

「ふむ、確かにそれはそうじゃのう。なにせ信じて損をするのであれば端から疑ってかかってみるといのが儂の信条じゃからな」

エレノアの案にベルベツトは両腕を組んでじつと考え込み、しばらくしてから導き出した答えを告げた。

「もし対魔士のいるところに誘導しようなんて考えてるなら…わかっているわよね?」

「あなた達を罠にかけるような真似はしません。言っただけです私は誓約をかけていると」

「いいわ。あんたに乗ってあげる。妙なことを考えてたらただじゃ済まないわよ」

「…承知しました」

エレノアの先導で一行が赴いたのは中心街から少し高く離れた位置にある一軒家。

外観の作りはここに来るまでに見てきた家とほとんど変わらない。

「ここが?」

ベルベツトが疑問の眼差しを向ける中でエレノアは一瞬逡巡するように手前で佇んでいたが、意を決して扉を軽く二回叩く。

「はいはい〜」

そうすると家の中から活気に溢れた声が聞こえてきた。

続いてドタドタと慌ただしい足音も聞こえて、扉が開けられた。

「どちら様?…エレノア」

「お、お久しぶりです…」

「お帰り、元気にしてたかい?」

「エレノアその人は?」

「私を育ててくれたお母さんです」

ライファイセットはエレノアに家の中から出てきた女性の素性を問うと、そう答えが返ってきた。

「そっちの人達は友達？」

「は、はい。一応」

「そうかい。かなり個性的な人が揃ってるわね」

エレノアの母らしき女性は左端のベルベットからライファイセットを経て、右端のガイアまで眺めて感想をはつきり言う。

優しそうな人だなあとライファイセットが思っていると、突然彼の意思に反してお腹がすつとんきような音を上げた。

「あつ…」

「また派手に鳴らしたなライファイセット」

「いつもお腹空いてるみたいない方やめてよ」

「お腹空いてるのかい？立ち話もなんだし家に上がんなさいな。腕によりをかけて振る舞わせてもらうよ」

その申し出にライファイセットと彼をからかっていたロクロウは気を良くした。

「いいの？」

「それはありがたい。オレもちょうど何か口にしたかったところだ」

「儂も腹ペコで背中と腹が密着するかと思っておったところじゃ、感謝するぞ」

お言葉に甘えて家の中へお邪魔しようとするロクロウとマギルウ。アイゼンもベルベットもそれに何の文句もなく続き、静観していたガイアも最後に中へ入った。

「ちょっと前まで子どもだと思ってたあの子がもうすっかり逞しくなって…いつかはそんな時が来るとは思っていたけど複雑なものね…」

血の繋がりがなくとも自分を実の姉と慕ってくれる弟の成長が嬉しくないはずがない。

けれども嬉しさの中に不安もあった。

いつしかオスカーに自分は必要とされなくなっていくのではという不安が。

素直に喜べない自分にやや苛立ちめいたものを感じていると、港へと向かう道すがら正面から来た男とすれ違う。

男が真横を通りすぎて数秒後、テレサは足を止め背後を振り返る。

(今の男…以前にもどこかで…)

蒼海色の髪も黒衣も、大人びた端正な横顔も、男の外見のどれ一つとしてテレサの知る男性に思い当たる人物は浮かばない。

(顔に見覚えはない。けどどうして? 何故かどこかで会った気がしてならない…一体どこで??)

振り返った時にはもう男の背中の人混みに紛れて発見できなかつた。

結局答えを確かめられず、テレサは釈然しない思いを胸に抱きながらもこの地でやり残した業務をこなすため再び歩き出した。

## 第27話 衝撃の青

「ごちそうさん！」

パン！とロクロウが両手の平を打ち合わせた音が景気よく食卓に鳴る。

海の幸をたんまりと使った海鮮丼、貝を出汁にしたスープ。

エレノアの母親シャノンお手製の品々にロクロウは舌鼓を打つ。

「いやー旨かった。こんな手の込んだ料理食べたのは久々だ」

「そう？お口に合うか不安だったけど気に入ってくれたようでみたいでよかったわ。お父さんにも聞かせてあげたいわ」

「ああ、魚も新鮮だし最高だった。な、ライフィセット」

「食べたことのない料理だったけどすごく美味しかった」

「ふふ、ありがとう。あら？あなた口の周りにご飯粒付いてるわよ」

「え!?どい?」

シャノンの指摘にライフィセットは大慌てで服の袖を使って口元を拭ってみる。

確かに袖口に米粒が付着していた。

「あ…」

恥ずかしさから頬を赤らめるライフィセット。

その愛くるしさにシャノンは笑みを作る、

「よっぽど食べるのに夢中だったみたいだな」

「坊の気持ちもわからんではないぞ。まさしく頬の肉が床に溢れ落ちるかのような美味じゃったからの…しかし本当に勿体ないの…この味お主らにも堪能して欲しかったのじゃが」

ロクロウに賛同する声を横から入れたマギルウは嫌みったらしい眼差しを真向かいのある二人に突き刺す。

ベルベットとガイアだ。

「悪いけど今あんまりお腹空いてないの」

「…俺も今そういう気分になれなくてな」

「わざわざ農らのために作ってくれたというのに好意を無下にするとは無礼千万じゃぞ…全く恥ずかしい、農の顔に泥を塗りおつてから

に」

「その言葉そっくりそのままあなたに返すわ」

「同感だな」

「ぬあにを〜！なんと不敬な。師匠に対する敬意を素直に示せんとは実に情けない…」

「ふふ、賑やかで面白い人達ね」

お前が自分達に言う資格はないと、暗に突きつけられマギルウはぐむむ、と怨恨の念を募らせる。

その光景にシャノン は笑みを崩すことなく、眺めていた。

「エレノアのお母さんスゴいね。マギルウに全然驚いてない」

「昔からあんな感じですよ。お母さんは」

ライフイセツトにそう答えるエレノアだがその胸中は穏やかではなかった。

(言わなきゃ…全部隠さずに。どんなに怨まれても、どんなに蔑まれても私がグランを殺めたことを)

何を言われても全て受け入れよう。

エレノアは決意を固めた。

「お母さん…私、お母さんに言わなきゃいけないことがあるの」

「どうしたの？そんな改まって」

「私、私は―」

「グリモワールという名に覚えはないか？ここにしていると聞いて来たんだが」

エレノアが告げようとした言葉はガイアによって途中で防がれた。

「グリモワール…人の名前よね？私は聞いたことないわ」

「そうか…」

「ごめんなさいね。力になれなくて」

「いや、大丈夫だ」

「で、エレノアは？」

「え？」

「さっき何か言おうとしてたでしょ？」

「あ…いえ…何でもない」



気を削がれてしまったエレノア。

「シャノンはどう？と返すと、ベルベットに訊ねる。

「あなた達はこれからどうするつもり？もし宿を取ってないならよかったですら今夜家に泊まっていかない？」

「いやそこまで世話になるわけには」

「よいではないか。受けとれるものは好意でも敵意でももらっておいた方が得じゃぞ」

「休める時に休んでおくのも大事だしな。それにエレノアはせっかくの里帰りだ。一晩くらい家族とゆつくりできる時間があつたつていいだろ」

申し出を拒むガイアに反して、マギルウとロクロウは好意的な意見を述べる。

楽観的とも取れる二人の発言を見かねたベルベットもガイアに加勢しようとするが：

「今のエレノアには休息が必要だ。器であるエレノアに何かあればライフェイスにも影響がでるぞ」

アイゼンに耳元でそう止められる。  
訝しげな目を向けたベルベットだがすぐにその言葉を聞き入れ、すんなり引き下がることにした。

「二人でどこに行くつもり？」

しばらくして単独で外へ出たガイアはベルベットに呼び止められた。  
隣にはライフェイスもいる。

「ちよつと散歩がてらグリモワールに関する情報を得られないかと思つてな。ここの住人のあの人が知らないのならおそらくグリモワールはイズルトの人間ではないだろうが、どこにいるのかぐらいの情報はわかるかもしれない」

「奇遇ね。あたし達も同じことを考えてたところよ」

「一緒にいけない?」

「それはいいが…」

「何か気になることでもあるの?」

言い淀むガイア。

彼はベルベットの頭から靴まで目を上下に動かして、こう呟く。

「やっぱり目立つな、その格好だと。これから歩き回るのにその格好だと目立つだろう?顔を覚えられてる一等対魔士もすぐ近くにいるんだから服変えた方がいいと思うんだが」

「変えたところで顔見られてるんだからやったって効果があるわけないでしょ?」

「だがやらないよりはマシじゃないか。悪目立ちがすぎるぞ…」

「見られたらその時はその時で対処すればいいでしょ…そもそもあんたも人のこととやかく言える身なりしてないと思うけど。怪しきで言えばあたしより遥かに上よ」

「僕は平気だけど知らない人からしたら確かにガイアの方が怪しいかな」

そこを気にするにしては今さらすぎるだろうとベルベットの反論に返せないガイア。

「…じゃあ…このままでもいいか…」

ガイアを伴って三人はイズルトの街を歩き回る。

風が運ぶ潮の匂いを心地よく感じながらライフィセットは立ち並ぶ高床式の家が気になった。

「ここって家が全部木でできた床の上にあるんだね」

「イズルトは海がすぐ近くにある街だからな。家を建てる時は必ず砂浜よりも高くするんだ」

「そっか…砂浜の上に建てちゃったら高潮とか津波とか色々大変だもんね」

「その通り。だからなるべく地上より少しでも高めに家を建てる必要があるんだ」

「じゃああそこの実は？」

「パイヤカ。匂いに難はあるが味はかなり上手いぞ。ちなみに果実の一種だ」

ライファイセットの疑問に丁寧な解説するガイア。

すっかり会話に夢中な彼らから一步距離を置きつつ、ベルベツトは注意を促す。

「話してもいいけどほどほどにしなさいよ。観光に来たんじゃないんだから」

「わかってる。ちゃんと周りに目は向けてるさ…でな、ライファイセット、さっきの話に戻るんだがこの家は高潮になると浮くようになってるんだ」

「ほんとう？見てみたいなあ。今日見れるかな」

口ではそう言うもののベルベツトは安心して受けとれはしなかった。

—自分がしつかりしなければ

二人の顔色からベルベツトはそう強く意識を持った。

その一方でベルベツトは目に留めている物体がひどく気になっていた。

「ところでさつきからちろちろいるあれなんなの？」

「ペンギンかな？でも本で見たのとちよつと違う」

「ペンギオンだよ」

ライファイセットも首を傾げる横でああ、とガイアは納得したように唸る。

「ペンギオン？ペンギオンっていうの？あの鳥」

「サウスガンド領に生息する魚鳥類だ。人畜無害な大人しい性格でイズルトでは数年前からペンギオンの養殖をしてるんだ。ちなみにペンギオンは愛し合ったペンギオン以外とはタマゴを作らないらしい一夫一妻の生き物であることが最近生物学者の研究でわかったらしい」

「タマゴから子どもが生まれるんだね。どうやって作るんだろ？」

「…え？えつと…」

「それは、だな。その、えっと…何て言うか…」

純粹でなんとも答えづらい質問にベルベットもガイアも表情を強張らせると口もつぐんでしまう。

(なんて説明したらいいんだ…)

(そんな目されたって言えるわけないでしょ。あんたが言いなさい。散々得意げに説明してたでしょ)

(その顔、こっちに説明しろって言うてるな。無理だ。僕にだって恥じらいはある。ったく、なんでこんな時に限ってマギルウが隣にいて欲しいと思うんだ)

言葉を交わさずして視線のみで心の内を読み合う二人。

どうライファイセットに話したものと考えるに考えた挙げ句、ガイアの出した結論は

「あ、そうそうライファイセット、ペンギオンはな鍋に入れると美味しいんだ」

無理やりはぐらかすことだった。

—さすがにその誤魔化し方は強引すぎやしないか

ベルベットはそう思わざるを得なかったが、意外にもライファイセットの関心を向けさせられたようだ。

「食べれるの？」

「もちろん。他にもペンギオンのモモ肉とプチプチタマゴを乗せたご飯『他人丼に見せかけた親子丼』ってのがあってな」

人差し指を空に向けて説明するガイア。

その説明にライファイセットは目を輝かせていたが、ふと残念そうに呟く。

「でも食べちゃうんだ。あんなにかわいいのに…」

「しょうがないわよ。食べなきゃ人間は生きていけないんだから」

「残酷な話だけだな。まあ、人間に限った話じゃないが」

ライオンが食欲を満たすためにウサギを食らったり、カエルが羽虫を食らったり、人間が家畜を食らったり

それら全て自らの命を未来に繋ぐためには致し方ないことだ。

ライファイセットにもそれは理解できる。

理解できるがやはりかわいそうだとは思う。けれども仕方のないことなのだ。

そう納得しようとした時

「本当にそうかな？」

ふと彼らの背後から冷めた男の眩きが割って入った。

---

その少し前の時刻、シャノンの家では

「ぶえ〜くしよび!!」

マギルウが盛大なくしやみを撒き散らしていた。

隣にいるロクロウはシャノンから差し出されたスイカをかじりながら彼女を気にかける。

「風邪でもひいたか？」

「いや体はすこぶる元気じゃからそれはなからう…背中のみずみず具合からして恐らくどこぞの馬の骨とも知れぬ輩がいずこかの地で儂を呼んでおるのじやろうて」

「マギルウを呼びたがるなんてそんな物好きいるか？」

「儂を誰だと心得ておる。悪魔も恐れおののく邪神より美貌を授かった天下の美少女大魔法使いマギルウ様にかかれば、ちよつと目の前を通りすぎただけで大抵の男はたちまち骨抜きじゃ…三日三晩満足に朝も寝れず塩水しか飲めん体にする事など造作もないわ。まったく困ったものじゃ、美しすぎるといふのもここまでくれば罪じゃな」

「お前…なんかかわいそうだな」  
根拠のない無駄に自信に溢れた自画自賛にロクロウは直球に辛辣な言葉を浴びせた。

「ベルベットとか他の奴らはどこ行ったんだ？」

「ベルベットは坊とガイアを連れてだいが前に外に出て行きおったぞ」

「エレノアとアイゼンは？」

「生憎そやつらに関してはどこに行つたかさっぱりじゃ。だがまあ、子どもでもあるまいしそんなに心配することでもなからう。ああ見えてエレノアはしっかりしておるし、アイゼンも死神の呪いを除けばまあまあマトモな方じゃからな」

それよりも、とマギルウは手にしている三日月の形をしたスイカにむしやりとかぶり付く。

「このスイカなる果物、シャリつとした舌触りがたまらんの。これであつとおしく暑苦しい日差しなんぞなければ今この瞬間こそ至福の時なんじゃが」

「そうか？むしろこの暑さあつてこそ味が引き立つつてもんだろ？もつともオレにはよくわからんがな」

「お主はいいのゝ業魔じゃから。暑いも寒いも関係なくて…」

暑さを感じない業魔の体質を大魔法使いはこの時初めて羨ましく思った。

シャノン家の裏側から少し歩いたところにポツリと墓石が一つ立っている。その前でエレノアは沈痛な面持ちで立ち尽くしていた。

墓石をじつと見つめていたエレノアであつたが、後方から生じる砂を踏みしめる音に目をそちらへ動かす。

「アイゼン…」

「探したぞ。黙って一人で勝手に出歩くな」

「軽率な行動でしたね。すみません、迷惑をかけてしまつて」

「無事なら構わん」

そう言つてアイゼンはエレノアの横に移動し同じように墓石を見つめる。

「グランのです。二年前にお父さんとお母さんと私でここに建てました…」

墓石が誰の物であるか彼女が一人でここにいる理由と悲しみに歪

んだ顔を見れば聞かずともわかることであつたが、律儀にもエレノアは説明してくれた。

「血の繋がったお母さんもグランも…大切な人達を業魔に奪われて、二年前私はここで誓いました。もう誰もこんな悲しい思いをさせないで、一日でも平和を望む皆が無事に笑つて過ごせる世界にするためにこの身と命をアルトリウス様の理想に捧げると…それが死んでしまった二人に報いる道だと信じて…なのに私は…」

一人ぼっちだった自分に寄り添つて側で励ましてくれた幼なじみはもういない。

異形に成り果ててしまつていたとしても、二年前その死を悲しんだ両親が愛した子どもをこの世界から消してしまつた。

紛れもなく自分の手で、自らの意思によつて

「ああする以外に他に方法はなかつた。お前が覚悟を決めなければ今俺達はここにいない」

「ですが—」

「あまり自分を責めるな。器のお前がいつまでもそんな顔をしていればライファイセツトが心配するぞ」

「…すみません」

ライファイセツトの名前を説き伏せる材料に使つてしまつたのは忍びなかつたがこうするしかなかつた。

無理矢理にでも自分を追い詰めることを止めさせなければエレノアは近い内に壊れてしまう。

それだけは絶対に避けなければならなかつた。

ライファイセツトのためにも、エレノアに生きて欲しいと望む者のためにも

「夕暮れまでまだ時間はある。少し街に出歩いてみるか」

「え？」

一拍置いてのアイゼンの言葉。

突然だったためにエレノアは目を丸くして、アイゼンの目を見た。

「何もせずただ時が過ぎるのを待つていても仕方ない。グリモワールの情報を集める本来の目的を果たすには充分な時間だ」

「ですがきつき出歩くなとアイゼンが」

「黙って一人で行動するなど言ったただけだ。出歩くなとは言っていない。それに少しばかり出港が遅くなるとバルエルティア号に伝える必要もあるからな」

そう眉一つ動かさず淡々と語るアイゼン。

仏頂面ではあったが彼の言葉に込められた気遣いにエレノアは口元を綻ばせた。

「ではありがたくお言葉に甘えさせてもらいますね」

「常に警戒はしておけ。どこで対魔士が目を光らせているかわからん」

こうしてベルベット達より少し遅れて二人も街に出ることとなった。

まずバルエルティア号に向かうことにした。

武器屋や道具屋など様々な店が集中する商店区域にきたエレノアは右へ左へと目を泳がせる。

「この辺りも変わってない…」

懐かしさに感銘を受けるエレノア。

そのまましばし歩いていると、ある人間から声をかけられた。

「あれ？もしかしてエレノアじゃない？」

「あなたは…」

振り返ったエレノアは相手の顔をまじまじと見た。

後ろで束ねられた桃色の髪、南方の住人特有の薄手の服を着たエレノアと同じくらいの年頃の女。

「やっぱり！エレノアでしょ！」

「セーニャ？久しぶり！」

セーニャという少女とエレノアは再会の喜びからお互いの手を握り、笑い合う。

「知り合いか？」

「私の子どもの時からの友達のセーニャです。セーニャ、こちらはアイゼン」

「よろしくアイゼン…さん付けた方がいいよね？見るからに年上つぽ



いし」

「何でもいい。好きに呼んでくれて構わん」

「そう？じゃあ改めてよろしくアイゼン」

セーニヤと手を握り合ったままエレノアは簡潔な紹介をする。

「まさか地元とはいえこんなところで会うなんてね。前に帰って来た時は対魔士の仕事が忙しいからなかなか会えそうにないって言うたから驚いたわよ。今日は対魔士の仕事休みなの？」

「ま、まあそんなところ。それよりセーニヤの方はどう？」

「どうってこの通りピンピンしてるよ。お店もまあまあ調子いいし」  
「お店？」

「ああ、エレノアにはまだ言っただけじゃなかったつけね。そ、最近開いたんだ。よかつたらちよつと見てみる？時間あるよね？」

「お前の好きにしろ」

「うん、大丈夫」

アイゼンからの許可が降り、エレノアはありがたく申し出を受けることにした。

「りよーかい。案内するからついて来て」

そうして彼らはセーニヤを先頭に歩き出す。

道すがら昔話が弾んで思い出に浸っていると海辺近くに建つ店の前に着く。

店の横には海を一望できるテラスのようなスペースがあり、机や椅子が多く設置されている。

「ここがセーニヤのお店？喫茶店みたいだけど」

「ええそう、その通り喫茶店。たっだいまー！」

「遅いぞ、いつまで休んでるんだよ。こっちはまだ昼飯も食べてないんだぞ」

勢い良く扉を開けるセーニヤに男が不満を垂らす。

こちらでもエレノアと同じ年頃の少年でメガネをかけた知的で大人しそうな雰囲気醸し出していた。

「ごめんごめん。そんなことより見てほら！」

「そんなことって、エレノア？エレノアか？」

「久しぶりハール」

メガネの少年ハールは目を丸くしカウンターを飛び出してエレノアに歩み寄る。

「うわあ、ほんとに久しぶりだな。いつこっちに帰って来てたんだ?」「今日来たばかりみたいよ。私もさっきまたまた会ってびっくりしたんだから」

「そうなのか。で、そっちの人は?この辺りじゃ見たことない顔だけど」

「この人はアイゼン。エレノアの知り合いなんだって」

「知り合いねえ…」

チラリとアイゼンと目が合ったハールは「ちよつと来い」とエレノアとセーニヤを手招きして、壁の隅に集める。

どうしたのかと、顔を合わせながら二人はハールの指示通りに動く。

「どうかした?ハール」

「あの人どういう知り合いだ?」

「どういうって?」

「見るからに明らかにお前がつるむタイプの見てくれじゃないだろあの人。…雰囲気もヤバそうだし、着てる服もかなり物騒だし…」

「確かにアイゼンは海賊だけど悪い人じゃないわよ」

「海賊?!?海賊ってあの海賊?一番関わっちゃいけない世界の人じゃないか…なんでそんなのと対魔士が一緒にいるんだよ」

本格的にハールの理解が追い付かなくなる。

略奪、殺戮、暴虐、世界の秩序を乱すことしかしないはずの海賊と対魔士のエレノアがどうやって繋がるとか疑問点が多すぎる。

「そんなに気になるなら直接聞けばいいじゃん。こそこそ話してるよりさ」

「直接言えないからこうして声を潜めてるんだろ。こんな話してるなんて知られたらどんな目に合うか…」

ひそひそ話すハールはそこで恐る恐る振り返ってアイゼンの顔を伺う。

「俺の顔に何かついてるか？」

「い、いえ…何でもないです」

腕を組んで睨みを利かせるアイゼンにハールの彼に対する恐怖心  
はますます増大してしまふ。

「今の見ただろ…絶対ヤバいつてあの入」

「そんなことないと思うけどな。変に警戒しすぎだよ。話してみればわかるって…ねーアイゼン、これから外の席で一緒にお茶しない？」

「ちよーおい！」

恐れ知らずとも馴れ馴れしいともとれるセーニヤにハールは面食らい、またそれにアイゼンが気を損ねないか酷く不安だった。

「ダメ？この前仕入れたいい紅茶があるんだけど」

「ほう、そいつは楽しみだ。ありがたく頂こう」

「じゃあ準備するから外の席で座って待っててそんなに時間はかからないから」

しかしそんなハールの不安とは裏腹にアイゼンに苛立ちのような感情は見受けられず、むしろ好意的なよう外席へ歩いていく。

予想を大きく裏切る展開にハールは空いた口が塞がらず啞然とする。

「なんで海賊相手にあんな思い切った行動が取れるんだ…」

「私達も行きましょう。大丈夫、話してみればわかりますよ。アイゼンはハールが思ってる程野蛮な人じゃありません」

「そ、そうか…？だといんだけど」

エレノアにそう言われたがハールの中の不安はまだ拭えてはいなかった。

(こいついつの間…こんなに近くまで来られてるのに気配をまるで感じなかった)

「本当にそれが正しいのか？」

ベルベットが男に警戒を向ける中で男はまるで意に介さない様子

だ。

「間違ったことを言ったつもりはないけど？食べなきゃ生きていけないのは人間だろうと動物だろうと同じでしょ」

「食物連鎖を否定する気はない。命を犠牲にせず生きている命などありはしない。全ての生物は全て生きるために他の命を喰らう、それは自然の摂理だ。命を持つ限りそれに抗える生物などいない」

「だったら何が不満な訳？」

ベルベットは更に警戒に目を細めながら訊ねる。

この男は普通とは何かが違う。直感がそうはつきりと告げていた。「今の人類に他の生物を犠牲にしても生きるべき価値があるかな？」

「価値？」

聞き返すベルベット。

その言葉の意味するところを図りかねるライファイセットも疑問の目で男を見上げる。

「…あんた何者？」

「邪魔をしたな」

ベルベットが問うが男はもう話す気はないとばかりに歩き出す。

ベルベットとガイアの間を通り抜けた男はそれつきり彼らに目を合わせることはなく、どこかへと去っていく。

「なんだったのかしらあいつ」

「わからないけど…なんだかベルベットに似てる感じがした」

「似てる？あたしに？」

「うん…上手く言えないけど冷たい感じの人だったけどあの人を見た時温かさを感じたんだ。ベルベットを見てるだった」

ライファイセットの発言にベルベットは怪訝そうに眉を上げ、もう己の視界には映らない男の顔を思い浮かべていた。

思わぬ出来事があったものの、その後グリモワール探しを再会する三人。

対魔士を警戒しながらあちこち周ったり、時に道行く人に聞いてみ

たりもしたがグリモワールの名前すら出てこなかった。

「やっぱりマギルウの言うことをアテにしたのが間違いだったのかしら」

「いくらマギルウでもデタラメを言っていていい時とそうでない時の区別は付くと思う…とりたいところだがここまでやって何の成果もないとなると怪しくなってきたな」

なかなか努力が実らない現状にベルベットとガイアはこの場に魔女へ不満を吐露する。

もはやこれまで、そう思われたがライフィセットがある物を発見した。

「ねえあれ、あれビエンフーに似てる」

「あれ?」

ライフィセットの見る先には店の棚に並ぶ人形。

その中のいくつかがビエンフーに似た青い人形があった。

「似てるけどあれがなんだって言うの?」

「あ…もしかして、そういうことか? ああ、そう考えたら確かに見つかりにくいのかも納得いく」

「どういうこと?」

「グリモワールってビエンフーと同じ聖隷なんじゃないか?」

「まさかそんな…いやあり得るわね」

一旦は否定しかけたベルベットだがすぐに自分の出した言葉を否定する。

「あのマギルウのことよ。正直に包み隠さず全部教えるはずがない」  
「だな。まあ可能性がゼロでないのなら何にせよ確かめる価値はある」

人形を扱ってるみやげ屋の店主に話を聞いてみるとこの人形は水の聖主アメノチ様をモデルとしたらしい。

みやげ屋はマクリル浜でアメノチ様に会ったのだが話しかけても「はあ…ふう…あそつ」とまるで素っ気ない態度で相手にされなかったという。

「どうやらそのアメノチ様がグリモワールで間違いないな。マクリル

浜ならすぐそこだし行ってみるか？夕方までまだかなり時間もあるし、それとも一度戻って他の皆と合流するか？」

「とりあえずマギルウに確認させるためにも戻った方がよさそうね」

「よしじゃあ早速——ッ！」

「何か来る！」

帰路に着こうとしたまさにその時、ガイアとライフィセットは何かを察知し、素早く海辺の方を振り向く。

二人してどうしたのかとベルベットが尋ねようとするより前にその現象は起きた。

晴れ渡る青空の下、静かに波打つ海の上に突然黒い瘴気のようなものが現れたかと思えばそれはたちまちの内にひとまとまりになると、異形を成して海に立つ。

『ギュルワアアア！』

水牛か山羊のような角、長い尾、白銀と黒の体表をした怪獣。パズズが誕生の咆哮をあげる。

「な、何なんだあれは!？」

「か、怪獣だ!とうとうこの街にも怪獣が！」

「に、逃げろお!!」

平穏だった時間を壊すように突然現れ陸に進行を始める化物。

その化物は角から稲妻を放ち、民家から火の手が上がる。

逃げ惑う人々、避難誘導する対魔士に聖隷術で迎撃する使役聖隷。穏やかだった南方の楽園が怪獣の雷により破壊されていく。

「最悪…なんだってこんな時に」

まるで自分達の邪魔をするようなタイミングで出現したパズズをベルベットは忌々しげに睨み付ける。

しかしそうしたところで相手が怖じ気づいて動きを止めて大人しくなるはずもない。

火炎や水弾などの聖隷術、矢をその身に打たれるパズズ。

ダメージはあるようだが陸への進行をやめることはない。

「早く倒さないとイズルトの人達が危ない！」

「攻撃したらダメよ。今戦ったら対魔士達に気付かれる」

「でも…」

術の詠唱を始めようとして咎められたライファイセットが悔しさに顔を歪める。

(どこか隠れられる場所は…！)

「落ち着いて！女子供を優先して避難させるんだ！」

(この声、もしかして！)

一方人目を隠せる場所を探していたガイアは混乱状態の街景色のある一点に、目を見張った。

漁に使う舟の近くで対魔士と協力して女子供を避難させている漁師の男達。その中の一人、屈強な体格と日に焼けた肌の男にガイアは目は引き付けられた。

「父さん…」

そう呟いたガイアは脇目も振らず一目散に走り出す。

「え？…ガイア！」

ライファイセットの声も耳に入っていないようで、浜辺の方へと駆けて行った。

「ベルベット、ガイアが！」

「あいつのことは後回しでいいわ。あたし達はアイゼン達と合流するわよ」

「う、うん！」

(あのままじゃ陸に上がるのも時間の問題だ。すぐに倒さないと父さん達もここも危ない！)

被害を食い止めるため変身に必要な身を隠す場所を探すガイア。

砂浜で右へ左へと首を動かし、ちようどいい岩見つけたガイアはその陰に隠れエスプレnderで変身を試みる…が、

「あれは…」

視線の先に人が立っていた。先ほどベルベットと問答をした男だ。

暴れまわるパズズを見上げていた男はガイアに気づき、パズズから視線を切つて向ける。そして不敵に笑う。

男の反応に虚を突かれて目を丸くしたガイアだが、彼の右腕に付けられたモノを見て更に驚愕する。

金色に縁取られた青い三角形の結晶体。腕輪のように身につけているそれはエスプレンダーと酷似した雰囲気を発していた。

「あれは、まさか…」

掠れたような低い声で呟くガイアの前で結晶体は明滅と回転を始め、その両側から鳥の翼を模した金色の突起が出てくる。

右腕を胸に掲げた直後腕輪は目を覆わんばかりの青い輝きを解き放ち、ガイアはたちまち視界を腕で庇つて目を瞑った。

光が止んでガイアが改めて正面に注目すると、男の姿はなく代わりに神秘的な雰囲気を纏った巨人がいた。

青と黒の巨大な体、尖った頭部、白く横長い結晶質の瞳。

それを一度だけガイアは見たことがあった。

ミスノエノリュウの見せた大地の記憶でその姿は脳裏にしつかりと刻み込まれていた。

「青い巨人…彼が」

光り輝く太陽を背に両の腕と膝を折り曲げて佇む青の巨人はガイアを背に構えを取り、パズズに相対した。



## 第28話 変わらないもの

「あ、あれは一体…」

平穏な海の街を蹂躪する怪獣の前に青き輝きを纏って現れた巨人。その登場と、怪獣と巨人との対決にイズルトにいた全ての者が目を奪われ、足を止めた。

民間人も、対魔士も全て。

「なんとということだ…怪獣だけでも手一杯だというのにあんなものまで攻めこまれたら我々はもう一巻の終わりだ」

「しかし我々が退けば市民達に危険が…！」

「狼狽えるな！攻撃を一時中断し様子を見る！」

ざわめく二等対魔士達の声はオスカーの一喝によりピタツと一斉に鎮められる。

「オスカー！無事ですか！」

「姉上？港を発たれたはずでは」

するとそこに港の方角からやって来たテレサの姿にオスカーは目を丸くする。もうイズルトにはいないはず姉が目の前にいることにオスカーの頭がいつぱいになるが、部下の手前すぐにその疑問を頭の片隅に追いやる。

「姉上、あれは味方と考えてよいのでしょうか？」

オスカーの言うあれ、今も戦いを続けパズズに左拳を命中させる青い巨人をテレサは目を細めて見上げる。

「怪獣と戦っているのを見るに怪獣を倒すという目的を持っているのは間違いないようですし、そういう見方をすれば敵ではないでしょう」

「つまり味方と見て問題ない、と」

「怪獣と戦っている内はですが…あれが未知の領域の存在であるのも事実。注意を払っておくにこしたことはありません」

怪獣と敵対していることと味方であることは同義ではない。

怪獣を倒した後巨人は次に自分達に標的を変える未来は充分にありうることだ。

（青い巨人、以前ヘラヴィーサに現れた赤い巨人とは別のようですが…聖隸でもなければ業魔でもないあれは一体なんだというのですか）  
今日の前で怪獣と対峙する青い巨人は何なのか。

顔には出さぬよう精一杯努めながらも、テレサには確かに困惑という感情があつた。

「何なんだあれ！いきなり現れて街をめちゃくちゃにして！」

ハールは憤りを覚えざるをいられなかった。

海の見える席でエレノアやアイゼンと紅茶を飲んで談笑していたところに、突然怪獣が出現し街を破壊しながら近付いてくる。

それだけでも驚きなのに今度はその怪獣と青い巨人が戦いを始めた。

立て続けに起こる事態にハールの理解は追い付けなかった。

『オオイ！』

振り下ろすパズズの爪を腕で軽く受け止めた巨人は、その腹に掌底を撃ち込む。

『ギユアアアアア！』

攻撃が失敗に終わっても、負けじとパズズは近接戦闘を仕掛ける。

しかし巨人はそれら全てを紙一重ながらも余裕の表れた動きでかわし、その度に一撃を入れていく。

戦い慣れた熟練者の動きだ。

「かっこいい…」

「あの巨人以前私達の前に現れた巨人とはまた別のようですね。見た目も戦い方も何から何までまるで違います」

セーニヤがその戦いに魅了される一方でエレノアは今まで何度か見た巨人と目の前の巨人とを比べてそのようにぼやいた。

「今の内にベルベット達と合流するぞ。対魔士に発見されたら面倒は避けられない」

「そうですね」

民間人を避難させる目的で対魔士がこの場所に来る可能性は多いにある。

アイゼンだけならばともかく業魔に与した裏切り者のエレノアと一緒にいれば、友人達に更なる危害が加わる恐れがある。それは避けなければならない

「二人共ここは危ない。教会が避難場所になっているはずだからすぐに避難を」

「エレノアはどうするの？避難するなら一緒に」

「私のことは心配しなくて平気。自分の身は自分で守れるから」

「わかった。無茶だけはしないでくれよ。いくぞセーニャ」

「気を付けてね」

そう言うとハールはセーニャの手を掴み共に教会を目指して走り出す。

お互いに離れないように手を握り合う友人達の後ろ姿。

それがエレノアの目にかけて同じように一緒に過ごした少年との日常が被って見えて、一瞬懐かしさと悲しみが彼女の心に込み上げた。

「いくぞ」

「…はい」

アイゼンに促されてエレノアは止めていた足を動かした。

今の自分がすべきことを成すために

『ギユアアア！』

『アアア！』

青い巨人の蹴りを食らいパズズは大きく後退する。

腹の痛みに苦しんで濁った悲鳴を出すパズズ。

それに背を向けて巨人はイズルトの街並みを見下ろす。

安全な場所に逃げようとする戦う術のない住人、そんな住人達を誘導しパズズと自分の攻防を緊張感を張り巡らせて見つめる対魔士

巨人が眺めたのはそんな光景だった。

『ギユアアア！』

そこに隙あり、と身を振って長い尻尾を振り回すパズズ。

完全な視角の外からの攻撃。本来ならば避けられようもない攻撃。

だが巨人は見向きもせずその動きを察知し、横風ぎに振り回された

尻尾が左の掌で受け止める。

かなりの衝撃が襲ったはずだが巨人が手を痛めた素振りには微塵も感じられない。

『ギユア!?!』

啞然とするパズズ。

巨人は振り向き様に体を捻り同じ一動作で容赦なくパズズの顔面をつま先が襲い、水面にその巨体が倒れる。

『ギユアアアア!』

近接戦ではいいようにやられると気付いたパズズは起き上がるなり、二本角から雷撃とだめ押しに口から火炎弾を放つ。

空気を切り裂きバチバチとなる雷鳴と大気を焼く炎の球に巨人は足を止めたまま、かわそうとしない。

『ンン、オオイ!』

両腕をクロスさせて雷と火の二重攻撃を受け止めた巨人は腕を体の外側に振る。

瞬間、雷撃は青い粉粒状に四散する。

『ギユア!?!』

勝てるはずがない、仮にパズズが言葉を発せたとすればまさにそう言わずにはいられないだろう。

あらゆる攻撃が通用せず、ひたすら痛めつけられる。

どうやっても勝ち目など見えるはずがなかった。

そんなパズズの心情を見抜いてか巨人は右手をクイクイとパズズに向ける。

それで終わりか。そんなものが全力なのかと言わんばかりに

『オオオオーン!』

挑発めいたその仕草にパズズは激昂の叫びを上げて、角の光を灯す。

だがそれが再び発射されることはなかった。

巨人の胸の結晶が緑色に光った瞬間一陣の風となった巨人はパズズの横を駆け抜け、二つの角が宙に舞う。

一瞬にして背後に回った巨人の腕からは青き剣が輝きを放つてい

る。

『グオワアア！』

パズズは腰を落とし、体当たりの要領でがむしやらに巨人に突っ込む。

決して弱くはないはずなのだが巨人がまるで微動だにしないせいで、じやれあっている子供の凶にしか見えない。

巨人は肘を首筋に打ち落としそこに膝蹴りも加える。

更におまけに蹲るパズズを両腕で持ち上げ、頭上から一気に後方へと投げおとす。

『オオオー』

消耗して立つのもやっとなパズズからある程度間合いを置いた青い巨人は頭の前で両腕を組むと、左右の腕を上下に動かしていく。

頭頂部に添えられた右手には青い光が満ちていき、眩く大きな輝く。その一連の動作は光の巨人としてのガイアが使う技の中でも最強の威力を誇るフォトンエッジに似ていた。

故にトドメを刺すつもりなのだと言いつつガイアにはすぐわかった。

だが

「待ってくれー！ここで倒したらー！」

陸側にいるパズズに対して巨人がいるのは正反対の沖側。この位置で倒しては非常によくない。

ガイアは制止の声を上げるが、巨人の動作が一瞬足りとも止まることはない。

「どうして、どうしてやめないんだ！」

声が届かぬと知りガイアはそう叫びながらエスプレンダーで赤い巨人へと変身する。

「ベルベット、あれ！」

「…なんで今頃になって」

ライフィセットとベルベットも仲間達の合流のために街中を駆け回っていた。

その途中、赤い巨人となって天を目指すガイアの姿を捉える。

(よし、この高さなら…間に合ってくれ！)

イズルトの街全体を一望できる高さまで飛翔したガイアはグツと身を丸めて力を溜める。

そして

『オアア、デヤアアアアア!』

『ジュアアアアア!』

青い巨人の額から繰り出された光刃―フォトンクラッシュャーがパズズを切り裂く。

ほどなくしてガイアは溜めた力を全身から照射し、その力は海辺から陸地まで、イズルトの隅々まで膜のように広がり包み込む。

間もなくパズズは粉々に砕け散り、その衝撃で大きな津波が引き起こされる。

「な、波がこつちに向かつてくる!」

「みんなに、逃げろ! あんなでかい波飲み込まれたら一巻の終わりだ!!」

「対魔士達よ、地の聖隷に命じ壁を作りなさい! 今すぐに!」

眼前に迫る津波の魔の手から必死に逃れようとする力無き人々。

そんな彼らを守るためテレサは二等対魔士に指示を出す、それは間に合わないし津波の規模に対し地の聖隷の量が圧倒的に不足している。

(やっぱり、ダメ、間に合わない!)

―自分達もろともイズルトの街は海に沈む

津波が目前にまで迫り、テレサは自らの表情は絶望一色に染まる。

しかし現実にはテレサの予想していた結果とは異なった。

ガイアの張ったエネルギーの膜が防壁の役割を果たしたため、津波がイズルトの街を覆うことはなく波はそのまま膜の上を通過して収まる。

「た、助かったの…? 対魔士達は? オスカーは?」

周りを見回すと聖隷も対魔士も見た限りでは津波の飲まれた者は一人もいないようだ。オスカーの姿も確認できた。

「よかった…っ、あの巨人達は!」

自分よりもオスカアの無事に安堵の息を吐くテレサであったが、すぐにハツとして視線を切り替える。

怪獣の脅威は去ったがまだ二体の巨人が残っている。  
気を抜いてはいけない。

『オア…』

空から降りたガイアが重力に身を委ねて力なく海上に跪く。

胸のライフゲージは赤く明滅し、静寂に静まり返った海に山びこのようにその音が響く。

無理もない。イズルト全域を覆う程のエネルギーを開放したのだから、余力もほとんど残っていない。

乱れた呼吸を整えるように両肩を上下させるガイア。

力を消耗したせいで体に急激な負担が襲いかかるが、今の彼にはそれが些細に思える程の疑念があった。

(何故なんだ。何故あんな真似を)

あれだけの質量の物体を海岸で爆発させたらどうなるか、それが想像できないような人物ではないはずだ。

あれだけ上手な戦い方ができるなら尚更だ。

振り返って佇む青い巨人を見ながらそんな考えをガイアが巡らせていた。

すると青い巨人は踵を返して、歩き出す。

(待ってくれ！)

その場で手を伸ばして引き止めようとするガイアだがその思いは届かず、体から強い青い光を放った巨人は姿を消す。

虚しく伸ばした手を力なく引つ込めたガイアは思うところがあつたのか、暫らくの間佇んでいた。

そうしているとライフゲージの点滅が速まり、活動の限界が近づいたガイアもまた赤い光となって、人目から姿を消した。

「ロクロウ、マギルウ！」

「おお、お前達無事だったみたいだな。…他の奴らはどうした？」  
「すみません、遅くなりました！」

「…っと、どうやら心配なさそうだな」

巨人も怪獣もいなくなつてイズルトに静けさが戻った頃、ベルベツトとライフィセットは離れていた仲間達と合流を果たした。

ロクロウとマギルウ、そしてエレノアとアイゼン。

皆傷もないようライフィセットは安堵する。

「よかった…皆無事みたいだね」

「そうじゃのう。これで全員…いやまだ一人欠けておるか」

マギルウの一言でライフィセットはまだここにいない者を思い出す。

「そうだ、ガイア！ガイアがまだ」

「一緒にいたんじゃないのか？グリモワール探しに行つてたんだろ？」

「一緒だったんだけど怪獣が出た時どこかに行つちやつたんだ」

「どこか行ってどこ行つたんだ？」

「わからない。でも…」

「でも、なんだ？」

「ううん、何でもない」

ロクロウの疑問に答えようとしたライフィセットははぐれる直前のガイアが口から溢した言葉を思い出して口ごもる。

なんとなくだが言つてはいけないような気がした。

「もしかして怪獣の攻撃に巻き込まれてしまったのでしょうか…もしそうだとしたら」

「それは大変じゃのう。ガイアがいなくなつてしまつたら大事な大事な古文書までパーということ。グリモ姐さんに会うどころじゃなくなつてしまうのう。いやはやどうしたものやら」

エレノアと違ってガイアの身より彼の持つ古文書の方の無事を案じるマギルウ。

約一人を除いてガイアの安否を心配するライフィセット達。

すぐに探しに行こうとするが、その必要はなくなった。



探そうとしていた人物が自分から来たのだ。

「ガイア！急にどこか行っちゃうから心配したんだよ！怪我とかしてない？」

「心配かけたな。この通り平気だ」

「なんじゃ生きておったか。つまらんの。まあ死んだら死んだで迷惑じゃがの」

五体満足で帰ってきたのが面白くなかったのかマギルウは軽々しく言い放つ。

「しかしなんだったのかのう。あの巨人共は。儂らの都合などお構い無しに好き放題やって去っていきおって…これも死神の呪いの仕業というやつか？」

「呪いのせいかどうかはともかくまさか巨人が二人いるとは思わなかったな。どんな関係なんだろうなああの二人、兄弟って感じじゃなかったよな。色も目付きも違うし」

「敵対しているようではなさそうでしたが仲間という風にも見えませんでしたね」

巨人に関して色んな意見が飛び交う。だが生憎長々と話しているだけの時間はない。

「その話をしてる時間はないわ。すぐにこの街から離れるわよ。この騒ぎのせいで対魔士の動きが慌ただしくなるはず、先を急ぐわよ」

「それには賛成だがこれからどうするんだ？結局グリモワールの居場所はわからないままで」

「グリモワールの情報なら手に入れたわ」

「本当か？」

「マギルウに聞かなくや確証は持てないけどたぶんアタリね」

情報の真偽を気にするロクロウにベルベットは淡々と告げた。

「どうやら話はまとまったようじゃな。そんじやさつさと尻尾を巻いてトンスラするでしょうぞ」

ロクロウとベルベットのやり取りをマギルウがお気楽な調子で総括する。

彼女の態度には何ら勘に触ることはなかったが、一方でエレノアに

はそれとは別に気がかりなことがあった。

「あの、ロクロウ、お母さんはその、無事ですか？」

「お袋さんならオレとマギルウがお前達と合流する前に避難するように言っておいた。たぶん今は避難所になってるところにいるはずだ。心配することはないと思うが」

「そうですか…」

ロクロウの返事にエレノアは一気に抱えていた不安が解消された。

「出る前に会っていくか？」

「…裏切り者の私が姿を見せれば対魔士達は私を捕らえようとするはずです。私のためにお母さんも友達ももう誰も巻き込みたくありません」

「エレノア…」

「そうか」

数秒迷って首を横に振るエレノア。

その数秒の間に行われた葛藤を察してライフィセットは心配する。ロクロウも提案はしたものの、エレノアが言うならそれでいいと彼女の答えに異を唱えなかった。

「待って！」

イズルトを後にし、去ろうとするエレノア達に制止を求める者がいた。

それはセーニヤだった。

かなりの距離を走ってきたのか前屈みになって息を整える。

「よかった…間に合った…やっぱり黙って行くつもりだったでしょ」

「セーニヤ!? どうしてここに避難したんじゃないの？」

戸惑うエレノアの前にセーニヤは肩を小刻みに揺らして歩み寄る。

「あれは？」

「エレノアの昔からの友人だそうだ」

「友人…そう」

アイゼンからセーニヤの素性を聞いてベルベットはひとまず彼女に向けていた警戒を緩める。

そしてエレノアとセーニヤの二人に、故郷の村アバルにいた頃の自

分と友達だった少女ニコの面影を感じながら眺めていた。

「エレノアにどうしても言っておきたいことがあるの」

「言っておきたいこと？」

「私達エレノアのこと信じてるから」

そう温かな笑みと共に両手でエレノアの手をそっと包み込むセーニャ。

「私は知ってるから。エレノアがどんな人か。真面目で誠実で嘘をつくのが苦手な私の友達。だから対魔士の人達が何て言っても私は信じてる」

「…知ってたの？今の私のこと。私が今聖寮でどうなってるのか」

「うん…でも理由があるんでしょ？エレノアがそうしなきゃならない事情が。ならあまり詳しく聞かない…その方がいいでしょ？」

「どうして、そこまで信じてくれるの？」

「小さい時からずっと一緒にいる友達なんだから当たり前でしょ…それにさつきも言ったけど私は知ってるから。エレノアが理由もなく悪い事に加担したりするなんてしないって…私だけじゃない。ハールだってそう。それに何よりエレノアのお母さんとお父さんが一番エレノアのことを信じてる」

「お母さんとお父さんが？」

セーニャの口から出るとは思っていなかった人物の名前にエレノアは戸惑う。

エレノアの反復にセーニャははつきり首を縦に振って言葉を紡ぐ。

「エレノアが聖寮を裏切ったって噂が広まった時言ってたの。エレノアは不器用なところはああるけど曲がったことは嫌いで正義感の強い子だって。そんな子が間違った道に進むはずがない、例え間違っていたとしても最後までエレノアの味方にいるんだって」

「お父さんとお母さんがそんなことを…」

血の繋がりのない自分を家族として認めてくれている今の両親の言葉。直接言われていないのにその言葉にエレノアは励まされているような気がした。

けれども嬉しさと同時に罪悪感もあった。

「そうだ、もう行っちゃうんでしょ？二人に何か言いたいことかない？もしあるなら私が代わりに伝えておくから」

「…ありがとうセーニャ。でも大丈夫」

続く言葉を吐き出すのに自分を守りたい気持ちが歯止めをかける。

が、エレノアはそれを押し切って言葉を絞り出す。

「お母さんとお父さんに言わなきゃいけない大事な話はあるけど、それは私の口から言わなきゃいけないことなの。今日は言えなかったけど…でも絶対に必ず話すから。お母さんとお父さんだけじゃない、セーニャとハールにも。だからその時が来るまで待つて欲しいの」

「…わかった。だったらその時まで絶対に無事でいてよ。約束よ」

「うん、約束する。またねセーニャ」

固く繋ぎ合っていた手を名残惜しそうに放すとエレノアはゆっくりベルベットの方を振り向く。

「待たせてしまってすみません。」

「これでいいのね？」

「ええ、今はこれで」

「…そう」

「そんなじゃ改めて行くとするか」

ベルベット達は今度こそイズルトを後にするためマクリル浜の方角へ歩き出す。

だがその時最後尾にいたガイアの背中にセーニャから声をかけられる。

「あの、エレノアのことお願いしてもいいですか？ああ見えて無茶するところあるから心配で」

「…何故俺にそれを頼む？エレノアの心配をしているのはわかるがわざわざ俺でなくてもいい話じゃないのか？」

まさか自分のことに気付いたのでは、とガイアは訝しげに訊ねる。

「雰囲気似てるから…かな」

「似てる？」

「今はもういないけど私にとっては大切な友達でエレノアにとってはかけがえのない幼なじみ…なんでかわからないけどあなたを見てる

とその人を見てるみたいなのがしてすごく懐かしい気持ちになったの。だからその人と似てるあなたに頼みたくなってる」

その言葉にガイアはフードの奥で舌を巻く。

昔からの付き合いとはいえこれが数年ぶり、いやガイアとしては初めての出会いだというのにセーニャは自分の素性の核心をついてきたのだ。

おそらくは偶然であろうがガイアはセーニャの優れた直感に賞賛を送りたい心持ちになった。

「ごめんなさい、こんなこと言ってもわからないですよね」

「敵わないな…」

「何がです?」

「何でもない、こっちの話だ。エレノアに危うい面があるのは短い付き合いだが知っているし、あいつに万が一のことがあったら困るのはこっちも同じだ。できる限りエレノアの身は守るつもりだ…それでいいか?」

「ありがとうございます」

パアツと満面の笑みを浮かべたセーニャは頭を下げた礼の言葉を述べる。

「エレノアは周りに恵まれてるな。身の安全を心配してくれる君のよくな友達や親がいる」

「あなたにはいないんですか? 自分のことを思ってくれる人」

「…どうかな。ただ昔ならともかく今の俺には少なくともそんな友人はいないだろうな」

「もたもたしとると置き去りにしておくぞよ!」

遠くから届いたマギルウの声にガイアは仲間達との距離がかなり離れているのに気付く。

「もう話している時間はなさそうだ。とにかくエレノアのこと俺達に任せてくれないか? 俺の言葉は信用できないかもしれないがエレノアに君達を悲しませるような真似はさせないし遭わせない。約束する」

「信じますよ、あなたの言葉…嘘をついているようには思えないし真

剣さは伝わってるから。改めてエレノアのことよろしくお願いしま  
す」

ガイアは頷き「じゃあ」と別れを告げてベルベット達の後を追いか  
ける。

(ほんと相変わらずだな…)

見た目は大人っぽくなって変わったが、友達思いな根っこのところ  
はグランの知るセーニャそのまんまだった。

それが嬉しくてガイアはつい口元を綻ばせた。

## 第29話 魔女の師

太陽が南の空を越して西へと沈みゆき、青い海がほのかに赤みを帯びてきた頃ある村の近くの磯辺には音色が響いていた。

その磯辺にいるのは一組の男女。

男はオカリナで柔らかな音を奏で、女は彼の出す男の音色に合わせて砂の上で舞いを踊っていた。

「どうだ？ 出来の方は」

演奏を止めオカリナから口を離れた彼は彼女に訊ねる。

「おかげでかなりコツが掴めました。緊張しなければ本番はなんとかなると思います」

「そうか、それならば俺もこうして付き合った甲斐があるというものだ。本番楽しみにさせてもらおうぞ」

「本当にありがとうございます。わざわざ踊りの練習にこんなに付き合ってもらって」

「気にするな。俺も好きでやっていることだ」

そうやって彼は彼女の顔を見つめる。彼女も彼の顔を見上げ、お互い何も言わぬまま時間が過ぎていく。

そうしてどれだけの時が経つだろうか。二人の表情に変化が起きたのは

彼女は愛らしい口から笑いという形で息を吹き出し、彼もまんざらでもないという両目を閉じてほくそ笑む。

「…もうじき日が暮れる。戻るとしよう」  
「はい」

彼と彼女が他愛ない話をしながら村へと戻る。

「もうここまで進んでいるのか…早いな。昨日までとは一目見ただけでも大違いだ」

「一年に一度しかない特別な日ですからね。皆この日を待ち遠しかったんだと思います」

「ふん、たった一日、それも一夜限りのことだというのによくもまあここまで熱心になれるものだな」

「夜になればきつとすぐに○○○○さんもわかりますよ。この村にとつて今日がどんなに大事な日か」

「そこまで言うからには当然期待はしていいんだろうな？」

「もちろんです。絶対お気に召されると思いますから楽しみにしててくださいね」

「おお、いたいた。二人ともこんな時間までどこ行ってたんだ」

会話をしながら村を歩いていると前から二人の男がやって来て声をかけられる。

「ちよつとマーナン海礁に、やっておきたいことがあったので：黙って行ってしまつてごめんなさい。ご迷惑をおかけしてしまつたのでしようか？」

「いやあ、迷惑だなんてとんでもない。祭りが始まるまでに戻って来てくれりや何してようが構わんさ。今の内に息抜きをしておくといい」

「はい、そうさせてもらいます」

にこやかに微笑む彼女。

だがそれに反して男達の顔色はいささか曇っているように見えた。二人の顔から切迫した事態に直面しているのを確信した彼は説明を要求した。

「その様子だと何かあつたようだな。話せ」

「ああ：二人ともマヒナを見なかつたか。昼頃からずっと姿が見えねえんだ」

「マヒナさんが？いえ私達は見えてないですが」

「どうするんだ？マヒナがいなくなると祭りの主旨が成り立たなくなるんじゃないのか？」

「そうなんだよ：だからさつきから男総出で必死に探してるんだけどどこにもいなくて」

「そんな：マヒナさんがどうして？」

「俺達にもわからない。気付いたらいなくなつてたんだ」

困り果てた男二人と彼女。

その様子を交互に見て彼は口を開いた。



「とりあえずお前は帰っておけ」

「え？でもマヒナさんを探さない」と

「それはこっちで引き受ける。お前は今日の夜に備えて体を休めておけ。探してる最中に足を怪我されても困るからな」

「わかりました。ではマヒナさんのことは任せていいですか」

「ああ、だからとつとと帰れ」

「ではまた後で」

彼女は彼の言う通りにその場を離れ去り際に笑みを浮かべて手を振る。

彼の方も仏頂面ではあるものの胸の前で手を挙げて彼女の後ろ姿が遠ざかるまで、挙げた手を降ろすことはなかった。

「さて、村の中は一通り探したんだな？」

「まだ全体とまでは…祭りの準備もあるし、人手が足りなくて」

「ならまず村の中を徹底的に確認するぞ。浜の方もだ、もしかすればそっちにいるかもしれない」

「わかった」

「おい、○○○○○ー！」

指示を飛ばして彼が行動に移ろうとした時また新たに男の声が近付いて来て彼の名前を呼ぶ。

「なんだ今度は？」

「聖寮の対魔士がこの村に近付いてる」

「ちい、こんな時に…悪いがマヒナの搜索は—」

「それが、その、いつも来る対魔士の人達とはなんか違うんだ」

「なに？どういうことだ」

「とにかく来て一緒に確認してくれ」

とりあえずマヒナの搜索は他の男達に任せて彼は若い男に連れられるまま足を運ぶ。彼が連れられたのはマクリル浜側の門に設置された見張り台。

その上に梯子を伝って登ると、男から渡された単眼鏡で浜辺を見下ろす。

「あれは…」

マクリル浜をこの村に向かって進む複数の若い男と女達がいた。

その中の一人は確かに対魔士の制服に身を包んでいた。

だが彼はその対魔士の顔を確認するや否やどこか面白そうに表情を崩す。

「な、いつも大勢で来るのに対魔士が一人だけなんだ。どうする？ 祭りもあるし何よりお前のためにも 追いついたら追いつくし、それが無理ならすぐに隠れた方が―」

「どちらも必要ない。これから来る奴らは案外物分かりがいいのが二人いるからな」

「もしかしてこれから来る対魔士と知り合いなのか？」

「…まあ、そんなところだ。とにかく少なくともそいつに関しては祭りを台無しにされるようなことはないだろう…最も中に入れるかどうかの権利は俺にない。どうするかはそつちに任せる」

「あ、ああ」

彼は見張り台を降りて村の奥へと歩き出す。

温かな夕陽に照らされた彼は笑いを浮かべていた。

そこから少々時間は前へと遡り…

ベルベット達はグリモワールという女性もとい女聖隷を求めて、マクリル浜を進んでいた。

「なあ、ベルベット。こんな何もない浜辺にグリモワールがいるのか？」

「そうであって欲しいわね。他に手がかりもないしここで見たついでに土産屋の情報が本当だつてことに期待するしかないわ」

「ただでさえ情報が不足しているというのに唯一グリモワールを知る奴がてんで役に立たんからな…地道に足を使って探すしかあるまい」

「よすががよいアイゼンよ。儂を誉めたところで何も出んぞ…出るといったらせいぜい鳩くらのものじゃぞ」

「マギルウ、今のは誉めてるのと違うとよ」

難航するグリモワール探しに苦い顔をする業魔二人と海賊、それを尻目に相も変わらさずお茶らけている魔女、そしてそれに律儀に反応を返してくれる幼い聖隷。

そんな彼らの会話が近くで交わされる中ガイアは独り思考に耽っていた。

（僕と同じ巨人の姿になったってことは…彼もミズノエノリユウから力を受け取ったんだろうか）

頭の中に思い浮かべたのはイズルトでベルベツトとライファイセツトと一緒にいた時に会った青髪の男、そして彼が変身し怪獣と戦う青い巨人の姿だ。

（彼は何者なんだろうか。ミズノエノリユウから与えられた力を何のために使おうとしているんだ…僕のように力を与えられた意味もわからないまま戦っているのかそれとも…）

「ガイア、ガイア」

と、そこまで考えていた時隣にいた者に呼びかけられているのに気付く、一時思考を中断させたガイアはそちらに首を向ける。

「…エレノア、どうかしたか…？」

「どうというわけではないですが、先ほどからどこか上の空という感じだったので気になって。体調でも悪くなったのですか？この暑さですししかもそんな格好ですからちよつと心配で」

「気を使わせてしまったみたいだな。悪かった…でも心配してもらわなくても大丈夫だ。今のところ体のどこにも異常はない」

「ならいいのですが無理はしないでくださいね。少しでも異変を感じたら遠慮せずすぐに言ってください」

「ああ。気をつけるよ」

——一番ずつと無理してるのはどっちの方だか

そうぼやききたくなつたがガイアは心の中だけに押し留めて、ベルベツト達と同じようにグリモワールの捜索に意識を向ける。

「あれ？あの岩に誰がいるよ」

そんな時ライファイセツトが声を上げた。何かを発見したようだ。

皆がライファイセツトの向いている方向を見やると確かに波打ち際

に横倒しになった木の上に帽子のようなものを被った黒く小さな物体があった。

「この距離じゃわかりにくいがビエンフーと同じ聖隷だな…となるともしかしてあれが」

「あの小さくとも威厳たつぷりな後ろ姿、間違いないでフ。あそこにいるお方こそグリモワールさんその人でフよ」

「あれが、グリモワール…なのか？」

ビエンフーにより一行が視線を揃えて見ている物体がグリモワールであると発覚するが、実際に自分の目で確かめてみる必要がある。ベルベツトは近付いてコンタクトを試みる。

「あんたがグリモワール？」

「ふう…」

「頼みたいことがあって探してたんだけど」

「はあ、あんた誰？」

「ベルベツト、魔女の知り合いよ」

「あつそ…魔女ねえ」

気だるそうなグリモワール。

あからさまなまでに相手にする気のない彼女の態度にベルベツトは無意識に片眉が吊り上がった。

「グリモワールさん、ご無沙汰じゃの〜！」

「ご無沙汰でフー！」

久しぶりにしては礼儀の欠片もない挨拶。

グリモワールははあと深く呆れ混じりの溜め息を吐く。

魔女と聞いてグリモワールの頭にすぐ思い浮かんだそのまんまの姿が一行の中にあった。

「ああ、あんたたち…相変わらずどっちも妙ちくりんねね。で、あんたがこうしてわざわざ会いにくるなんて一体どんだけ面倒な用件を持ってきたのかしら…」

「酷い言い草じゃのう。これでも儂姐さんの弟子じゃろ？まあ、ろくでもない頼みなのは確かじゃが」

「わかったから。その頼みつてのをさっさと話さない。聞くだけな

ら聞いてあげなくもないから」

「つれないの……たった一人の弟子との久々の感動の再会じゃぞ、もつとこう、愛想よくどくでもいい会話に洒落こんでもよいではないか」

「あなたに愛想よくしたってあたしに得ないでしょうに」

—本当に冷たいのう

肩を落としてひとしきり項垂れたマギルウは顔を上げると本題に入る。

「実はなかなか興味深い古文書があつての、その解読を頼みたいんじゃない」

「へえ、あなたが他人に肩入れなんて、珍しいこともあるもんね」

「ヒマ潰しにちようどよくての」

「あたしはヒマじゃないけど……」

「ビエーン!!グリモ姐さん、そこをなんとかお願いでフー!」

「そういうのやってないから」

「ふむ……残念無念、引き受けてはもらえぬか」

とりつく島もないグリモワールに泣きつくビエーンと早々に諦めるマギルウ。

彼女達のやり取りに業を煮やしたベルベットは刃をグリモワールの小さな首筋に突きつける。

「やる気なら出させてあげるわよ」

「やれば?」

「脅しじゃないわよ」

「でしようねえ……」

ベルベットが刃を少し横に動かせば首と体が別れるというのにグリモワールはまるで動じず、恐怖に怯えるどころかベルベットの目を見据え品定めするように観察していた。

「あんたみたいな目をした子と関わるとんでもないもの背負わされるのよ。この年になるとそういうのは重くっていけないわね」

「何歳なんだ……?」

「絶対あれはかなり高齢だろうな。人間年齢で換算したらたぶん50

「かろくじゅー」

「それ以上踏み込むとあんた達のケツに花火ぶち込むわよ」

「応、これは失敬」

「…失礼した」

失礼な無駄口を叩いたロクロウとガイアは威圧に気圧され即座に詫げる。

そんなバカ二人はさておいて、なかなか要求を飲んでくれないグリモワールにアイゼンは頭を悩ませた。

「とりつく島がないようだな」

「南の島なのにごめんねえ…」

洒落た返しをするグリモワール。

「古代語、どうやったら読めるようになる？勉強する本とかあるかな？」

「へえ、自分で勉強して読む気？」

「僕、本が好きだし、昔のこととか知りたいし、必要なんだ」

「坊やずいぶん熱心じゃない」

「坊はベルベットの役に立ちたいんじゃない」

「う、うん」

からかうマギルウにライファイセットは微かに頬を赤くする。

その可愛げのあるライファイセットにガイアも負けじと古文書を取り出して、続いた。

「俺からも頼む。この古文書は全て古代アヴァロスト語で解読しようにも俺には力不足だった…あんたの知恵を貸してくれ」

「古代アヴァロスト語ねえ…面倒なものね」

グリモワールは考え込む。

「授業料、高いわよ」

「教えてくれるの？」

「うっそ、健気さに免じて読んであげるわ…そうねえ、この先にハリアっていう村があるから読むのはそこでしましょ」

ベルベット達はグリモワールを伴ってハリアなる村へ向かうため、移動を再会する。

ハリアの村の間が見えたのは空が夕陽によって橙に塗り替えられ始めた頃だった。

「門の前に人が立っていますね」

「門番か？」

「いや武器を持ってない。門番ではなさそうだぞ。しかし何故武器も持たずに一人で外に」

業魔の襲撃に備えて門番だとしても一人で、それも何の武器も持たずに外にいるというのは不可解だ。

そんなささやかな疑問を抱いたまま門の前まで歩くと、門番の男がエレノアの格好を見るなりこう言った。

「あの、対魔士様…ですよね？一体何の用でしょうか？」

そう聞いてくる男の声色と瞳には僅かに警戒が込められているような気がした。

「私達はイズルトから来たのですが先ほどイズルトで怪獣が出現したんです。幸い被害は最小限に収まり怪獣は討伐されたのですが、念のためこの辺り一帯に何か異常がないか調査に来たのです」

「イズルトに怪獣が？…しかし対魔士様、お連れの方は対魔士ではないようですが」

「それは」

「この対魔士様はローグレスから来たばかりでこの辺りの地理に疎いからあたし達イズルトの人間が調査に協力してるの」

「ええ、こちらにいるのは皆私を手伝ってくださっている方達です。調査が一段落したのでこちらの宿に一晩泊まらせて頂けないかと思いを来たのですが」

「そういうことでしたか。失礼なことを聞いてしまい申し訳ありません。どうぞお入りください、宿屋まで案内します」

「ありがとうございます」

案内役を買って出た男に礼を述べるエレノア。

その後続く形でベルベット達もハリアの村に入る。

ハリアの村には辺り一面紅色が広がっていた。砂浜も、海も本来な

ら違う色としてあるものが全て紅色に染め上げられていた。

その原因は夕陽の光だけではない。村の至るところに設置された篝火の明かりのせいだ。

そして村のあちこちを村人が行き交っていた。

「賑やかな村だな。ここはいつもこんな感じなのか？」

「篝火にあれは屋台の準備か…もしかして近々祭りでもあるのか？」

ロクロウとアイゼンが村を見た感想を述べる。

「実は今日の夜このハリアの村で祭りが行われるのです」

「お祭りですか？」

「この村は古くからアメノチ様の加護を授かっていると伝えられていて、一年間の豊作や豊漁への感謝と次の年も加護をもたらしてくださいという一年に一度アメノチ様への祈りを捧げる祭りが行われることになってるんです」

「そんなお祭りがあるんだ」

話を聞いて興味を持つライファイセツト。

一方でロクロウは今の話にわからないところがあつたようで、隣にいるアイゼンに訊ねていた。

「なあ？アメノチってなんだ？」

「地水火風の内の一つ、水を司る聖主だ」

「ここサウスガンドは元々アメノチ信仰の根強い地域で昔じやアメノチへの信仰を祭りや儀式なんか形に表すことが多かったらしい」

「その証拠としてサウスガンドの地ではアメノチの紋様が彫られた遺跡や神殿が発見されている。故に古くからサウスガンドはアメノチの加護が強く、その影響が豊作や豊漁に結びついていると言われている」

アイゼンとガイア、この手の話題には滅法強くかつ関心を寄せている二人は交互に知識を披露する。

「さすが、イズルトの方はよくご存知ですね。そうです、そちらの方が仰るようにサウスガンド街や村はアメノチ様を思い、その信仰と伝承を後世に託すよう先祖代々から伝えられていました。ですが今となつては聖寮に…」



「ハリアの村と対魔士との間に何かいざこざがあつたのですか？」

「いざこざという程のことではないのですが…イズルトの方ではどうだかわかりませんが聖寮の対魔士達は私達ハリアの村人にカノヌシの信仰を強いてくるのです」

「聖寮がそんなことを…」

信仰の強要、聖寮がそのようなことをしているとはエレノアにはとても信じられない。

しかし男が嘘をついているようにも思えない。

現に男の表情は微弱ながらも不満が募っているのが見て取れる。

「通りで周りからギスギスと刺々しい視線が飛んでくるわけじゃのう。村の者達はいつ聖寮に自分らの崇める聖主様を取り上げられるのかビクビクしておる…まったく持って天下の対魔士様には頭が上がらんのです」

「マギルウ」

「事実を言ったまでじゃよ」

ハリアの住民とエレノア、どちらにも嫌味を飛ばすマギルウにガイアから注意が飛ぶ。

だがマギルウが悪びれも反省も顔に示すことはなかった。

「こちらが宿になります。先ほどは失礼しました。対魔士様の前でこんなことを…」

「いえ、我々の方こそ申し訳ありません…わざわざ案内して頂き感謝します」

「では、ぐゅっくり」

案内してもらった男に改めて礼を告げてエレノア達は宿の中に足を踏み入れる。

受付を済ませて手配された部屋でさっそく古文書の解読に入る。

集中したいから、というグリモワールの要望により一部の者には出してもらった。グリモワールの他に部屋にはライフイセットとガイア、マギルウとビエンフー

解読に関わる者だけが残ることになった。

「さてそれじゃあ始めようかしら。これがその古文書ね。で、こつち

が…」

「解読してみた箇所をまとめたものだ」

グリモワールはガイアから受け取った古文書と複数の紙がまとめられた紙束に目を通す。

だが紙束を読み進めていく内にグリモワールが梅干しでも食べたような渋い表情になる。

「お師さんや、こやつ解読に何か問題でも見つかったのか？」

「参考になる資料もないしアヴァロスト語はあまり詳しくないからところどころ間違っているかもしれないが…」

グリモワールの表情から解読文にミスがあつたのではと予想するが、次の瞬間グリモワールから告げられたのは思いもよらぬ一言だつた。

「ところどころなんてもんじゃないわよ…ほとんど全部間違えてるわよ」

「…ほとんど…全部？」

「ええ、酷いもんね。とても解読なんて言えるものじゃないわね」

「そんな…嘘だろ…ちよつとどころか全部つて…」

「元氣出してガイア。ガイアが皆のために頑張つてたのぼく知ってるから。だからそんなに落ち込まないで」

「うしし、残念じゃつたのう。解読に費やした労力と時間は全て無駄、全部水泡に消えたということじゃ…」

オブラートの欠片もないグリモワールの酷評に落ち込むガイア。

人目がなければ床に手を付いていそうな落胆ぶりを見てライフィセツトは元氣付けようとしますが、マギルウはいつもの調子で追い討ちを叩き込む。

「でも誉めてあげられることもあるわよ。あなた、根気強さはなかなかのものよ」

しかしそこに酷評していたはずのグリモワールからそんな言葉が聞こえた。

「古代アヴァロスト語はね、昔の恋を引き摺る男並みに面倒なの。素人なら三分で枕が恋しくなるはずよ。けれどあなたは諦めず、この紙

束にまとめられるぐらいに格闘した。訳こそ間違っていたけどそれはたぶんあなたの直感と語学センスが古代アヴァロスト語に適應できていないから。ちゃんと古代アヴァロスト語を学べばあなた化けるわよ」

「本当か？」

「あなたにその気があればその坊やと一緒に教えてあげるわ。どうする？」

顔を上げてグリモワールを見つめるガイア。

品定めするようなグリモワールの視線を身に感じながら彼は即答する。

「是非ご教授の程、お願いします。グリモワール先生、いえ師匠！」

「こらー!!ちよつと待たんかゝい!!」

宿全域に響き渡らんばかりに喧しい叫び。

それを出した元凶はガイアの胸ぐらに掴みかかる。

「何故にグリモ姐さんを師匠呼ばわりするんじゃ!師匠儂じゃろ!?お主の師匠はおんりーわんじやろ!?儂だけじゃろ!」

「苦しい、放せ!そんなの勝手にそっちが決めたことだろ!認めた覚えなんてない!」

「嘘をつくでない!これまで散々儂を師匠と呼んだことはあつたではないか!」

「本気で言ってると思つてたのか!大体一度でも俺の前で師匠らしいところを見せたことがあつたか?ちっこいくせに人を小馬鹿にしてばっかりで師匠らしいことを一切しないお前のどこを尊敬を抱けばいいのか教えて欲しいね!」

「ぬわぁにをくく!今なんと言つた!ちっこいと言つたか!えらそーと言つたか!尊敬できないと言つたか!」

「あー!言つたよ!事実だろう。違うところがあるつて言うなら言い返してみろ!お前に比べたらな、グリモワール姐さんはよっぽど尊敬のしがいのある師匠だよ。お前よりもな!」

「ぐぬぬぬ…言わせておけば…さすがの儂も堪忍袋の尾が切れたぞ。もう、許さん…許さんぞー!!」

ガイアからの罵倒にマギルウは憤りを露にする。

その言葉と共に掴んでいた手を胸ぐらから両耳に変更し、勢いよく耳を引っ張る。

「あだだだだだ！耳、耳引っ張るな！」

「数々の暴言の仕置きじゃーい!!」

「そうやってすぐ手が出る…だから尊敬できないって言ってるんだよっ！」

「ほーこの状況でまだ言うか。これはみい〜ちり、教育せねばならぬな…徹底的にの」

「いっただあぁ！手離せ！千切れる！千切れるから！」

ガイアの絶叫もむなしくマギルウが手を放す気配はなく、むしろ引っ張る力を強めていく。

「素直に儂を師匠として崇め尊敬し無様に許しを乞いひれ伏すがよい。そうすれば手を放してやってもよいぞ」

「断る。ぜったい、いやだね…！」

「ならば仕方あるまい。もっと苦痛を味わってもらうだけのことじゃ。ほれっ」

「つう、ああ！いっただあぁあっ！」

更に痛みに襲われるガイア。そんな彼にビエンフーはこの上ない親近感を感じていた。

「…この感じまるでボクを見ているようで見ていられないでフ。これは巻き込まれない内に離れた方がよさそうでフね」

マギルウという名の魔女の理不尽を長年経験し、身に染みてしまったせいも他人が酷い目に合っているのもつい自分の姿が被ってしまった。

とぼっちりを食らわぬようさっさと離れてしまおう。

そう思ったビエンフーがこっそり扉へと歩き出そうとした時、その頭をがっしり掴まれる。

「ビエッ？」

突然の事態に困惑するビエンフー。状況に理解が追いつかない彼の足は床を離れ、頭には締め付けられるような痛みが襲いかかってき

た。

「な、なんでフか!?痛いのでフ、痛いのでフ〜!」

「さあ、マギルウ今すぐ手を放せ!さもないとビエンフーの頭を握り潰すぞ!」

「ふっふっふ、愚かじやのうガイアや。儂がビエンフーの一人、いや一匹二匹の身を案じるような慈悲深い魔女に見えるか?残念ながらそやつに人質ならぬノル質の価値は…一切ない!!」

「そ、そんなく!?姐さん、そりやないでフよ〜!」

「くっそ!やつぱりダメか!!わかつていたこととはいえ!」

「ってガイアもなんてこと言うでフか〜!そこは否定するところでフよ〜!」

「…あんだ達、騒ぐなら出てってもらえる?」

古文書の解説という目的を完全に見失ったガイアとマギルウにグリモワールは呆れ返る。

「はあ…ねえ、いつもこうなの?」

「いつもってわけじゃないよ。ガイアとマギルウ、普段は仲いいから。けど今日は一段と激しいかも…」

「…そう、珍しくはない光景ってことね」

ライファイセツトの言葉を聞いてグリモワールはもう一度喧騒に目を向ける。

帽子を被った頭を鷲掴みされて泣き叫ぶ小さな聖隷とフード越しに耳を引っ張られる素顔の見えない人間そしてそんな手下達の苦しむ格好を愉しげに笑う魔女に

解説に携わらないベルベット達は宿の受付の待合室でその結果が出るのを待っていた。

「どのくらいかかるかしら?」

「古代アヴァロスト語は文法や単語を知っていれば読めるというものではないらしい」

「そんなんでどうやって読むんだ?」

「詳しくはわからんが直感的な読み方ができないと正しく解説できな

いと聞いたことがある」

「直感か：やつかいそうね」

「解読が終わるのを気長に待つしかないでしょうね」

「だな。焦ってたって今オレ達に出来ることはないんだし、休める時に体を休めておこうぜ」

解読の手助けができないベルベット達は体を休めてただ時が過ぎるのを待った。

「対魔士様方よろしければこちらの飲み物をどうぞ」

するとそこに黄色の液体の入った何個かのグラスを持って女性がやって来た。

年齢はベルベットやエレノアとほぼ変わらないだろう。

へそを出した大胆な服装をしていながらも全体的に清楚さがあり、黄髪を後ろで一本に結っている。

「えっと、あなたはこちらの宿の方ですか？」

「ナターシャと申します。この宿屋の娘です」

ナターシャと名乗る女性はそう言うと言機の上にグラスをベルベット達一人一人の前に置いていく。

「どうぞ、この宿特製のパイナップルジュースです」

「宿屋の人間にしてはなかなか面白い格好だな」

「あ、いえこれは今日のお祭りのために着てるものですからいつもは村の皆さんがしてるようなのと同じ服を着てます」

ロクロウの言葉に気の良い微笑みを崩さず柔らかい口調で答えるナターシャ。

全員の手元にグラスを置き終えた彼女はキョロキョロと周りに目を巡らす。

「他の方はいらっしやれないのですか？確か他にもお連れの方がおられたと思います」

ナターシャの質問に訊ねられたエレノアが口を開こうとしたまさにそのタイミングで、宿屋の一室のドアが開かれ中から数人姿を見せた。

「いや〜ひじょーにスカツとしたわい。心の中の天気曇りがかつて

いたどんよりとした空だったのが一転、澄みきった青空のように心が晴れ晴れとしておるわ。気分はサイコーじゃ」

「頭が、頭がジンジンするでフ…とんでもない目にあつたでフ」

「つあ〜！まだ痛みが引かないぞ…これ大丈夫か、ちゃんと音拾えてるか…」

手をパンパン叩いて満足感に浸るマギルウとは大きく変わって、頭やら耳やらを抑えて苦しむビエンフーとガイア。

とても解読していたとは思えない光景が部屋から出てきた。

「あの…解読してたんですよね。なんでそんな耳が赤くなってるんですか？一体何と戦ってたんですか」

「…マギルウに聞いてくれ。全部あいつが悪い」

「おやおや、これはけしからんのう。儂に内緒でこっそりそんなものになりつけおって、全く儂の弟子共は揃いも揃って敬意の払い方になっておらんわ」

「あなたの弟子になった覚えなんてないわよ」

「細かいことをガタガタ抜かすでない。バツとしてこれは頂くぞ、どーせお主は食べぬのじゃしよいじやろ？」

耳の先まで真っ赤に染め上げたガイアをよそにマギルウはベルベットの分のグラスを奪い取り、その味を堪能する。

ワガママぶりを遺憾なく発揮する彼女にもう呆れるという感情を持つことすら放棄したベルベットのガイアに質問を投げかけた。

「解読は大丈夫なんでしようね」

「ライファイセットがやってる。あいつに任せれば問題ないはずだ。グリモワール師匠いや先生もついてるしな」

ガイアの言葉でベルベットの不安は消えた。

ライファイセットなら性格に難のある二人と違ってグリモワールと上手く解読を進められるだろう。

「そう、なら安心ね」

「きつとスムーズに解読が進むと思うぞ。それにしても、あくなんか無駄に疲れた気がする」

ひとまず安心したベルベットの前でガイアは憔悴しきった表情で

力なくソファに持たれなかった。

そんな彼にもナターシャはグラスを手渡した。

「お連れの方もいかがですか？」

「ありがとう。君は？」

「ナターシャと言います。この村で踊り子をしています」

「ハリアの…踊り子？」

ハリアの踊り子と聞いてガイアは険しい顔になる。

—前に聞いたことのある言葉の響きだ。しかしいつどこで、誰から聞いたのか思い出せない。

「ボクにもくれるんでフか!?ありがとうでフ〜!」

必死に記憶の引き出しを漁っていたガイアの思考は喚起の叫びに中断される。

気になってそちらをしてみるとナターシャからグラスを受けとるビエンフーがいた。

よほど嬉しかったのか丸っこい目が潤んでいる。

「こんなに優しくしてもらえたのはエレノア様の聖隷だった時以来でフ…ああ、マギルウ姐さんの呪縛から解放されて一番満ち足りていたあの時へ戻りたいでフ。エレノア様の涙が渴くよう頬をフーフーしてあげた日々が恋しいでフ」

「え?!ちよつと!」

感激の余り思いも寄らぬことを口走るビエンフー。

その口から出た言葉にエレノアは上擦った声を上げる。

「な、な、何言ってるんですか!」

「エレノアそんなことしてもらってたのか」

「ビエンフーがいなくなっちゃったからってまさか今度はライファイセットにやらせてるんじゃないでしょうね?」

「してませんよ!というか以前にもそんなことは…!もうどうしてあなたはいつも一言余計なんですか!」

「ビエンフーや…まだ懲りておらんのか。仕置きが足りぬというのならばいくらでも手を貸してやるぞ」

「そ、そんなもう勘弁して欲しいでフ〜!」



ガイアとベルベットに質問攻めに遭うエレノアがいたり、マギルウからまたしても脅迫を受け怯えるビエンフーがいたりと受付前は大騒ぎ。

ロクロウもアイゼンも静観を決め込み、もう少し続くかと思われた騒ぎにメスを入れたのは意外にもナターシャだった。

「エレノアさん？あなたがエレノアさんなんですか？一等対魔士の」

ナターシャのその言葉にマギルウ以外の皆が首を傾げた。

「はい、エレノアは私ですけど」

ナターシャはエレノアをじっと見つめて、どこか嬉しそうな顔をする。

「話を聞いてからは非一度会いたいと思っていたんです。けどまさかこんな日に会えるなんてこれもアメノチ様の加護のおかげでしょうか？」

「えっ、と…ナターシャさん…？ちよつと、いいですか？」

「あつ、すみません。対魔士様の前でこんな失礼な態度をとってしまつて」

「それは構いませんが…気になることが。どうして私の名前を知っているんですか？それに私が一等対魔士であることも…私はこの村を訪れたことはありませんし、あなたともこれが初対面のはずですが」「実はエレノアさんのことは何度も聞いていたんです。とつても職務に誠実で優秀な方であると」

「私を知っている方と知り合いなのですか？」

——一体誰から聞いたのだろうか。

もしかするとイズルトの誰かから聞いたのだろうか。

そんなことをエレノアが考えていると…

「対魔士様、一緒にこちらの夜桜あんみつはいかがでしょうか？食後のデザートにはとおつてもおすすめてですよ」

いきなり後ろにいた誰かに肩に手を置かれ、耳元でねつとりとした声で囁かれた。

その声のエレノアは背筋がビクツと震え、瞬時に声の主を振り向

く。

ガイアも同じく目を見張り、そして凝固した。

その男はかつてエレノアと同じ一等対魔士であり、二年前グランと共に調査隊に任命された者。そして今や業魔と成り果てた男。

「ジャグ・ラー……？」

その男の名はジャグラス・ジャグラー。二人の前に現れたのはかつての仲間であった者だった。

### 第30話 渚の天使（おとめ）と悪魔（ごうま）

「ジャグララー…?」

「らしくない間抜け面だな。今更そんな面で俺を見る必要もないだろうに」

「何故…あなたがこんなところに…」

エレノアの理解の範疇を越えた状況が目の前にあった。

衝撃の余り声が震えているのにも気付いていない。

「こんなところとは随分な言い方だな」

「だって、貴方は…」

「なあ、こいつもしかして」

「業魔ね。あの目、まず間違いないわ」

「ベルベット!」

エレノアが言い出せなかったことをベルベットは躊躇なく口にしてみせた。

それにエレノアは反発の色を見せるが、ジャグララーは一切戸惑いを見せずベルベットに言い返す。

「だから…なんだ?業魔が人間の村にいたら問題だとも言う気か?

…だとすればお前達の中にも俺と似たようなのがいると思うがな」

「あんた、何者?エレノアとは知り合いみたいだけど」

まるで自分達の素性を、ベルベットが業魔であることを知っているかのような口振りに警戒心を抱き、ベルベットは目を細めるようにして彼を見る。

「お前に名乗る義理も義務もない…だがまあいい。お仲間の対魔士様に免じて教えてやろう。ジャグラス・ジャグララー、人間だった頃はテナンバーの一等対魔士そして今ではご覧の通り平和な世の中に災いをもたらす業魔の一人だ」

わざわざ勿体ぶった調子で名乗るジャグララー。

するとそこへナターシャが口を挟む。

「口は悪いですが誤解さらないでください。業魔ですけど悪い業魔ではないんです。彼は私達にとってこの村で暮らす仲間なんです」

「貴方は彼が業魔だと知っているんですか？そもそも貴方とジャグラの関係は一体？」

「エレノアさんにはきちんと説明した方がいいですよ。いいですよ？ジャグラ」

「構わん。だが一から十まで丁寧に話す必要はない。必要最低限でいい」

「では皆さん、少々長くなりますのでとりあえずお座りください」

全員をソファアに座らせたのを見届けてからナターシャは語った。

ジャグラとはナターシャがローグレスで道を訊ねたのがきっかけで出会ったこと。

それを機にローグレスで何度か話をするようになり、ナターシャがハリアに戻ってからもう文通で交流を続けていたが、二年前のある時を境にジャグラからの文が途絶えたこと。

そして最近ハリア村近くの浜辺で傷付き倒れていたジャグラをナターシャが介抱する形でハリアに連れてきたこと

ナターシャは出会いから今に至るまでのあらましをきちんと丁寧に説明してくれた。

「貴方とジャグラはそんなに前からの付き合いがあったのですね…驚きました。ジャグラからはそういった話は聞いたことがなかったですしそれに…」

その説明を聞いたエレノアはナターシャからジャグラへと順に視線を巡らせる。

対魔士としての使命よりも剣の道一筋に生きる孤高の剣士、それが聖寮にいた頃のジャグラに抱いていた印象であった。

浮わつた遊びも一切せず、任務以外で誰かと一緒にいるところなど見たこともなければ噂ですら聞いたこともない。

そんな彼が異性との交流があったというのはエレノアには驚きでしかなかった。

「それにしても関わりがあったとはいえよく業魔を村に招き入れようなんて思ったな。普通の村じゃそんなことしないだろう。反対とか

なかったのか？」

「もちろん最初は反対されました。業魔を村に入れるなんて正気かと、母も村長も私以外の皆がジャグラーを拒んでいました」

「ま、普通そうなるじやろうな。ましてここは聖主を崇拝する村、そんなことをすれば自分達の信じる聖主様からお怒りの天罰が下るやも知れぬからのう」

「それが今も村にいる…ってことはそいつはもうこの村の一員ってわけね」

「何がきつかけだったんだ？」

おそらくマギルウを除く全員が最も気にしていたであろう疑問をガイアは投げかけた。

ナターシャもそれを聞かれるのはわかっていたようで、すぐに言葉を紡いだ。

「どうしても傷付いたジャグラーを放っておけなくてどうにか皆に最初は怪我が治るまでという約束で村にすることを許されたんです。けどそんな折近くの海から魚のような見た目の、怪獣って言うんでしょうかそれぐらい大きな生き物が村に近付いてきたんです。その怪獣からジャグラーはまだ傷の癒えていない体で戦って私達を守ってくれて…その事があって以来皆のジャグラーを見る目が変わっていききました。業魔としてではなく人間としての内面を見るようになったんです」

「業魔が人間を、ね」

「もういいだろう。この話は終わりだ」

事の経緯を聞いて誰に話すわけでもなく呟くベルベット。無感情な面持ちを装いながらも声色にはうつすらと本人にも上手く言葉にできないような感情が込もっていた。

それに気付いてかもしくは気付いていないのかジャグラーは話しに幕を下ろすと、体を預けていた壁から離れてエレノアに向き直る。

「聞いての通りだ。さて、対魔士様…どうする？ ナターシャはこう言っているがお前も知っての通り俺は業魔だ。俺を村から引き剥がすか？ 聖寮に引き渡すか？ それとも、槍を取って今ここで殺すか？」

「……！」

―槍を取って殺す

恐らく意図せずしてたまたまからかい目的で使われたことばであろうが、ジャグラーのその言葉はエレノアの表情を強張らせ、身体をビクツとさせ震えた声を出させた。

「……いえ、貴方に危害を加えるつもりはありません。」

「感謝します。対魔士様」

まるで良家に仕える家来のようにわざとらしく片手を胸に当てて頭を下げられてエレノアは苦い顔をした。

しかしジャグラーは既に終わったこととみなしたのか、エレノアから目を反らしてナターシャにここに来た本来の用件を話していた。

「ああ、ナターシャ、マヒナの件だが未だに見つかっていない」

「そうですか……まだ見つからないなんて、どこに行ってしまったのでしょうか。何か大変なことに巻き込まれてなければいいのですが」

「またすぐに捜索に出る。だが万一に間に合っなかった時のことを考えておく必要がある……俺に一つ考えがある」

マヒナの安否を気遣うナターシャにそう言うと言つとジャグラーはベルベット達に視線を戻す。

「何かあったのか？」

「今朝方からこの村の巫女が突然姿を眩ませて行方がわからなくなつてな。巫女が不在ではこの後の祭りに問題がある」

「問題？」

「お祭りの始まりとしてアメノチ様に感謝を捧げるための祈りがあるのですがその役目は代々巫女が担っているのです」

「ということだ。つまり巫女がいなければせつかくの祭りも台無しというわけだ……そこで一つお前に頼みがある」

「私に？」

ジャグラーに見つめられたエレノアは困惑の表情で彼をじつと見つめ、次の言葉を待った。

「お前に巫女の代わりを引き受けてもらいたくてな」

「わ、私がですか!?!無理ですよ!そんなの!」

突然の思わぬ指名にエレノアは困惑し、声を大にして辞退しようとする。

「修道女の経験があると前に言っていただろう。それと似たようなものだ」

「確かに修道院にはいましたけど子どもの時の修道女とも言えないようなほんの少しの間だけですし、それにそもそも私はこの村の人間ではありません。そんな私に巫女なんてとても勤まりませんよ……」

「巫女を勤めるのは聖主様に祈りを捧げるに相応しい清廉な精神こころの持ち主でなければなりません。対魔士様のエレノアさんなら充分巫女として大丈夫なはずです。どうかお願いします」

「そう言われましても……」

ジャグラーだけでなくナターシャにまで懇願され、困り果てたエレノアは助けを求めるように仲間達へと目を泳がせる……が

「いいじゃないか。今夜だけのことだろうし一宿一飯の恩もある。協力してやったらどうだ？」

「うむ、助力を求める下々の声に耳を傾け救いの手を差し伸べるのが対魔士の役目じゃろ？しよくむほーきなど言語道断。こつちのことは儂らに任せて全身全霊をかけて巫女の勤めを果たしてくるがよい」

「他人事だと思っ……」

ロクロウとマギルウ以外の三人も無言で一切口を開かないのを見て、エレノアは自分に完全な味方はいないのだと悟った。

脱力して大きく息を吐くと、折れて協力する意志を見せた。

「わかりました。私でよろしければお手伝いさせていただきます」

「ありがとうございます！ではさっそく村長さんのところに行きましよう！私と一緒に来てください」

「は、はい」

承諾を得るなりナターシャは足早に宿から出ていく。

エレノアも彼女に連れられるというより引っ張られるようにして外へと消えていった。

「俺も行くとするか」

二人を見送ったジャグラーは壁から離れて扉に手をかける。  
そんな彼にロクロウからの声がかかった。

「お前は何をしにくんだ？」

「本来の巫女探しの続きだ…そうだ、お前達の中から誰かに手伝ってもらおう。人手も足りないことだしな…その顔を隠した奴、お前に来てもらおう」

ジャグラーはベルベット達四人の中の一人、ガイアにそう告げる。

ガイアもジャグラーをじっと見つめ、彼のニヤリとニヒルな笑いを浮かべた口から次の言葉が出てくるのを待った。

「構わないだろう？」

「ああ」

「オレ達も手伝った方がいいか？」

「必要ない。言っただろう、人手が足りない。ここで祭りが始まるまで大人しく羽根を伸ばしておけ」

手伝いを申し出たロクロウにジャグラーはにべもなく、そう言うと宿を後にする。そしてガイアもその後を追いかけるように去って行った。

静まった空気が場を包む中ロクロウがポツリとこんなことを呟いた。

「マギルウ、お前は一緒に行かなくていいのか？」

「はて、どういう意味じゃ？」

「お前業魔でも聖隷でもないんだし、オレ達と違って人手になるだろ」「そうじゃな、お主の言うとおり儂は業魔でも聖隷でもない。しかし、そこいらにいるような普通の人間とも違うんじゃない。なにせ儂は」

「魔女だからでしょ」

「正解じゃ、故に人手には含まれぬということじゃ。お主もやつと儂のことをわかってきたようじゃのう」

「そんなんでいいのか？」

ベルベットにマギルウが賛辞の言葉を送り、ロクロウはマギルウのでたらめな理屈に眉を潜める。



アイゼンはそんな三人の会話に耳を立てつつも、ついさつきジャグラーとガイアが出ていった扉を眺めていた。

(ここは…)

ガイアがジャグラーに導かれて足を運んだのは村の端に寂しく佇む小さな小屋の前だった。

ジャグラーは錠前の付いた扉を手にしていた鍵で開けると、中へと入っていきガイアも後に続く。

中に足を踏み込んだ途端ガイアは呆気に取られた。

部屋には生活用品はなく、見受けられるのは鍬や銛のように畑作業や漁に使うものばかり。

(パツと見た感じ物置小屋、だよな。こんなところに何の用が)

「ぼさつとするな。この上だ、さつさつについてこい」

意図がわからず困惑しながらもガイアはジャグラーに従い、梯子を伝って上階へ上がる。

上階は下と比べて狭苦しい空間であったが椅子や机がある分、生活感とは格別の上に思えた。

ジャグラーは椅子に腰かけるのを見てガイアも反対側の椅子に座る。

お互い向き合ったまま暫し沈黙の時間が二人の間を行き交う。

どう切り出したものかと悩むガイア。すると思いがけずしてジャグラーの方から先に沈黙を破ってきた。

「いつまで黙りを決め込んでいるつもりだ。俺に聞きたいことが山ほどあるはずだろう」

「…ジャグラー」

「顔を見せる。人と話す時は顔を見せるのが礼儀というものじゃないのか?」

「…」

「村の連中は準備やら搜索やらで立て込んでいる。ここには誰もこない、無論お前のツレもな」

そう言われてガイアは躊躇いはあったものの、フードを取って素顔を晒す。

「随分な変わり様だな」

「そつちの変わり様の方に比べたら大人しいと思うけど…ほんと、驚いた。生きてたのもそうだけどまさか業魔になってるなんて」

「あいつから何も聞いてないのか」

「あいつ?…エレノアと会ったのか。業魔になってから」

「相変わらずの堅物ぶりで安心した」

(そういえば…あの時)

サイコメザードと会話している時エレノアは確かにジャグラと既に会っていたような口振りをしていた。おそらく業魔であるのもその時点で知っていたのだろう。

とそこまで考えてガイアはもう一つ思い出したことがある。

「まさかエレノアの使役聖隷を消したのは…」

「ああ、そういえばそんなこともあったな」

「なんでそんなことを」

「聖寮をぶつ潰すしてアルトリウスを殺すためさ。だが安心しろ、今はその気はもうない…と言っても信じられんだろうがな。顔を見ればわかる」

その言葉が本当に信じられないと表情に表わすガイアに、まあ当然かとジャグラはその反応に納得する。

「蛇心流の剣士としてこの世の誰よりも強くなる、それだけを思い俺はこれまで剣の腕を磨き生きてきた。対魔士になってからも業魔になつてからもそのことに変わりはないなかつた…変わったのは精々俺をこんな姿にしたきっかけを作ったあの男をこの手で討つという理由が加わったぐらいだ」

「ただしかしそんな折俺は再会してしまった。戦いで意識を失って初めて目を覚ました時あいつが覗き込むように俺を見ていた。俺は恐れたよ、醜い化け物の姿を見て一体どんな言葉が出てくるか…しかしあいつは俺にこう言った『お怪我の具合はどうですか』だってよ。業

魔になった俺にまるで恐怖を抱かず話しかけてきたんだ」

「以来俺はこの村であいつと共に過ごすようになって以来俺の中にちよつとした思いが生まれてきた。最初は傷が治るまでのつもりだった。居心地がよくなったんだ……ここであいつや村の奴らと暮らしていくそんな道も悪くないそう思えるようになった」

こんなジャグラーは初めてだとガイアはそう思わざるにいられなかった。

ジャグラーがここまで自分のことを話すのも、他人の話しを嬉しうに話すのも、対魔士だった頃には見られなかった姿が今ガイアの前にあった。

「業魔の俺がこんなことを望むのはおかしいか？」

「いや……おかしくなんてない。大切な人や居場所を守りたいって気持ちはわかる。例え今までの自分と違う姿や存在になってしまったとしても……うん、よくわかるよ」

——だって自分も同じようなものだから

とは言えず、ガイアはジャグラーの言葉に理解を示し耳を傾ける。

「まさか俺が誰かを守りたいなんて言うようになるなんてな。お前やエレノアの思想を笑ってた頃の俺が今の俺を見たなら間違いない腑抜けと言われるだろうな」

「だろうね。でもいい変化だと思うよ、僕はね」

「気色悪い」

「……そういうところは変わってないんだ」

「お互いにな」

こういう会話も久しぶりだと二人は思う。この時ガイアはグランとして、ジャグラーは人間であった頃の名残りを感じていた。

「それにしてもよく僕だってわかったね。顔見せてないのに」

「教えてもらったのさ。こいつらにな」

「それは……」

ガイアは血相を変える。ジャグラーが服から取り出したのは赤や青など色んな色の複数のカード。それが賭け事で使うような単なるカードであれば問題はない。しかしジャグラーの手にあるのは単な

るカードで済まされる代物ではなかった。

コツヴ、ジャツパ、タツコング、エレキング、バードン…：ガイアだけでなく青い巨人が倒した、更にはガイアが知らない怪獣達がカードには描かれていた。

「おっと」

危険な匂いがする。直感的にそう思い取り上げようと手を伸ばすが虚しくも腕で阻まれ、ジャグララーは空いた手でカードを再び服にしまいこむ。

ジャグララーは掴んでいたガイアの腕を放す。

「それを渡してくれ」

「そいつは無理な相談だ。俺には必要な力だ」

「村を守るならそんなものがなくても君の剣の腕ならできる。そんなものに頼らなくなつて。」

「そうだ。普通の相手なら俺だつてこんな物に頼る程軟弱じゃない。だが未知の脅威の前には未知の力で対抗するより他はない。業魔にしても、怪獣にしても、大切なものを脅かす危険から守るには力はあるにこしたことはない。それが得体の知れない力であろうとむしろ積極的に利用するべきだ…：お前も同じはずだ。だから巨人として戦っている2年前のあの時手にした力でずつと」

ジャグララーの言葉にガイアは立ち上がる。

何故そこまで知っているのか、と顔に出ているガイアをジャグララーは余裕綽々の笑みで一笑に伏す。

「どうしても言うのなら俺を倒してでも取り上げればいい。だがその結果によっては俺はお前を叩き斬る。お前だけじゃない。お前の家族も故郷もお前の守るもの全てを奪ってやる。当然お前の幼馴染みもな」

そう言つてのけるジャグララーの目は本気で、ガイアは一瞬背筋が凍った。間違いなく有言実行できるだけの実力と意志の強さを知っているだけに

だがジャグララーの言い分もわからなくはなく、迷った末にガイアは引き下がる選択を選んだ

「これだけは教えてくれ。それはどうやって手に入れた？さつき君は力つて言つてた。そのカードの怪獣は僕達が倒したはず、力つてどういう」

「倒した、か。だからお前達はダメなんだ。せつかくだから教えてやろう。お前達の行為は謂わばひとまとまりになつたでかい埃を撒き散らしているだけに過ぎない。無駄に等しい、まあ俺からすれば楽に力を手に入れられて都合がいいんだが」

「埃？」

「そう埃だ。俺はそれを集め力にした。それがたまたまカードになつた」

「なんなんだ、その埃つて？」

「教えない」

薄気味の悪い、しかしそれでいて何故か可愛げのある感じの笑いでそうジャグラーは言った。

「ふざけてないで真面目に――」

――カアン、カアン

追及しようとした時遠くから硬い金属を叩いたような音が聞こえてきた

「祭りが始まるようだな」

椅子から立ち上がつてジャグラーはガイアの脇を素通りして梯子へと歩き出す。

「幼馴染みの晴れ舞台だぞ。見物しなくていいのか？」

一足先に梯子を降りるジャグラー。渋々ガイアも下まで降りてジャグラーと共に来た道を引き返す。

結局『埃』とやらがなんなのか聞き出せなかった。

どうせまた訊ねてもはぐらかされるだけだろうと踏んだガイアは諦めた。だがどうしてもこれだけは確認しておきたかった

「信じていいんだな？さつきの言葉」

「言つただろう。昔ならともかく今はそんな気はない」

「なら約束してくれ。むやみやたらに命を奪つたり、怪獣の力を使わないって」

「約束？はっ、バカか。誰がそんな子供じみた真似するか」

ガイアに背を向けたまま彼をきつく一蹴するジャグラーだがその直後にポツリとこんなことを呟いた。

「この奴らを裏切りはしない」

ジャグラーのその言葉にガイアは驚き、そして安堵した。

正直なところジャグラーに関して不安も心配もある。手にしている力が力だし、業魔の本能が暴走する危険も充分に考えられる。

だが今のジャグラーには彼を支えてくれるかけがえのない大切な人が、共に支え合う仲間がいる。このハリアの村の人達がいる限りジャグラーは邪なことはせず、平穏な人生をここで過ごすことができるのではないだろうか。

もしそれが可能ならば、ジャグラーが心から望んでいるのならそうなつて欲しい。

「おい」

そんな考えを巡らせているとジャグラーから声がかかった。

ジャグラーは自身の頭の上を指差しガイアに何かを伝えようとしている。しかしガイアは眉を細めて首を傾げる。

溜め息を落としたジャグラーは距離を縮めガイアの首根っこに手を回すと、乱暴な手つきでフードを頭に被せる。

「ああ…そういうこと」

「自分で気づけ。間抜け」

やっと仕草の意味に気付いたガイアを罵るとジャグラーは歩みを再開する。

その後ろ姿にどうしてか笑いが込み上げたガイアは彼に悟られぬよう静かに口元を綻ばせてからゆっくり歩を進めた。

### 第31話 地上の楽園

ガイアとジャグラーが村に戻ってくると浜辺の辺りに賑わう人だかりができていた。

その中にはベルベツトらの姿もあり、二人の姿を見るとライフィセットが小さな手を振った。

「あ、ガイア。ここにだよ」

ライフィセットの声と手を頼りにガイアとジャグラーは人混みを掻き分けて、手前まで辿り着く。

「ライフィセット、解読の方はもう終わったのか？」

「ううん、まだまだ。キリのいいところまで進んだから今日はここままでしようってグリモ先生が。それでベルベツトのところに来たらエレノアが巫女をやるって聞いたから見てみたくて」

「なるほど、お疲れ様」

「その人は？ガイアの知り合い？」

「あ、ああ…えつと」

どう答えたらよいのやら

隣にいるジャグラーのことを聞かれてガイアが言葉の引き出しを探る。

すると

「お初にお目にかかる小さな聖隷君。俺の名はジャグラス・ジャグラー、元対魔士だ。以後お見知りおきを」

視線をライフィセットに合わせるため身を屈めたジャグラーが礼儀正しく代わりに答える。

薄気味悪いぐらいやんわりとした優しい笑顔で、とても本人の物とは思えない程かけ離れた穏やかな声色で言う友人のあまりの豹変ぶりにガイアはギョツと魚のように目を見開く。

「対魔士ってことはエレノアを知ってるの？」

「あいつの恥ずかしいところとか色々とな…お前の顔」

「僕の顔に何か付いてる？」

「お前、二号か。テレサに引っ付いてた」

ジャグラーはじつとライフィセットを見つめる。

対魔士だった頃テレサ・リナレスが使役聖隷の片割れに目の前の聖隷と同じ顔がいた。

「なんで僕のこと…あ、そっか。エレノアと知り合いで対魔士ならテレサ様も知ってるよね。そうだよ、僕は二号。でも今は違うよ」  
「何？」

「ライフィセット、それが今の僕の名前だから」

「ほう、それは失礼した。では改めてよろしく、ライフィセット」

「よろしく、ジャグラー」

感心したような目と穢れのない純粋な目を送り合うジャグラーとライフィセット。

二人を交互に見てガイアは

(やっぱ、ほんと、慣れないな…あんなジャグラー)

先のジャグラーの言葉を疑うつもりではないが記憶の中の人物と目の前の人物が同じであるのが受け入れ難い。

起こり得るあり得ない現象を前にしているようで不気味、はつきり言って気持ち悪い。

と、そのようなことを考えていると周囲からおおつ、と声が沸き上がる。

「お、主役の登場したみたいだぞ」

ロクロウの言葉に釣られて他の皆もそちらからやって来る人物を見る。

左右に分かれたいつものツインテールは解かれ、白と蒼海色の巫女衣装に身を纏ったエレノアがナターシャを伴って現れた。

「ほおくなかなか珍妙な格好をしておるではないか。表情アレなのがちとあれじゃが」

「確かに表情が堅苦しいのは気になるが、似合ってるいいと思うぞ。なあ？ライフィセット」

「そうだね。いつもと違うエレノアって感じでとっても可愛いと思うよ」

「…へえ、ああいうのが好みなんだ」



「その言い方だと普段お前はエレノアを可愛くないと思っている。そう聞こえるが？」

「そんなことないよ。エレノアはいつだって可愛いよ」

「おやはや、これは驚いたわい。いつの間にかそんな小生意気にも大胆なセリフを坊が吐けるようになっておったとは」

それぞれ思い思いの感想を呟くライファイセット達。その輪の中にはちやつかりとジャグラも加わっていた。

アイゼンはそれに聞き耳を立てながらを唯一何も述べずにいるガリアに近より、耳打ち程度のか細い声で訊ねる。

「どうだ？感想は」

「…なんか、すつごい可愛い。あんなエレノア初めて見た」

「ふつ、そうか」

その感想にアイゼンは失笑する。

「万物に宿り自然を司る四聖主の一角、水の聖主アメノチ様」

声も音も一切が消えると浜辺へと歩むエレノアは教会で懺悔するように膝を折って、ナターシャから教わった通り祈りを始める。

ハリアの人々もエレノアの祈祷に合わせて目を閉じて、砂地に膝を付け始めた。

「我らハリアの民は穏やかな時と豊穡を与えてくださったアメノチ様の加護により、無事この時を迎えることができました。今宵アメノチ様の加護に深く尊敬と感謝の意を表します。我らの祈りをどうか受け取ってください。そして今後もハリアの村に加護をお与えください」

祈祷が終わり、ハリアの村には祭りの雰囲気にも包まれた。

五人の女による南国風のダンスと四人の老人による楽器の演奏でハリアの夜を盛り上げている。

そんな中

「とても見事でしたよ。対魔士様、初めてなんて思えないくらい」

「ありがとうございます。貴方のおかげでアメノチ様へ我らの祈りを

捧げることができました」

「いえ、対魔士として当然の行いをしただけですから」

村人に囲まれてあまりの勢いに気圧されて戸惑うエレノアがいて

「豪快な飲みっぷりだなあんちゃん。どれ、もう一杯いくか」

「応、頼む。こんなに上質な心水は久しぶりだ、まだまだ飲み足りん」

「ペンギョンの唐揚げも食うか？酒のつまみにはピッタリだぞ」

ロクロウは村の男達と心水の飲み合い

「このぬいぐるみ…」

「それはイズルトにいた商人からの貰い物だよ。かわいらしい見た目だけどなんかよくわからなくてね」

「これはピンキストの島とも言われているティポ島で流通している人形なんだが、島がここよりずっと遠くにあるらしく簡単には手に入らない代物だな。実物を見るのは初めてだ」

「そんな珍しいもんだったとはねえ、どうだい？買ってくかい？」

「では、そうさせて貰おう。妹に送ったら喜びそうだ」

アイゼンは出店している雑貨屋でファンシーな人形に興味を示していた。皆村人に混じって祭りを楽しんでいるようだった

「あやつらすっかり溶け込んでおるのう。単純というかなんと言うか、聖寮に追われてる身だというのに気楽で羨ましいわい。やれやれ、少しは勤勉なこの儂を見習ったらどうじゃ」

「勤勉ねえ、起きてるのに寝言が言えるなんてさすがだな」

村人に混ざって祭りを満喫する二人を呆れのこもった眼差しで見るマギルウにガイアはきつい言葉をぶちまける。

「これはこれは心外じゃのう。儂のどこをどう見たらそんな言葉が出るんじゃ。見てのとおり、儂はこんなにもかよわくしておしとやかな乙女じゃというのに」

「いつもが一番騒がしいのに何言ってるんだ。ローグレスの時だって率先して奇術団の真似事してたし、こういう祭り事絶対好きだろ」

「ちっちゃっちゃ、わかったらんのう。まるでわかっておらんわ…よいか、周りがうかれておるのに便乗するのは簡単じゃ。自らの手でムードをメイキングし周りをざわつかせてこそ一流の芸人というもの

「じゃて」

「…あつそ」

いつから芸人になったのかだとか、魔女じゃなかったのかだとか、そういうどーでもよい指摘はもはや海へと投げ捨てることにした。

指摘したその瞬間からまた面倒くさいダルがらみが始まるのは決定づけられた未来だ。そんな未来への一步をわかっていながら踏み出すのは愚か者のすることだ。

「ところで、ビエンフーが見当たらないけどどこ行った？」

目線を反らした時マギルウの足元にいつもいるはずのビエンフーの姿がないのに気づく。

「さあもう、わからんわ」

「わからんわっていいのか。そんなんで」

「大方そこらの娘に色目使って片っぱしからナンパでもかけてるんじゃないわ。ビエンフーごときにいちいち構ってる暇はないわ」

「あんだだけ探してた癖にドライだな。もっと大事にしてあげないとまたいなくなっても知らないぞ」

「いいんじゃないよ、あやつはそういう扱いで。もし逃げ出した時にはまた引っ捕らえればよい。ま、もう二度とそんな気が起きぬようみっちり教えておるし、問題なからう。じゃ、また後での」

最後に何やら物騒めいた事を残してマギルウはガイアから離れて、一人どこかへ歩いていく。

（ビエンフーを探しに行ったのか、それとも単に暇潰しをしに行ったのか…）

暗闇に消えたマギルウにそんなことを思いながらガイアは祭りの賑いへと目を移す。

「それよりも、どうするか」

祭りが終わるまでまだかなりの時間がある。

この後何をしようかと考えていると、ある人物が目留った。

「ふう…」

一人砂に座り込むエレノア。

緊張と疲れもあつて深く息を吐いた時彼女はふと、砂を踏み締める音と気配に反応してそちらを振り向く。

「ガイア」

「お疲れさん。やっぱり緊張したか」

「こんな大勢の人前で歴史あるお祭りの大役をするととなると疲れますし、緊張もしますよ」

「だろうな、気持ちはわかる。でも結果よかったじゃないか、無事上手くいって。これ食べるか？さつきもらってきたんだ」

そうフードの奥で破顔してガイアはエレノアに皿に乗った食べ物を渡す。

「キツシュ、ですか？気持ちは嬉しいのですがこれは、その…」

「ほうれん草は入ってないって言ってたから安心しろ」

「そうですか。よかった」

キツシュを凝視して警戒していたエレノアはその言葉に安堵してキツシュを迷いなく口元に運ぶ。

「おいしいか？」

「ええ、とても。ありがとうございます」

「そうか、ならよかった」

キツシュを頬張るエレノアの横顔をガイアは見つめる。

満足そうに喉に運んでいた彼女だがふと突然、ピタリと動きを止める。

「どうした？」

「…なんで知ってるんですか」

「へ？」

「私がほうれん草苦手だってこと貴方に言ったことありませんよね。なのにどうして知ってるんですか」

「……あっ」

（しまった……！）

失念していた。

エレノアがほうれん草を苦手としているのは知っていた。しかし

それを知っているのはグランであって、今エレノアの前にいるガイアとしては知ってはおかしいのだ。

咄嗟に言い訳が思い付かず、エレノアの追及の眼差しを浴びるがままになってしまったガイア。

するとそこに思わぬ助け船が現れた。

「俺が教えてやったのさ。巫女探しの間の、話の種にな」

現れたのはジャグラー。彼はベルベットとライフセットを伴っていた。

珍しい組み合わせだなとガイアが考えていると、ライフセットがエレノアに話しかけていた。

「エレノアお疲れ様。大変だったでしょ？」

「ありがとうございますライフィセット。口元に何かついてますよ」

「え!?!どこっ?」

「私が取ってあげます。こっちに来てください」

ライフセットの視線に合わせてしゃがむエレノアと先ほどまで何か食べていたのか食べかすを取ってもらって恥ずかしそうにするライフセット。

和やかな二人にガイアがほんわかかな気持ちになっている

と、いきなり横からジャグラーに肩に腕を回されると同時に耳元で囁かれる。

「妬いてるのか?お前」

「いや全然。仲良にならなくて思ってたただけだけど」

「ほお、全然とききたか。てつきり俺はずっと昔から一緒にいる幼なじみを取られて嫉妬してるのかと思ったが」

「嫉妬?まさか、ないない」

「はっ、どうだかな」

「本当だつて」

「まあ、お前がエレノアとライフセットとかいうあの聖隷が何をしようが構わないのはわかったが、あのお嬢さんはどうだかな?」

「お嬢さん?あ、ああ…」

納得した調子でガイアが見たのはベルベット。腕を組んで冷静な

風を装っているが、人差し指が何度も上下に揺れ、エレノアとライファイセットを見つめる眼差しからは浅はかならぬ敵対心を感じさせる。

「あれは見るからに―」

「妬いてるね。でも仕方ないと思う部分もあるけどね、ベルベットはライファイセットに特別な思いあるみたいだし」

「そりやまた素敵な話だ。業魔と聖隷のラブロマンスなど本でも出せばさぞかし話題になるだろうな」

「絶対誉めてないだろそれ。ラブロマンスってわけではないだろうけど…まあ、意外に似た者同士な二人かもよ。君とベルベット」

「何がまあだ。バカも休み休み言え。俺とあいつのどこが似てるってんだ」

「素直じゃないところとか、口では文句を言いながら世話焼きなところとか、無理して悪ぶってる時があるところとか」

「アホか」

わざわざ指を折ってまで挙げ始めたガイアの言葉を妄言とばかりにジャグラーはあしらう。

すると彼らがチラチラと自分の方を見ていたのにベルベットが気づく。

「何コソコソ話してるのよ」

「いんやあ、別に何でもないさ。なあ？」

「ま、まあ…そうだな」

明らかに怪しんでいるベルベットから意識的に目を反らすガイアを軽く一笑するジャグラー。

そしてコキツと首を回してからゆったりとエレノアに歩み寄る。

「こうして間近で見るとやはり面白い格好だな」

「その言葉バカにしてるんですか？それは確かに私には不釣り合いな格好ですけど」

「誉めてるさ。いいんじゃないか？馬子にも衣装とでも言った感じで」

「やっぱりバカにしません？それ」

上目遣いのままジト目で睨むエレノア。

期待していたそのままの反応が返ってジャグラーはうつすら笑う。

「先も言ったが改めて言わせてもらおうか。巫女を引き受けてくれたこと感謝する。おかげでとりあえず祭りを行えた。」

「え？あ、いえ、この村の方達の力になれたのなら私にとつてもありがたいことです、けど…」

「けど、なんだ？」

「…変わりましたね。ジャグラー、以前の貴方だったらこんな言葉言われるとは想像もつきませんでした」

「揃いも揃って似たようなこと言いやがって…」

「え？」

つい先ほども聞いた覚えがあるだけにジャグラーは苦虫を潰した顔で口走る。だがすぐにそれを打ち消すように新たに言葉を覆い被せる。

「そう言うお前は、変わらないな。良くも悪くも昔のままだ。憎たらしいぐらいに真っ直ぐだ…そんなところが癪に触ったが今となってはまあ、悪い気はしない」

「ジャグラー！」

「つと、こんな話をしている間に時間になったか」

浜辺から来たナターシャの声に應えるようジャグラーはゆったりそちらへ歩み寄っていく。

どこへ行くのかという疑問がエレノアを始めとする多くの者に浮かんだ瞬間、ジャグラーは立ち止まった。

「これからお前達にいいものを見せてやる」

そう言い残したジャグラーの姿はナターシャと肩を並べて浜辺へと遠退いていく。

「いいものって何のことだろう？」

「何のことでしょう」

ライファイセットもエレノアもそしてガイアも怪訝な目でジャグラーとナターシャの動きを追う。

そしてベルベットも表情の変化こそないが関心はあるようで三人

に倣ってこれから始まる何かに意識を向ける。

「おおつ、待ってました!」

「今夜は何を見せてくれるんだい?お二人さん」

先ほどまで別の踊り娘達がいた高台に登った二人を村の男達は囁し立てるように迎える。

送られる声援にジャグラーは梅干しを食べたような渋い顔を僅かに見せつつも、オカリナに唇を当ててる。

~~~~~♪

オカリナが音を奏でる。穢らわしい悪の象徴たる業魔のイメージとは天と地ほどかけ離れた優しい音色が浜辺を中心に村の隅から隅まで広がっていく。

聞く者全ての心を穏やかにさせるメロディーに沿って舞う彼女。その姿はさながら天使のよう、見る者全てを虜にする天使がそこにいた。

「…うわぁ」

踊りなど初めて見たのだろう。ライフィセットの目は夜空に照らす一等星に負けない輝きを帯びていた。

「ジャグラーにこんな特技があつたなんて」

エレノアもまたライフィセットと同様に釘付けになっていた。自分の知るかつての彼ならば絶対にしないであろう行いを好き好んで行う今いる彼に驚きを禁じえない。

そう顔に出ていた。

「いい音楽だな」

「え…?」

どうしてだろう。

他の誰かが言ってもきつと気にも留めない言葉のはずなのに、何故ガイアから出た言葉となるとこんなにも敏感に反応してしまうのだろうか。

その答えがわからずもやもやした感覚を抱えたまま、エレノアは演



奏を眺め続けた。

—まるで楽園だ

業魔が音楽を奏で、人間の娘が音色に合わせて踊り、他の取り巻き達はそれに興奮し沸き立つ。

その光景はある者の心に影響を与えた。

光輝く微笑みを向けてくれた親友を始めとする村人達、時々くだらないだじやれを言うけれどいつも温かい姉、病気で苦しい体なのに自分の身を案じてくれた優しい弟。

そして：時に厳しくも同じような実の家族みたいに接してくれた頼りになる義兄

(あんなことがなければあたしは今もあんなふうには)

自分が失った物の全てがこの村にはある。業魔と人間が共存している世界で唯一の村

失った過去にはもう戻れない。戻りたいなどと思うのは自分が弱い証拠だ。

それがわかっているにもかかわらず、やはり思ってしまう。そして優しい過去を思い出す度、憎しみが拳を握り、奥歯を噛み締めさせる。

(あの時にはもう戻れない。わかっている、だからこそあたしは必ず復讐する。ニコやライファイセット、あたしから何もかもを奪ったあの男に)

穏やかなメロデーはただ一人、ベルベットの心を癒すことはなかった。

### 第32話 忌み名の聖主

「うああっ！」

「おっと、危ないところだったなライフイセット。もう少しで水浸しになるところだったぞ」

「足元には注意して進んだ方がいいわ。岩ばかりで足場が不安定だし、ただでさえあんたは歩幅が小さいんだから、一人で渡れそうになかったら今みたいなことになる前にすぐに言いなさい」

「水に落ちて風邪でもひいたら元も子もないからな。遠慮せず言ってくれ、言ってくればいつでも担いでやるぞ」

「うん、次はこうならないように気を付けるよ。ありがとうロクロウ」  
マーン海礁、色とりどりの珊瑚と暑く照りつける太陽の日射しを受けて白く光る海が広がる絶景の中をベルベット達は横断していた。

岩と岩の間隔が不安定なため、足の置き場に注意を払いながら先へと進む。

何故彼らの姿がここにいるのか

その理由は

「昨日は息抜きできたみたいね」

時を少々逆のぼり、祭りが明けた日の朝。

ハリアの村の宿屋でグリモワールが告げた第一声がそれだった。

「古文書の解読はできたの？」

「いきなり本題に入るわね。ま、いいわ。ええ、この坊やおかげでね」

「グリモワール先生の教え方が上手いからだよ」

師弟関係は良好なようでライフイセットの言葉にグリモワールは機嫌を良くする。

「ほんと可愛げがあっといういい生徒だわ。どこかの騒がしいのとは大違い」

「言われてるぞお前たち」

「はてさて、一体どこの誰のことじゃろうな。皆目検討も付かぬわ」

「……」

片やシラを切り、もう片やは自覚があるのか反省してフードの奥で黙り混む『騒がしいの』。

その態度にグリモワールは辟易しながら言葉を続ける。

「さあて、坊や読んであげて。古文書の数え歌を」

「はい。グリモ先生」

グリモワールの言葉を合図にライフィセットは古文書を朗読する準備をてきぱき始める。

会って僅か一日であるが、良質な師弟関係が両者の間で生まれているようだ。どこかの騒がしい師弟と違って

『八つの首持つ大地の主は 七つの首で穢れを喰って

無明に流るる地の脈伝い いつか目覚めの時を待つ

四つの聖主に裂かれても 四色の光を授かりし戦士が現れようとも

御稜威に通じる人あらば 不磨の喰魔は生えかわる

緋色の月の満ちるを望み

忌み名の聖主心はひとつ 忌み名の聖主体はひとつ』

「カノヌシを表す図と、かぞえ歌。この古文書は、その意味を解読した注釈書なのよ」

古文書の内容を読み上げたライフィセットとそれを補足するグリモワールの言葉の後、一同の間に沈黙の時間が流れる。

「勿体ぶってないで、その注釈とやらを教えてください」

「ごめん、まだかぞえ歌の歌詞しか解読できてないんだ」

「そう…」

「どうやら全部解読するにはまだまだ時間がかかりそうじゃの〜」

「だが聖寮の目的と狙いを知るためには重要なものだ。時間がかかってもやるべきだろう」

「歌詞だけでも得られる情報はあります。とにかく情報を整理しましょう」

エレノアの言葉を皮切りに一同は再び古文書の情報をまとめる。

世界には地上に溢れる穢れを喰らい、地脈の力が集中する『地脈点』

と呼ばれる特別な場所が複数ある。

カノヌシはその地脈点からエネルギーを得て復活しようとしている。

地脈点からエネルギーを送っているのは喰魔と呼ばれる業魔であり、それはカノヌシの首としての役割を担っている。

「この古文書によれば穢れを喰らうカノヌシの首は七つ、ということはその数だけ喰魔が存在しているということになる」

「要は七つ全ての喰魔を探しだしてカノヌシの首を潰す。そうすればカノヌシの力を削いで聖寮の目論みを崩せる。簡単な話よ」

「ならばまず地脈点を探すべきだろう。喰魔がカノヌシに穢れを送るなら地脈点に喰魔がいる可能性は充分考えられる」

「じゃが問題は――」

「その地脈点をどうやって探すかですね」

「何か手がかりでもあればいいんだがな」

世界各地に点在しているという地脈点をむやみやたらに当てずっぽで探すのは無理がある。

せめて何か位置を特定できる情報があれば……そう悩んでいると

「この印がある場所って……」

古文書の地図を眺めていたライファイセットがクワブトを取り出す。

「この虫がいた結界があつたよね？」

「まさかその虫が喰魔だと？いえ、それなら聖寮が捕獲していたことの説明がつく」

「ローグレスにも同じ結界があつたよね」

続いて血翅鯨からギデオンの暗殺を請け負った時に見た巨鳥の業魔。

あれも結界に閉じ込められていた。クワブトと同じように

「あれも喰魔？喰魔はそれぞれ違うってことか」

「おそらくそういうことだろう」

「どうする？ローグレスに戻って確かめるか？」

「まだ無為に時間を潰したくない」

ロクロウの提案をベルベットはキツパリ首を振って却下する。

するとライファイセットを謎の感覚が走った。

「ワァーグ樹林の時と同じ感じがする！」

羅針盤の針が急速に回転し、ある方角でピタリと止まる。

羅針盤の針とライファイセットの指が指した方角にあると思われる施設にマギルウは心当たりがあった。

「この方角あるのは聖主アメノチの聖殿。パラミデス。今は聖寮の施設じゃったか」

「聖殿や神殿は霊的な力が集中する場所に造られると聞いたことがあります。地脈点を意味している可能性は高いのではないのでしょうか？」

「地脈点は世界中に数多くある。喰魔が七体ならほとんどの場所はハズレだ」

「しかし決定的な手がかりもない。可能性があるなら行ってみるべきじゃないか」

「解読を無為に待つ気はないわ。ライファイセットの感覚の正体も気になるし」

エレノアが口にした推論にベルベットは迷っていたが、アイゼンの助言を受けてパラミデス神殿へ向かう決断をした。

「というやり取りがあって彼らはパラミデス神殿を目指しているのだが」

「もし喰魔がクワブトやローグレスの離宮の奴と同じなら戦う確率が高いな」

「そうですね。これまでの傾向からしてないとは言えませんが。戦わずに済めばそれにこしたことはありませんが一戦交える覚悟をしておいた方がいいかもしれません」

「オレとしてはその方が都合がいいんだがな。退屈せずに済むし腕試しにもなる。毎回それでもいいくらいだ」

「どっちにしてもやることは変わらないわ。喰魔を探してカノヌシの力を削ればなんだっていい」

そんな話をしているとロクロウがこんなことを言った。

「なあエレノア、お前に聞きたいことがあつたんだが」

「なんです?」

「村にいたジャグラーって男、元対魔士だったそうだがどんな奴なんだ?」

「彼は蛇心流という流派の使い手でテンナンバーという一等対魔士の中でも指折りの実力者です」

「蛇心流か。聞いたことがある。確か古くから伝わる長太刀の技を継承している東方の異国の流派だ」

「そんな優秀な対魔士が業魔になるなんてね。一体いつ業魔になったのかしら」

「…おそらく二年前です。ロウライネの塔の近くにあつた遺跡の調査には彼も同行していましたから。グランが業魔になつたことを考えるとジャグラーもその時に」

「さつき言つてたわよね。聖殿や神殿は靈的な力が集中する場所に造られるって、あの遺跡も地脈点だつたってことはない?」

「まさかそんな、いえでももしそうなら…アルトリウス様が指示したのは他に理由が?」

「アルトリウスが?」

ベルベットは意外なところで出た人物の名に食い付く。

エレノアの幼なじみが遺跡の調査に向かつた話はこれまでに聞いたり、その後の顛末を實際目にしたがアルトリウスが関与している情報は初耳だつた。

「村で会うより前、業魔になつたジャグラーが言つてました『いずれアルトリウス様の首を頂く』と。聖寮にいた時は彼はそんなことを言う人ではありませんでした。もしかすれば遺跡で起こつた何かがかきつけかけでアルトリウス様を憎むようになったのではと」

「あいつが業魔になつた理由にアルトリウスが絡んでる?カノヌシの復活の他にあいつは何か企んでいるってこと?」

「パラミデスに行けば手がかりくらいは掴めるだろう。アルトリウスの思惑もライフイセットの感覚の正体も」

「そうね、今考えても埒が明かないわ」

新たに浮上した疑惑に悩むエレノアとベルベットであったが、アイゼンの言葉で意識を切り替える。

一方でライフイセツトは考え事を秘めている様子のガイアに声をかける。

「何を考えてるの？」

「ああ：グリモワールの言ってたことがちよつと気になつてな」

「喰魔が生え変わるって言ってたよね。どういう意味かな？」

「生え変わる：か」

グリモワールが気にしていた『生え変わる』という言葉。

それが何を意味するのか、二人が考えていると

「なんじゃなんじゃ、二人揃つてつまらん顔で考え事でもしとるのか？ 悩みがあるなら儂が聞いてやらんこともないぞ」

自信満々に威張るマギルウを前にガイアはライフイセツトと顔を見合せ、しやがみこむと

「マギルウに聞いて、わかるかな？」

「わかつてても聞くだけ時間の無駄だぞ。はぐらかされるか適当に答えるかだからな」

「だけどあの様子だと絶対引き下がらなさそうだよ」

「面倒くさいよな…ほんと」

「聞こえておるぞ〜？」

ボソボソと話していたのだがどうやら全部耳に入ってしまったようにマギルウはプンスカと不満を表す。

「こそこそと話しおつて！ 文句があるならはつきり言えばよかろう！ 何故わざわざ本人に聞こえぬようにする必要があるのじゃ！」

「どうしよう…」

「こそこそ正論なのが腹立つな…」

日頃の行いが悪いとはいえ、こちらの非を大声で叫ぶように突き付けられては言い返すのに抵抗がある。

仲間内でもエレノアを含め良心的な人たちトップ3の二人だ。例え相手がマギルウであつても良心が痛むのだ。

その優しさにつけ込んで魔女は更に畳みかける。

「ひどいわ、初めて会った時はもつと優しくかったのに：燃えるヴォーティガン海門で怯える私に『怖いなら安心して、君が眠れるまで僕が側にいてあげるよ』って言うてくれたあなたはどこへ行ってしまったの?」

「ガイア、そんなこと言うて—」

「言うてないっ：！断じて言うてない!」

わざとらしくか弱い乙女を演じるマギルウ。

ライファイセツトはガイアのストレスをこれ以上蓄積させないために勇気ある行いに出る。

「ねえマギルウ、前から気になってたんだけどその腰に付いてるのは何の本なの?」

「おお、よくぞ聞いてくれた」

ライファイセツトに構ってもらえて気を良くしたマギルウは元の調子に戻り、腰元の本について語る。

「マギルウ叢書全五巻の秘密お主らだけに特別教えてやろう。右の尻側から家計簿と魔法大全集じゃ。魔法大全集は主にあぶらとりがみとして使っておる」

「あぶらとりがみ?」

「乙女のたしなみじゃよ」

「そんな使用用途でいいのか魔法大全集」

初っぱなからマギルウ節漂う説明にガイアは不安しかない。

「左の二冊は押し花用の『重い本』と飛び出しすぎる絵本じゃ」

「飛び出しすぎる絵本!」

「ひと開きで川に橋が架かるほどの飛び出しじゃ。敵に追い込まれた時に壁に向かって使えば瞬時に脱出できる優れものじゃよ。使った後で戻すのが玉にキズでな。ここ何年かは開いておらんがな」

「正面の本は?」

「バウムクーヘンじゃよ。重ねた生地には生き延びるための知恵が焼き印で記されておる。食べてタメになる魅惑のグルメ本じゃ」

（嘘じゃん：絶対嘘じゃん：なんでそう変な方向にだけ口が達者なの。バカなの?）



よくもまあそんなデタラメがすぐさま出てくるものだ、ある意味マギルウの頭の良さに違った意味で感心するガイア。

一方でライファイセットはというと

「食べてタメになる…」

「マジメにリアクションされると罪の意識がわくのう…」

一方のライファイセットはマギルウの話を完全に鵜呑みにしてしまっていた。

疑うことを捨て去ったその純粹な心にさしものマギルウも罪悪感を感じているようだが、それで大人しく引き下がらないのがこの魔女だ。

「そんなに気になるというならどうじゃ？坊よ、見たいか？」

「はあ!？」

「見たい！」

スカートの裾をちらつかせるマギルウの発言にガイアは絶句する。

「バカマギルウ、さすがにやめろ」

「何ゆえお主が止める？儂は坊に言っておるのじゃぞ」

「だからだ。ライファイセットに悪影響だろ」

「海賊がよく言うわ。坊が見たいと言っておるのだからそれで良いではないか。それ、と、もう本当のところ主も見たいんじゃないか？」

「…いや、そんなことない。絶対ない！」

そう否定しながらも視線を別の方向に向けるガイア。

その反応に意地悪くほくそ笑むとマギルウは

「ほれ」

「んなっ!？」

スカートをチラッと捲ってガイアに見せつける。

見えてはいけない布地が微かに露になり、反射的にガイアは首ごと目を横に反らす。

「んなっと言ったか、んなっと言ったかお主。可愛らしいのくウブじゃのくお主。口では憎まれ口を叩くものさういうところがあるから儂はキライになれぬぞ。坊も見たいなら見てもよいぞ…おろ？」

ガイアでこれなのだからライファイセットは一体どんなピュアピュ

アな反応をしてくれるのだろうか、とマギルウが期待の眼差しを向ける。

「その鍵つきの本の装丁は確かメリオダス王朝で流行した形…」

ところが目線の先には熱心な瞳でマギルウのスカートの中、本の外装を見つめるライフイセットがいた。

「マギルウもう一回捲って本とベルトの繋ぎ方を見たいから」

「あっ…はい…」

ある意味純粹過ぎたライフイセットの熱意にマギルウはキョトンとしたまま、彼の言葉に応じるしかなかった。

そんなことがありながらも歩みを進め続けた彼らは海辺に雄大に佇む神殿をその視界に捉えた。

「あれが聖殿。パラミデスか」

「見張りがいないみたいね。聖寮が管理しているって言ってなかった？」

「管理していると言ってもここは人口密集地から遠く離れた聖殿だ。ここに来る者は村の住民ばかりでそのほとんどは信仰のために訪れる程度で業魔などの外敵は近寄らない」

「だから見張りはいらないってわけ？まあ、こっちからすれば好都合だけだ」

「だがその代わり中にはうようよ対魔士がいるぞ」

「わかってる」

百も承知と言うようにアイゼンに応えたベルベツトは真つ先に神殿に入る。

他の面々もそれに続き、ライフイセットも中に行こうとするが目の前でガイアが足を止めた。

「ガイア？」

「…悪い、ちよつと先に行つてくれ」

「え？」

「後ですぐ追い付くから。頼む」

どうしたのだろうか、ライフイセットは答えを求めるように見ると

アイゼンも無言で首を縦に振るだけだった。望む通りにしてくれということだろう。

「わかった。必ず来てね」

二人の意を汲み取ったライフイセツトは言葉通りに従い、アイゼンもガイアと視線を合わせた後神殿へと姿を消す。

一人外に残ったガイアは神殿を離れ砂浜に移動する。

その彼の前に岩の陰から男が現れた。ガイアはその男に覚えがあった。

イズルトで青い巨人となって怪獣と戦った男だ。

### 第33話 世界の罪

「よく気付いたな」

イズルトで青い巨人に変身した男は岩陰から姿を現して開口一番にそう切り出した。

「ずっと前から後尾けてたよね。何のために？」

「見定めるためさ。君を」

「僕を…？」

どういう意味か、ガイアが二の句を告げようとする前に男からの言葉が返ってくる。

「君が与えられた力に値する者か、俺の仲間となるべき存在かこの目で確かめる。そのためさ…しかし正直言つて失望したよ。何故奴らに肩入れする。何故人間や業魔などという生きているだけで世界を蝕む奴らと共にいる」

「業魔が、人間が世界を蝕む？…何を言ってるんだ」

言ってることの意味が理解できなかつた。

業魔が世界を苦しめるといふならまだわかる。

しかし人間にまでそこまで言うとは一体何故なのか、ガイアが聞いた。ただそうとするより早く男が口を開いた。

「そうか、君は何も知らないのか…なるほど納得がいったよ。どうやらミズノエノリユウには君に全てを説明するだけの余裕はなかつたようだな」

一人納得したように言うと、男は両手をポケットにしまいながらゆったり距離を縮め、ガイアの目前で足を止める。

「話はまたの機会にしよう。あそこに行つて確かめるといい。今君が最も知るべき真実の一端がある」

「君はあの中に何かあるのか知っているのか？」

尋ねるガイア。すると男はフツと彼の言葉を嘲笑うように口角を上げる。

「世界の罪」

「罪？」

「業魔そして人間が自分たちの過ちに気付かずただ知らずのうのと生きてきた。その結果の果て、それを体現したものがあそこにある。じつくりその目で見てくるといい。その時君は気付くはずだ。人間も業魔もこの世界に不要な存在だということが」

「…君は」

男の言葉を素直に聞くべきかガイアは僅かに迷ったが、ここできつとしていても埒が明かないと身体を翻して聖殿に向かう。

「一つ言い忘れていた。俺の名はアグル。次に会う時を楽しみにしているよガイア。きつと俺の考えに理解を示してくれるだろうからな」

男―アグルの言葉にピタリと足を止め、振り返る。

不敵に笑いこちらを見るアグルにガイアは得体の知れない寒気を感じつつ、聖殿に踏みいった。

「せあつー！」

「うわあああー！」

聖殿パラミデス内部ではベルベツトラが警備の対魔士と遭遇し、戦いになっていた。

一等対魔士の中にはいたがてんで足留めにもならず、あつという間に掃討されてしまった。

「ふう、これで全部か」

ロクロウが小太刀を納め、周りを見渡す。

あちらこちらに対魔士や使役聖隷が倒れ伏し、音も神殿内を流れる水の音だけと戦闘中の騒ぎから一転、静かなものになっている。

「妙だな。警備の数が少なすぎやしないか？」

「同感だな。いくら辺境の地にある施設とはいえ喰魔を守護する警備にしては不足しているように思える」

村人から接収したといえども紛いなりにも聖寮の施設であり、喰魔を守護しているのならもつと対魔士の数が多くてもいいはずなのだが実際ロクロウたちが刃を交えたのは十人程度。

どうにもおかしいとロクロウだけでなくアイゼンも思っていた。

一方でライフィセットは彼らとは別の疑問を抱えていた。

「また、戦うのかな。クワブトの時みたいに」

「ないとは言い切れませんね。ここの喰魔はクワブト程手強くないと助かるのですが」

ライフィセットとエレノアはクワブトとの戦いを振り返る。

最初に戦った喰魔であるクワブトは全員でかかってやっと鎮圧できた強敵だ。

そのクワブトと同種の敵となれば強さも同等かそれ以上の可能性は大いに考えられる。

「喰魔から力を得るってことはカノヌシはやっぱりとてつもない強さなんだよね。僕たちで勝てるのかな」

「大丈夫ですよ。皆で力を合わせればきつと何とかできます」

「いつになくやる気満々じゃのうお主ら。しかし果たして皆で力を合わせる事ができるかの？ここにおけるのは所詮利害の一致だけで一緒に行動しておる程度の協調性しか持ち合わせておらん者たち。仲間なんて言葉に不釣り合いな集団じゃぞ。それなのに」

「それに？」

「今の時点で一人欠けておるのに皆で力を合わせるのは無理だと思うのじゃが」

「一人欠けて？何を言って、あれ？」

マギルウに指摘されてエレノアはそこでようやくあることに気付く。

「ガイアがいません。さっきまでいたはずなのに？」

「ああ、そういえば。あいつどこに行ったんだ？」

エレノアもロクロウも目を配るがガイアの姿はどこにも見当たらない。

ライフィセットは口にすべきか迷ってアイゼンを見やる。アイゼンは唇を重く閉ざして固い表情を保っている。

ガイアに関しては何も言うなということだろう。

「なんじや今更気付いたんかお主ら。さつきからずつとおらんかったじやろうに」

「気付かなかったな。戦ってる時に何か足りないと思っていたんだが」

「どこに行つたにせよ子どもじやないんだしそのうちあつちから来るわよ。そんなことより喰魔を――」

「あああああ――」

ベルベットの言葉を打ち消す形で悲鳴が奥から上がった。

「今の悲鳴は」

「奥からじやな」

視線を奥に送るなり、皆それぞれのタイミングで走り出す。

そうして広い円状の空間に出た彼らを待ち受けていたのは地に這いつくばる対魔士や聖隷の亡骸と……それらの中心に立つ狼の業魔だ。

「業魔！……こんなところにまで！」

「そうか、ここまで対魔士の数が少なかったのはこいつのせいか」

予期せぬ遭遇に驚きを露にするエレノアとは対照的にロクロウは落ち着いた様子で小太刀を握り直す。

他の面々も武器を構え交戦準備に入った時、マギルウが業魔のある一点に目を引く。

「あの胸の紋章、あれは代々当代の巫女が先代から使命と共に受け継がれる代物のはず。それを身に付けているということは――」

「そんな……あの業魔は行方知らずだった巫女！」

数日前にハリア村から姿を消した巫女。そしてその巫女の証たるアメノチの紋章を目前の業魔が持っている。

それが意味することがわからないエレノアではなかった。認めたくない事実であっても

「こいつが喰魔つてわけじやなさそうね」

「早々に片付けるぞ」

「待ってください！……この業魔は倒すというのですか！彼女は――」

「あれは業魔よ」

「っ、ですが！」

戦う姿勢を見せないエレノアの心に非情なまでに正しいベルベットの言葉が突き刺さる。

「ガァー！」

「来るぞー！」

こちらの事情などお構い無しに狼業魔が攻撃に打って出る。床を蹴り、人間を卓越した凄まじい速度で一直線にベルベツトラに迫り、ギリリと鋭く光る爪を振りかざす。

これが並みの相手ならば反応が追いつかずこの一撃で首筋の血管を抉り取られているだろうが、業魔はこちらにもいる。

「業魔になっただけあつてなかなかの速さだな。だが、甘い！」

ロクロウは人の枠を越えた反射神経を發揮し前に出て、爪を二刀小太刀で防ぐ。

そして動きが止まった隙を突いて、爪を小太刀で受け止めたままもう一方の小太刀を胸元目掛けて振るいにかかる。

尖った切っ先が迫るのを視線で感じた狼業魔―マヒナは後ろに跳んで距離を取るも、小太刀は体表を掠め胸元の毛皮が赤く染まる。

「ロクロウ！」

「悪いなエレノア。気持ちはわかるが今回ばかりはお前の願いは聞いてやるのは無理そうだ。残念だがあれはもう業魔だ…いくらお前が戦いを拒んでもあつちはオレ達を仕留める気マンマンだ」

「戦わないなら下がってなさい。邪魔になるだけよ」

ベルベツトは手甲から剣を抜きロクロウと並び立つ。

合図もなく二人は同時に前進し、マヒナと切り結ぶ。

躊躇なく剣を向ける二人を見てエレノアは自らが握る槍に目を落とす。

「業魔となつてしまつたらもう戦うしかない…でもあの人は」

「…っ！」

エレノアの様子を気遣うライフィセットの胸に痛みが走り、顔をしかめる。

(またこの痛みだ。前にもあつたけどなんなんだろう)

針に刺されたような小さく、電撃のように一瞬の僅かな痛み。



その原因が分からず戸惑うライファイセットと迷うエレノア。  
そんな二人をアイゼンは後ろで見つめる。

「炎牙昇竜脚！」

猛々しい炎を纏う蹴りを繰り出すベルベット。

勢いよく燃え盛る業火の一蹴りを狼の俊敏性を活かしてなんとかかわすマヒナだが、逃れた先にはロクロウが振るった刃が待っていた。

「グウウー！」

咄嗟に腕を出したものの下方から切り上げられたせいで左腕に縦一文字の切り傷が刻まれ、そこから真つ赤な血潮が吹き出す。

血が滴り落ち使い物にならなくなった左腕をブラリと下ろしてもなお、マヒナの瞳に宿る闘志は消えない。

二度ベルベットへ真つ正面から突っ込む。

「そう何度もやったってー！」

結果は同じ、それはベルベットだけでなくマヒナもわかっていた。理性か本能かのどちらか、あるいはその両方で

だからマヒナはベルベットの剣先が届くギリギリまで間合いを詰め、そこで高く跳躍した。

「何?！」

マヒナの胴体を裂くはずだったベルベットの剣は虚しく虚空を切り、そんな彼女と加えてロクロウの頭上を越えてマヒナは標的を変える。

そう、二人の後ろにいたライファイセットに

「しまった！」

戦う意識をしていなかったためにライファイセットは慌てて術の詠唱を始めるが、恐らく間に合わない。

「もう元には戻れないのなら、せめてこれで終わりに……！」

それを見抜いたエレノアはライファイセットの前に出て上へ飛ぶ。

爪と槍。リーチの差もあってマヒナの爪はエレノアに届かず、返り討ちに合う。

「ガッ！アア……！」

胸元に刺さった槍を引き抜いたエレノアが着地。

直後マヒナも力を失ったように背面から地べたへ落ちる。

指先すらもピクリとも動かず、完全に沈黙していた。

「これでいいんです…これで、こうするしかもう」

「エレノア…」

そう、これでいいのだ。命を守るために業魔を殺す。

対魔士としてずっとやってきたこと。だから今更躊躇いも後悔もない…ないはずなのに

ないはずなのに胸が痛い。今にも引き裂かれそうな程自分の心が苦しみ、心の中がぐちゃぐちゃに掻き乱されているような感覚が離れない。

そんなエレノアを…

頬に付いた返り血に気付かず倒れるマヒナをじっと見つめるエレノアの姿を、ライファイセツトは見ていることしかできなかった。

大丈夫、などと言葉をかけたところで今の彼女にはなんの気休めにもならないとわかっていたから。

マヒナとの戦いを終えて聖殿を進むベルベットたち。

奥まで足を運んだ彼女たちを待っていたのは巨木。

しかし巨木とはいってもその見かけは実際の木とは大きくかけ離れていた。

目と口があり、口以上中に子ども程の小さな緑色の肉体があるまるでお伽噺に出てくるような大樹だった。

「カアアアア」

「普通の業魔とは感じが違うな。こいつが喰魔か」

「さつきより感覚が強くなった。感じた場所はここみたい」

「ってことはこいつが喰魔ってことでいいのね」

ロクロウの呟きを裏付けるライファイセツトの言葉を耳に入れながらベルベットはブレードを抜き近付く。

一歩一歩とゆっくりと距離を縮めるベルベットへ喰魔はその見た目からは想像できない跳躍力で飛びかかるが、張られていた結界に

よって弾かれる。

「結界：間違いない」

これと同種の結界がローグレス離宮の地下とワアーグ樹林にあった。

そして結界の中には巨鳥と巨虫の業魔が閉じ込められており、巨虫の業魔―クワブトのいる結界の近くにはそれを守るように聖寮の対魔士がいた。

ベルベツトたちがいる今の状況はまさにそれらと似通っていた。

目の前の業魔が喰魔だと確かな実感を得た。

「どうする？ 仕留める気か」

「生き死になんてどうでもいい。アルトリウスの目論見を壊せるならなんだって」

そうアイゼンに相づちを打つとベルベツトはいち早く結界内に突入。鞭のようにしならせた根を避け、喰魔の肉体に斬りかかる。

「相変わらず目的がはっきりしたら一目散に突っ込んでいくのう。勢いがよいのは結構じゃがもう少し考えてから事を起こさんか」

「考えてる風で何も考えてない奴よりかはまだまともだと思っぞ」

猪突猛進気味なベルベツトにやや呆れを露にするマギルウと暗にお前が言うなと言葉をぶつけたロクロウも喰魔への攻撃を始める。

小太刀と炎の竜巻が喰魔に直撃し、反撃のために振り上げた根も風を纏ったベルベツトの飛び蹴り―飛天翔駆に弾き落とされてしまう。

「霊槍・空旋！」

「ヒートレッド！」

「カアアアア」

休む間もなく竜巻に動きを妨げられ、その暴風に乗って喰魔の身体表面を焼き尽くす炎。

そこへ更に地面から突き出た土の槍が刺さり、喰魔は悲鳴を上げる。

術の詠唱をしながら一步離れた場所で戦闘の様子を見守っていたアイゼンは違和感を覚えた。

「簡単すぎる…」

いくらこちらか数で勝っているとはいえ、喰魔がこうも歯が立たないものだろうか。

同じ喰魔のクワブトは全員でかかってやっと鎮圧に成功した程の強敵だったのに。

(同じ喰魔でも個体によってこうまで力に差があるのか。それともまだ実力を出していないだけか)

アイゼンが疑問を浮かべている内にも攻撃は続き、喰魔はもう自らが攻撃に移れぬ程に疲弊していた。

「こいつは小さくならないみたいだな」

クワブトの時のことを思い出すロクロウの横でベルベツトは業魔手を解き放つ。

喰い殺すための準備に入ったのだ。

しかしそこへ背後から来た何か彼女らの頭上を飛び越え、喰魔とベルベツトたちの間に介入した。

「さっきの業魔！」

それは狼の業魔マヒナだった。

エレノアに穿たれた胸から血を垂らしているにも関わらず、マヒナは生きていたのだ。

業魔と化したその眼差しから執念のようなものを感じエレノアの心には哀れみが生まれた。

「今度こそ、終わりにします」

槍に力を込め切っ先をマヒナに向けるエレノア。

しかしマヒナが見せた行動はエレノアの予想を裏切った。

ゆらゆらと左右によるめきながらエレノアに背を向け、マヒナは喰魔に歩み寄る。

「何を…？」

マヒナの行動の意図が読み取れずエレノアは困惑する。

エレノアだけでなくその困惑はベルベツトやライファイセットにも伝染していた。

マヒナは喰魔の体に抱き付くとそのマヒナの首筋に喰魔がかぶり付き、そのまま咀嚼していった。

「ゴメンネエ、モツ、アナ」

### 第34話 零れ落ちた幸せ

最もいとおしいと思った。

世界の誰よりも美しく、何よりも清らかで、どんな物よりも愛せる。渇き飢えた砂漠の迷い人に天から水の恵みをもたらし、心に潤いを、救いをくれた。

そんな君を俺は好きだ。

最も欲しいと思った。

何の躊躇いもなく接し、笑顔を振り撒き、その笑顔で恋を知らず、恋を嘲笑うバケモノの剣士を男にした。

まるで凍てついた重たい闇の中に舞い降り、照らす一筋の光のような人。

だから君を俺は物にしたい。

何気ない仕草も、花のような横顔も、君を君たらしめる全てに心を奪われた。

例えこの恋が実らずとも君を愛した過去は変わらない。

君を愛した心を誇りに思い、未来永劫君への愛は不変となるだろう。

そしてなによりも君が大切だった。何を犠牲にしても我が身が滅んでも守りたいと思っていた。

そう、君だけを守りたいと…

—ムジャ、グチャア

静けさに満ちた空間に生々しい音だけが反響する。

音を発生させている存在は食事に夢中になっていた。

場にいる誰もがその行為を止めることができず、ただ茫然と眺めていた。

そして幾度となく繰り返された音が止んだ時には餌マヒナの姿は黒い瘡

気となり、食事を終えた喰魔もまた姿を変えた。

「お母さん、お母さん」

「喰魔が女の子になった!?!」

体が緑と茶色に変色し、奇妙な形の触覚が生えているが泣きじやくるその姿は紛れもなく人間の少女のそれだった。

「まさかモアナ?」

マヒナと共に村から行方不明になっていた少女が喰魔になっている。

認めたくない事実だが母親が業魔になってこの場にいたのならその娘が同じ場所で喰魔になっていても不思議ではない。

「どこにいるのお母さん」

母を探すモアナをエレノアは直視できずにいた。

「これは…」

「ガイア」

そこにガイアがやって来た。

ガイアは反応したライフイセットに目ですまないと軽く伝えようと、エレノアからモアナへ、モアナからエレノアとその手の槍に目を動かす。

ここに来る途中、対魔士や聖隷の死体と円形の広場で赤黒い血の跡を見て来た。

そして母を求め号泣する少女と苦しげなエレノアの表情とベルベットらの反応。

まさかと思うが

「なんでお母さんはいなくなったの?弱かったから?ごめんなさい:ごめんなさい:モアナ、頑張つて強くなったから:聖寮の人が強くしてくれたんだよ:だから帰つて来てよお母さん」

「聖寮が強くした?」

「喰魔にした、ということか?つくづく生贄が好きで連中じやて」

モアナの言葉からマギルウは聖寮がモアナを喰魔にしたのだと推察する。

恐らくその推察は正しいとベルベットは思った。

理のためなら義理の弟の命も平然と奪うような男がトップにいるのだ。

赤の他人の娘を計画の犠牲にしたところで何ら不思議ではないし、その事に特別動揺はない。

「救えなかった我が子の腹を満たすために死にゆく自分を差し出したのか」

「私が…私のせいでは…」

(そうか…やっぱりエレノアが)

当たって欲しくなかった予想が現実と知り、ガイアは衝撃を受ける。

そんな彼を余所に喰魔の処遇についてロクロウとベルベットは話し合う。

「どうする？連れてくか？」

「この状態じゃ足手まといになるだけよ」

「喰魔に手を出すことは許さない」

会話に介入する声が後方から聞こえ振り返る。

そこにいたのはオスカー。剣を鞘から引き抜いており一戦交える用意は既に完了していた。

「オスカー、こんな時に…！」

思いもよらぬ参上にガイアは銃へ手をかけ臨戦に備える。

「オスカー！聖寮は何をしているの！お願い教えて！」

「エレノア、君は知らなくていい」

「よくない！私が母親を倒したせいでこの子は」

その言葉を聞いてオスカーはエレノアの後方、泣きじやくる喰魔の少女へ目をやる。

「例の業魔を喰らったのか。だが君が気に病むことはない。全ては世界の痛みを止めるために必要な犠牲なんだ」

「業魔じゃない！あの人は母親だった！この子のたった一人の…お母さん、だった」

目を潤わせ、声を震わせ、絞り出すようにエレノアは吐露する。

彼女がどんな思いでその言葉を声に出したか、それはガイアがこの



場にいる誰よりも人一倍理解していた。

オスカーもエレノアの涙に思うところがあるのか苦い顔をして目を反らす、一切妥協せず真っ向から言い返す。

「だとしても強き翼を持つ者は―があッ!」

否定しようと放った言葉は最後まで続かなかった。

急速に詰め寄ったベルベットが蹴りでオスカーを飛ばしたのだ。

その一撃はオスカーを壁に打ち付け、衝撃によつて彼の意識を沈めた。

「女の涙には気を付けることね」

気絶したオスカーにベルベットはそう言うと、次に業魔手を解放しモアナに向かう。

「何をするつもりだ。ベルベットよせ!」

「待って! 貴方には優しさがありませんか!?!」

「そんな議論をするつもりはない」

「目的はカノヲシを弱めることでしょうか? 繋がりを断れば殺さなくても」

モアナを殺めるのではないかと危惧したガイアとエレノアが制止の呼びかけをする、その歩みは止まらない。

ついにモアナを足元に見下ろすまで近付いたベルベットは業魔手を振り上げる。

しかし彼女の手が触れたのはモアナの体ではなく、喰魔を閉じ込める結果。

そのエネルギーを喰らうことで結界を消滅させる。

「情にほだされたか。女の涙は実に危険じゃのう」

「グリモワールの言葉が気になったのよ。殺すのは後でもできる」

「連れてくならさっさと引き上げよう。敵の拠点に長居は無用だ」

「ベルベット…」

モアナの殺害を実行に移さなかったベルベットにガイアはホッと息を吐く。

ライファイセットとエレノアはモアナへと駆け寄る。

「僕はライファイセット、モアナ一緒にここから出よう?」

「お母さんは？一緒にやないと寂しいよ」

「寂しくないですよ。大丈夫、離れていてもお母さんはずっとあなたを見守っていますから」

「行こう、モアナ」

差し伸べられたライファイセツトの手をモアナは自らの意志で取った。

その頃、ハリアの村。祭りの後片付けに追われる者が多い中、浜辺でジャグラーとナターシャはなかむつまじく語り合う。

「昨日は上手くいきましたね。どうでした？初めてのこの村の祭りは？」

「そうだな。騒がしいのは好みじゃないが、たまにはこういうのも悪くない」

「エレノアさんたちのおかげです。お礼を言おうと思っていたのですが、姿が見えなくて」

「朝方出て行ったぞ。どこへ行ったか知らんが…宿には今夜の宿代も払っていたようだから礼を言う機会はあるだろう」

「そうですね。皆さんが戻られたらたつぷりとお礼をしなければ、料理でも振る舞おうかしら」

「奴らには勿体ないご馳走だろうがな。まあ、俺の分が残っていれば問題ない」

「ふふ、ちゃんと残しておきますよ」

そうにこやかに笑うナターシャ。そんな彼女へジャグラーは若干の抵抗を隠して、こう切り出す。

「ナターシャ、お前に言いたいことがある。その…」

はい？と怪訝な顔でナターシャは改まった顔をする見つめる。

純粹無垢な眼差しと表情にジャグラーの胸はついで味わったことのない高鳴りを起こす。

「俺は…これからもずっと」

一緒にいたい。

恥じらいを捨てて、人間としての感情でそう告げようとした時、異変が起きた。

「ううっ!!」

「ナターシャ?」

ナターシャは頭を抑えて膝を付く。

「頭が痛い…寒い…」

「どうした? しつかりしろ、おい! 待ってるすぐに医者を一ツ!」

ナターシャに寄り添いその体を支えるジャグラーは助けを呼ぶために目を配るが

「ああッ、胸がア、苦しい…」

「ウウ…」

胸を抑えて蹲る者、虚ろな目で砂浜を徘徊する者。

彼以外の村人が皆一様に謎の症状に苦しみ、体から黒い瘴気を放出している。

「どうなっている…まさか!」

ジャグラーは過去にこの現象に何度か相對したことがある。だからすぐに答えに気付いた。

だが認めたくないという思いが頭の中を埋めつくしている。認めてしまえば村の人々は、ナターシャは—

「ジャグツ、あああああ!!」

「ナターシャアアア!」

「っ—」

パラミデス聖殿を出て、ハリア村へと戻るためマーン海礁を渡るその道中、ある二人の体にゾワツと不気味な感覚が走った。

「なんだ…」

「ガイアも感じた? 今の、良くない感じだったよね」

「かなり嫌な感覚だ。しかもハリア村の方角から…急ぐぞ」

ガイアとライフィセットは視線を交わすなり急に走り出す。

「おいどうしたんだ？お前たち！」

「後を追いかけるぞ」

突然の二人の行動に呆気に取られたものの、他の面々も姿を見失わないよう追いかける。

「これって！」

「なんなんだ、どうしてこんなことになってるんだ！」

ハリア村に着いたライフィセットとガイアは目前に広がる光景の前に立ち尽くした。

すっかり黒ずんだ空の下、狼の業魔が我が物顔で無人の村を蔓延っている。

早朝に出た村と同じ村とは思えない有り様だった。

「業魔が大量に…」

「どうなってるんだこりゃあ。村の外から入り込んで来たのか？」

少し遅れて到着したベルベット達もこの様子を目の当たりにして驚きを隠せないでいた。

「ウウ、ああアアア!!」

そして彼女達の前で村人が黒い瘴気を帯び、業魔と化す。

「まさか業魔病！」

「穢れだ」

「穢れのせいよ。穢れが溢れて限界が来たのよ皆…彼以外皆ね」

「ぐわああつ!!」

聞こえてきた叫びにエレノアが振り向くと、その先には家を支える柱に衝突するジャグラの姿があった。

受け身も取らずにいたためか、苦しく息を詰まらせながらも彼は自らを殴り飛ばした業魔に呼びかける。

「戻ってくれ…お前まで俺と同じになる必要はない！自分を見失うな、自分自身を取り戻せ！」

ジャグラは鞘から刀を抜かず一切反撃に転じない。

狼業魔の意識を戻すため懸命に言葉を尽くすが、狼業魔はピクリとも反応しない。

「ガアッ！」

「頼む、戻ってくれっ……！」

それどころか近寄るなり彼の首を握り締めると、一点の迷いもなく水辺に投げ飛ばす。

「あそこまで必死になるとは……あの業魔はあいつの」

「ジャグララー……」

「まだ遠くへは行っていないはずだ！絶対に探し出せ！」

サイコメザードの時のエレノアの二の舞を踏ませてなるものかと助けに入ろうとしたガイアの耳に、パラミデス聖殿の方角から声が飛んできた。

オスカーが目を覚まし対魔士を引き連れて戻って来たのだ。

「ひとまず船へ戻るぞ、対魔士の足止めは業魔が引き受けてくれるはずだ」

元村人の業魔たちに追っ手の対魔士を押し付ける選択をし、アイゼンたちはイズルト方面に走る。

ナターシャ業魔を正気に戻そうと奮闘するジャグララーを見て、ごめんなさいと心からの謝罪を呟いて事態を把握していないモアナの手を取り駆け出す。

業魔たちはこちらに気付いていない。

このまま真っ直ぐに走ればここから離脱できる。

しかしイズルト側の門を目前にして、ある者の動きに変化があった。

「ガイア!？」

走っていたガイアは何を思ったか足を止め身を翻すと同時に銃を抜く。緑の弾丸をパラミデス側の門に撃ち込む。緑色の光が門を包む。

防壁としてではなく結界の代わりにバリアを利用して、対魔士の侵入を阻む備えを終えると、業魔の群れへと突っ込んでしまう。

「どうしようガイアが！」

「あたしが連れ戻す。あんたはアイゼンたちと先に行つてなさい！」  
状況が状況なものもあつてガイアへ苛立ちを込めた舌打ちを放つたベルベットはライフイセットたちを先に行かせ、ガイアを連れ戻そうとする。

「ヴガア!!」

襲いかかる元村人の業魔の群れにガイアは格闘でいなすなりステップなりで回避を行うも、反撃の手を加えることはしなかつた。ただジャグラの元へ向かうので必死だつた。

いや少し違う。

確かにその思いからこの場に残つたが、業魔に攻撃しない一番の理由は抵抗。さつきまで人間だつたものに銃口を向けることに対する抵抗だつた。

「どいてくれー!」

今まで躊躇いなく戦えていたはずの自分はどこへ行つてしまったのか。

自身でも戸惑いを覚えながらも、業魔たちに意志が届くように声を張る。

しかし躊躇うガイアの事情など当然お構い無しに業魔は攻め立てる。

掴みかかろうとする一体の腕を払い、もう一体に蹴りを入れている隙に仲間たちの頭上を飛び越えた別の業魔が覆い被さる。

「ぐうっ!」

飛び付かれた勢いのまま業魔と一緒に浜辺に転がるガイアはしがみつかれた業魔を巴投げの要領で蹴り飛ばす。

浮かび上がった業魔は並々ならぬ身体能力を發揮して背面からではなく、脚から砂地に降り立ち、起き上がったばかりのガイアめがけて突進する。

次の瞬間、その業魔の背中から血潮が舞つた。

ベルベットだ。

「やっさと離れるわよ」

「俺のことはいい。先に行ってくれ」

「あいつを助けるつもりなら諦めなさい。ああなったらもう救いはない」

「いや、まだだ。まだできることはあるはずだ」

「現実を見なさい！今まで散々見てきたでしょう。業魔に相手にまともな会話がーっ！」

ベルベットとガイアの口論を割くように業魔が二人の間に飛び込む。

こんな時に、とガイアと業魔の両方に苛立ちを募らせベルベットは業魔に刃を向けて相手をする。

ガイアもまたベルベットを巻き込んでしまった自分に憤りを胸に秘め、業魔を退けていた。

「ナターシャ……くそっ、体が……」

いくら業魔といえど無抵抗のまま、されるがままにダメージを受け続けた体は思うように動かせなくなってきた。

太刀を握る握力は弱まり、立ち上がるうとしても腕に力が入らない。

波打ち際に打ち捨てられた魚のように這いつくばるジャグラの視線の先にはナターシャ、いやナターシャだった業魔が殺意を向けて一歩一歩砂に足跡を刻んで近づいてくる。

「ハッ、結局こういう方向に回るのがかよ。だから夢なんてみるもんじゃないなかつたんだ……だが心地いい夢だった。最後の最後で幸福な一時を過ごせた。でもって……」

ナターシャはジャグラの首根っこを掴んで起こす。

ジャグラにはその腕を掴む気力もない。

「その幸せな時間を惚れた女の手で締めくくってもらえるとは最高だな」

ジャグラの首を締める力が強まり、微かに苦悶の声を漏らす。力が加わる毎に太刀を握る握力が弱まり、手放しかけている。

ーこれでもいい

これから殺されるというのに不思議と心は晴れやかだった。

首の骨を折られるか、腕で体を貫かれるかナターシャがどんな方法を選ぶのか心待ちにしていた。

―ズシャ!!

肉を貫く感触がジャグラーに伝わった。

だが痛みはいつまで経ってもやって来ない。

代わりに首を締める腕がほどかれ、何かが胸にもたれかかる感触がやって来た。

「ガッ…」

手にしていた太刀の刀身がナターシャ業魔を貫通していた。プルプルと震える体がジャグラーの胸に頭を預けるような姿勢だった。

その光景にジャグラーは張り裂けんばかりに目を見開く。

「俺かやったのか?...何故だ、こんなはずじゃ...俺はお前に...」

太刀から放し、業魔が崩れ落ちる。痙攣が止まり、完全に動かない。ジャグラーは自分の手を見る。

赤く染まった手、ナターシャ業魔の血がたっぷり染み付いた手だ。それで初めて彼は自覚した。ナターシャを殺してしまったのだと愛する人に殺されることを望む意志より生きたいと願う本能が上回ったのだと

「フフッ、フフハハハ」

笑いが溢れる。何かが壊れたかのように不規則なりズムで、涙を流している表情からは相反した喜びが声に込もっていた。

「アアアアアアアアアアア!!」

絶望の雄叫びを上げた業魔を紫の霧が包み込む。

その不可解な現象と戦いの喧騒さえ掻き消す叫びに理性の有無を問わず、場に居合わせた者たちが全て動きを止めてそちらを振り向く。

霧が消失し、砂を踏む音さえ潰えた浜辺にはさつきとは別の姿があった。

鬼に似た形相の面、騎士というよりかは甲殻類を思わせる鎧を纏ったような体。

同じ異形でもその外見からはベルベットやロウロウのような人間



らしさも、ハリアの村人が変異した業魔のような生物らしさも微塵も感じられない。

―死神

―悪魔

―魔人

その姿を形容するとしたらそういった言葉しかない。

「フハハハハハハ」

### 第35話 奪った者と奪われた者

「業魔から別の業魔になった？」

霧が薄れ姿を露にした魔人にベルベットは困惑する。

人から業魔になった現象には見慣れているが、業魔からまた異なる姿になるなどお目にかかったことのない現象だ。

魔人―ジャグラーはナターシャ業魔の亡骸から太刀を引き抜き、刀身にへばりついた血を自らの手のひらで撫で落とす。

赤く染まった掌に目を落とし無言のまま佇むジャグラー。

見つめていた手を下げ、自身の周りの業魔に目を合わせる

「あああつ!!」

業魔たちに斬りかかる。

心臓に当たる部位を貫き、引き抜いた勢いを殺さず、絶命の瞬間を見届けもせず、次の業魔に狙いを定めて刃を下ろす。

狂ったような叫びを上げている者とは思えない、無駄なく適切に急所を切り裂く。

「ジャグラー…」

次々とかつて共に過ごした仲間たちを切り捨てていく友。

その惨状をガイアは立ち尽くして眺めるしかできなかった。

「今の内に離れるわよ」

「駄目だ。まだ間に合うジャグラーを―ぐうっ!」

ジャグラーの元へ駆け寄ろうと身を乗り出したガイアの腕をベルベットは掴み、力任せにグルリと振り向かせると、腹に自らの膝を食い込ませる。

「ベルベット―」

ガクリと項垂れ、意識を飛ばすガイア。膝から崩れ落ちるその体をベルベットは持ち上げ、肩に担ぎ上げた。

このままハリアを離脱しようと足を踏み出した時、後ろを振り返る。

激情の赴くまま業魔<sup>村人</sup>を切り捨ててる業魔<sup>ジャグラー</sup>の姿が瞳に映る。

その姿がどことなく以前にも同じようなことをやってしまった誰かと被る。

ベルベツトは目を反らし、ハリア村を去った。

「業魔が全滅している?」

それから少ししてベルベツトを追跡してたオスカーが部下を引き連れて、ハリア村内へ踏み込んだ。

彼の視界が捉えたのは数多くの業魔たち、それらが全て赤黒くどろりとした液体を散らして息耐えている光景。

「村の住民が一人もいませんね。これは一体?」

「彼らが業魔となったのだらう。しかし誰がこの業魔を?あの女業魔か」

業魔の亡骸を見下ろしながら村を進んでいくと中心にあたる位置で太刀を下げて、立ち尽くしている業魔を捉えた。

その業魔は気配に気付くとオスカーたちの方を振り向く。

「よう久しぶりだなあ。オスカー」

「何者だ?何故僕を知っている」

「おいおい、悲しいなあ。昔散々手合わせした仲だらう。まあ仲が良いいとは言い難いような付き合いだったか」

「手合わせだと?…まさか、ジャグラー?」

「正解。忘れてなかったようで嬉しいよ」

「業魔になってしまったのか…」

オスカーは愕然とした。

死んだものと思われていた仲間が業魔となった。その事実が生存を祝う喜びを押し潰した。

「君がやったのか」

「ああ」

「理由はなんだ?」

「…気に食わなかった。それだけだ」

「それだけの理由で殺したというのか」

「何故怒る必要がある？よかつただろ、手間が省けて」

静かな怒りを心の内に留めオスカーは剣を抜刀し、構える。

「ほおやる気か？」

「生きてくれていたことは嬉しい。だがそのような姿になっては倒すしかない。対魔士として業魔を理に反する者を見逃すわけにはいかない」

「昔と変わらないな。悪い癖だぞオスカー、できもしないことを軽々しく口にするものじゃあない」

「やってみなければわからない！」

交錯する二つの刃。鳴り響く金属音。

砂を蹴って飛び込んだオスカーがジャグラーと肉薄する。

一振り、二振りと剣を振り回すオスカーだがジャグラーは悠々とした態度で刀身を体スレスレでかわす。

剣で受けたのは最初の一撃だけで、それ以外は手元に引き寄せようともしない。

―遊ばれている

必死さの欠片もなく、積極的に攻勢に出ようとしなないジャグラーの所作からオスカーは直感した。

「何故しかけてこない！遊んでいるのか！」

「言っただろう。お前と俺では勝負にならない、ならせめてゆっくり楽しもうと思つてな。お前でも気晴らしくらいにはなるだろう」

「ふざけるのも大概にしろー！」

その一言にオスカーの沸点は一気に上がった。

感情と力に任せて上段で構え、振り降ろす。

ジャグラーは涼しい顔でその一撃を片手に握った太刀で止め、がら空きになった腹部を蹴りつける。

「やつぱりこんなものか」

咳き込むオスカーを一瞥してジャグラーは太刀に邪気を集約させる。

「蛇心流奥義新月残波！」

「ぐわあああ！」

闇の気が形となった斬撃。漆黒の三日月を無防備に受けたオスカーの体は紙くずのように軽く吹き飛ぶ。

何度も転がり回り、砂を頭いつぱいに被ったオスカーは痛みに足掻きながらジャグラーを見上げる。

「じゃあな」

「待て、ジャグラー……！」

「帰って姉弟ごっこでもしてろ。負け犬」

太刀を下げて遠ざかるジャグラーにオスカーは手を伸ばす。まだ戦えるという意志の表れであったが、目前の相手は見向きもしない。

結果その手が届くことはなく、ただ虚空を掴むだけ。

自らに視界に傷付いた手を映しただけだ。

「オスカー様！……無事ですか！」

「すぐに治療致します！」

「くそお!!」

砂浜に打ち付けた拳に悔しさが込み上げる。随伴の対魔士が自らを気遣う声など意識に入らない程の悔しさが

ベルベットののように不意打ちで遅れを取っただけならまだ傷は軽くて済んだ。油断したという一応の言い訳も立つ。

だが真つ向から挑んだ真剣勝負で一太刀も入れることなく大敗を喫した。それも自分から仕掛けておいてだ

言い知れぬ敗北感がオスカーを襲った。

「また負けた……また私は業魔に勝てなかった。なんと情けない……これではアルトリウス様に、姉上に顔向けができない……」

イズルトの港、バンエルティア号の前でロクロウたちは未だ姿を見せないベルベットとガイアを心配していた。

「遅いな」

「そう身を案ずることもあるまいに。いくら数を上回っているにしてもあやつらに限って普通の業魔相手によほどはなからう」

「珍しいな。お前からそんな言葉が出るなんて」

「あやつらに行く先にはまだまだ面白いことが待っておろうにこんな中途半端なところで終わってもらっては困るからもう」

「帰って来たよ！」

ロクロウとマギルウがそんなやり取りをしている内にベルベットが彼らの元へ歩いてくる。

その背中には彼女におぶられてる形でガイアもいる。

「ベルベット、ガイアはどうしたの？もしかして怪我してる？」

「気絶させただけよ。すぐに回復が必要な傷はないわ」

「気絶させたってお前何したんだ？」

さらつとぶちまけられた物騒な一言にロクロウが反応する。

「ジャグララーは、村の人たちはどうなったんですか？」

「：わかりきったこと聞かないで」

一瞬だけ暗い顔になりつつもあつさり突き放した言い方だった。

しかしそれでもエレノアが事の顛末を察するには充分すぎた。

「それよりアイゼン、教えて穢れって何なの」

ガイアの体を近場の樽置き場に置いてベルベットはアイゼンに訊ねる。

「あんた、聖隷の禁忌を破るつもり？」

熟考するアイゼンにグリモワールが釘を刺す。

「どうやら彼女はベルベットたちの知りたい秘密を知っているようだ。その秘密を話す行為が聖隷にとってどんな意味を持つのかも」

「こいつらには知る権利がある」

「そう。好きにしなさい」

だがアイゼンが揺るがないのを見ると簡単に引き下がった。

グリモワールの承諾を得たアイゼンは聖隷の禁忌をベルベットたちちに語る。

「そもそも業魔病なんて病気は世界に存在しない。人間は元々誰もが業魔になる。心に抱えた穢れが溢れればな」

「穢れとは一体？」

「理性では抑えきれぬ負の感情、人の心が本質として抱えている業

「じゃよ」

「知っていたのか」

「魔女じゃからのう」

いきなり訳知り顔で代わりに説明したマギルウにアイゼンは微かに驚く。

アイゼンの言葉に馴染みの台詞を返してマギルウは口を開く。

「穢れは誰もが持つ心の闇。それが理性の許容量を越えれば化け物になる。お主らにも心当たりがあるろう？」

マギルウの言う通りここにいるベルベット・ロクロウはそれぞれ方向性は違えど人として間違った思いの強さから業魔となった。

当人らも自覚はあるのかマギルウの説明をすんなり受け止めていた。

「そんな事実が知れ渡れば民衆は大混乱になる。だから聖寮は業魔病という仮病を作って広めた」

「嘘です。開門の日以前に業魔はいなかった」

「本来業魔も聖隷も特別な才能『霊応力』のない人間には見えない存在だった」

「並みの人間には突然凶暴化しただけに見えたんじゃよ。その異常さは悪魔憑きや獣人化などと呼ばれて伝わったがな」

エレノアから発せられた反論をアイゼンとマギルウが真つ向から叩き潰す。

これまでの流れを聞いてロクロウは気になっていたことがあった。

「なんで急に見えるようになったんだ？」

「人間全体の霊応力が増加されたからだろうが理由はわからん。同じく降臨の日を境に聖隷まで人間に見えるようになった」

「きつとアルトリウスが絡んでる」

降臨の日に何があったのか。ベルベットはそれを知る数少ない人間だ。

ベルベットが業魔となった日。

そしてライフィセット・クラウが義兄アルトリウスの剣に刺し殺された日でもある。

「でも、病気でもなければ村人が一斉に業魔化するなんてあり得ません」

業魔化が病気のせいであると信じたい様子のエレノア。

彼女が否定の言葉を上げた時、ライファイセツトは頭の中に古文書の一文を思い起こす。

『八つの首持つ大地の主は七つの口で穢れを喰って』喰魔は人が出す穢れを吸収してカノヌシに送る。なのに僕たちが地脈点からモアナ喰魔を連れ出したから——」

「坊は賢いのくそう、吸収されなくなった穢れが溢れたのじゃ」

「つまりあたしのせいか」

揶揄するマギルウから告げた現実にはベルベットは力なく返す。

「ねえ、どうしたの？皆怖いよ」

眠るガイアの膝や頬をツンツンつついていたモアナの無邪気な声が重い空気によく響く。

「おかげで古文書の記述が信用できることがわかったわ。地脈点から全ての喰魔を引き剥がす。カノヌシの力を削ぎ、覚醒を阻止するため」

「でも喰魔を奪ったら人間がどんどん業魔になっちゃうんじゃ……」

「やらなきやアルトリウスを殺せない」

「真実を知ってなお進むか、いいだろう」

自らの起こす行動に伴う犠牲。

それを突きつけても揺るがない決意の炎をベルベットは瞳に灯していた。

イズルトを離れ、海の上を走るバンエルティア号。

その一室でエレノアは悶々としていた。

(業魔化が人の負の心が原因だと言うなら人と業魔の違いは……)

モアナが羅針盤に興味深そうな目を注ぎ、ライファイセツトが彼女にわかりやすい説明をしている。

聖隸と喰魔がああも笑い合っている。そこに互いを別の生き物と



して区別している視点はない。

悩み苦しんでいるとガイアが部屋に入ってきた。

「ガイアもう起きて平気なの？」

「ああ。別に大した怪我をしたわけじゃない」

ありがとう、と自らを氣遣うライファイセットに言うとエレノアの隣に座ると

「ごめん」

「え？」

「止められなかった…」

言葉を口にした本人ですらも驚くほど声に力が感じられなかった。代わりにその分の力が口に加算され唇を強く噛み締める。

目を合わせるのが怖くて合わせた両手を見つめて、エレノアからどんな言葉が来るのか畏怖しながら待つ。

「私のことなら大丈夫です。それにあなたが謝ることじゃありませんから」

「それは—」

それは違う、と言おうとしたがその先が出なかった。どんな言葉を出せばいいのかすぐに浮かばなかった。

今の自分が何を言っても彼女の傷付いた心を癒せないのでは？とそんな思いが生じたからだ。

「きやあああああ—」

「モアナ？」

モアナの叫びに思考を中断させてガイアもエレノアも駆けつける。

「モアナどうしたの！」

「怖い、モアナの顔怖いよお」

モアナの前にある姿見。

そこに映る虚像を見て三人は気付いた。モアナは今初めて喰魔となった自分の姿を知ったのだと

「こんな顔やだよお…お母さんに嫌われちゃう」

「モアナ、見て」

しやがみこんでおもむろに上着に手をかけるエレノア。

ボタンを外していくその様子を見て彼女の意図を見抜いたガイアは真つ先にライフイセットの後ろに回り込んで目を手で覆った。

「うわっ、ガイアどうしたの?」

「悪い。ちよつとしばらくこのままにさせてくれ」

そう言うとガイアはエレノアとモアナに視線を移す。

上着を脱いだエレノアがモアナに自分の胸元：そこに刻まれた切り傷を見せていた。

「すごいキズ!どうしたの」

「大きくて怖い傷でしょう。私の体にも怖いところがあります。モアナは私が怖い?」

「ううん、怖くないよ。それより大丈夫?痛くないの?」

「

「ありがとう。全然平気よ」

モアナの優しさに心に温もりを感じながらエレノアは服を着直して立ち上がる。

「エレノアはモアナのこと怖くないの?」

「私を心配してくれるあなたを怖いものですか。私もおガイアもライフイセットも、あなたのお母さんも…」

(ノア…)

優しい口調でモアナを諭すエレノアの顔をガイアはまじまじと見つめる。

そうしていると

「ガイア、もういいかな?」

「…あ、すまない」

目を塞いでいたのをすっかり忘れていたガイアはその言葉でようやく手を放す。

耳は塞がれていなかったのでさっきの会話を聞いていたライフイセットは目をぱちくりさせてエレノアに訊ねた。

「その傷は業魔に?」

「小さい頃私が生まれた村も業魔に襲われました。傷付いて動けなくなった私を母は自分を囿に逃がしてくれたんです…強く生きて、それ

が母の最期に私に残してくれた言葉でした」

「じゃあグランとは」

「ええ、母を亡くして一人になった私は身寄りのない子どもたちを保護している修道院に修道女見習いとして預けられました。その神父と今のお母さんが知り合いでその縁で私は彼の家族と一緒に」

そこで言葉を切るとエレノアはモアナと向き合う。

「私もモアナと同じです。本当のお母さんは今は離れ離れです。でもお母さんはずっと私の近くで見守ってくれている…そう信じています」

「モアナのお母さんも？」

「ええ、あなたがいつでも笑顔でいてくれるように離れたところにもても願っているはずですよ。だから悲しい顔をしていたらお母さんも心配してしまいますよ」

「…わかった。モアナもう泣かない。お母さん心配させたくないもん」

否定もせず、につこり笑顔でその言葉を受け入れるモアナ。

しかし彼女の笑みとその心はエレノアの表情に陰を作り、胸を締め付けた。

モアナをダイルやベンウィックたち海賊に任せて、ベルベットたちは揃って甲板にいた。

古文書の記述に関してグリモワールが話があるとのこととで集められたのだ。

そして彼女は確認した。古文書の二番目の歌詞を覚えているか、と『御稜威につながる人あらば不磨の喰魔は生えかわる。緋色の月の満ちるを望み、忌み名の聖主心はひとつ、忌み名の聖主体はひとつ』だよね」

文面を読まずにスラスラと歌詞を言うライフイセットの優秀さにグリモワールはご満悦といった様子で、皆の顔を柵の上から見渡す。「そう、それについて話したかったの。『選ばれし者によってカノヌシと喰魔が甦る』って私たちは解釈したんだけど、どうにも生え変わ

るって言葉に引つかかってね…で、考え方を変えてみた」

「カノヌシに選ばれた誰かが喰魔をつくるのではなく、カノヌシが喰魔になる誰かを選ぶ…としたら？…ここはどう読める？」

グリモワールは古文書の『御稜威に通じる人あらば喰魔は生え変わる』の部分を目指して言う。

「カノヌシの力に適応した人間が喰魔に生え変わる…」

「モアナ!?!…まさかそんな」

「全より個を優先するような連中よ。そういうことを平然としてたところでも何も不思議じゃない」

驚くエレノアにベルベットがあっさり突き付ける。

「つまり聖寮は人間を喰魔にしているわけか。カノヌシの口として利用するために」

「いやクワブトのことを踏まえると喰魔にするのは何も人間とは限らなさそうだ」

「穢れを送れさえすれば喰魔にする口は何でもいいということか…」  
話をまとめるロクロウにガイアとアイゼンが捕捉する形で言う。

「しかも生え変わるではなくあえて生えかわるという言葉にしている。生え変わると生え替わる、二つの意味にとれるようにしてると思う」

「生え替わる、代わりができる…喰魔を消してもまた新しい喰魔が生まれる」

「それなら不磨、不滅という意味にも説明がつくわね」

「よかったのう。善より子を優先して」

マギルウはベルベットを茶化すように言うが、実際モアナを殺しておかなかったのは正解だった。

モアナの代わりに生まれるであろう喰魔を探す手間が省けたのだから。

「カノヌシの口の数は決まっている。数を減らさなければ次は生まれない。つまり俺たちは七体の喰魔を地脈点から引き剥がした上で聖寮に奪還も殺害もされないように守らなければならない」

アイゼンの出した結論にベルベットたちは再度成し遂げようとしている事の難解さを思い知る。

「他に後もうひとつ気になることがあるのよ。一番目の歌詞にある『四色の光を授かりし戦士』これだけが何を指しているのか皆目見当もつかなくてね」

「四色の光を授かりし戦士：あ！それって」

「あら、そっちの方には心当たりがあるわけ？」

「うん、グリモ先生。もしかしたら僕たちその戦士に会ってるかもしれない」

ライフィセットが知っている戦士、と聞いてベルベットとロクロウは同じ姿を想像した。

「まさかあの巨人のこと？」

「ああ、あり得るかもな。いつもピカツて現れるし光の戦士って呼んでもピッタリ合う」

「詳しく聞かせてくれる？」

「僕たち前が何度も会ったことがあるんだ。赤い巨人と青い巨人に」  
ライフィセットはグリモワールに巨人との出会いを説明する。

ヘラヴィーサから始まり、ブリギット渓谷、ロウライネの遺跡、イズルトで自分たちが怪獣と戦っているとどこからか光と共に、赤い巨人が助けに来て力を貸してくれたと。

そしてイズルトでもう一人、青い巨人とも遭遇したとも

「へえ、赤と青二人の巨人ねえ。聞いたところでは確かに特徴は数え歌の光の戦士に似ているわね」

「もし予想通り巨人がその光の戦士なら今度会った時話をしてみるか？会話ができるかわからんが意思の疎通はできたんだ。話くらい聞いてくれるだろう」

「どうかしら。まだ味方つてはつきり決まったわけじゃない」

「そうかな？僕はあるの巨人は味方になってくれると思うよ。いつも助けてくれるし、怪獣を倒さないでって僕の願いを聞いてくれたし」

「私もライフィセットと同じ意見です。ベルベットは見ていないと思えますが、彼はヘラヴィーサの時倉庫の火災を鎮火し、被害を最小限

に止めてくれました。人間の味方として考えるには十分な判断材料ではないですか？」

ライファイセツトとエレノアは今まで目にした赤い光の巨人の行為から好意的な意見を口にする。

「じゃが青い方はどうする？赤いのはともかく青いのは儂らの話に耳を傾けてくれるかの？」

「何が言いたいのか？」

「よく思い出してみよ。イズルトで青いのが怪獣を倒した時のことを。あやつが立てた波に危うく儂らは飲まれかけたのじゃぞ？赤いのが防壁を張ってくれたからよかったものの、青いののせいで儂らは死にかけるところだった」

青い巨人は怪獣パズズを倒してくれた。しかしその際に起きた爆発のせいで津波が生じ、イズルトの村に押し寄せた。

赤い巨人がいなければマギルウの言うようにどうなっていたかわからない。

それを認めつつもライファイセツトは擁護の声を上げる。

「でもそれは…青い巨人だつて怪獣を倒すので一生懸命だっただろうし」

「あの戦いぶりで周りが見えない程でござつていたようには思えなかったがの。儂には周りのことなぞ端から眼中になかったように思える」

「マギルウは巨人が私たちに力を貸してくれるとは思えないと考えているのですか？」

「少し違うの。あくまでも青いのに関しては、と言つたまでじゃ。赤いの方にはまだ可能性はあるのではないか？まあ、どうするかはお主に任せるわ。儂はただ暇潰しができればなんでもよい」

そう言うだけ言つてマギルウは無言を決め込んでいる者たち、ガイアとアイゼンを目の端に収め見定めるような目付きを相手に悟られぬよう送る。

「一度ならず何度も目の前に現れたんでしよう？しかもあなたたちが怪獣と戦つてる時に限つて…偶然にしては運命的すぎるわ」

「言われてみれば確かに、オレたちが怪獣に苦戦してる時にだけいつも現れるよな」

「もしかしたら案外近くで儂らのことを監視しておるのかもしれんな」

そう言つてマガルウは無言を決め込んでいる者たち：アイゼンとガイアを目の端に収める。

見定めるような目付きを相手に悟られぬよう送る。

「監視つて、そんな」

「いや案外冗談とは言えない話かもな。グリモワールの言つた通り巨人が現れるのは決まつてオレたちが怪獣を相手にしている時だ。しかもグリモワールは会つたことがないのにオレたちは四回も出くわしてる」

「偶然で片付けるには不自然ね。タイミングも回数も」

「ですがあれだけの大きな巨人ですよ？近くにいたら気付かないのは不自然では？」

「姿がいつもああととは限らんど。光になつて現れたりするように日頃は別の姿をとつているやのも：例えば空気であつたりそこの犬であつたりあるいは、人間だつたりの」

「またもマガルウからガイアへ向けられる目線。」

お前の隠し事などお見通しと、真つ向から注がれる視線をガイアは特段驚いた様子もなく顔色を変えずに受け止める。

「とにかく推測でしかわからないものより今は確実にできることをやるしかない。地脈点を探して喰魔を聖寮から守る、そうしていればそのうち巨人にも遭遇するできるわ。今までだつて会おうとしてたわけでもなく会えたんだから」

「だな。こつちから探すより向こうからひよっこり現れてくれるのを待つた方が楽そうだ」

「また何かわかつたら知らせてあげる。先が見えなくなつたらその時にまた話し合えばいいんじゃない？」

まずははつきりとわかつていることから片付ける。今回はそれでひとまず議論に終止符を打つた。

光の戦士とは何なのか、カノヌシとどんな関わりがあるのか、  
自分たちの力になってくれるのか  
その謎が解き明かされる時はまだもう少し先のことになる



### 第三章 君は一人じゃない 第36話 情けは人のためより自分のために

冷えきった空気が体にまとわりつく。

家屋が立ち並び、黒い海に浮かぶ星々の明かりに照らされた人通りのない道をベルベットたちは歩いていった。

「ローグレスか、ここに来るのも久々だなあ」

「思い出すのお。力なき人々を導かんとする善良な導師様を民衆の目前で始末しようとした悪魔がいたのを。あの時は本当にヒヤヒヤしたわい」

ローグレスの街並みを見てマギルウはロクロウと一緒に前回の出来事を振り返る。

聖寮に追われている身の上の彼らがわざわざ敵の本丸が構える都市にいる理由、それは

「血刺蝶から連絡を受けたそうだが：何の用件だ？」

行く当てもなくさ迷う航海の最中かつて聖主の御座を襲撃する際に手を貸してくれた血刺蝶からシルフモドキで手紙が来た。

『ローグレスに来てほしい』そう手紙には記されていた。

「さあ、でもちようどいいわ。血刺蝶なら喰魔を匿うのに適した場所を知ってるかもしれないし」

「確かに、彼らならそういう情報を持っていても不思議はないな」

血刺蝶が目下の問題を解決するための助言を授けてくれるかもしれない。ベルベットはそう望みをかけていた。

人目を気にしながら歩き続ける内に彼らの経営する酒場の扉の前に辿り着く。

早速中に入ろうとする一行

しかしエレノアには一つ気がかりがあった。

「彼らがこちらの話を聞いてくれるでしょうか？」

血刺蝶の黒い噂は対魔士であるエレノアも耳にしたことがある。

聖寮の情報網を持ってすら得体の知れない相手との交渉が上手く

いくのかと先の見えない不安があった。

「案ずるでないぞエレノアや、対魔士なら無理じやろうが儂らならなーんも問題ない。聖寮の嫌われ者という意味においてはあっちもこっちも同じじゃからな」

「そういうこと。ここはあたしたちに任せてあんたは外で待つてなさい。対魔士がいたんじやまとまる話もまともなくなる」

ベルベットはそう言うのと扉に手をかけてからエレノアへ首を向け、忠告を付け加える。

だがそこへガイアが口を挟んだ。

「一緒に入るべきじゃないか？」

「エレノアは対魔士よ」

「ああ、それはわかってる。だが今のエレノアは聖寮から敵視されている身。こんな敵の本拠ど真ん中に置き去りにしたら俺たちより聖寮の連中に見つかってしまう確率が高い…そしてそうなればエレノアの存在が俺たちがここにいらすとしらしめてしまう」

「……」

ガイアの考えにベルベットは判断に迷う。

絶対に起きない事態とは言えない。

悩む彼女を手をアイゼンは掴んで皆の輪から引き離す。

「何？」

「あいつの言う通りにするべきだ。エレノアはライファイセットの器でもある。エレノアが傷付けばライファイセットにも危害が及ぶぞ」

「前にも言つてたわねそんなこと。それも穢れがらみつてわけ？」

「そうだ。だが今は話せない。落ち着いたところで話す」

問われたアイゼンは口を閉ざし、その瞳はベルベットを映したまま微動だにしない。

「必ずきつちり説明してもらおうわよ」

秘密主義の仲間にベルベットはそう言うってエレノアの元へ踵を返す。

「入ってもいいけどその代わり大人しくしてなさいよ。向こうの機嫌を損ねないようにね」

「気を付けます」

エレノアに釘を刺してベルベットは扉を開ける。

酒場特有の騒ぎ声のないものと扱いながら歩いていくと、カウンターの奥の血刺蝶の長タバサが彼女に気付く。

「いらつしやい。今日はどうしたのかしら」

「そつちが呼びつけておいてどうしたもないでしょう。用件は何？」

「ちよつとしたジョークよ、つれないわねえ。あれからずいぶん色々あったみたいね」

「耳が早いわね。だったら話が早い、こつちもあんたたちに聞きたいことがあるの。聞いてくれるわね」

「ええもちろん。でも話に入る前にちよつと頼み事があるんだけど…手伝ってもらえるかしらこの仕事を」

「は？」

タバサの言葉の意図がわからずベルベットは一瞬固まる。ベルベットだけでなく、ライファイセットもガイアもエレノアもだ。

アイゼンやマギルウでさえ眉をピクリと吊り上げるくらいのもので、はしたのにてんで動じていないのはロクロウくらいのものであった。

「それは私たちが貴方たちのお店の仕事を手伝うということですか？」

「そう、今日急にコックと配膳係が揃って流行り病にかかって休んでね。幸い軽い症状で済んでるみたいだけど人手が足らなくなっちゃってね。だから貴方たちの手を貸してもらいたいの」

「そんなのそつちの都合でしょ。そつちの都合にあたしたちを巻き込まないで」

「そうね、貴方の言い分は最も。だけど人払いができないと貴方たちの欲しい情報を話せないけどいいのかしら」

面倒ごととはごめんだと突っぱねるベルベットにタバサも負けじと応戦する。

両者共に視線を交わしたままの膠着状態が続いた結果、ベルベットの方が折れた。

「わかったわよ。やればいいんでしょ、その代わり必ずこつちの注文

に伝えてもらおうよ」

投げやりな態度でベルベットはやむ無くタバサの要求を飲んだ。

かくしてベルベットたちは協力して酒場の仕事を手伝うことになったのだが

「こんなことしてる場合じゃないってのに」

「言いたくなる気持ちはわかるがしょうがないだろ。こうなっちゃったんだから、文句言ってもどうにもならん」

愚痴るベルベットにガイアはそう口で返しながら、慣れた手つきでじやがいもの皮を剥く。

すぐ近くではエレノアが鍋の面倒を見ている。

話し合いによる役割分担の末、この彼ら三人はそれなりに上手い料理が作れるため厨房を任されることになった。他はそれ以外の業務に回された。

「コーンスープ出来ました。ライフイセット、お願いします」

「ありがとう」

エレノアから皿を受け取ってライフイセットは溢さぬよう注意を払って客のテーブルへ料理を運ぶ。

「ほれほれ、ペースが落ちておるぞ。しゃきつとせんか」

せつせと皆が働く輪の外から厳しい声が飛ぶ。

声の主はカウンターにどっしり座るマギルウだ。

彼女は面倒くさいからという理由で唯一店の業務に参加していない。

「お前はいいな。楽そうぞ」

「苦勞をするとわかって選択をしたのはお主ら自身じゃろう？羨ましいなら羨ましいと言ってもよいぞ。なんならこっちに来るか？今からでも間に合うぞ」

「ありがたいお誘いですが遠慮します。羨ましいとは思っても、自堕落な人間にもなりたくないんで。貴方みたいなの」

「勿体ないのう。せつかく滅多にない善意から出た儂の言葉をこうも簡単に無下にするとはい」

手を動かしながらガイアはマギルウと口で格闘する。

そうしていると、ライファイセットがガイアに寄ってきた。

「ガイア、今ちよつといいかな?」

「どうした?」

「お客さんの注文が上手くできなくて一緒に聞いて欲しいんだ」

「さっきまで順調に出来てただろ?」

「そうなんだけど、ごめん、とりあえず来てくれる」

「あ、ああ。わかった。ロクロウ悪いが暫く代わってくれ。じやがいも斬るだけでいいから」

「応、承知した」

ロクロウと立場を入れ替えて厨房を抜けたガイアはエプロンを椅子にかけて、ライファイセットと客の席へ向かう。

「お待たせしました」

「おっせーぞノロマが!何ちんたらやってんだ」

「乳臭せえガキの次は辛気臭せえフードかよ。どうなってんだよこの店」

そこにいたのは柄の悪い三人組。如何にも面倒事を持ちかけてくるのが好きそうな若い男たちだった。

(こういうことか)

彼らの風貌からして問題であることは決定的でライファイセットが苦心する理由も納得がいった。

「注文すつから聞いとけよ。マーボーカレー激辛風味三つ、茶碗蒸し五つ、夏野菜がナッフル添え六つ、トロピカルフルーツジュースバナナ抜き一個、で、さっきのカレー二つピリ辛な」

「ちよつ、えつと、夏野菜のナッフル添えとトロピカルフルーツジュース…マーボーカレー激辛風味がピリ辛風味に変わって」

「違えよアホ、トロピカルフルーツジュースバナナ抜きだ。しっかり聞いとけや。それとやっぱマーボーカレー激辛でチーズ付けてくれ。んで後ウリボアのステーキ四つ、ミディアムとウエルダンで一つとレア二つ、うまうまティー三つ」

「あの…申し訳ないんですができたらもう一度」

「注文は仕舞いだ。しつかり全部持ってこいよ」

(こいつら……間違いない。明らかにこつちで遊んでる)

食べられない量のメニューを頼んで翻弄される店側の様子を嘲笑って楽しんでいる。

できることなら叩き出してやりたいがこんなでも客だ。手荒な真似はできない。

少々お待ちを、と断りを入れてガイアはライファイセットの待つ場所に引き返す。

「思ったより面倒なのがきたな」

「困ったね。どうしよう」

「あのタチの悪い奴らの相手に時間を裂くだけ無駄だ。大丈夫、こういう時は適材適所。さっさと解決してくれる助っ人に頼るに限る」

「助っ人？」

ライファイセットにそう言うのとガイアは厨房に引き返す。

彼が助力を乞う相手とは

「ベルベット、手を借りたいんだが」

「今注文がかさばって手放せないの。あんたもサボってないでこつちに戻ってきなさい」

ベルベットは調理に手を焼いていてんで目線もくれない。

だがガイアには嫌が応でも意識を反らす魔法の言葉を備えていた。

「ライファイセットに難癖つけて遊んでる厄介な奴らがいるんだが」

—ピクツ

その言葉を突き付けた途端ベルベットの手が止まり、背中から感じる雰囲気が一気に変貌した。

「その連中どこの？」

「奥のテーブルのガラの悪い三人組。作業は引き継ぐから」

「ええ、任せたわ。すぐ戻る」

冷めきった声色で告げたベルベットはエプロンを身近なテーブルの上に捨て、問題の客の席へ歩いていく。

時間にして数分……彼女は何食わぬ顔で戻ってくると

「お冷や三つ運んでおいて」

ライフイセットに告げて再び作業を再開する。

問題の席を覗いて見ると男たちはさっきの喧しさはどこへやら大人しくじつと待っていた。

膝の上に行儀良く置いた手を震わせて

「ベルベットあの人たちの注文取れたんだね。すごいなあ」

「たぶんあの人たちの要望は何一つとして通ってないだろうけどな」

「違うの？」

「…やっぱなんでもない」

純粋な少年が勘違いをしたままでいて欲しいと思ったのか、ガイアは見切りを付けてこの問題を忘れ去る。

とにかくこれで問題は収束したと安堵したガイアだが、そこにエレノアが困った顔でやって来る。

「ガイアどうしてじゃがいもをみじん切りになんてしたんですか。これじゃ煮込む時に溶けてしまいますよ」

「俺、そんなことしてないけど」

「え？さつきじゃがいもの皮剥いてましたよね？」

「やってたけど途中で呼び出されたからやったのは皮までで切るのはやってないぞ…第一料理初心者じゃないんだからそんなミスまずやらないし」

本当に覚えがなくガイアは目をぱちくりさせる。

「じゃあ一体誰が」

「あ…まさか」

そこまで口にした時ガイアは思い出す。調理場を離れる時誰に作業を引き継いだかを

嫌な予感がする。

足早に厨房へ向かうと、そこに待っていたのは

「はあ!!」

じゃがいもが宙に舞い、次の瞬間音もなくその身を皮ごと細かく切り刻まれる。

ガイアの指示通りロクロウは今もじゃがいもを刻んでいた。鮮やかで美しい無駄のない手つきで、自慢の小太刀を使って

「お前…」

「ちよつと何してるんですかロクロウ！」

「何って言われた通り普通にじゃがいも斬ってるだけだぞ。間違ってたか？」

「間違ってるぞ、色々とな…切り方とかもだけど一番は手に持つてる道具だ。料理にそんな大それた刃物を使う奴があるか！包丁使え包丁！」

「そう言われても俺にとっては包丁よりこいつの方が手に馴染みがあるからなあ。それに包丁も小太刀も刃物なんだから変わらないだろ。切れば全部一緒だろ」

「違いますよ…どうしてそうなるんですか…」

「俺が悪いんだ。中途半端な指示で済ませた俺が悪かったんだ。ロクロウも面白い、俺がやるから元の仕事に戻ってくれ」

あっけらんとしたロクロウにエレノアは何も言えなくなる。ガイアも説明不足に責任を感じているようで四つん這いになって項垂れている。

そこへ

ガシャン！と何かが勢い良く割れる音が響いた。

音の出所に目を向けると蛇口の前にアイゼンがおり、その手元には泡の立ったスポンジが、足元にはさつきまで皿だった物の欠片があった。宇宙に広がる星のように。

その風景一つでガイアは事の全てを見抜いた。

「アイゼンお前…皿洗いも満足に出来なかったのか」

「…すまん」

不器用とか注意力に欠けているとかそういうことが原因ではないのはわかっている。

呪いのせいだ。

本人の意に反した結果をもたらす死神の呪いのせいだ。

「し、しょうがないですよ。アイゼンのせいではありませんから。不可抗力ですよ」

「そうだ。お前が気にすることはない。こっちは俺たちで何とかする



からお前は別のことをやってくれ」

「すまん」

悲しいかな

二人のフォローが尚更傷口に刺さりアイゼンは心を痛める。

口数がなくなりながらもせめてこれだけはと、出来上がったコーンスープを運ぶ。

その途中…厨房から指定の卓までのほんの短い間で悲劇は起きた。

運悪く床が濡れていたせいで足を取られ、コーンスープはアイゼンの手から抜け落ち、重力に従って落下。茶色の木目を黄色に染め上げる。

「うわあ…すごい偶然」

「死神の呪いがここまで酷いものだったなんて」

「うっそだろお前…」

「うっひひひひ！こりや、こりや堪らんかう！出来すぎにも程があるわ！ひっひひひひ！」

「…もう何もなくていい。何もなくていいから大人しくじつとしてろ。頼むからほんとに」

冗談みたいな一連の流れを目撃した身内の反応は様々だった。

誰かが恐怖を感じ、誰かが哀れみの目を注ぎ、誰かが腹が振れる程の大爆笑をし、誰かが途方もない失望と何故こうなる前に止められなかったのかと後悔に襲われた。

### 第37話 理に背いた者

慌ただしい時間を終え、すっかり静んだ空気に満たされた店内にはカウンターでマーボーカレーを食すライフィセットや円卓の上にボロ雑巾のように体を突っ伏すガイアなど、疲れを癒す各々の姿があった。

「皆お疲れ様。おかげで助かったわ」

「礼は受け取っておくわ。それより早く説明して、なんであたしたちを呼びつけたのか」

「この人を王都から連れ出して欲しいね」

せっかちなね、と口を突いて出そうになった言葉を引つ込めてタバサは本題に入った。

タバサの言う『この人』、彼女が目線で指し示した方にはカウンターに座っている人物。

飼い慣らしているのか手元には一羽の鷹が大人しく佇んでおり、その人物はガイアと同じようにフードで顔を隠していた。

「目的地は？」

「お上の手が届かないところまで」

「そんな場所があるならこつちが教えて欲しいくらいよ」

「生憎こつちもそういう場所探しててな。どこかい場所を知らないか」

ベルベットとロクロウからの返答にタバサは考え込む。

「そういえば、ここ最近聖寮本部と監獄島タイタニアの連絡が途絶えてるって噂よ」

「監獄島か…」

その響きはベルベットに過去の記憶を思い起こさせる。

故郷と家族との幸せを剥奪された彼女が三年もの長きに渡り、幽閉されていた忌々しい場所。

日の光すら差し込まない世界から摘ままれた者たちの巣窟。

あれからあちこち回ってたくさんの出来事があったが、あの場所だけは今思い出しても胸糞悪くなる気分しかない。

「確かにあそこなら喰魔が食べる穢れも多そうだ」

「しかも逃げ出した囚人が好き好んで戻るとはお行儀のいい聖寮は考えんじやろーしな」

一時をそこで過ごし、ベルベットと共に監獄島を脱け出したロクロウとマギルウが賛成の声をあげる。

罪人を収容する施設なら人の負の心から発生する穢れも摂取できるし、脱獄人のベルベットたちが身を隠すには意表を突ける。隠れるなら都合の良い条件が整っている。

「状況を確かめる価値はある、か。業魔に関して何かない？」

「離宮にいた業魔が別の場所に移ったそうよ」

間を置いてタバサが口にする。

「それって結界に閉じ込められてたって言う巨大な鳥の業魔のことだろ。だとしたら何の意味があるんだ」

「確かにそうだよ。あの業魔もクワブトやモアナと同じ結界の中にいたんだから、きつとそこが地脈点になってたはずだし別の場所に移す理由なんてないと思うけど」

聖寮の行動にある不可解な点にガイアもライフィセットも口を曲げて、考えに耽る。

「とにかくその頼みは引き受けるわ。業魔の情報、任せたわよ。どんな些細なことでも」

「ええ、必ず貴方たちに伝えるわ」

要求の合致を経てベルベットとタバサの交渉は円満に終わった。

ベルベットやマギルウがそれぞれ席を立ち、出入口に向かい鳥を連れたフードの男もそちらに続く。

(香水の臭い?)

—清らかな花

男が横切った瞬間エレノアは彼の体からそんな香りを感じた。身なりからはとても想像が付かないような高貴で甘い香りを

ベルベットは海を眺めていた。

灰色の空、不機嫌に荒れる波風、まるで自身の心の有り様を映して

いるように思えた。

(またあそこに戻るのね。あたしが長い間閉じ込められてたあの地獄に)

あの牢獄で何もかもが苦しい時間を過ごした。

鎖に繋がれ自由を奪われ、輝かしい太陽の光も届かないうすら寒い闇の中で時を無駄にした。三年も

そんな日々を思い出すだけで異形の右腕が疼く。

(あいつはあたしたち家族を裏切った。あたしから全てを奪ってライフィセットを…何としてもあいつの企んでることを暴いてこの手で潰してやる。あいつの命諸とも…!)

ふつふつと沸き上がる憎しみで握った手に力がこもる。

その時微かに軋む木の音と気配を感じて振り返ると

「何の用？」

「この間はすまなかつたな。迷惑かけた」

ガイアがそう言うって隣に並んでふうと息を付く。

隣に並んでしばらくしてから彼は口火を切った。

「別に大したことじゃないわよ。でもあんなの二度も三度もやられたんじゃないさすがに迷惑よ」

「次は気を付ける」

「わかってるならいいわ」

素っ気なく淡白な会話。その中でベルベットはガイアの声色に力がないことに気付いた。

その理由に思い当たる節はあったが、しかしあえて触れはせず黙り返む。

とその時上から火の玉が降り、バンエルティア号の横…海面で弾ける。

「この攻撃、敵襲か!？」

「空から、ってことは業魔ね」

船体が傾き、柵に捕まりながら攻撃が飛んできた方角…上空を見上げると灰色にくすんだ空の中に複数の魔物が羽ばたいている。

人間の女性が翼と腕が一体になったような姿のハーピー、それが群

れを成していた。

「業魔が来たぞ！お前ら気合い入れろ！」

「了解、急げお前ら！砲を上げろ！」

アイフリード海賊団の船員たちは迅速に動き回り、船の武装を起動させる。

とそこに

「何なんですか!?今の揺れは！」

「皆大丈夫！」

「敵襲だ！迎え撃つぞ、急いで武器を取れ！」

船内から出てきたエレノアとライファイセツトにアイゼンは告げながら、接近してきたハーピーの横っ腹を殴りつける。

そして既にベルベットとガイアは周囲を飛び回るハーピーを見据え、迎撃を行っていた。

「相手は空だ、俺が仕掛ける！援護を頼む！」

「ちやんときつちり当てなさいよ！」

銃から分散した青い光条をかわしながら進むハーピーたち。その中の一羽の動きを予測してベルベットは跳躍。

相手の爪を真下で通過させて足の仕込み刃を喉元に食い込ませる。

仲間の死を受けて激昂したハーピーが死角から飛びかかろうとするが、赤い光の弾に撃ち抜かれて同じ末路を迎える。

「ヒートレット！」

「貫け、霊槍・獣炎！」

「ブレイズスオーム！」

他の場所でも多くのハーピーが炎に飲まれ羽の一筋も残さず灰となり、数少ない個体もロクロウの小太刀の錆となり絶命する。

そうして着々と数を減らしていく中でベルベットたちは一ヶ所に集い身を寄せ合う。

「モアナとあの男は？」

「中でダイルや海賊たちが付いてくれています」

「一時はどうなるかと思ったがこの調子じゃすぐに片が付きそうだ

な」

そう誰もが思った時霊的な感に優れたライフィセットとアイゼン、ガイアの三人は新たな危険の予兆を感覚で感じ取る。

「まだだよ、まだ何か来る！」

『グアアアアア!!』

甲高い鳴き声と共に灰色の空を引き裂いてバンエルティア号の進路上に立ち塞がるように滞空する鳥がいた。いや鳥というよりはワイバーンのような翼竜に近いかもしれない。

「ヤバいつて！あんなのに取りつかれたらいくらバンエルティア号でも船体が持たない！」

翼竜―有翼怪獣チャンドラーの凶体を見て舵を握るベンウィツクの声が震える。

チャンドラーが羽をはためかせるその度に風を引き起こし、波と船を揺らす。

「急いで近くの物に掴まれ！」

咄嗟に船の上にいる者たちは柵や支柱に手を伸ばして吹き飛ばされぬよう強風に耐える。

だが強風に身体を飛ばされぬようにするので精一杯でとても攻撃まで手が回らない。

「早く倒さないと！皆海に落ちちやう！」

「ですが相手は海の上、しかもかなりの巨体ですよ！さっきの業魔のように簡単に倒せるかどうか」

「しかもその上落ちぬようにするので手一杯で術による攻撃もままならん。ピンチもピンチじゃ。こんな時都合よく巨人が助けに参上してくれないものかのう」

マギルウの言う通り巨人に変身すればこの状況を切り抜けられる。それは他ならぬガイア自身がわかっていた。実行に移そうともした。

だができなかった

（……で変身するわけにはいかない。でも他に手立てが……くそ、どうすれば！）

変身したくはないが他の代案も思い付かない。ジレンマに悩まさ

れるガイアの視界に黒い巨影が横切った。

『ギューアアア！』

突然どこからか出現した巨鳥がチャンドラーに突進をぶつける。風が止み、姿勢を落ち着かせたベルベツトは空を見上げ巨鳥の姿に反応を示す。

「あれって…あの時の」

ローグレスの離宮で目撃した業魔。それと今チャンドラーと戦っている巨鳥はまさしく瓜二つであった。

その巨鳥はチャンドラーの喉元に嘴を突き刺し、引き抜く。

『グアアアアア！』

それで戦意を喪失したのかチャンドラーは喉から血を垂らしながら反転し、バンエルティア号から遠ざかっていく。

「なんとか助かったな。しかしあれはなんだ？あいつは離宮にいた業魔じゃなかったか？なんでこんなところに」

「彼は私の友人だ」

ロクロウの言葉に応じたのはベルベツトたちでも海賊たちでもなかった。船内への扉の前に立つ男、血刺蝶から護衛を依頼された人物だった。

「ありがとう。助かったよ」

その男の元に巨鳥は舞い降り、腕に止まった。体を普通の鷹と同じサイズに縮小させながら

「普通の鳥になった!？」

「あんた何者?」

驚くライフィセットと疑問を目に浮かべるベルベツト。

二人の前で男はフードに手をかけ、外した。

「なっ!？」

「貴方は!」

露になった素顔を目の当たりにし、ガイアとエレノアは目を見開き唾然とする。

「名を明かさずにここまで連れてきてしまつてすまない。私はパーシバル、ミッドガンド王国第一王子」

船内でパーシバルはベルベットたちに全てを打ち明けた。

自身の身の上、将来国をまとめるために幼少の頃から個人の感情より理を優先した教育を強いられ、そんな環境で友であるグリフォンが自由に空を飛ぶ姿を見るのが唯一の楽しみであったこと

しかしある日そんな友がカノヌシの力に適合して喰魔となったせいで聖寮に取り上げられてしまった。

その友を救うために対魔士を欺いて結界を解いたのだが解放されたグリフォンが対魔士を殺めてしまった。

そのせいで王家には戻れなくなってしまうらしい。

「つまり王国は聖寮が喰魔を作っている事実も含めてアルトリウスの理と意志に手を貸し、貴方はそれに反抗した、と」

「しかしまあ大胆なことをしたもののじゃな。いくら友のためとはいえ地脈点から喰魔を引き剥がすとは。知っておろう？地脈点から喰魔がいなくなればその喰魔を喰魔が喰らっていた穢れはその周囲に溢れだす。お主のしたことは——」

「王家の人間の行為として反しているのはわかっている。だがそれでも私は友が自由を奪われ、犠牲になるのを見過ごすわけにはいかなかった」

「世界や一国の安寧より一羽の鷹か……」

他の何を擲ってでも心の救いである存在を守りたい。

生まれも環境も何もかもが離れた世界にいるはずなのに親近感を覚える。彼の言動からベルベットはそう感じた

だからだろうか。ついこの問いを目前の人物に投げてみたくなかった。

「鳥は何故空を飛ぶと思う？」

「それはアルトリウス様の」

そうそれは導師アルトリウスの言葉、そしてかつてベルベットが義兄アーサーに問われた言葉でもある。

「解剖学の本には骨が軽くて翼を動かす筋肉にすごい力があるからだって——」



「いや飛べない鳥は鳥ではないからだ。私はそう思う」

生物学的な見地から答えを出そうとするライフイセットに対してパーシバルはそう言った。

「勝手なことと承知でお願いしたい。どうか私とグリフォンを君たちの元に置いてくれないだろうか」

「俺は賛成だ。王子の立場は聖察を相手取るのに使える。」

「命の恩人でもあるしな。今度はオレたちが守ってやらねばオレの義に反する」

アイゼンとロクロウが述べパーシバルの要求を受け入れた。

と、そのタイミングでバンエルティア号の動きがピタリと止まる。

「降りるぞ、無事着いたようだ」

アイゼンの言葉でベルベツトは目付きを鋭くさせる。

着いたのだ：

理に反した者たちが身を囚われる絶海の孤島に。

ある意味で復讐の始まりの地となった場所、監獄島タイタニアへと。